

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第37集

奥谷南遺跡Ⅰ

四国横断自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

奥谷南遺跡 I

1999.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



奥谷南遺跡Ⅰ-Ⅲ区全景―夏～秋―（1994.9撮影）



奥谷南遺跡遠景—冬—（1995.1撮影）

巻頭カラー3



I 区
弥生系高地性集落（南東側斜面）



I 区
弥生系高地性集落（西側斜面）



I 区 SK-1 (儒墓)



I 区 SK-1出土遺物 (唐津一中型甕と鉢)



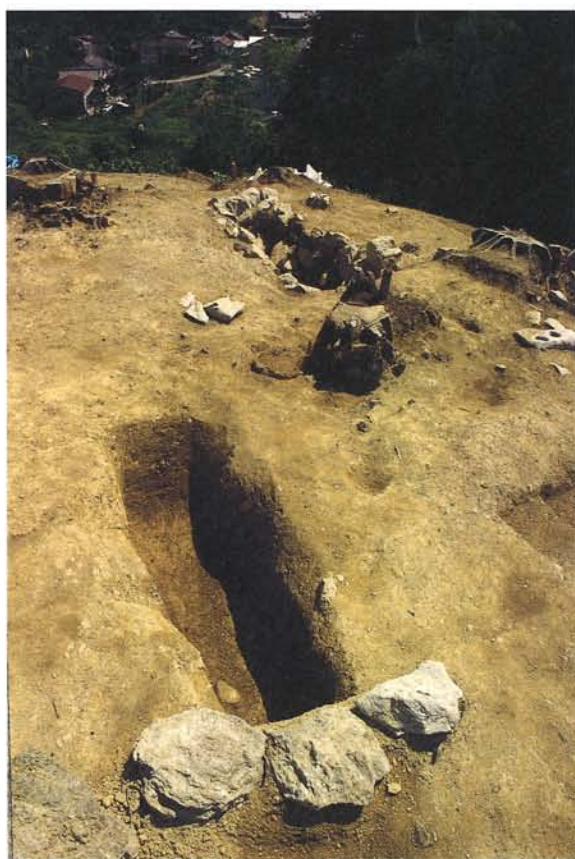
Ⅱ区 尾根上の土坑墓群（東から）



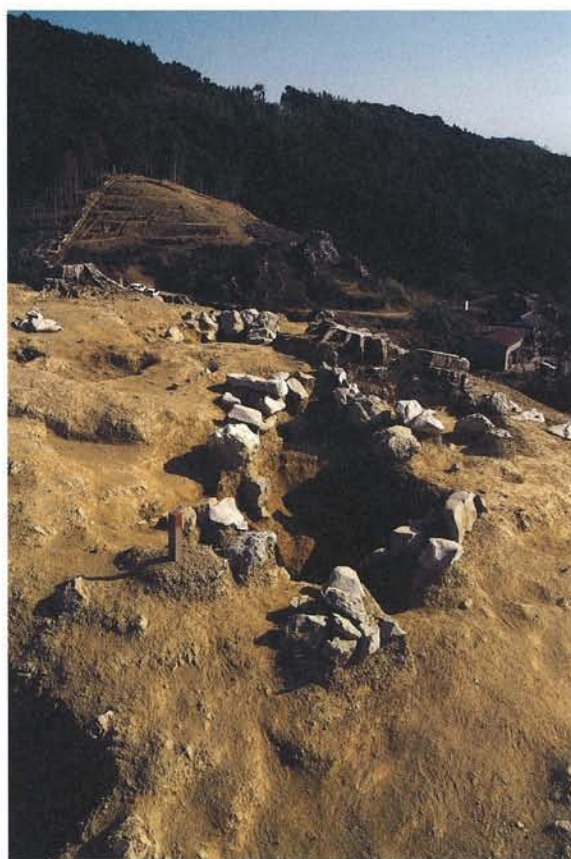
Ⅱ区 尾根上の土坑墓群（上空から）



I区 ST-1から高知平野をのぞむ



II区 SK-3



II区 SK-4



Ⅱ区 SK-2



Ⅱ区 SK-2 東端 検出礫



Ⅲ区 貯蔵穴周辺の景観



Ⅲ区 貯蔵穴 (SK-2～SK-8)



Ⅲ区 縄文土器出土状況(171)

序

平成10年3月20日に四国横断自動車道・南国～伊野間が開通したことによって、高速道路網が高知県の発展に果たす役割はますます大きくなってきました。それに伴います発掘調査は平成4年度から8年度にわたって実施されています。長畝古墳群、栄エ田遺跡、尾立遺跡、福井遺跡等数多くの新しい発見があり、高知県の歴史に新しい1ページを加えるものとなりました。

今回報告いたします奥谷南遺跡は南国市岡豊町小蓮に位置し、周辺には長宗我部氏の居城岡豊城をはじめ各時代の遺跡が集中しており、温暖な気候とその地形により各々の時期を通じて人々が生活を営むのに適した場所であったと考えられます。調査の結果、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古代、近世に至るまでの大変貴重な発見が相次ぎました。このような遺跡が高速道路建設のためとはいえ失われてしまったことは誠に残念なことでありますが、ここに記録保存という形で皆様に成果をご報告することができる運びとなりました。発掘調査報告書につきましては3分冊にわたって作成することとし、その第1分冊にあたる『奥谷南遺跡Ⅰ』では平成6年度調査を中心に報告させていただきます。

この先、高知県の歴史を解明する上で重要な手掛りとなり、学術研究や教育の向上に役立ち広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施、報告書の作成にあたっての関係各位からの多大の御協力と御指導に対し心から厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

（財）高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 古谷 碩志

例 言

1. 本書は四国横断自動車道建設に伴って高知県文化財団埋蔵文化財センターが1994(平成6)年度に実施した奥谷南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は日本道路公団高松建設局(現四国支社)の依頼を受け、高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査を実施した。奥谷南遺跡の調査は1994～1996年の3ヶ年にわたり、発掘調査報告書は3分冊にわたって刊行する予定であり、本報告書は第1分冊にあたる。
3. 奥谷南遺跡は高知県南国市岡豊町小蓮に所在する。
4. 発掘調査は1994(平成6)年4月から1996(平成8)年10月まで実施しており、今回報告する平成6年度調査は1994(平成6)年4月18日から1995(平成8)年3月17日までである。調査は高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員松村信博・小嶋博満が担当し、調査員池澤俊幸の協力を得た。
5. 本報告書の作成は1997・1998年度に財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターにおいて主任調査員松村信博、調査補助員山本純代が担当して行った。
6. 本報告書の編集は松村が行った。執筆分担は以下のとおりである。第1章～第5章(松村)、第6章(山本)。
7. 本報告書に関わる自然遺物などのうち、一部のものについて鑑定・同定及び分析を下記の諸氏、機関に依頼し有益な教示を得た。記して厚く御礼申し上げる次第である。
渡辺誠名古屋大学教授・恒石直和高知市子ども科学図書館指導員・(株)パリオサーヴェイ
8. 調査の進行にあわせて3回の空中写真撮影並びに空中写真測量を実施した。地形的な制約もあり、産業用ヘリコプターによる空中写真撮影を選択、業務は(株)アイシーに委託した。
9. 出土遺物ならびに写真・図書類は高知県文化財団埋蔵文化財センター(高知県南国市篠原1437-1)に保管している。
10. 調査に参加した作業員の方々は、以下のとおりである。ここに挙げる人々によって発掘調査全体が支えられ、そのおかげで大きな成果を得ることができた。記して感謝をささげたい。

(試掘調査)

井上速男・井上郁雄・小松栄一・小松好・小松木義・小松浜子・吉川競・吉川勉・高橋弘喜・浜口興・石川功・森本幸栄

(1994年度発掘調査)

井上速男・井上郁雄・石川功・岡田稔夫・小松栄一・小松好・小松木義・小松浜子・小松重喜・小松光尾・浜口興・森本幸栄・森本倫代・永田美津子・島井博志・島井澄子・島井周子・高村秀吉・高橋弘喜・武市隆男・武市和子・吉川競・吉川勉・浜田孝康・田内成実・田内和子・山本純代・宮野広至・菊地直樹・池本恵・手皮かおり・河本美紀子・臼木こずえ・楠瀬憲子・宮本幸子

(整理作業) 1994～1998年度

岩貞泰代・楠瀬憲子・小松経子・竹村延子・松本富子・宮本幸子・矢野雅・山本裕美子・前田玲子・高橋千代・久万公子・川井由香・西内宏美・中西純子・臼木こずえ・小野山美香・東村知

子・大原喜子・浜田雅代・白木由里・尾崎富貴・岩本須美子・高橋加奈・横飛美紀・森綾子・川久保香・入野三千子

11. 本報告書作成に際して、以下の諸氏に貴重な御教示・御助言をいただいた。記して感謝する次第である。(敬称略)

渡辺誠(名古屋大学)、大橋康二(佐賀県教育庁文化財課)、村上伸之(佐賀県有田町教育委員会)、平井勝(岡山県教育委員会文化課)、東和幸(鹿児島県埋蔵文化財センター)、恒石直和(高知市子ども科学図書館)、三好和弘(広島県埋蔵文化財センター)、岡田容子(広島県府中市教育委員会)、岡本健児(高知県文化財保護審議会)、岡本桂典(高知県歴史民俗資料館)、前田光雄・山本哲也・出原恵三・松田直則・廣田佳久・森田尚宏・泉幸代・浜田恵子・藤方正治・吉成承三・武吉眞裕・池澤俊幸・久家隆芳はじめ高知県埋蔵文化財センターの諸氏

凡 例

1. 本報告書に用いた高度は海拔高であり、北方位については真北を用いた。
2. 本報告書における遺構名称については、調査区ごとの通し番号とし、遺跡全体で統一した呼称は採用していない。本報告書ではⅠ・Ⅱ・Ⅲの3つの調査区について各々の遺構番号を採用する。
3. 奥谷南遺跡では、3分冊を予定しているが、遺物については1冊ごとの通し番号をつける予定である。本報告書では遺物にⅠ～Ⅲ区全体を通した通し番号をつけた。

4. 遺構・遺物の縮尺は以下のとおりである。

遺構

1/60・1/80(竪穴住居等) 1/30・1/40(土坑ピット等)——遺構については大きさに応じたものとし、随時明記する。

上記の縮尺に統一するが、例外も含まれる。遺物出土状況等が含まれる図面については1/20で掲載する図面もある。

遺物

1/4(土器～弥生時代以降) 1/3(土器～縄文時代)——図化し得る遺物の多くが小片であったため、縄文時代の遺物については縮尺を1/3で統一した。

4/5・1/2・1/3(石器)——石器については大きさに応じてこれらの縮尺を使い分ける。

5. 本報告書に掲載した土器拓本のうち口径のでない個体は、弥生時代以降の遺物は断面図の左側に内面、右側に外面の拓本をのせている。縄文土器については、断面図の左側に内面→外面の順でのせ、外面のみの拓本を要する場合は断面図の左側に一枚の拓本をのせる。

目 次

第1章 調査に至る経過及び試掘調査	1
第1節 調査に至る経過	
第2節 試掘調査	
1. 試掘調査の経過及び概要	3
2. 調査の方法	3
3. 試掘トレンチの概要	5
4. 試掘調査まとめ	10
第2章 地理的歴史的環境	
第1節 地理的環境	
1. 奥谷南遺跡の位置と行政区	11
2. 遺跡周辺の地質	11
3. 奥谷南遺跡周辺の地形	14
第2節 歴史的環境	
1. 旧石器時代	15
2. 縄文時代	17
3. 弥生時代	18
4. 古墳時代	19
5. 古代	19
6. 中世	20
7. 近世以降	20
8. 遺跡の所在する小蓮地区について	20
第3章 調査の方法及び調査区の概要	
第1節 調査区の設定及び日程	
1. 調査区の設定	23
2. 調査の日程	24
第2節 調査の概要	
1. 調査の方法	25
2. 調査区の概要	25
第4章 調査の成果	
第1節 I区の成果	
1. I区調査の概要	28
2. 基本層序	29
3. 遺構と遺物	32

(1) 弥生時代の遺構と遺物	33
(2) 近世の遺構と遺物	51
(3) その他の時代の遺構と遺物	63
第2節 II区の成果	
1. II区調査の概要	68
2. 基本層序	70
3. 遺構と遺物	73
(1) 弥生時代の遺構と遺物	73
(2) その他の時代の遺物	93
第3節 III区の成果	
1. III区調査の概要	94
2. 基本層序	96
3. 遺構と遺物	
(1) 縄文時代前期の遺物	99
(2) 縄文時代中期の遺構と遺物	99
(3) その他の時代の遺構と遺物	136
第5章 奥谷南遺跡Ⅰ～Ⅲ区調査のまとめ	
第1節 縄文時代	139
1. 縄文時代前期	139
2. 縄文時代中期	140
(1) 出土遺物－奥谷南遺跡出土の縄文中期土器について	140
(2) 西側旧谷状地形上面に形成された遺構－竪穴住居－(SX-1)	147
(3) 貯蔵穴	149
(4) まとめ－縄文時代中期末の奥谷南遺跡	156
第2節 弥生時代中期末～後期初頭	162
第3節 弥生時代後期末	165
第4節 近世	168
第6章 考察	
高知平野の弥生墓制	(山本純代) 173
第7章 付編 奥谷南遺跡出土遺物の自然科学分析	(株)パリノサーヴェイ 187

挿図目次

Fig. 1	奥谷南遺跡位置図	1
Fig. 2	四国横断自動車道関連遺跡地図(高知県)(S=1/400,000)	2
Fig. 3	試掘トレンチ位置図(S=1/2,000)	4
Fig. 4	試掘トレンチ出土遺物(1～6試掘Ⅰ区、7～16試掘Ⅲ区)(S=1/4・1/3)	6
Fig. 5	高知県高知市北部～上佐山田町北部の地質図	12
Fig. 6	四国地方の地帯構造区分(『四国地方 日本の地質 8』共立出版株式会社 を参考にして作成)	12
Fig. 7	奥谷南遺跡周辺の地形～高知平野東半の河川と上佐湯及び長岡台地(洪積台地)～	13
Fig. 8	周辺の遺跡分布図(S=1/50,000)	16
Fig. 9	奥谷南遺跡調査区位置図及び四国横断自動車道建設予定地(S=1/2,500)	23
Fig. 10	1994年調査区(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区)の位置、及びグリッド方向(S=1/1,500)	26
Fig. 11	Ⅰ区確認トレンチ及びグリッド(S=1/400)	28
Fig. 12	Ⅰ区基本層序(1)(S=1/80)	30
Fig. 13	Ⅰ区基本層序(2)(S=1/80)	31
Fig. 14	Ⅰ区遺構平面全体図(S=1/250)	32
Fig. 15	ST-1 出土遺物(S=1/2・1/3)	33
Fig. 16	ST-1 出土遺物(S=1/4)	34
Fig. 17	ST-1 平面・セクション・エレベーション図(S=1/80)	35
Fig. 18	ST-2 平面・セクション・エレベーション図(S=1/60)及び出土遺物(S=1/4)	37
Fig. 19	ST-2 焼土及び焼礫出土状況平面・エレベーション図(S=1/40)	38
Fig. 20	SX-1 平面・エレベーション図(S=1/60)	39
Fig. 21	SX-2 平面・エレベーション図(S=1/60)及び出土遺物(S=1/4)	40
Fig. 22	SX-3 平面・セクション・エレベーション図(S=1/60)及び出土遺物(S=1/4、1/3)	41
Fig. 23	SX-4 平面・セクション・エレベーション図(S=1/60)及び出土遺物(S=1/4、1/3)	43
Fig. 24	SX-5、SX-6、SX-7 平面・セクション・エレベーション図(S=1/60) 及び出土遺物(S=1/4・1/3)	44
Fig. 25	SX-8、9 平面・エレベーション図(S=1/60)及び出土遺物(S=1/4)	45
Fig. 26	SX-10 平面・セクション・エレベーション図(S=1/60)及び出土遺物(S=1/4)	47
Fig. 27	SX-11 平面・エレベーション図(S=1/60)及び出土遺物(S=1/4)	49
Fig. 28	SX-12 平面・エレベーション図(S=1/40)	50
Fig. 29	Ⅰ区包含層出土遺物(S=1/4・1/3)	53
Fig. 30	SK-1 平面・セクション・エレベーション図(S=1/40)	54
Fig. 31	SK-1 出土遺物(S=1/4)	55

Fig.32	SK-2 平面・エレベーション図(S=1/40)	59
Fig.33	SK-3、SK-4 平面・セクション・エレベーション図(S=1/40)及び 出土遺物(S=1/4・1/2)	60
Fig.34	SK-4 出土遺物(S=1/4)	61
Fig.35	SK-5、SB-1 平面・エレベーション図(S=1/60・1/40)	62
Fig.36	I 区包含層出土遺物(古代)(S=1/4)	63
Fig.37	奥谷南遺跡Ⅱ区調査前地形(S=1/300)	68
Fig.38	Ⅱ区トレンチ及びグリッド(S=1/200)	69
Fig.39	Ⅱ区基本層序(S=1/80)	71
Fig.40	Ⅱ区遺構平面全体図(S=1/200)	72
Fig.41	1 群遺構配置図(S=1/60)	73
Fig.42	SK-1 平面・エレベーション図(S=1/40)	74
Fig.43	SK-6 礫出土状況・東南側面・完掘状況平面・エレベーション図(S=1/40)	75
Fig.44	SK-5 礫出土状況及び完掘状況平面・セクション及びエレベーション図(S=1/40)	76
Fig.45	2 群遺構配置図(S=1/60)	77
Fig.46	SK-2 礫出土状況及び側面図(S=1/40)	78
Fig.47	SK-2 完掘状況平面・セクション及びエレベーション図(S=1/40)	79
Fig.48	SK-3 完掘状況平面・エレベーション図及び礫検出状況(S=1/40)	80
Fig.49	SK-4 礫出土状況平面・セクション及びエレベーション図(S=1/40)	82
Fig.50	SK-4 完掘状況平面・エレベーション図(S=1/40)及び遺物出土状況(S=1/20)、 出土遺物(S=1/8)	83
Fig.51	SK-7 弥生土器出土状況・完掘状況平面及びエレベーション図(S=1/20)	84
Fig.52	P-1～7 平面及びエレベーション図(S=1/30)	85
Fig.53	Ⅱ区出土遺物--弥生土器(S=1/4)	86
Fig.54	文化11年銘瓦表採地点	93
Fig.55	Ⅲ区全体図(S=1/400)	95
Fig.56	Ⅲ区基本層序(1)(南北方向)(S=1/80)	97
Fig.57	Ⅲ区基本層序(2)(S=1/80)	98
Fig.58	出土遺物(縄文時代前期)(S=1/3)	99
Fig.59	SK-1 平面及びエレベーション図(S=1/30)	99
Fig.60	縄文時代中期の遺構と土器出土地点(S=1/100)	100
Fig.61	東側谷部検出遺構と地形(S=1/80)	101
Fig.62	SK-2 完掘状況平面・礫出土状況及びセクション図(S=1/30)	102
Fig.63	SK-3 サンプル採取地点(S=1/30)	104
Fig.64	SK-3 完掘状況平面・礫出土状況及びセクション図(S=1/30)	105
Fig.65	SK-4 完掘状況平面・礫出土状況及びセクション図(S=1/30)	106

Fig.66	SK-5～8完掘状況平面・礫出土状況及びセクション図(S=1/30)	109
Fig.67	遺構出土遺物(S=1/3・1/4・1/2)	110
Fig.68	貯蔵穴上面礫・杭検出状況及び杭断面図(S=1/40)	111
Fig.69	貯蔵穴(SK-2～SK-8)完掘状況平面・エレベーション図(S=1/60)	112
Fig.70-1	西側谷状地形谷落ち際堆積状況模式図	116
Fig.70-2	P-1～13平面・エレベーション図(S=1/40)	117
Fig.70-3	J-I層遺物集中地点(SX-1)	118
Fig.71	包含層出土遺物－縄文時代中期土器(1)(S=1/3)	119
Fig.72	包含層出土遺物－縄文時代中期土器(2)(S=1/3)	121
Fig.73	包含層出土遺物－縄文時代中期土器(3)(S=1/3)	122
Fig.74	包含層出土遺物－縄文時代中期土器(4)(S=1/3)	123
Fig.75	包含層出土遺物－縄文時代中期土器(5)(S=1/3)	123
Fig.76	包含層出土遺物－縄文時代中期土器(6)(S=1/3)	125
Fig.77	包含層出土遺物－縄文時代中期土器(7)(S=1/3)	126
Fig.78	包含層出土遺物－縄文時代中期土器(8)(S=1/3)	127
Fig.79	包含層出土遺物－縄文時代石器(1)(S=1/2・1/3)	128
Fig.80	包含層出土遺物－縄文時代石器(2)(S=1/3)	129
Fig.81	杭列平面・断面図(S=1/40)	136
Fig.82	包含層出土遺物－弥生時代以降(S=1/4)	137
Fig.83	追加実測縄文土器(S=1/3)	138
Fig.84	高知平野及び周辺の縄文前期土器出土遺跡	139
Fig.85	奥谷南遺跡出土縄文時代中期土器(S=1/6)	141
Fig.86	高知県の縄文時代中期の遺跡と高知平野の縄文時代後期初頭の遺跡	143
Fig.87	SX-1出土遺物(土器)(S=1/4)	147
Fig.88	南四国の縄文時代の竪穴住居(S=1/60)	148
Fig.89	高知県内の縄文時代の貯蔵穴と貯蔵穴検出遺跡位置図(貯蔵穴はS=1/60)	151
Fig.90	SK-2、SK-3出土資料の暦年較正	155
Fig.91	高知県の弥生時代の高地性集落遺跡(高山に立地する集落を含む)	163
Fig.92	(参考資料)石盤に刻まれた墓誌	169
Fig.93	高知平野の弥生時代集落遺跡及び墓	173
Fig.94	弥生時代前期 田村遺跡	175
Fig.95	弥生時代中期(田村遺跡、永田遺跡)・弥生時代後期(小籠遺跡、下ノ坪遺跡、ひびのき遺跡)	177
Fig.96	弥生時代終末(土佐岡衛跡、深淵遺跡、五軒屋敷遺跡、ひびのきサウジ遺跡)	179

表目次

Tab. 1	試掘調査出土遺物観察表(1).....	7
Tab. 2	試掘調査出土遺物観察表(2)－石器	7
Tab. 3	試掘トレンチの概要	9
Tab. 4	試掘調査区・本発掘調査区対照表.....	10
Tab. 5	周辺の遺跡.....	17
Tab. 6	I 区ST- 1 ビット計測表.....	34
Tab. 7	I 区SX-12出土焼粘土塊計測観察表.....	51
Tab. 8	I 区SK- 3 出土古銭計測表	58
Tab. 9	I 区出土遺物観察表(1).....	64
Tab.10	I 区出土遺物観察表(2).....	65
Tab.11	I 区出土遺物観察表(3).....	66
Tab.12	I 区出土遺物観察表(4).....	67
Tab.13	I 区出土遺物観察表(5)－石器-	67
Tab.14	II 区出土遺物観察表.....	87
Tab.15	II 区出土礫計測表(SK- 1 ～ 6、遺構外)	87
Tab.16	II 区出土礫重量階級別 一覧表.....	90
Tab.17	II 区出土礫石質別 一覧及び個数・重量%	91
Tab.18	III 区SK- 2 層別堅果類出土状況.....	113
Tab.19	III 区SK- 3 層別堅果類出土状況.....	113
Tab.20	III 区SK- 4 層別堅果類出土状況.....	113
Tab.21	III 区SK- 5 層別堅果類出土状況.....	114
Tab.22	III 区SK- 6 層別堅果類出土状況.....	114
Tab.23	III 区SK- 7 層別堅果類出土状況.....	114
Tab.24	III 区SK- 8 層別堅果類出土状況.....	114
Tab.25	III 区出土遺物観察表－縄文土器(1).....	130
Tab.26	III 区出土遺物観察表－縄文土器(2).....	131
Tab.27	III 区出土遺物観察表－縄文土器(3).....	132
Tab.28	III 区出土遺物観察表－縄文土器(4).....	133
Tab.29	III 区出土遺物観察表－縄文土器(5).....	134
Tab.30	III 区出土遺物観察表－縄文土器(6).....	135
Tab.31	III 区出土遺物観察表－石器.....	135
Tab.32	III 区出土遺物観察表－弥生時代以降.....	137
Tab.33	追加実測縄文土器観察表.....	138

Tab.34	高知県の縄文時代後期初頭の遺跡	144
Tab.35	高知県の縄文時代中期の遺跡	144
Tab.36	縄文時代中期後半の編年と高知県の遺跡	146
Tab.37	貯蔵穴別堅果類－種類・量－	153
Tab.38	奥谷南遺跡貯蔵穴まとめ	153
Tab.39	高知県の弥生時代の高地性集落(高山性集落を含む)	163
Tab.40	高知平野の弥生墓一覧表	181

写真図版

- 巻頭カラー 1 奥谷南遺跡Ⅰ～Ⅲ区全景－夏～秋－(1994.9撮影)
巻頭カラー 2 奥谷南遺跡遠景－冬－(1995.1撮影)
巻頭カラー 3 Ⅰ区弥生系高地性集落(南東側斜面)、Ⅰ区弥生系高地性集落(西側斜面)
巻頭カラー 4 Ⅰ区SK-1(甕墓)、Ⅰ区SK-1出土遺物(唐津Ⅰ中型甕と鉢)
巻頭カラー 5 Ⅱ区尾根上の土坑墓群(東から)、Ⅱ区尾根上の土坑墓群(上空から)
巻頭カラー 6 Ⅰ区ST-1から高知平野をのぞむ、Ⅱ区SK-3、Ⅱ区SK-4
巻頭カラー 7 Ⅱ区SK-2、Ⅱ区SK-2東端検出礫
巻頭カラー 8 Ⅲ区貯蔵穴周辺の景観、Ⅲ区貯蔵穴(SK-2～SK-8)、Ⅲ区縄文土器出土状況(171)

- PL 1 奥谷南遺跡調査前(上空から)、Ⅱ区調査前(上空から)、Ⅰ・Ⅲ区調査前(上空から)
PL 2 試掘調査
PL 3 Ⅰ区調査前風景、Ⅰ区西斜面調査前の状況及び確認トレンチ(TR-6)
PL 4 Ⅰ区全景(上空から)、Ⅰ区ST-1周辺(南から)
PL 5 Ⅰ区ST-1完掘(平野部をのぞむ)、Ⅰ区ST-1セクション
PL 6 Ⅰ区ST-1、ST-1出土遺物、Ⅱ区からⅠ区尾根方向をのぞむ
PL 7 Ⅰ区ST-1、Ⅰ区ST-1下層・最終確認
PL 8 Ⅰ区ST-2セクション、Ⅰ区ST-2完掘(斜面上方より)
PL 9 Ⅰ区SX-2、Ⅰ区西斜面・SX-3・SX-4・SB-1
PL10 Ⅰ区SX-8出土遺物、Ⅰ区SX-8からST-1方向をのぞむ
PL11 Ⅰ区SX-4、Ⅰ区SX-3、Ⅰ区SX-12
PL12 Ⅰ区SK-1出土遺物、Ⅰ区SK-1遺物取り上げ後の土坑とセクション
PL13 Ⅰ区SK-2
PL14 Ⅰ区SK-3セクション、Ⅰ区SK-3遺物出土状況(寛永通宝)、Ⅰ区SK-3
遺物出土状況(伊万里)
PL15 Ⅰ区SK-3
PL16 Ⅰ区調査風景
PL17 Ⅱ区調査前(北から)、Ⅱ区調査前(南から)
PL18 Ⅱ区遠景(南から)、Ⅱ区遺構完掘状況(上空から)
PL19 Ⅱ区確認トレンチ、Ⅱ区設定バンク(北から)
PL20 Ⅱ区南北方向バンク(6ライン)、Ⅱ区東西方向バンク(Cライン)
PL21 Ⅱ区SK-1・SK-6礫検出状況、Ⅱ区SK-1・SK-6最終礫検出状況
PL22 Ⅱ区SK-6、Ⅱ区SK-6、Ⅱ区SK-6、Ⅱ区SK-5
PL23 Ⅱ区SK-1からSK-3・4・5方向をのぞむ、Ⅱ区SK-1北端礫検出状況、Ⅱ区SK-2・3・4

- PL24 II区SK-2
- PL25 II区SK-2
- PL26 II区SK-2完掘、II区SK-2最終礫検出状況、II区SK-3
- PL27 II区SK-4、石列検出状況、供献土器(139)
- PL28 II区SK-4、II区SK-7、II区SK-4完掘
- PL29 II区遺構完掘状況、SK-1、SK-3、SK-4、SK-5
- PL30 III区調査前風景
- PL31 III区全景(上空から)、III区貯蔵穴周辺(上空から)
- PL32 III区西側谷状地形・遺構面、III区遺物出土状況
- PL33 III区東側谷状地形、貯蔵穴(北から)
- PL34 貯蔵穴(SK-2～SK-8北から)、貯蔵穴東側南北セクション
- PL35 III区貯蔵穴、SK-2、SK-2セクション、SK-3とSK-4、SK-3
- PL36 III区貯蔵穴、SK-4、SK-5、SK-2～8(南から)
- PL37 III区貯蔵穴、SK-5～8
- PL38 SK-2、SK-2最下層堅果類出土状況、出土直後の堅果類、III区貯蔵穴(SK-2・3・4・7)及び堅果類出土状況
- PL39 III区遺物出土状況
- PL40 II・III区作業風景
- PL41 試掘調査出土遺物
- PL42 I区ST-1出土遺物
- PL43 I区出土遺物(包含層、SX-4、SX-5)
- PL44 I区出土遺物(SK-1・SK-3)
- PL45 I区出土遺物(SK-4)
- PL46 II区出土遺物
- PL47 貯蔵穴出土堅果類(1)、貯蔵穴出土堅果類(2)
- PL48 III区遺構出土遺物
- PL49 III区遺構出土遺物、III区遺構外出土遺物(縄文前期)
- PL50 III区遺構外出土遺物(1)
- PL51 III区遺構外出土遺物(2)
- PL52 III区遺構外出土遺物(3)
- PL53 III区遺構外出土遺物(4)
- PL54 III区遺構外出土遺物(5)
- PL55 III区遺構外出土遺物(6)
- PL56 現地説明会
- PL57 調査に参加した人々(現場発掘作業)

第1章 調査に至る経過及び試掘調査

第1節 調査に至る経過

高知県に初めて高速道路が開通したのは、昭和62(1987)年のことである。吉野川上流の嶺北地域の大豊インターと高知平野東北端の南国インターを結ぶ、対面交通2車線の山岳ハイウェイが上佐路に高速時代の幕開けを告げた。全行程の57.1%をトンネルが占め、橋梁などの山地に由来する構造物を含めると山岳構造物は70%に達する。



Fig. 1 奥谷南遺跡位置図

総延長22kmではあるが県民に歓迎され、さらなる高速道路の延伸と道路網の充実が期待された。大豊～南国間の開通に続いて、平成4(1992)年に四国横断自動車道は四国山地を貫通する。川之江～大豊間の開通である。これによって、高知平野と本州が高速道路でつながり、四国横断自動車道は四国山地を横断する交通の動脈として機能し始める。中国地方や四国の他県での高速道路網の充実とともに高知平野と中四国・近畿の他都市との時間距離は益々縮まった。物資輸送も含めたその重要性については言を待たない。平成9(1997)年には、米子自動車道も開通、日本海と太平洋が約3時間半で結ばれた。日本海・瀬戸内・太平洋を結ぶ通称三海ロードとして物資流通・観光など多方面での効果が期待されている。平成10(1998)年3月には南国～伊野間が開通、県都高知市に初めて高速道路が乗り入れることになる。現在、高知県内では四国横断自動車道(伊野～須崎間)の平成14(2002)年開通を目指して工事が進行中である。

南国インターまでは山間部が中心だった四国横断自動車道だが、南国インター以西は高知平野北端の山麓部を縫うように走り、鏡川・仁淀川の高知平野西半の河川を経て平野部へと抜ける。南国インター以北では本発掘調査の対象は2遺跡(上佐山田町鍋古屋岩陰遺跡、南国市口ミノヲ谷古墳)だったのに対し、山麓～平野部の割合が増加した南国インター以西では15遺跡へと増加する。

南国市岡豊町小蓮地区に所在する奥谷南遺跡は、昭和63年の分布調査によって確認された遺跡である。遺物は縄文時代の乳棒状石斧1点であり、縄文時代の散布地として遺跡台帳に登録されたものの、遺跡の実態・拡がりなど詳細な内容については全く不明な状況だった。この奥谷南遺跡周辺が計画路線となり、最初に試掘調査実施計画が策定されたのは平成2年のことだが、用地買収等の交渉が進展し、実際に試掘調査の実施に至ったのは平成5年度になってからである。試掘調査の日程は1994年2月23日から3月31日、調査面積は400㎡である。合計35ヶ所のトレンチを設定して調査した結果、調査対象地の中で6つの調査区、約1万㎡について調査が必要であることが判明した。

試掘調査に基づいて協議の結果、奥谷南遺跡の本発掘調査実施を決定、日本道路公団高松建設局高知工事事務所と(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの両者が、平成6年4月1日付けで委託契約を締結した。調査は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが受託・実施した。平成6年

本発掘調査は、地形に即してⅠ～Ⅶの調査区を設定した上で調査区ごとに順次実施、3ヶ年にわたる調査となった。平成6年度にはⅠ～Ⅵ区の調査を実施したが、調査が終了したのはⅠ・Ⅱ・Ⅲの3調査区であり、家屋移転・用地買収などの諸事情により、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵの3調査区については一部分の調査に着手したのみであり、Ⅶ区は平成7年度に新たに設定したⅦ区とともに調査を進め平成7年度中に調査終了、Ⅳ区・Ⅴ区については、平成7年度から平成8年度にかけてⅤ区としてまとめて調査を実施した。

引用文献

1. 森田尚宏「銅古屋岩陰遺跡調査報告書」高知県教育委員会 1983年
2. 森田尚宏「ロミノヲ谷古墳」高知県教育委員会 1984年



第2節 試掘調査

1. 試掘調査の経過及び概要

四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う事前の試掘調査として、高知県教育委員会から委託を受け、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成6年2月23日から3月31日にかけて実施した。調査に際しては、日本道路公団高松建設局高知工事事務所・南国市教育委員会・高知県教育委員会の協力を得た。調査は松村信博（同センター調査員）が担当し、3月中旬から池澤俊幸（同センター調査員）の協力を得た。調査面積は400m²、全域で35ヶ所のトレンチを設定、調査を進めた結果、縄文時代～近世にかけての遺物遺構を確認した。遺物が確認されたのは、35ヶ所中22ヶ所のトレンチで、8ヶ所設定した調査区の内7ヶ所について全面あるいは部分的な本発掘調査が必要であると判断、平成6年度以降に本発掘調査を行うこととなる。

2. 調査の方法

調査対象地は山地が高知平野に落ち込む平野と山地の境界部に位置する。尾根と谷が入り組む複雑な地形を示すため、地形に即して8つの調査区にわけて、Ⅰ～Ⅷの調査区毎にトレンチを設定して調査を進めた。トレンチに全体の通し番号はなく、各区毎に1から付けていく。トレンチの規模は4m²～25m²、各地点の地形に即したものとなっている。

パワーショベル及び人力により表土を除去した後、人力により遺構検出作業を行った。谷だけではなく、丘陵上も試掘対象であり、急峻な斜面上に阻まれ機械力に頼ることができない調査区もあった。尾根上にあたるⅣ区・Ⅶ区・Ⅷ区は人力のみの調査である。



Ⅶ区



Ⅳ区

試掘調査の状況

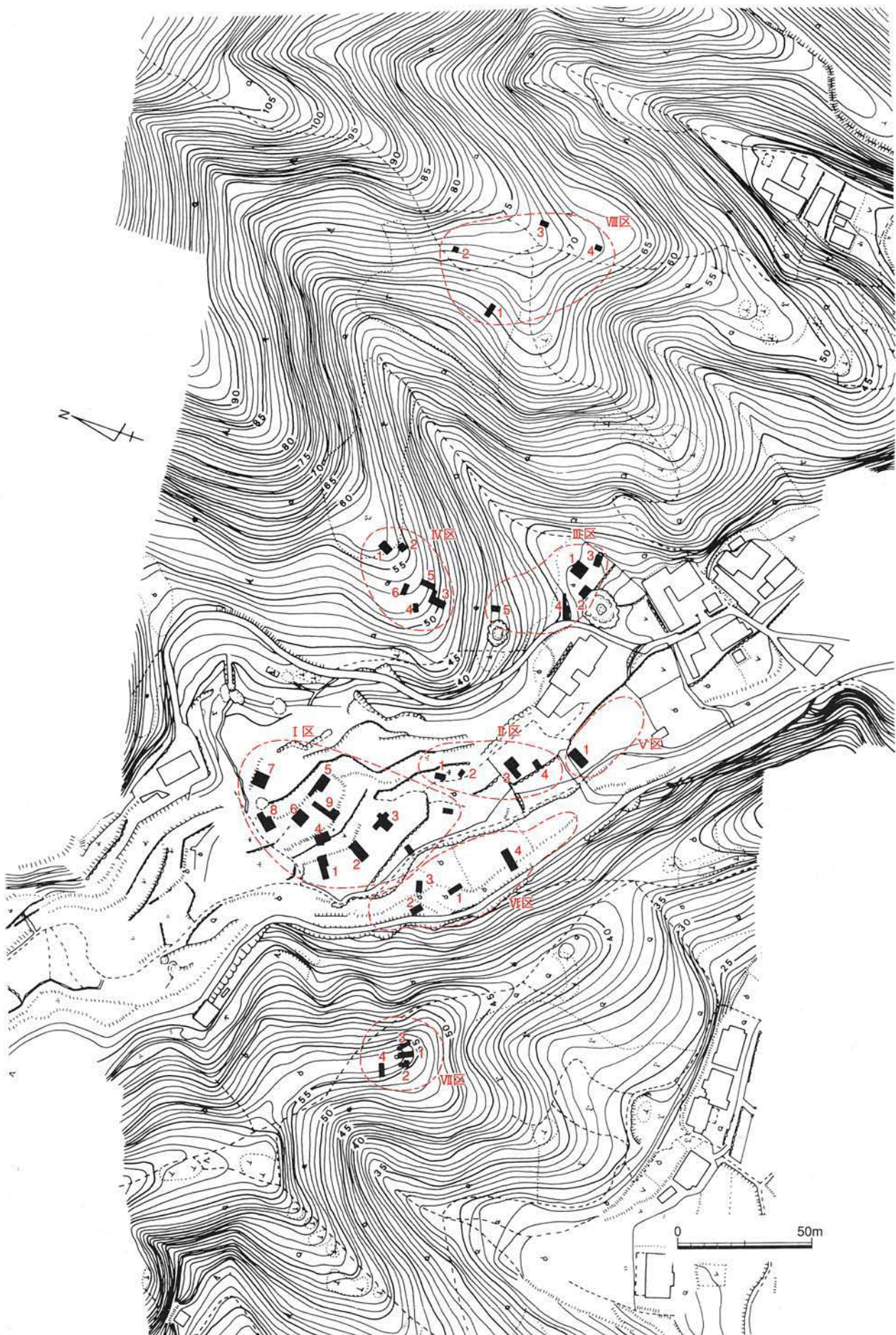


Fig. 3 試掘トレンチ位置図(S=1/2,000)

3. 試掘トレンチの概要

試掘トレンチの位置はFig.3のとおりである。また、試掘トレンチの調査面積・出土遺物・遺構等の概要はTab.3のとおりである。遺物は出土したものの、小片が多く、図示し得るものはFig.4の1～20の20点の遺物のみであった。

以下、調査区ごとに地形及びトレンチの内容について記述を進める。

(1) I区（→本調査時Ⅲ区）

TR-1～11

谷川の北側に形成された小規模な段田の上に舌状に延びた微高地を石垣を使い水田化、棚田として利用している。水田化に際して、削平・埋積が繰り返され、旧地形は改変されている。遺構遺物の伴う地点を中心に発掘調査が必要である。

棚田水田の中で谷川に接する最下段にTR-1～3を設定、削平・埋積による水田化を確認した。TR-3から1の9世紀初頭の土師器皿が確認され、杭列が検出された以外には遺物は認められない。

棚田の中段にはTR-4を設定、舌状の張出地形を確認し、2の縄文土器、3の近世陶器を検出した。2は縄文中期末の深鉢である。TR-4からは、他に数点の条痕を持つ縄文土器小片が検出されている。棚田のさらに上段からは東西に谷状に落ち込む地形が確認され（TR-5・6）、図示不能ではあるが、縄文土器・須恵器・土師器などの細片が確認されている。また、棚田の最上段、TR-7からも縄文土器・須恵器・土師器が確認されており、今回の調査対象区外に生活領域が広がっていたことが予想される。

(2) II区（→本調査時Ⅴ区）

TR-1～4

4ヶ所のトレンチを設定して調査を進め、全地点で黒褐色粘質土の厚い堆積を確認した。旧地形は、斜面を削り出して造られた平坦地であり、数年前まで家屋が建っていた地点である。II区の西半から遺物の出土は確認できなかったが、東半に設定したTR-3・4から縄文土器細片が確認されている。

遺構は把握できず、黒褐色土も北側の斜面からの流れ込みにより形成されたものと判断される。II区の東側にチャート巨岩と未移転家屋が残っており、家屋移転後に本発掘調査が必要であると考えられる。

(3) III区（→本調査時Ⅴ区）

TR-1～5

チャート巨岩東側の谷とそれに続く斜面をIII区と設定して調査を進めた。谷は2メートルの深さに埋め立てられ、石垣を築いて水田として利用されていた。表土1m下の礫層から磁器が出土した。水田化するために埋め立てられた時期は近現代だと考えられる。埋立土の下の岩盤直上の自然流路の埋積土中から弥生土器小片と古代の布目瓦(6)が検出されている。

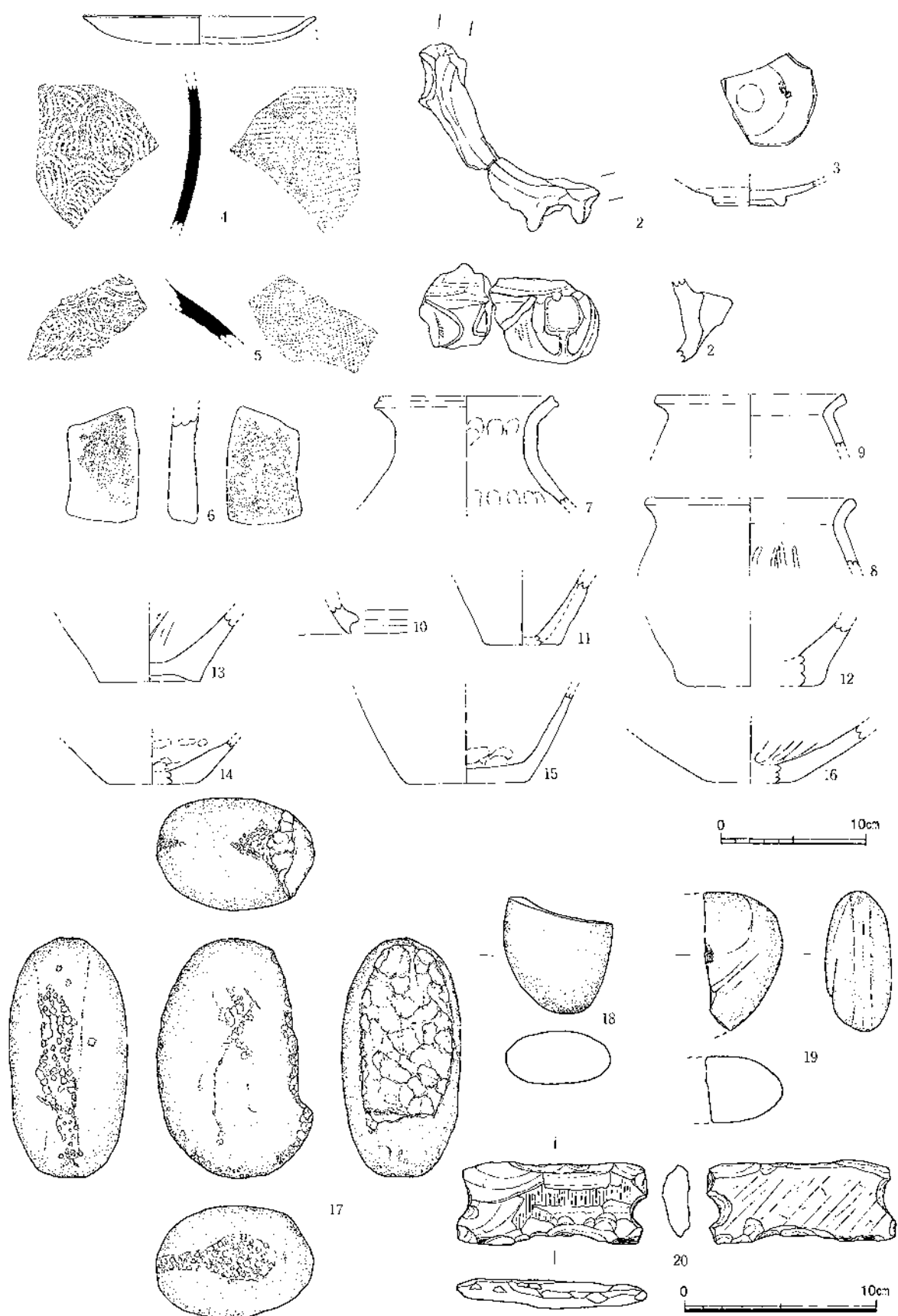


Fig. 4 試掘トレンチ出土遺物（1～6試掘Ⅰ区，7～16試掘Ⅲ区）（S=1/4・1/3）

Tab.1 試掘調査出土遺物観察表(1)

Fig. 番号	図版番号	出土地点 層位	種別	器種	法 量 (cm)				特 徴	色 調		備 考
					口径	器高	胴径	底径		内面	外面	
4	1	試掘Ⅰ区 TR-3	土師器	皿	16.0	3.0		12.0	口縁部は若干外反し、丸く収めた口縁に至る。内面には指頭圧痕が残る、外底は手持ちへう削り。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	9世紀初頭。
4	2	試掘Ⅰ区 TR-4	縄文土器	深鉢					外面2ヶ所に円形の突起部を持ち、元来は四隅にあったものと推定される。突起部の上端は横方向の鋸状の突起に連なる。外面に沈線による区画文を有し、LRの原体による縄文を施文。	暗灰黄色	暗灰黄色	縄文時代中期末。
4	3	試掘Ⅰ区 TR-4 II層	近世陶器	鉢				4.6	内面見込は白色化粧掛けの上に青緑色の釉をやや厚くかける。蛇ノ目状釉割ぎ。外面は白色透明の釉がかかるが、高台外面は露胎。高台は断面逆台形状で削り出し高台。	灰白色	灰白色	肥前系陶器。
4	4	試掘Ⅱ区 TR-6	須恵器	甕					内面、同心円叩き。外面、横方向の叩き(平行タタキ) 後縦方向の刷毛目。	灰色	灰色	胴部破片。
4	5	試掘Ⅱ区 TR-8	須恵器	甕					内面、同心円叩き。外面、縦方向の叩き(平行タタキ) 後横方向の刷毛目。	灰色	灰色	胴部破片。
4	6	試掘Ⅱ区 TR-9	瓦	平瓦					還元焼成だが軟質で摩耗著しい。内面に布目、外面に叩目が残る。	灰白色	灰白色	古代。
4	7	試掘Ⅳ区 TR-3	弥生土器	甕・口縁	12.0				横方向の強いナデのため口縁は上下に拡張、口唇は凹状にくぼむが明瞭ではない。摩耗顯著だが内面に指頭圧痕が観察される。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
4	8	試掘Ⅳ区 TR-3	弥生土器	甕・口縁	14.0				口唇は丸く収める。内面は縦方向のユビナデ。	黄褐色	褐色	
4	9	試掘Ⅳ区 TR-3	弥生土器	甕・口縁	12.8				頸部はくの字状に強く屈曲し、内傾面をなす口縁に至る。摩耗顯著で調整不明。	褐色	褐色	
4	10	試掘Ⅳ区 TR-3	弥生土器	高杯脚端部					横方向の強いナデにより脚端部を作り出す。内面に刷毛目残る。精選された胎土で砂粒はほとんど含まない。	褐色	褐色	
4	11	試掘Ⅳ区 TR-3	弥生土器	甕・底部				3.2	平底の底部。摩耗のため調整不明。チャートの砂粒を多く含み、雲母・角閃石も確認される。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
4	12	試掘Ⅳ区 TR-3	弥生土器	甕・底部				10.2	平底で厚さ20mm程の厚手の底部。チャート砂粒多し。調整不明。	浅黄色	にぶい黄褐色	
4	13	試掘Ⅳ区 TR-3	弥生土器	甕・底部				6.9	上げ底の底部で馬線部7～8mm幅で高台状に接地面を形成する。内面へう削り、外面刷毛後、率なナデ。	にぶい褐色	にぶい褐色	
4	14	試掘Ⅳ区 TR-3	弥生土器	甕・底部				6.0	平底の底部。	黄灰色	にぶい褐色	
4	15	試掘Ⅳ区 TR-3	弥生土器	甕・底部				8.2	平底の底部。内面に指頭圧痕が残る。外面は摩耗顯著だが、部分的にへう磨きの痕跡が観察される。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
4	16	試掘Ⅳ区 TR-3	弥生土器	甕・底部				6.4	平底の底部から体部は大きく開いて立ち上がる。	にぶい黄褐色	暗灰黄色	

Tab.2 試掘調査出土遺物観察表(2) 石器

Fig. 番号	図版番号	出土地点		器種	法 量				石 材	特 徴	備 考
		調査区	層位遺構		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)			
4	17	試掘Ⅰ区 TR露頭	黒色粘土層	叩石	12.4	7.3	5.8	740	砂岩	粗い粒子の砂岩。部分的に折損。円礫利用の叩石で、両端部及び側縁、表面ともに強い敲打痕が認められる。	縄文時代の層。
4	18	試掘Ⅱ区 TR-4		叩石	(5.1)	5.6	2.9	115	砂岩	粗い粒子の砂岩。端部と側縁に敲打痕あり。2次焼成を受けており、赤変している。	
4	19	試掘Ⅲ区 TR-3		叩石	(7.2)	(3.9)	3.5	(114.8)	砂岩	側縁に敲打痕あり。表面にわずかに敲打痕残るが、中央部で折損。	
4	20	試掘Ⅲ区 TR-3		石包丁	9.7	3.7	1.4	72.3	緑色岩系の堆積岩	両端部に抉りを持つ。加撃による剥離により形を整える。湾曲部と直線部を持つ両刃石包丁。表面にはわずかに擦痕が残る。刃部は両方ともに研ぎ出され、擦痕が観察される。	

チャート巨岩の北側は、厚い黒褐色土の堆積が認められた。土器は確認できなかったものの、17の叩石が出土している。

(4) IV区 (→本調査時I区)

TR-1～6

巨岩北の尾根上全域をIV区として設定、6ヶ所のトレンチを設定して調査を進めた。尾根中央からは遺物は検出できなかったものの、形態や現在へつながる地表の痕跡が全く残されていないことから、近世墓だと判断した遺構が2ヶ所確認されている。(TR-1・2)また、尾根の南側斜面からは弥生時代中期末～後期初頭の土器片が各トレンチから検出され、住居址も一棟確認された。(TR-3)麓からの比高差(約30m)と急斜面に立地する遺構であることから、弥生系の高地性集落であると判断される。

(5) V区 (→本調査時IV区)

TR-1

移転予定家屋の南側をV区としてトレンチを1ヶ所設定した。畑地として利用されており1ヶ所だけの確認にとどまったが、TR-1からは弥生土器とピットが確認されている。

(6) VI区 (→本調査の対象とせず)

TR-1～4

谷の南側一帯がVI区である。斜面を段状に成形し果樹園として利用していた。4ヶ所設定したトレンチいずれからも遺物・遺構ともに確認されず、河川沿いからは礫層と粘土層の堆積が確認された。

(7) VII区 (→本調査時II区)

TR-1～4

調査区西端の標高58m～60m前後の尾根上をVII区として設定した。4ヶ所のトレンチを設定し確認した結果、弥生時代後期末の土器片と石灰石・チャート・砂岩などの20～50cm大の礫からなる2条の石列を検出した。斜面落ち際に石列を検出した時点で墳丘は確認できなかったものの、墳丘の側面を画する石列と判断し、その拡がりを確認するため尾根南側の裾部にトレンチを設定したが他地点に設定したトレンチからは石列・遺物ともに検出できなかった。

(8) VIII区 (→本調査時VI・VII区)

TR-1～4

調査区東端の標高70m前後の斜面一帯をVIII区として設定、斜面を削り出して形成された平坦部及び尾根周辺にトレンチを設定した。尾根上からは遺物を確認することは出来なかったが、斜面に形成された平坦部から9～10世紀の土師器が出土している。

Tab.3 試掘トレンチの概要

調査区	トレンチ名	面積	遺 物	遺 構
Ⅰ区	TR-1	12㎡	なし	なし
	TR-2	12㎡	なし	なし
	TR-3	25㎡	土師器・本製品（杭）	杭列
	TR-4	16㎡	縄文土器・叩石	溝状遺構
	TR-5	16㎡	土師器・須恵器	谷状地形
	TR-6	14㎡	なし	なし
	TR-7	16㎡	縄文土器・土師器	谷状地形
	TR-8	20㎡	土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器	ピット・溝
	TR-9	18㎡	なし	ピット
	TR-10	5㎡	なし	なし
	TR-11	12㎡	なし	なし
Ⅱ区	TR-1	12㎡	なし	なし
	TR-2	4㎡	なし	なし
	TR-3	25㎡	縄文土器	現代の遺構のみ
	TR-4	12㎡	縄文土器	なし
Ⅲ区	TR-1	25㎡	なし	なし
	TR-2	8㎡	布目瓦・叩石	なし
	TR-3	6㎡	弥生土器	なし
	TR-4	6㎡	縄文土器・叩石	なし（谷底）
	TR-5	6㎡	須恵器	溝（現代）
Ⅳ区	TR-1	14㎡	瓦（時期不明）	土坑・ピット
	TR-2	4㎡	なし	土坑墓
	TR-3	12㎡	弥生土器・石包丁・叩石	住居跡・ピット・土坑
	TR-4	6㎡	弥生土器	ピット
	TR-5	8㎡	弥生土器	ピット
	TR-6	6㎡	弥生土器	ピット
V区	TR-1	20㎡	弥生土器	ピット・谷状地形
Ⅵ区	TR-1	8㎡	なし	なし
	TR-2	10㎡	なし	なし
	TR-3	8㎡	なし	なし
	TR-4	10㎡	なし	なし
Ⅶ区	TR-1	10㎡	弥生土器	石列
	TR-2	4㎡	弥生土器	石列
	TR-3	6㎡	弥生土器	ピット
	TR-4	4㎡	弥生土器	なし
Ⅷ区	TR-1	10㎡	土師器	なし
	TR-2	4㎡	土師器	なし
	TR-3	6㎡	なし	なし
	TR-4	4㎡	なし	なし

4. 試掘調査まとめ

(1)～(8)の各区の試掘調査の結果、①縄文時代中期末・弥生時代中期末～後期初頭・弥生時代後期末・古代（9世紀）・近世の各時期の遺物が確認された。②当初、チャートの巨岩のある谷の出口周辺に限定され则认为られていた遺跡の範囲が、谷西側の尾根（試掘Ⅲ区）・谷の北側の水田一帯（試掘Ⅰ区）・巨岩の北側に位置する尾根先端部一帯（試掘Ⅳ区）・縄文時代の石斧が出土した巨岩周辺一帯（試掘Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ区）・遺跡東端の斜面一帯（試掘Ⅶ区）と道路予定地外も含めて約3万㎡の範囲に拡がっていることが確認された。

Tab.4 試掘調査区・本発掘調査区対照表

試掘調査 調査区名称	対応する本発掘調査 調査区名称	遺跡全体での位置	標 高	試掘調査の時点で 出土した遺物
Ⅰ区	Ⅲ区	谷の北側一帯	20～30m	縄文土器
Ⅱ区	Ⅴ区	巨岩に接する家屋の西側	23～24m	縄文土器小片
Ⅲ区	一部Ⅴ区	巨岩の東側の谷	25～27m	近世以降の磁器
Ⅳ区	Ⅰ区	巨岩の北側の尾根一帯	49～60m	弥生土器
Ⅴ区	Ⅳ区	巨岩に接する家屋の南側	23m	弥生土器・土師器
Ⅵ区	調査の必要なし	谷川の南側一帯	23～30m	なし
Ⅶ区	Ⅱ区	遺跡西端の尾根頂部付近	55～58m	弥生土器・石列
Ⅷ区	Ⅵ・Ⅶ区	遺跡東端の尾根西斜面一帯	65～80m	土師器・青磁

第2章 地理的歴史的環境

第1節 地理的環境

1. 奥谷南遺跡の位置と行政区

奥谷南遺跡は、高知県の中央部高知平野の東半南国市岡豊町小蓮地区に所在し、北緯33度35分50秒、東経133度36分45秒付近を中心に約3万㎡の範囲に広がる旧石器時代から近世にかけての遺跡である。遺跡は四国山地に連なる南国市北部山地が高知平野に没する山地と平野の境界部に位置し、尾根と谷の入り組む地形を呈する。遺跡の南1.2kmを西流する国分川に向かって、これらの平野に没する丘陵に刻み込まれた谷から幾筋もの小河川が国分川に流れ込み扇状地性低地(谷底平野)を形成する。

遺跡の所在する南国市は高知市の東隣に接し、人口48,333人(平成9年4月1日現在)、昭和34年の町村合併によって誕生した市である。海岸線から独立丘陵の点在する平野部、四国山地に連なる山地まで東西6～8km、南北20kmの南北に細長い市で、総面積125.21km²、耕地面積は2,286haと県下最大であり、かつ農家人口112,011人で県下最多と、産業の中心は農業である⁽¹⁾。農村地帯が市の大半を占め、かつて米の2期作中心地の一つとして知られていた水田地帯が平野部に広がっている。海岸部の砂丘上では施設園芸が盛んである。

近年、高知空港の拡張、高速道路の延伸などに伴う道路網の整備が進み、それに伴って市街化が進んでいる。高知市近郊としての急速な市街地拡大に対する都市基盤整備も課題の一つである。積年の課題となっていた南国市の中心地「後免町」市街地再開発事業も始まり、「人が輝く夢ロマン人間都市」・「心が安らぐ健康文化都市」・「まちが煌めく産業元気都市」をテーマにした『南国市総合計画』が策定されている⁽²⁾。高速道路・空港が近いという立地条件を生かして、四国横断自動車道南国インター近く久礼田地区の南国オフィスパーク、高知空港近くの浜改田地区の大規模物流団地が建設されるなど社会資本の整備が推し進められている。遺跡の所在する岡豊町小蓮地区は平野北端の山麓に位置し、高知医科大学、岡豊城跡、高知県歴史民俗資料館等のある文教の里である。遺跡・文化財の集中する岡豊地区・国分地区・長岡地区は「まほろばの里」と位置づけられ、これらの共有財産を生かした街づくりが目指されている。

2. 遺跡周辺の地質

地質の上でみれば、遺跡のある丘陵部は白木谷層群南側の白木谷亜帯に属する。谷川に沿った小地形はこれらの丘陵が開析されてできたものである。白木谷層群が形成されたのは古生代ペルム紀占世～中世であり、この層群は砂岩と泥岩の互層からなり、石灰岩・チャート・塩基性凝灰岩を含んでいる。白木谷層群白木谷亜帯は秩父累帯北帯の南限を画しており、この南縁に沿って秩父累帯中帯の北半を含む領域に黒瀬川構造帯が分布する。遺跡の南東約1キロの地点に蛇紋岩の露頭が観察できる岡豊山が位置しており、岡豊山周辺は黒瀬川構造帯に属している。白木谷亜帯は幅約4km

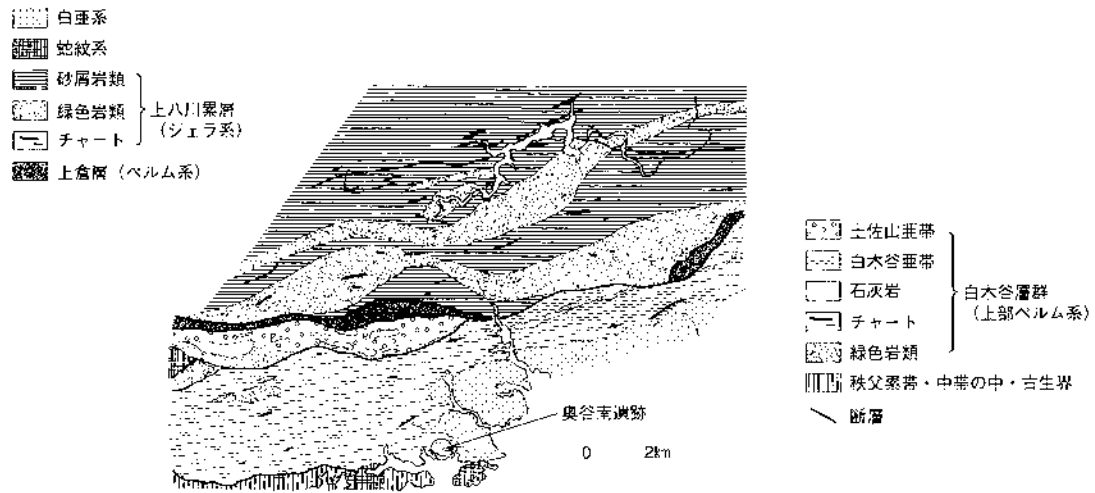


Fig. 5 高知県高知市北部—土佐山田町北部の地質図

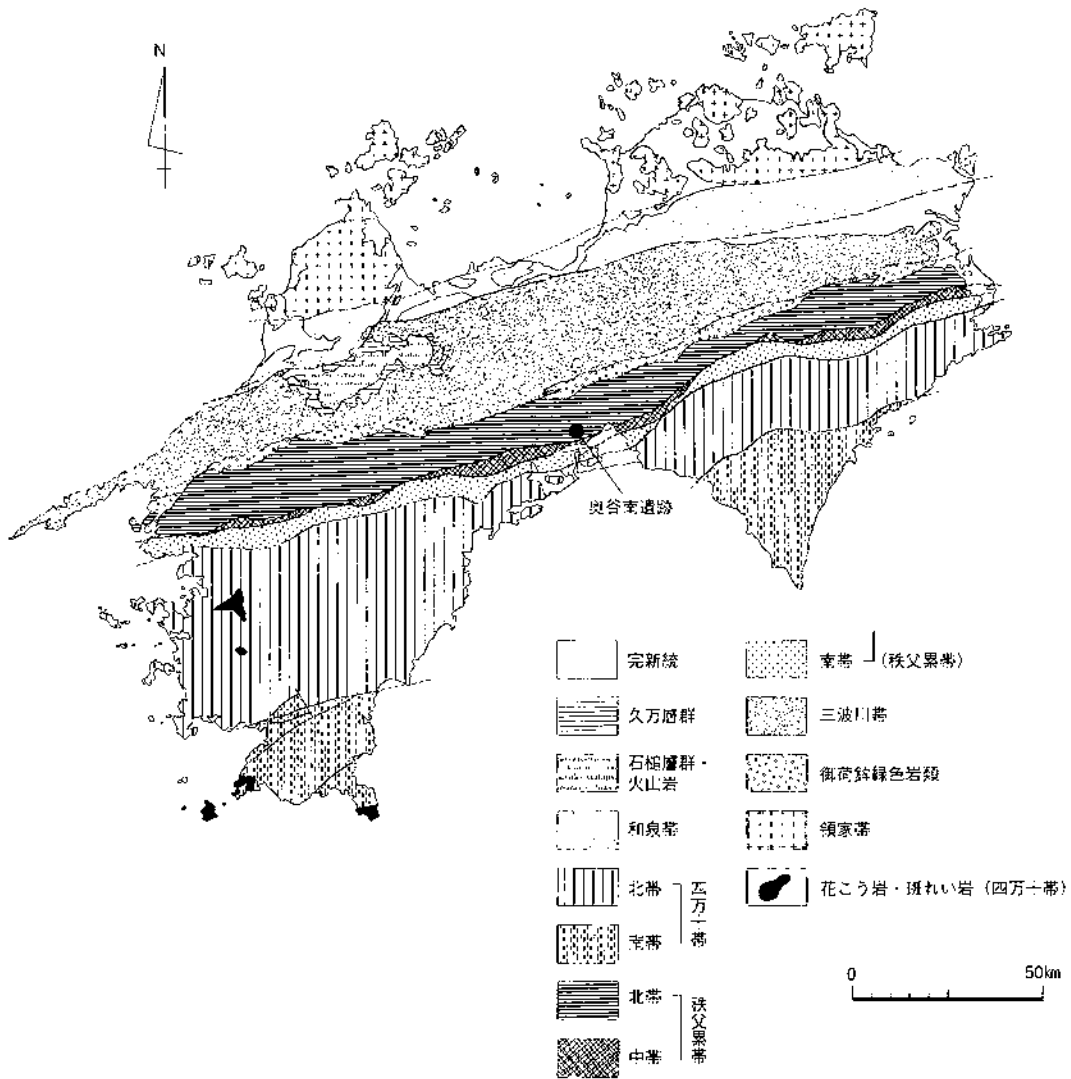
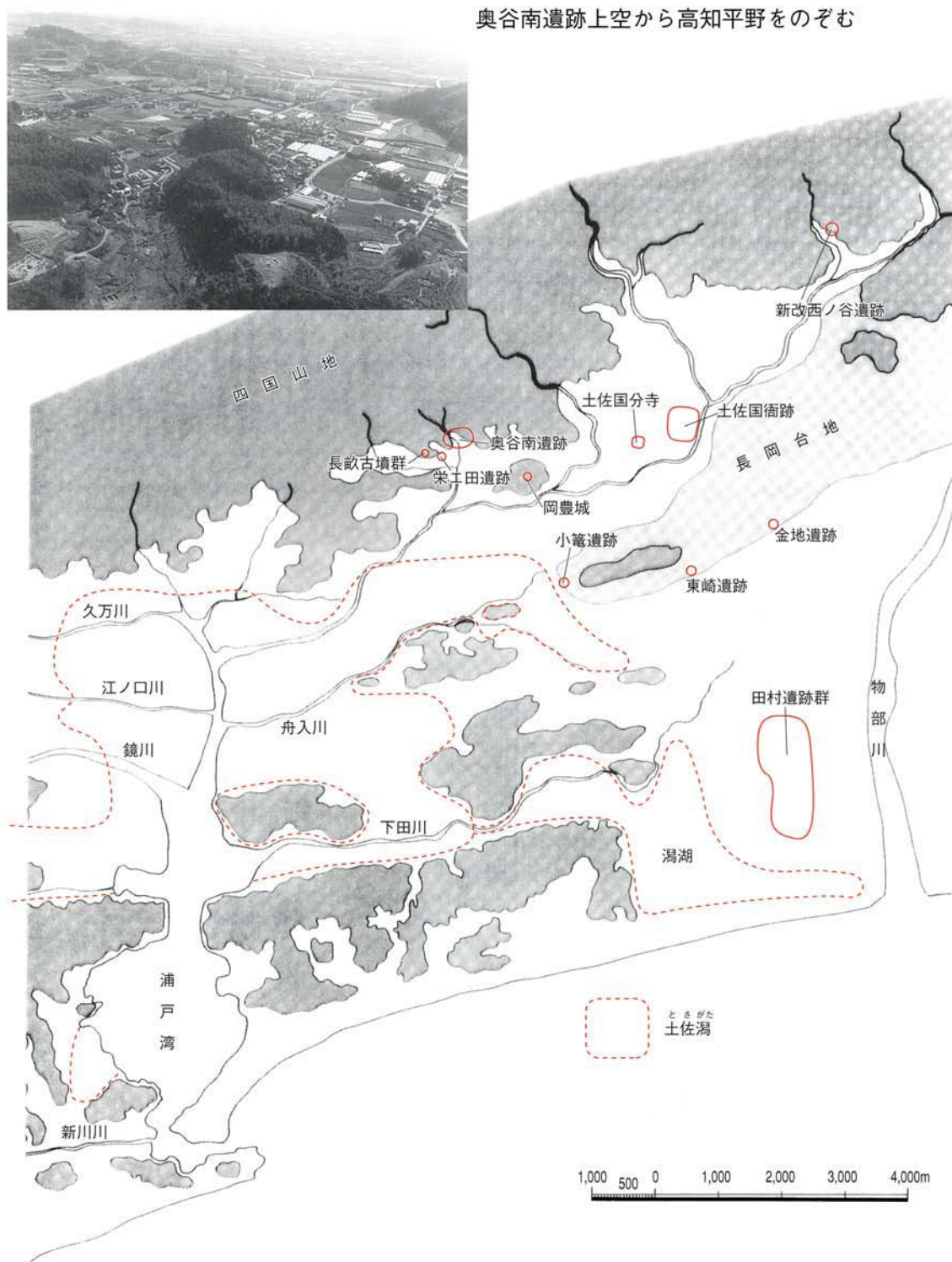


Fig. 6 四国地方の地帯構造区分 (『四国地方—日本の地質8』 共立出版株式会社を参考にして作成)

で帯状に分布、その北には約1キロの幅で石灰岩が集中する白木谷層群土佐山垂帯が分布する⁽³⁾。奥谷南遺跡で観察された岩類は砂岩・泥岩・石灰岩・チャートなど白木谷層群に含まれる岩類が中心である。中でも泥岩とチャートが多く、特にチャートは高さ5～10mの岩塊が点在する状況で認められる。石灰岩は遺構（弥生時代終末の土坑墓等）から出土したものの遺跡周辺では認められな



かった。検出された石灰岩は他の土地から現地に運ばれたものだと考えられるが、白木谷層群全域に石灰岩の含まれている可能性があり、産出した土地の特定はできない。最も近い石灰岩の集中は、遺跡から北へ約4kmの土佐山亜帯に属する南国市白木谷地区に認められる。

また、遺跡の南約1kmを西流する国分川の形成する段丘上には、弥生時代から近世に至る遺跡の集中が見られ、さらに南側には、浦戸湾が深く湾入し古浦戸湾を形成していたと考えられており、最近、遺跡の分布と古浦戸湾の形状に着目して「土佐潟」という概念によって南国市から高知市東半の平野部を理解しようとする考えも示されている⁽⁴⁾。

土佐潟の縁辺に沿って遺跡は分布しており、奥谷南遺跡も縄文時代以降、この土佐潟と無縁ではなかったと考えられる。なお、南国市稲生付近で、土佐潟は一旦途切れ、物部川付近に接する地点と砂丘の自然堤防に囲まれた一帯は「潟湖」を形成していたようである。旧村遺跡群の南面には、この潟湖が広がっていた。

3. 奥谷南遺跡周辺の地形

奥谷南遺跡は、白木谷層群白木谷亜帯に属する丘陵上・丘陵先端部と丘陵の間の谷間に立地し、土佐潟の北端に位置する遺跡だと言える。遺跡の谷間を開析する小河川は国分川に流れ込み、小規模な扇状地性低地(谷底平野)を形成する。時期による環境の変化はあろうが、この遺跡が国分川と土佐潟から受けた影響は看過できない。また丘陵の形状と高さ数m～10数mの巨岩の佇立する地形的特徴も遺跡環境を考える上で重要である。南東に開く谷は冬期の風を遮り、谷に囲まれていない平野部と比べ、格段と暖かな気候をつくりだす。旧石器時代には人々の移動時にチャートの巨岩は格好の目印となったであろうし、風化して河川に流れ込んだチャートの転石は石器原料として有用であったであろう。現在、遺跡の北側にはアカガシの林が繁り、丘陵上は県内でも有数の自然林を形成する⁽⁵⁾。四国山地に連なるこの丘陵は、往時の気候に応じた豊かな森林を形成していたものと推察される。

引用文献・註

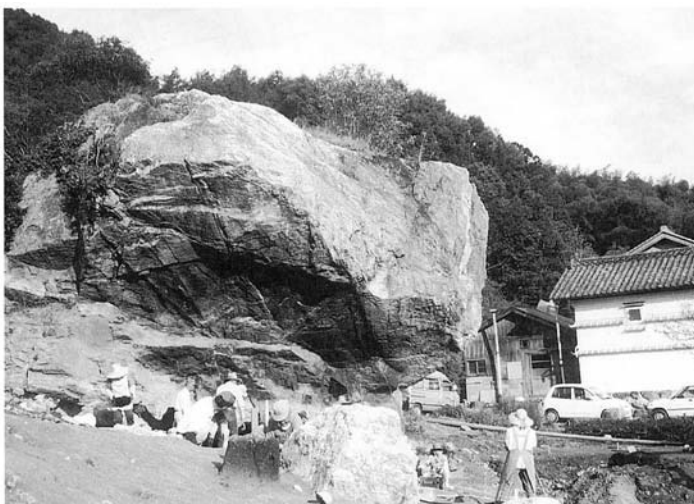
- (1) 『1997高知県県民手帳』高知県統計協会 1997年
- (2) 『まほろばのふるさとNANKOKU－南国市・市勢要覧－』南国市 1997年
『土佐のまほろば・南国ルネサンス構想－南国市総合計画－』南国市 1996年
- (3) 『四国地方-日本の地質8』共立出版 1991年
- (4) 出原恵三「第四章考察 1 弥生時代から中世における小籠遺跡の変遷」(『小籠遺跡Ⅲ』)高知県埋蔵文化財センター 1997年
- (5) 1995年2月、発掘調査現場での恒石直和氏(高知市子ども科学図書館)の御教示による。

第2節 歴史的環境

奥谷南遺跡は高知平野の北西端に位置し、周辺には岡豊城跡、土佐国衙跡、比江磨寺、土佐国分寺など古代～中世の遺跡が集中し、当時は土佐の中でも中心となる場所の一つであった。これらの遺跡は国分川によって形成された扇状地性低地や平野部に点在する小起伏丘陵（起伏量100m以下の丘陵地）周辺に立地する。一方、旧石器時代～縄文時代については、近年の開発に伴う調査により徐々に報告される事例が増え始めたものの、高知平野全体でも様相が判り始めたところであり、現段階で不明な点も多い。奥谷南遺跡は旧石器時代から近世に至る遺物が確認されている。各時期ごとに国分川中流域を中心に高知平野の北西辺の遺跡を概観する。

1. 旧石器時代

高知県の旧石器時代については「旧石器の空白地帯」と称される程、当該期の遺跡が少ない。近年の調査によって高知県西部では徐々に遺跡数が増加しているものの、高知平野周辺では、古墳石室流入土中より出土した1点の細石核^①を除いては、旧石器時代の遺物は全く出土していない状況であった。このような状況下において、本遺跡の岩陰（奥谷南岩陰）周辺から、細石刃400点、細石核150点、ナイフ形石器50点など従来予想し得なかった旧石器時代遺物が確認された^②。現在遺物整理中であり、まだ全貌はつかめていない。現段階ではっきりしていることは、A T上層にナイフ形石器の2枚の文化層（1枚は関東のIV層下部に併行するバラエティーに富む形態を持つナイフ形石器の一群であり、もう1枚はナイフ形石器文化終末に比定される小型化する段階である。）があるということ、そして旧石器時代終末の細石器文化期^③の遺物が集中し、層中からは植物食利用を示す叩石が共伴するということである。石材から見ると、瀬戸内から畿内馬辺を席卷した瀬戸内技法及びそれに連なるサヌカイトは全く認められず、在地の石材である「チャート」を利用している。岩陰自体がチャートの巨岩により形成されており、石材の入手は容易であったものと考えられる。また、この時期の角錐状石器が10点あまり出土しており、九州の状況に類似する様相として注目される^④。詳細な報告は『奥谷南遺跡Ⅲ』（平成12年度刊行予定）を待ちたい。



奥谷南岩陰

また、1997年に国分川水系の上流域の上佐山田町新改西谷遺跡から2次堆積ではあるものの（室町時代の寺院造成時の堆積土中からの出土）小型のナイフ形石器50点あまりが確認されている^⑤。正確な時期は特定できないもののナイフ形石器後半期（A T上層）に属する遺物と想定され、南東に開く谷の丘陵先端に立地すること、チャートを利用していることなど奥谷南遺跡との類似性も注目される。

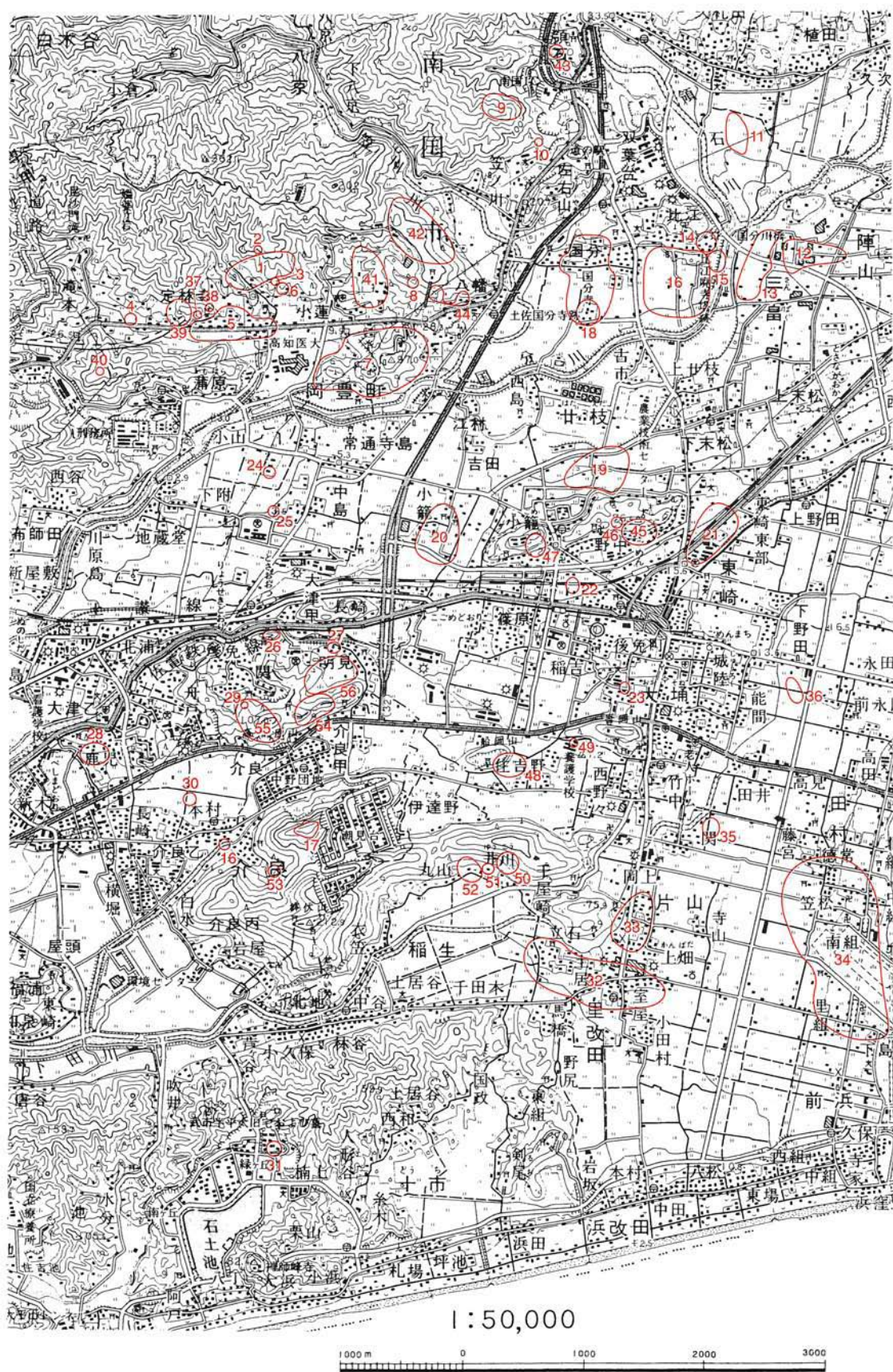


Fig. 8 周辺の遺跡分布図 (S=1/50,000)

2. 縄文時代

高知平野の縄文時代の遺跡は遺跡深度の関係もあり、近年に至るまではほとんどその存在を知られていなかった。1980年代前半までは国分川流域の南国市岡豊町栄エ田遺跡でビニールハウス建設に伴う調査で縄文後・晩期の土器が出土した⁶⁾ものの、それ以外の縄文時代の遺跡としては石斧が確認された奥谷南遺跡、奥谷北遺跡、国分熊野神社西裏遺跡⁷⁾など散布地を挙げることができるに過ぎなかった。高知平野の縄文時代については1980年代後半以降の空港・高速道路等の大規模な社会資本整備に伴い、徐々にその姿が解明されつつある。

草創期～中期

草創期から中期にかけての遺跡は、高知県内全域で見ても少なく、その多くが表採資料であり発掘調査が実施された遺跡はほとんどない。草創期の土器はいずれも草創期前半に属し、高岡郡佐川町不動ヶ岩屋洞窟遺跡⁸⁾・幡多郡土和村十川駄場崎遺跡⁹⁾そして奥谷南遺跡から出土している。この3遺跡と幡多郡大月町ナシヶ森遺跡¹⁰⁾の4遺跡が発掘調査の実施された草創期遺跡である。

高知平野周辺に限定すると、草創期は奥谷南遺跡、早期は土佐山田町飼古屋岩陰遺跡¹¹⁾、香北町刈谷賀野遺跡¹²⁾、奥谷南遺跡、前期は本山町松ノ木遺跡¹³⁾、栄エ田遺跡¹⁴⁾、奥谷南遺跡、中期は松ノ木遺跡、奥谷南遺跡など各時期ごとに数遺跡ずつの遺跡を挙げ得るに過ぎない。その中で、奥谷南遺跡は縄文草創期から中期にかけての各期の資料が出土しており、注目される。

Tab.5 周辺の遺跡

No.	遺跡名	時 期	No.	遺跡名	時 期	No.	遺跡名	時 期
1	奥谷南遺跡	旧石器～近世	20	小籠遺跡	弥生～近世	39	芝の前古墳(1～3号)	古墳
2	奥谷北遺跡	縄文	21	東崎遺跡	弥生～中世	40	蒲原山古墳	古墳
3	宮の前遺跡	弥生～平安	22	野中廃寺跡	平安	41	小蓮古墳群(1～4号)	古墳
4	滝本遺跡	古墳, 近世	23	大篠遺跡	弥生	42	舟岩古墳群(1～16号)	古墳
5	栄エ田遺跡	縄文～近世	24	中島町田遺跡	古墳～平安	43	コミノヲ谷古墳	古墳
6	小野上居城跡	中世	25	カラツ池遺跡	中世	44	蔵本1・2号墳	古墳
7	岡豊城跡	中世	26	大津城跡	中世	45	年越山古墳(1～3号)	古墳
8	狭間遺跡	弥生	27	竹の後遺跡	弥生, 古墳	46	坂折山1・2号墳	古墳
9	新城城跡	中世	28	鹿兒遺跡	古代	47	越戸1・2号墳	古墳
10	笠の川窯跡	古墳	29	高岡原1号墳	古墳(旧石器)	48	住吉山古墳(1～4号)	古墳
11	白猪田遺跡	古墳～平安	30	介良遺跡	弥生～中世	49	吾岡山古墳	古墳
12	三島遺跡	弥生～平安	31	運倉遺跡	弥生	50	井川1・2号墳	古墳
13	淵の上遺跡	弥生～平安	32	尾改田遺跡	弥生～中世	51	馬背古墳	古墳
14	比江山城跡	中世	33	中組遺跡	弥生～中世	52	馬背裏1・2号墳	古墳
15	比江廃寺跡	白鳳, 奈良	34	田村遺跡群	縄文～近世	53	宮の谷古墳	古墳
16	土佐国府跡	弥生～中世	35	関町田遺跡	弥生	54	狸岩古墳(1～3号)	古墳
17	国分寺遺跡群	古墳～近世	36	カントヲリ遺跡	縄文古墳～平安	55	高岡原古墳群	古墳
18	土佐国分寺跡	奈良, 平安	37	長畝遺跡	弥生	56	明見山古墳(1～3号)	古墳
19	土島田遺跡	弥生～近世	38	長畝古墳群	古墳			

後期～晩期

田村遺跡群からは第Ⅰ期調査(1980～1983)で後期の彦崎KⅠ式土器が、第Ⅱ期調査で後期の鐘崎式土器が検出され、九州との関係を示すものとして注目された⁽¹⁵⁾。奥谷南遺跡の尾根を挟んだ西側の栄エ田遺跡からは四国横断自動車道に伴う1993年度調査で、後期初頭の中津式から後半の伊吹町式に至るまで、晩期についても前半・中葉・後半の各期の遺物が確認され、蛇紋岩製の磨製石斧が破損品も含めて30点程出土している⁽¹⁶⁾。

高知平野の西部に目を転じれば、春野町西分増井遺跡では後期から晩期の土器を含む包含層⁽¹⁷⁾が、高知市柳川遺跡で後期初頭の中津式新段階と晩期終末の突帯文土器⁽¹⁸⁾が、伊野町八田神母谷遺跡で後期後半の伊吹町式土器と晩期後半の突帯文土器⁽¹⁹⁾が確認されるなど、1990年代に入って、新たな資料が蓄積されつつある。

奥谷南遺跡の北に連なる四国山地、吉野川上流域には後期の縁帯文成立期の松ノ木式土器の標式遺跡である本山町松ノ木遺跡⁽²⁰⁾があり、後期を中心に前期から晩期に至る土器が確認されている。チャートの岩陰遺跡である土佐山田町飼古屋岩陰からは、早期の押型文土器とサヌカイト製の石鏃がまとまって出土している⁽²¹⁾。物部川中流域の河岸段丘上では土佐山田町林田シタノヂ遺跡で中津式土器と晩期の無刻み日突帯を持つ土器が確認されている⁽²²⁾。また、物部川流域では香北町美良布遺跡⁽²³⁾、香我美町十萬遺跡⁽²⁴⁾から晩期の貯蔵穴が検出され、周辺に集落の存在が予想されている。

縄文時代の資料は増加しているものの、高知平野周辺で確認された竪穴住居は1棟に過ぎず、南四国中央部の縄文時代像を描くためには、さらなる資料の蓄積を待たなければならない。

3. 弥生時代

遺跡の南西10kmの地点には前期初頭の村の調査を行い、集落の姿にせまった田村遺跡群がある。高知空港拡張工事(第Ⅰ期)に伴う調査(1980～83)によって、前期から中期そして後期初頭へと変遷する拠点集落、田村遺跡群の姿が明らかになった⁽²⁵⁾。古相の遠賀川式土器が出土し、弥生時代で最も古い段階の「村」のまとまった調査という点で注目された。高知空港は現在第Ⅱ期拡張工事に伴う調査(1996～)が行われており、さらに広範な集落の姿が把握されつつある。

弥生前期前半の土器については、従来田村遺跡群、春野町西分増井遺跡、仁ノ遺跡⁽²⁶⁾で類例が知られるに過ぎなかったのだが、近年の調査で仁淀川流域で出土例が増加している。また吉野川上流域の本山町松ノ木遺跡や土佐町銀杏の木遺跡⁽²⁷⁾からも出土しており、従来、点として捉え得るのみであった南四国中央部の弥生時代前期前半の状況も徐々にではあるが面的に捉えられるようになってきた。

前期後半から前期末にかけての遺跡は急増し、高知平野東半に限っても、南国市大篠小学校校庭遺跡⁽²⁸⁾、栄エ田遺跡、小籠遺跡⁽²⁹⁾、香我美町下分遠崎遺跡⁽³⁰⁾、野市町下ノ坪遺跡⁽³¹⁾、高知市介良遺跡⁽³²⁾など遺跡数からも集落の拡散は明らかである。

中期に入ると一転して遺跡は急減する。特に中期前半の畿内Ⅱ様式併行期には遺構もほとんど確認されておらず、当該期の遺跡もほとんどなくなる。中期中葉の櫛描文盛行期のⅢ様式中段階から凹線文が登場する新段階への転換期を経て、中期後半になって平野部周辺に高地性集落が登場する。

高知県全体で26遺跡が確認されている高地性集落だが、最古のものはⅢ様式新段階からⅣ様式にかけての高知市朝倉城山遺跡⁽³³⁾で、県内の弥生系高地性集落は全て中期後半から後期初頭に属する。高知平野周辺では、東部の野市町本村遺跡⁽³⁴⁾、鬼ヶ岩屋洞穴遺跡、笹ヶ峯遺跡、南国市狭間遺跡、奥谷南遺跡、西部の高知市朝倉城山遺跡、伊野町バーガ森北斜面遺跡、土佐市市木山遺跡などが挙げられる。東部の遺跡と西部の遺跡の間の出土土器に占める凹線文を有する土器の割合が異なること等から、当時の高知平野の緊張関係の一端を知ることができる。

周辺の他地域同様、無文化を指向した後期前半の高知平野の土器は、中葉から後半にいたって叩き目が盛行する段階で、土佐山田町ヒビノキ遺跡⁽³⁵⁾、南国市東崎遺跡⁽³⁶⁾、金地遺跡⁽³⁷⁾など長岡台地縁辺部や栄エ田遺跡など国分川流域に開発を進め、金属器の普及とともに集落数も増加する。古墳時代前夜に西日本各地で独自の弥生墳丘墓などの墓制が展開するが、高知平野の様相は明らかではない。南国市東崎遺跡の方形周溝墓、土佐国衙跡の礫を投げ込んだ土坑墓⁽³⁸⁾、南国市五軒屋敷遺跡⁽³⁹⁾、土佐山田町林田遺跡⁽⁴⁰⁾の土器棺墓などが、現在知られている弥生時代終末の高知平野の墓制である。

4. 古墳時代

遺跡の周辺は後期古墳の密集地であり、高知県最大の小連古墳を有する小連古墳群、最大規模の古墳群である舟岩古墳群、蒲原山古墳群など平野の北端の丘陵上には多くの古墳群が集まっている。多くの後期古墳が知られる中で、古墳時代前期の姿は明らかではなかった。1994年の四国横断自動車道に伴う長畝古墳群の調査で、同一丘陵上から4世紀前半・5世紀後半・6世紀前半の古墳(長畝2～4号墳)が確認され、それに先行する古墳時代初頭の土坑も検出されるなど注目される成果が得られている⁽⁴¹⁾。従来、土佐は初期須恵器が出土せず、幡多と較べても古相の須恵器が著しく少ない地域とされてきたが、近年の調査で平野部全域から初期須恵器の出土が確認されるようになった。遺跡の南5kmにある高知市介良遺跡からも5世紀中葉の須恵器が出土しており⁽⁴²⁾、高知平野の古墳時代前期の様相が徐々に解明されつつある。

集落は古墳時代初頭のヒビノキⅢ式併行期の集落は南国市・土佐山田町を中心に数多く調査されている。この時期以降5～7世紀の集落の調査例は少ないが、野市町深瀬遺跡⁽⁴³⁾、下ノ坪遺跡、香我美町拝原遺跡⁽⁴⁴⁾、南国市土佐国衙跡、小籠遺跡などに類例が認められる。

5. 古代

東方約5キロに土佐国衙跡が所在している。11次にわたる調査が実施された国衙推定域の調査により遺跡の様相は把握されつつあるが、政庁域については現段階でまだ明らかになっていない⁽⁴⁵⁾。

古代の寺院も国分寺・比江廃寺・秦泉寺廃寺・野中廃寺の各遺跡の発掘調査が実施されており、成果の報告が待たれている。

近年、物部川下流域の野市町下ノ坪遺跡(左岸)、南国市岩村遺跡(右岸)で相次いで発掘調査が実施され、いずれも川津として位置づけられている。特に下ノ坪遺跡では土佐国衙跡にも勝る規模の

柱穴を有する官衙関連建物群や発掘調査では全国3例目の四仙騎獣八稜鏡が出土するなど注目される内容を持っている⁽⁴⁶⁾。

奥谷南遺跡近辺では古代に属する遺跡は少ないが、遺跡の南約200mには式内社である小野神社があり、西隣の栄エ田遺跡からは8世紀後半の円面硯が出土している⁽⁴⁷⁾。

6. 中世

奥谷南遺跡は江村郷に属し、長宗我部氏の居城岡豊城に近接した位置にある。検地(長宗我部地検帳)もここからはじめられており、遺跡付近は長宗我部氏に関係が深かったと考えられる。岡豊城については6次にわたる発掘調査が実施され⁽⁴⁸⁾、成果に基づいて史跡公園化されている。残念ながら地元民間企業の開発により一部破壊されてしまった箇所もあるが、跡地は歴史民俗資料館として活用されている。

中世の集落については、岡豊市町^{いちまろ}をはじめ長宗我部地検帳を元にした集落の復元研究が行われている。集落推定地の開発に際しては、事前に十分な調査が求められる。

7. 近世以降

近世の村落についても、考古学の立場から精力的な研究が進められている。長岡台地の縁辺部、小籠遺跡においては、地名・長宗我部地検帳・遺構・遺物・文献資料等様々な側面から当時の集落の姿を鮮やかに浮かび上がらせ、考古学と文献史学及び周辺諸科学の連係による近世村落研究の一つの到達点が示された⁽⁴⁹⁾。長岡台地上は近世になってはじめて本格的に開発されたことが陣山遺跡⁽⁵⁰⁾・五反地遺跡⁽⁵¹⁾など発掘調査の結果からも裏づけられている。また、近世墓の研究も考古学の立場から積極的に進められ、小籠遺跡の調査結果を基に集成が行われている⁽⁵²⁾。

1998年の考古学協会沖縄大会では、戦争遺跡を対象とした分科会が初めて設置される⁽⁵³⁾など、戦跡考古学も市民権を持ち広がりつつある。高知平野でも本上決戦に備えた第55軍(四国防衛軍)の遺した遺構が平野部一帯で知られており、上佐市人麻呂様城跡では塹壕が発掘調査の対象となっている⁽⁵⁴⁾。また、南国市陣山北遺跡では、陣山海軍送信所跡地の武装解除された第55軍の放棄した夥しい武器弾薬類が出土し、兵器の特徴を抽出することで第55軍の性格に迫るという試みもなされている⁽⁵⁵⁾。

今回の調査範囲には含まれないが、遺跡周辺の丘陵にも第2次大戦末期に安芸兵団(第205師団)によって築かれた各種の塹壕(塙遠陣地など)が遺されている。戦後53年を経て、当時の記憶を語ることのできる人々も少なくなってきた今、戦時中の遺構の現状把握と位置付けが急務である。

8. 遺跡の所在する小蓮地区について

遺跡の所在する小蓮地区は、明治17年(1878)合併に際し、旧小野村・奥谷村・大谷村・蓮如寺村を併せて「小蓮村」と称するようになる。小野村の「小」と蓮如寺村の「蓮」と取り、合成して小蓮という地名ができ上がった⁽⁵⁶⁾。

明治22年(1889)、笠ノ川・八幡・定林寺・滝本・蒲原・中島・常通寺島・江村・吉田・小籠の各

村と合併、岡豊村となり、昭和33年(1958)には後免町・香長村・野田村・岡豊村・岩村・介良村伊達野地区の合併により南国市が発足、南国市岡豊町小蓮地区となる。

現在の小蓮地区は東西に旧国道32号線が走り、四国横断自動車道南国サービスエリアも設置されるなど交通網の充実に加え、岡豊城跡や小蓮古墳など県下の知られた史跡そして昭和53年に開学した高知医科大学、平成3年オープンの県立歴史民俗資料館など文教の里として発展している。

参考文献

- 『角川日本地名大辞典 39 高知』1986 角川書店
『高知県の地名 高知県歴史地名大系40』1983 平凡社
『南国市史』上・下巻 1982・1983 南国市史編纂委員会

引用文献・註

- (1) 岡本健児『高知県史』考古編 高知県1968年
- (2) 松村信博・山本純代「(速報)高知県南国市奥谷南遺跡」『考古学ジャーナル416』1997年
- (3) 宮田栄二「南九州における細石刃文化期終末の様相」『坂詰秀一先生還暦記念論文集 考古学の諸相』1996年
- (4) 同 (2)
- (5) 森田尚宏「西谷遺跡」『第15回中西国旧石器談話会資料』中西国旧石器談話会1998年
- (6) 岡本健児『古代の遺跡・38高知』保育社1989年
- (7) 『南国市史・上巻』南国市教育委員会1983年
- (8) 岡本健児・片岡鷹介「高知県不動ヶ岩屋洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会1967年
岡本健児・片岡鷹介「高知県不動ヶ岩屋洞窟遺跡」『考古学集刊第4号』東京考古学会1969年
- (9) 岡本桂典・山本哲也「上川駒場崎遺跡発掘調査報告書」高知県幡多郡十和村教育委員会1989年
- (10) 門脇隆「ナシヶ森遺跡発掘調査概要報告書」高知県幡多郡大月町教育委員会1995年
- (11) 森田尚宏『銅古屋岩陰遺跡調査報告書』高知県教育委員会1983年
- (12) 門脇隆・寺川嗣『平成8年度町内遺跡発掘調査概要報告書』香北町教育委員会1997年
- (13) 出原恵三『松ノ木遺跡Ⅰ』本山町教育委員会1992年／出原恵三『松ノ木遺跡Ⅱ』本山町教育委員会1992年／前田光雄・吉成承三『松ノ木遺跡Ⅲ』本山町教育委員会1993年／出原恵三・前田光雄『松ノ木遺跡Ⅳ』本山町教育委員会1996年
- (14) 松村信博『栄エ田遺跡一四国横断自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1995年
- (15) 坂本憲昭「高知県田村遺跡B1区事例報告」『中・西国の縄文時代草創期の土器と石器組成一第8回中西国縄文研究会』中西国縄文研究会1997年
- (16) 同 (14)
- (17) 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会1990年
- (18) 森田尚宏・藤方正治・吉成承三『柳田遺跡記者発表資料』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1992年
- (19) 久家隆芳『八田神母谷遺跡一四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1998年
- (20) 同 (13)
- (21) 同 (11)
- (22) 山崎正明『林田シタノザ遺跡Ⅱ』土佐山田町教育委員会1993年
- (23) 出原恵三『美良布遺跡』香北町教育委員会1991年

- (24) 出原恵三・高橋啓明・吉原達生『十萬遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会1988年
- (25) 『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書旧村遺跡群』第1～15分冊 高知県教育委員会1986年
- (26) 前田光雄・山下英雄・山崎正明・松村信博「仁ノ遺跡」『高知県埋蔵文化財センター年報2』(財)高知県埋蔵文化財センター1992年
- (27) 渡辺徳仁・筒井敬二「銀杏ノ木遺跡」『高知県埋蔵文化財センター年報第7号1997年度』(財)高知県埋蔵文化財センター1998年
- (28) 同 (7)
- (29) 出原恵三・泉 幸代・藤方正治「小籠遺跡Ⅰ」1995年／出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治「小籠遺跡Ⅱ」1996年／出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治・行藤たけし「小籠遺跡Ⅲ」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1997年
- (30) 出原恵三「下分遠崎遺跡(高知県香美郡香我美町)」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1994年
- (31) 出原恵三・池澤俊幸・小松大洋・行藤たけし「下ノ坪遺跡Ⅰ」高知県野市町教育委員会1997年
- (32) 坂本憲昭・田坂京子「介良遺跡概要報告書」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1997年
- (33) 岡本健児『高知県史 考古編』1968年
- (34) 坂本憲昭「野市町本村遺跡」野市町教育委員会1994年
- (35) 岡本健児・廣田典夫「ひびのき遺跡」土佐山田町教育委員会1997年
- (36) 山本哲也「東崎遺跡Ⅰ」高知県教育委員会1991年
- (37) 吉原達生「金地遺跡」高知県教育委員会1992年
- (38) 廣田佳久「上佐国衙跡発掘調査報告書第9集—金谷地区の調査—」高知県教育委員会1989年
- (39) 角谷和男・下村公彦「五軒屋敷遺跡調査報告書」高知県教育委員会1984年
- (40) 森田尚宏「林田遺跡」土佐山田町教育委員会1985年
- (41) 廣田佳久・池澤俊幸「長畝古墳群 高知自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1996年
- (42) 同 (32)
- (43) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生「深淵遺跡発掘調査報告書」野市町教育委員会1989年
- (44) 出原恵三「拝原遺跡」高知県香我美町教育委員会1993年
- (45) 同 (38)
- (46) 出原恵三・池澤俊幸・小松大洋「下ノ坪遺跡Ⅱ」高知県野市町教育委員会1998年
- (47) 同 (14)
- (48) 森田尚宏・松田直則・岡本桂典「岡豊城跡—第1～5次発掘調査報告書—」高知県教育委員会1990年
- (49) 出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治・行藤たけし「小籠遺跡Ⅲ」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1997年
- (50) 出原恵三・吉成承三・浜田恵子・佐竹 寛「陣山遺跡、陣山北三区遺跡」(財)高知県埋蔵文化財センター1997年
- (51) 藤方正治「奈良時代の道路跡」『季刊考古学第57号』雄山閣1996年
- (52) 出原恵三「近世墓について」『小籠遺跡Ⅰ』(財)高知県埋蔵文化財センター1997年
- (53) 「日本考古学協会沖縄大会資料集」日本考古学協会1998年
- (54) 松村信博「人麻呂様城・天崎遺跡現地説明会資料」土佐市教育委員会・(財)高知県埋蔵文化財センター1998年
- (55) 出原恵三「第4節 陣山海軍送信所と爆発事故」『陣山・陣山北三区遺跡』第Ⅳ章 考察 (財)高知県埋蔵文化財センター1997年
- (56) 『南国古史・下巻』南国市教育委員会1982年

第3章 調査の方法及び調査区の概要

第1節 調査区の設定及び日程

1. 調査区の設定

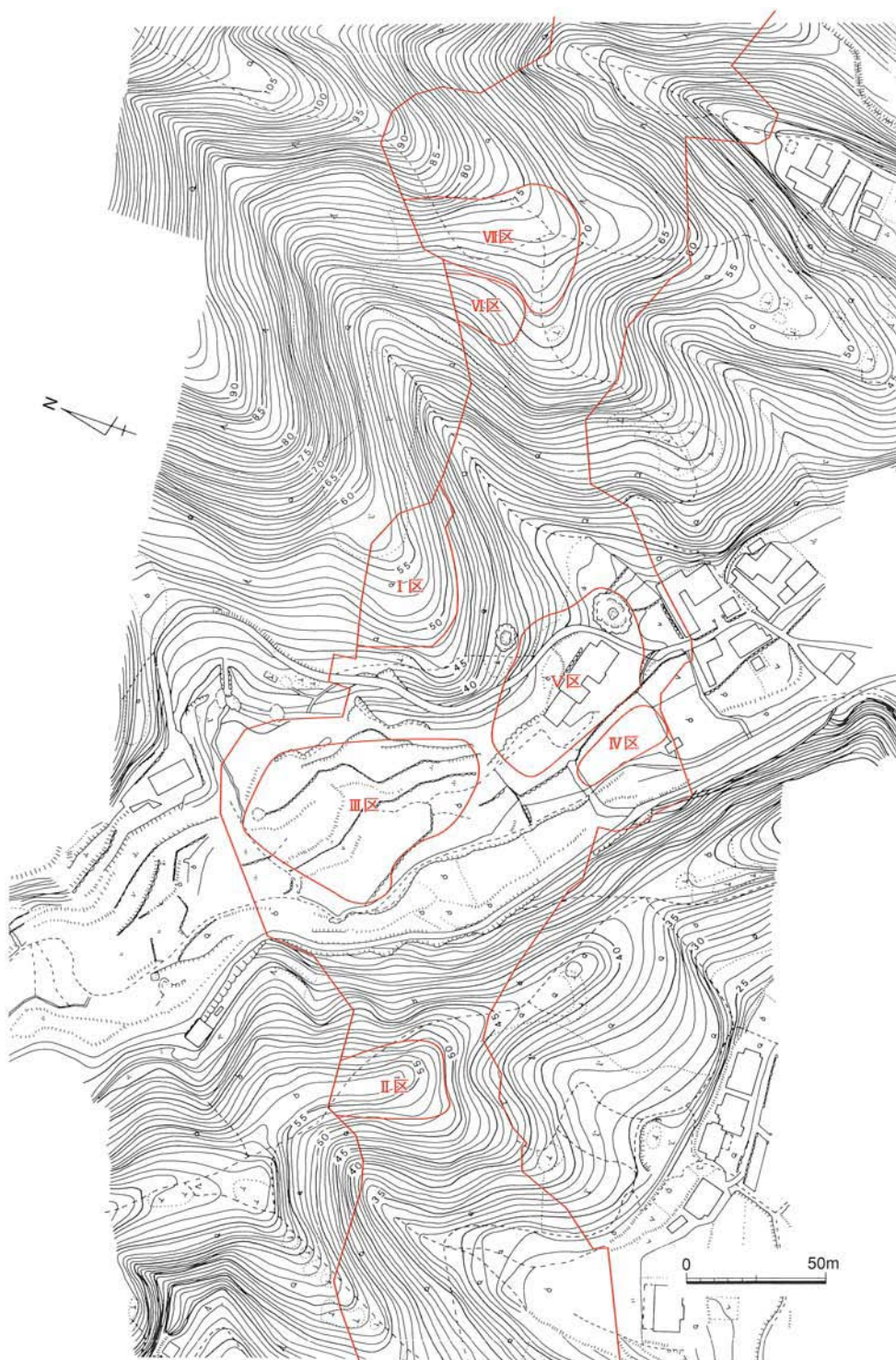


Fig.9 奥谷南遺跡調査区位置図及び四国横断自動車道建設予定地 (S = 1/2500)

平成5年度の試掘調査の結果、遺構・遺物の分布が3つの尾根とその尾根に挟まれた2つの谷、約3万㎡の範囲に広がっていることが判明した。家屋移転・進入経路等の関係上、平成6年度から平成8年度の3ヶ年にわたる調査となった。標高20mから80mと高低差もあり、直線距離で長さ約320m、最大幅約160mと広い範囲に広がっている。試掘調査の結果から予想される遺跡の性格も多様である。それゆえ、地形に即して調査範囲全体をⅠ～Ⅶの調査区に分けて、各々の調査区ごとの調査となった。

各調査区の位置は以下のとおりである。

Ⅰ区…遺跡中央部に位置する標高40～60mの尾根上と斜面一帯。調査の対象としたのは、わずかに平坦部の残る尾根上とそれに続く傾斜度20～29°の斜面（尾根上に近い地点は15°程度と緩やか）である。東側は、40°近い急斜面で、遺構の形成は認められなかった。西側及び南側は墓地として造成されており、地形の収束が著しい。

Ⅱ区…遺跡西端の尾根頂部付近。尾根に連なる斜面も含む。踏査に着手した時には樹木の伐採は終了していたが、周辺は高知平野でも屈指の自然林が残った山林であり、ここにも見事な林が形成されていたという。

Ⅲ区…Ⅰ区とⅡ区に挟まれた谷部一帯。谷川の南岸については試掘調査の結果、遺物・遺構とも確認されなかったため、対象外とし、谷川の北岸一帯に限定して調査を実施する。現状は、棚田であり、耕作可能な場所は石垣を築いて可能な限り水田化されていた。

Ⅳ・Ⅴ区…Ⅰ区を設定した尾根の南側。岩陰及びその周辺。移転予定家屋の南面に広がる畑で、94年度調査で調査可能な地点をⅣ区として設定した。岩陰周辺と移転予定家屋についてはⅤ区として、家屋移転終了後の95・96年度の2年にわたって調査を実施する。

Ⅵ・Ⅶ区…遺跡地東端の標高60～80mの尾根及び西斜面一帯。2段の平坦部が確認された。下段をⅥ区、上段及び周辺の緩斜面をⅦ区とする。

2. 調査の日程

各調査区の調査については順番に進めたのではなく、同時並行で実施する。1994年4月に始めたⅠ区の調査を皮切りに、5月からⅡ区、10月からⅢ区、翌1995年1月からⅣ区、2月からⅥ区の調査を行うことになる。各調査区の終了時期も一定しておらず、平成6年度調査においてはⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅵ区の各調査区の調査を完了し、家屋移転等の理由から残りの調査区については1995年度以降に調査を持ち越していたのだが、1995年度にⅦ区（1995.12.20～1996.2.27）・Ⅴ区（1995.5.7～5.12、1996.2.23～3.29）の調査を相次いで実施し、1996年度はⅤ区の調査を1996.4.2～10.23の日程で実施する。1994年度のⅠ～Ⅲ・Ⅳ・Ⅵの各調査区の調査日程は以下のとおりである。Ⅰ区（1994.4.18～9.24）、Ⅱ区（5.10～9.24）、Ⅲ区（10.17～3.17）、Ⅳ区（12.17～1.30）、Ⅵ区（2.6～3.17）。

本報告書で取り扱うのは、先述の調査区の中でⅠ～Ⅲの3調査区であり、Ⅳ・Ⅵ区については地形の関係上、各々Ⅴ区・Ⅶ区と同じ巻で報告することとし、本報告書中では取り扱わない。

第2節 調査の概要

1. 調査の方法

各調査区ごとに、地形に応じて公共座標に合わせることが可能な地点は公共座標に応じた4 mグリッドを設定、丘陵の延びる方向など地形の条件によっては任意の4 mグリッドを設定して調査を行った。工事用に設置した測量杭より放射トラバースによる測り込みにより、各調査区ごとに基準となる測量杭の公共座標・標高を設定した。

出土遺物については、出土地点の位置・標高を記録した後、取り上げるという方法を取ったが、出土層位の明瞭な包含層出土遺物についてはその限りではない。

I区・II区の丘陵上に位置する調査区については、調査に入る段階で樹木の伐採は終了していたものの切株は残されており、遺構を極力破壊しないようにこれらの切株を除去する作業から調査に着手した。同時に、遺跡全体の状況を把握するための確認トレンチを設定、遺跡の広がりへの把握に努めた。I区の調査面積は約1,500m²、II区の調査面積は約500m²である。III区については、全域の草刈り作業をした後、試掘調査で遺物のまともって確認されたトレンチから順次拡張、調査区をアルファベット順にA～Gまで便宜的な地点呼称により調査を進めた。最終的な調査面積は約3,000 m²に達する。

2. 調査区の概要

(1) I区

I区は遺跡中央部の尾根上の頂部と斜面一帯であり、おおよそ標高40～60mの範囲に広がっている。遺構の状況や地形から判断して、遺跡自体はさらに谷の奥、北側の高速道路予定地外に向かって広がっているものと思われる。

弥生中期末～後期初頭の高埴性集落が斜面一帯から、近世(17世紀中葉)の儒墓と18世紀以降に属する近世の土坑墓が頂部付近から検出されている。

丘陵上に遺跡が広がるため、I区の調査に際しては、稜線方向に平行な任意の軸を設定、この軸を中心に4 mグリッドを設定して調査を進める。工事用に設置された公共座標を基準として標高・座標ともに測り込み、各測量杭の公共座標を決定した。

(2) II区

遺跡西端の尾根頂部付近をII区として設定した。

尾根の延びる方向を基準とし、その長軸方向を基準線としてグリッドを設定する。グリッドは4 mグリッドであり、この座標を基に遺物の取り上げを行った。I区同様、各杭の座標については、工事用の測量杭の公共座標を利用して測り込み、測量杭ごとの公共座標を決定した。

II区からは弥生時代終末の土坑墓と土器棺墓が検出されている。

(3) III区

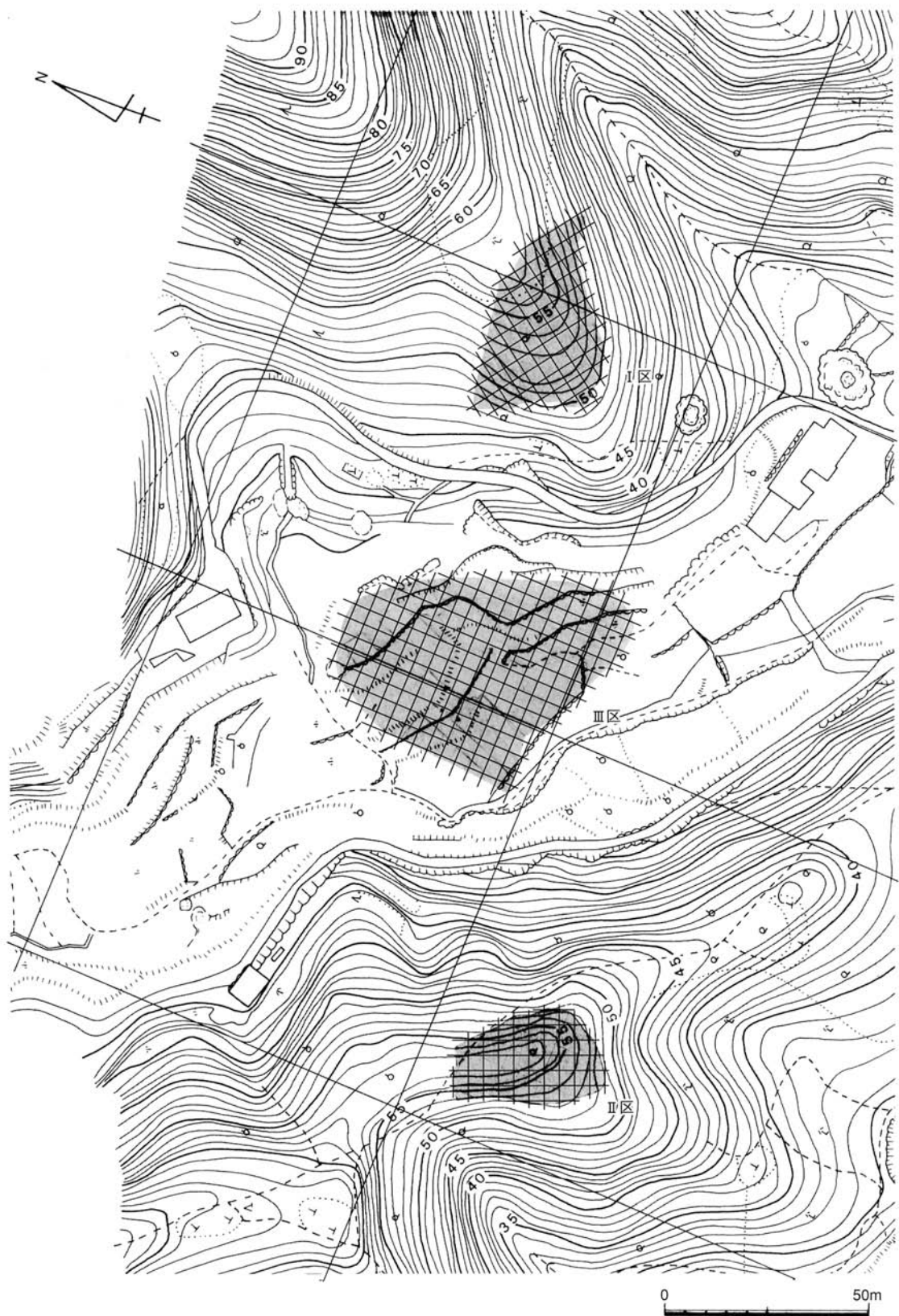
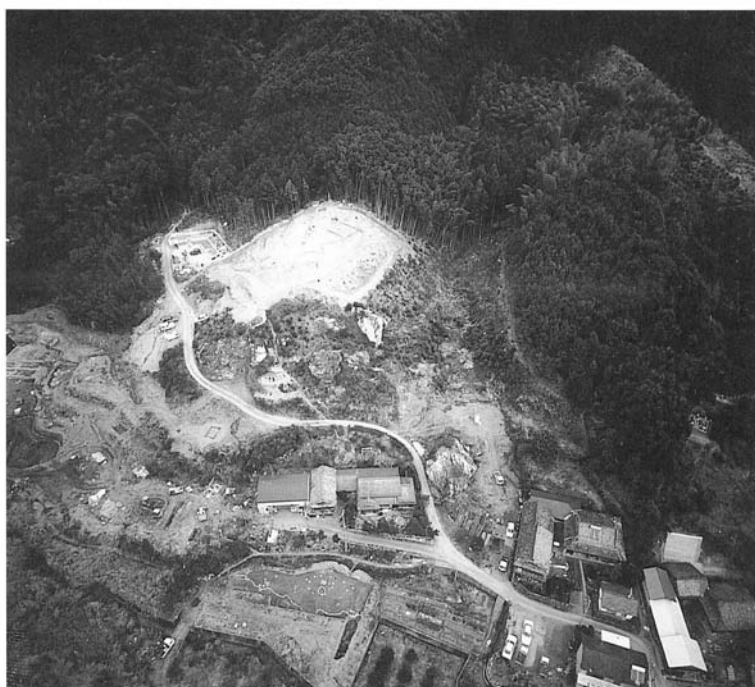


Fig. 10 1994年調査区（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区）の位置，及びグリッド方向（S=1/1500）

I区とⅢ区の尾根に挟まれた谷部一帯。試掘調査の結果、谷川の右岸(北岸)一帯から遺物が検出され、調査の結果、縄文中期に属する遺構と7基の同時期の堅果類貯蔵穴が確認されている。

調査区については公共座標に即して4mグリッドを設定した。試掘トレンチを基に遺物集中地点から順次、A～Gの小区を設定して調査を進める。遺構が検出されたのは、Ⅲ区中央部に舌状に延びる微高地西端と東側の谷底にあたる低地からである。



I区を南からのぞむ

Ⅱ・Ⅲ区を北からのぞむ



第4章 調査の成果

調査の成果については、調査区の性格上、調査区ごとに述べる。Ⅰ区については弥生時代中期末～後期及び近世、Ⅱ区は弥生時代後期末、Ⅲ区は縄文時代中期末が中心である。Ⅰ・Ⅲ区に少量の古代の遺物、Ⅲ区に縄文前期初頭の遺物が認められるが、それ以外は先述の時代の遺構・遺物である。

第1節 Ⅰ区の成果

1. Ⅰ区調査の概要

5年度の試掘調査の段階では、時間の制約もあり尾根頂部付近に4ヶ所のトレンチを入れ、頂部付近を中心にした遺構の広がりを確認するにとどまった。まず遺構の広がりを確認し調査範囲を確定するためのトレンチを東側斜面に3本(TR-1～3)、西側斜面に4本(TR-4～7)、南側斜面に1本(TR-8)設定した。南側斜面のTR-8からは遺構遺物とも確認されなかったが、それ以外の東西斜面に設定した7本の確認トレンチからは各々遺構が検出され、遺物の出土も確認された。

東側斜面の下方は傾斜度38度以上の急斜面であり、確認のため設定したトレンチからも遺物は検出されていない。また、西側及び南側斜面の下方は墓地として利用されており、そのため旧地形の改変が著しい。トレンチ調査の結果と地形の現況から調査範囲についてはFig.11に示した1,250m²の区域に限定した。なお、斜面の確認のため設定したトレンチとあわせたⅠ区の合計調査面積は約1,500m²である。

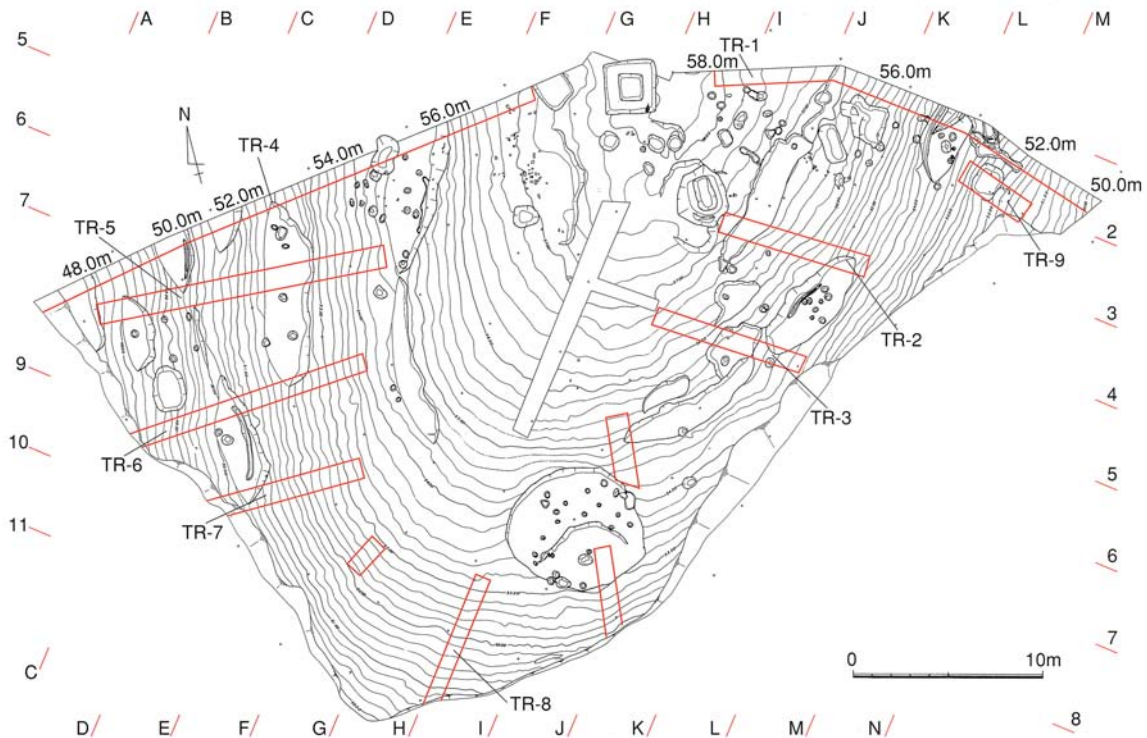


Fig.11 Ⅰ区確認トレンチ及びグリッド (S=1/400)

2. 基本層序

頂部付近には若干の平坦地もあり、それに連なる斜面は $10^{\circ} \sim 15^{\circ}$ の傾斜を示しており、比較的緩やかである。頂部に連続する緩斜面に続いて、東・南・西の3方には傾斜度 $25^{\circ} \sim 30^{\circ}$ の斜面が展開する。東西の傾斜はより急で、特に東側斜面は下方では 40° 近い急斜面となる。南側斜面が若干緩やかなものの遺構の検出された部分においては傾斜度の差はほとんどない。地点により異なるが、遺構が検出された斜面は概ね $27^{\circ} \sim 29^{\circ}$ の傾斜を持っている。

遺構が検出された地点では、複雑な堆積が観察される。遺構埋土上面や遺構の形成されない岩盤上では、基本的には表土層である黒褐色腐植土層、その下層に褐色礫混粘土層、さらに3層目として地山岩盤と同じ色調の明褐色地山風化土層(礫混粘土層)と大別して3つの地層の堆積が認められた。トレンチを設定した各斜面の状況は異なっており、含まれる礫の量を基準にした層の細分は可能であるものの、ほぼ全域のトレンチから表土(黒褐色腐植土)・褐色礫混じり粘土・明褐色礫混じり粘土の堆積順序が確認されている。ただし、急傾斜地ゆえに表土や堆積土が流失した部分があり、堆積の様相は一様ではない。また、遺構はことごとく地山である明褐色粘土や岩盤を掘り抜いて形成されており、2層目の褐色礫混じり粘土層と3層目の明褐色礫混じり粘土層が逆転しているトレンチもある。

なお各々のトレンチの位置はFig.11のとおりであり、東斜面・西斜面・南斜面の土層堆積状況はFig.12・13に示したとおりである。



I区 遠景(南東より)

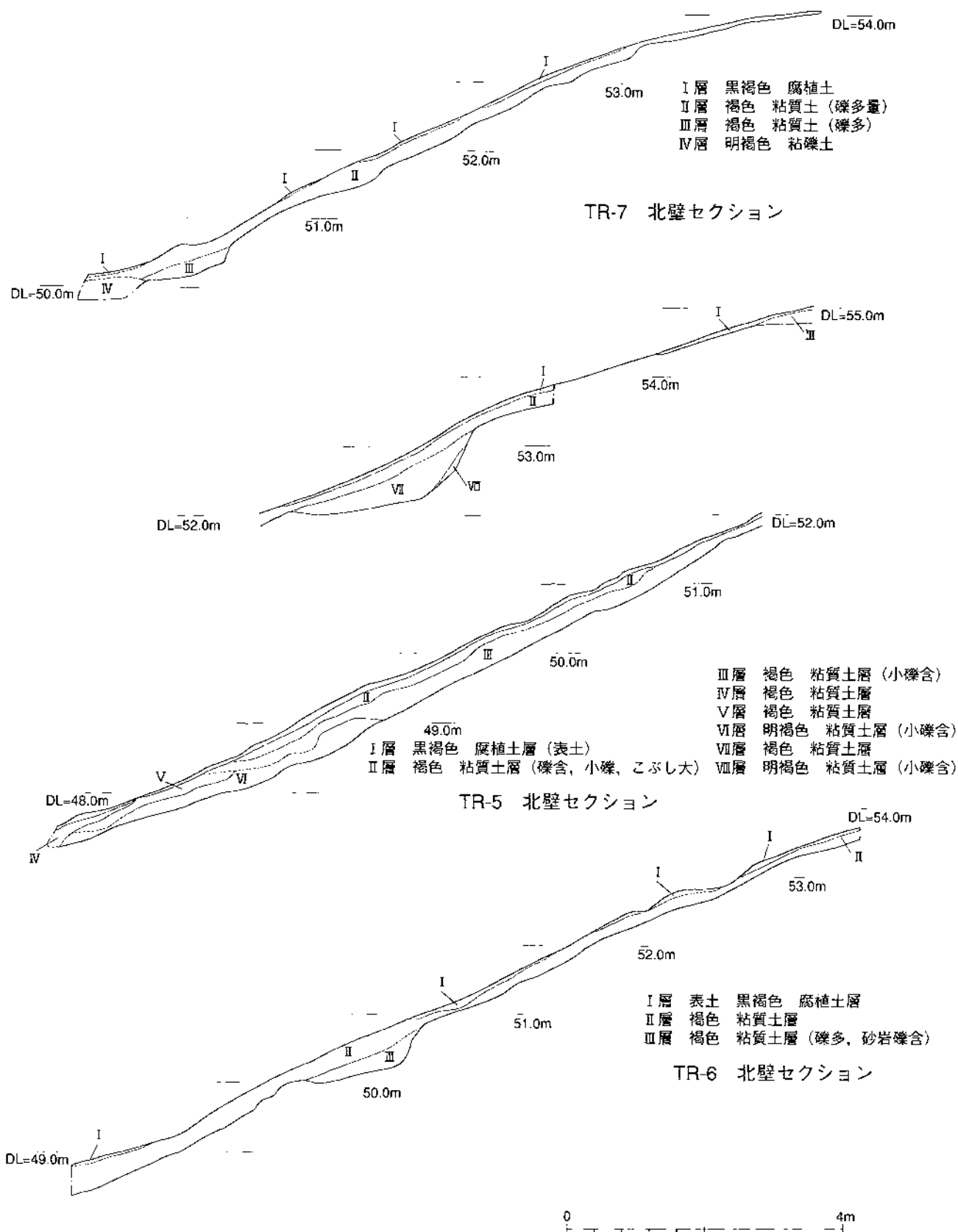
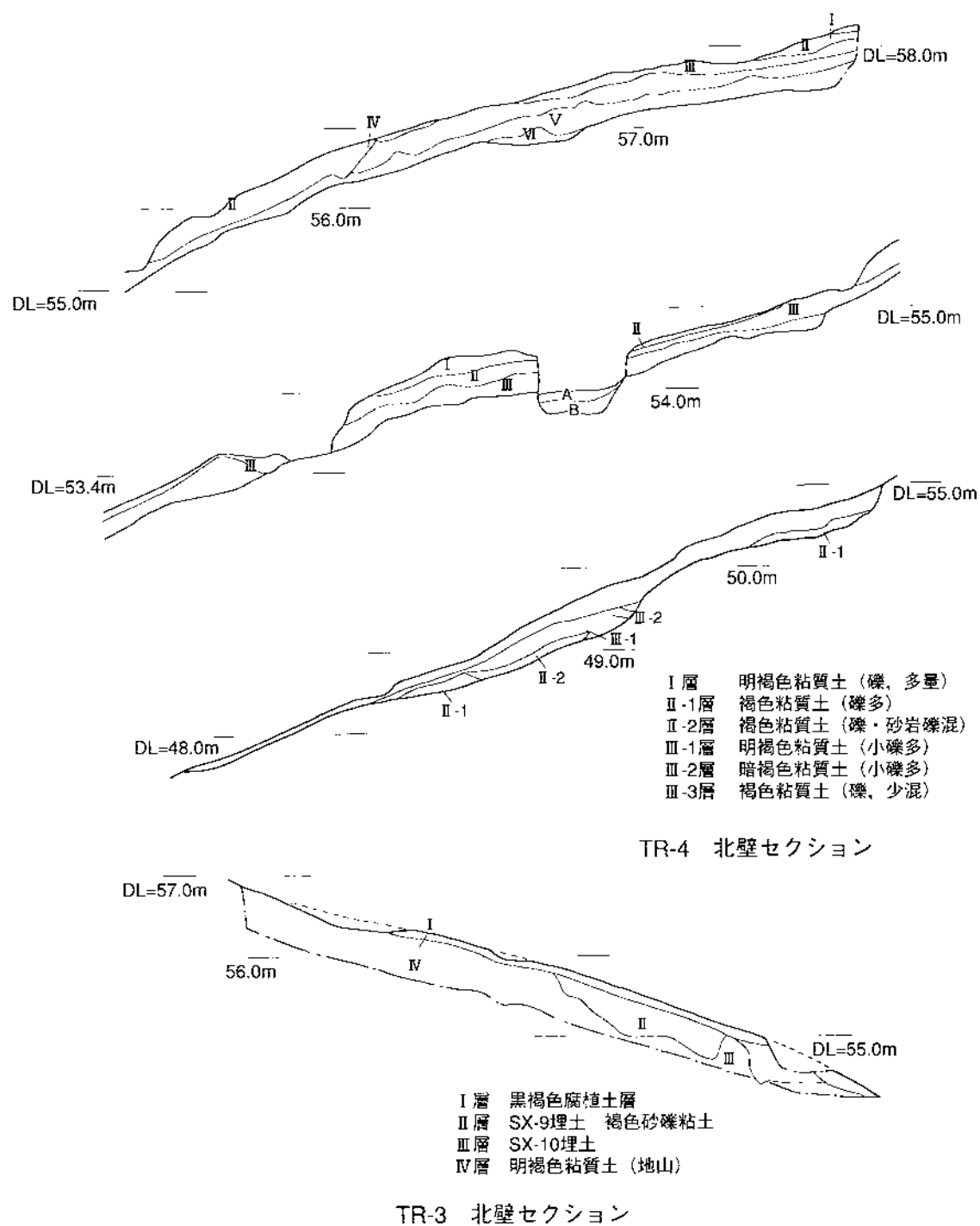


Fig.12 I区 基本層序(1) (S=1/80)



0 4m

Fig.13 I 区 基本層序(2) (S=1/80)

3. 遺構と遺物



Fig.14 I区 遺構平面全体図 (S=1/250)

I 区の遺構はFig.14の遺構配置のとおりである。調査区は地形的特徴から傾斜が緩やかで平坦に近い部分もある尾根頂部付近と20°～30°の傾斜を持つ東・南・西の3方向の斜面に分けられる。時期が確認可能な遺構は弥生時代中期～後期初頭と近世の2時期であり、包含層からは少量ではあるが、古代などそれ以外の時期の遺物も出土している。遺構・遺物について弥生時代と近世の2時期に分けて成果についての報告を行い、時期不明の遺構及び古代の遺物についてはまとめてその他の時期の遺構・遺物として報告する。

(1) 弥生時代の遺構と遺物

A. 遺構

ST 1 (竪穴住居 1 -Fig.15)

調査区南側の丘陵先端で検出した遺構である。標高53.0mから54.5mにかけて形成される。試掘調査時に中央ピット付近が確認され(試掘Ⅳ区TR-3)、竪穴住居であることが判明した。遺構は、北側の斜面上部から南側の斜面下に向けて2段の階段状に平坦な床面を形成する。中央ピット(P-1)は下段中央部付近に位置しており、長径72cm～短径58cmの楕円形である。遺構のプランは上段の径720cm(東西方向)～680cm(南北方向)、下段の径490cm(東西方向)～370cm(南北方向)のほぼ円形で、遺構の南端部は斜面下に崩落しているものと考えられる。上下段とも壁体溝は確認されていない。床面積は上段22.2㎡、下段14.14㎡で、下段を3.3m拡張して上段の遺構を形成したと考え

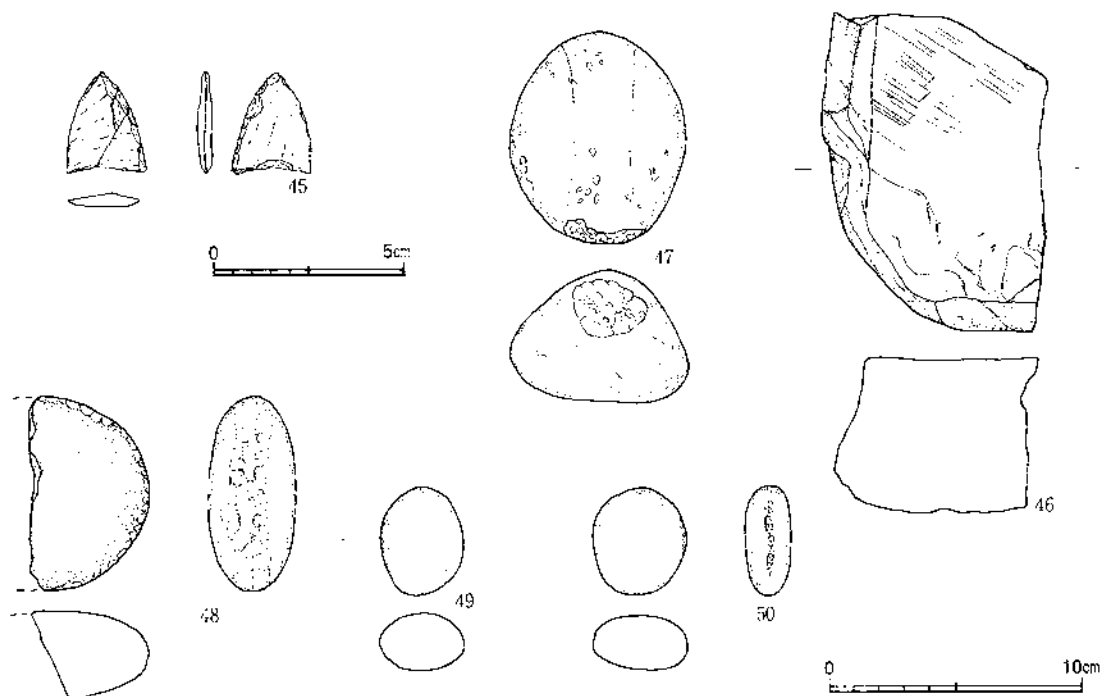


Fig.15 ST-1 出土遺物 (S=1/2・1/3)

Tab.6 I区 ST-1 ピット計測表

遺構名	深さ(cm)	遺構名	深さ(cm)	遺構名	深さ(cm)	遺構名	深さ(cm)
P-1	20	P-6	24	P-11	14	P-16	9
P-2	12	P-7	10	P-12	10	P-17	20
P-3	20	P-8	10	P-13	18	P-18	10
P-4	30	P-9	17	P-14	14	P-19	7
P-5	32	P-10	18	P-15	12	P-20	17

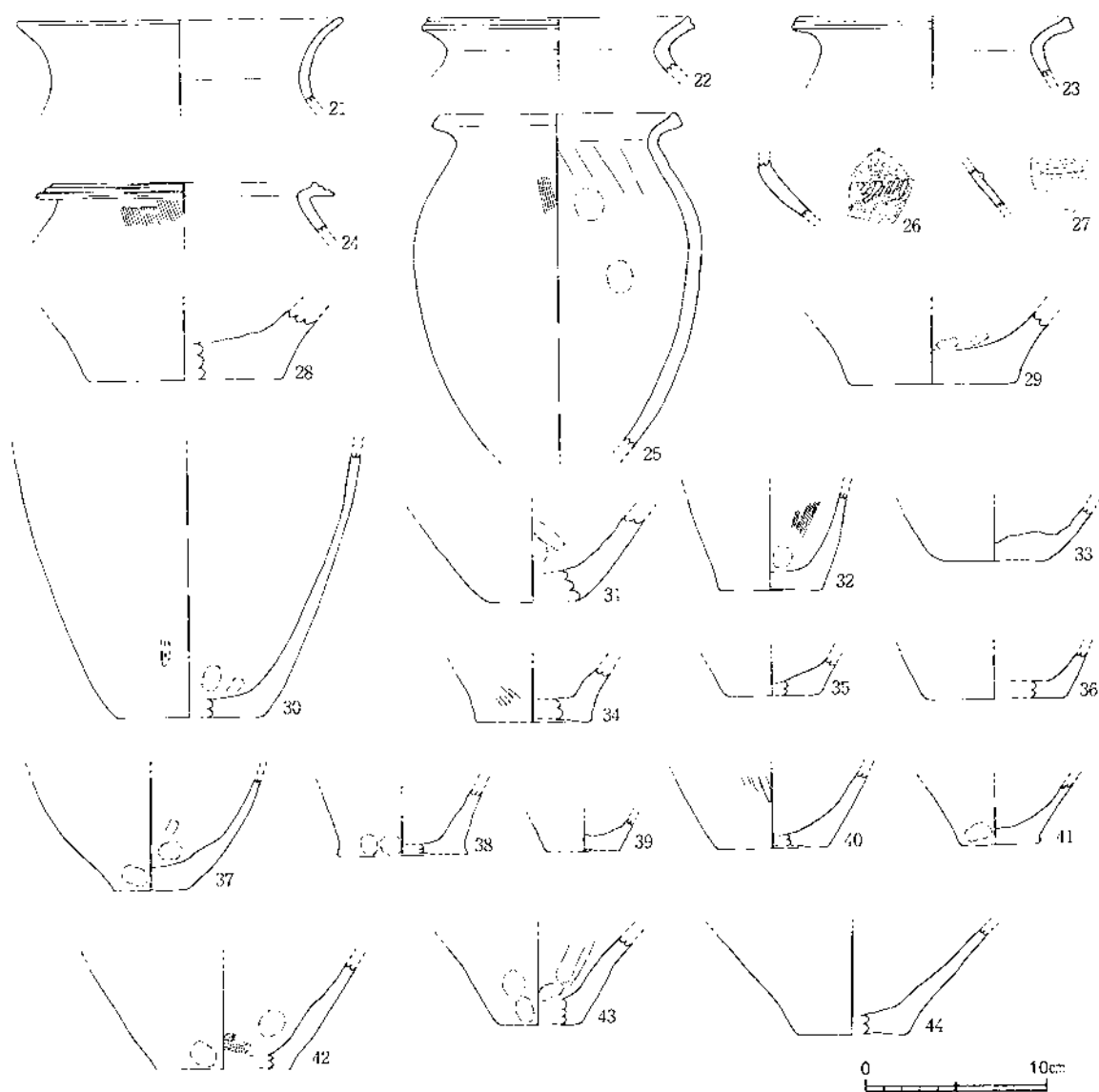


Fig. 16 ST-1 出土遺物 (S=1/4)

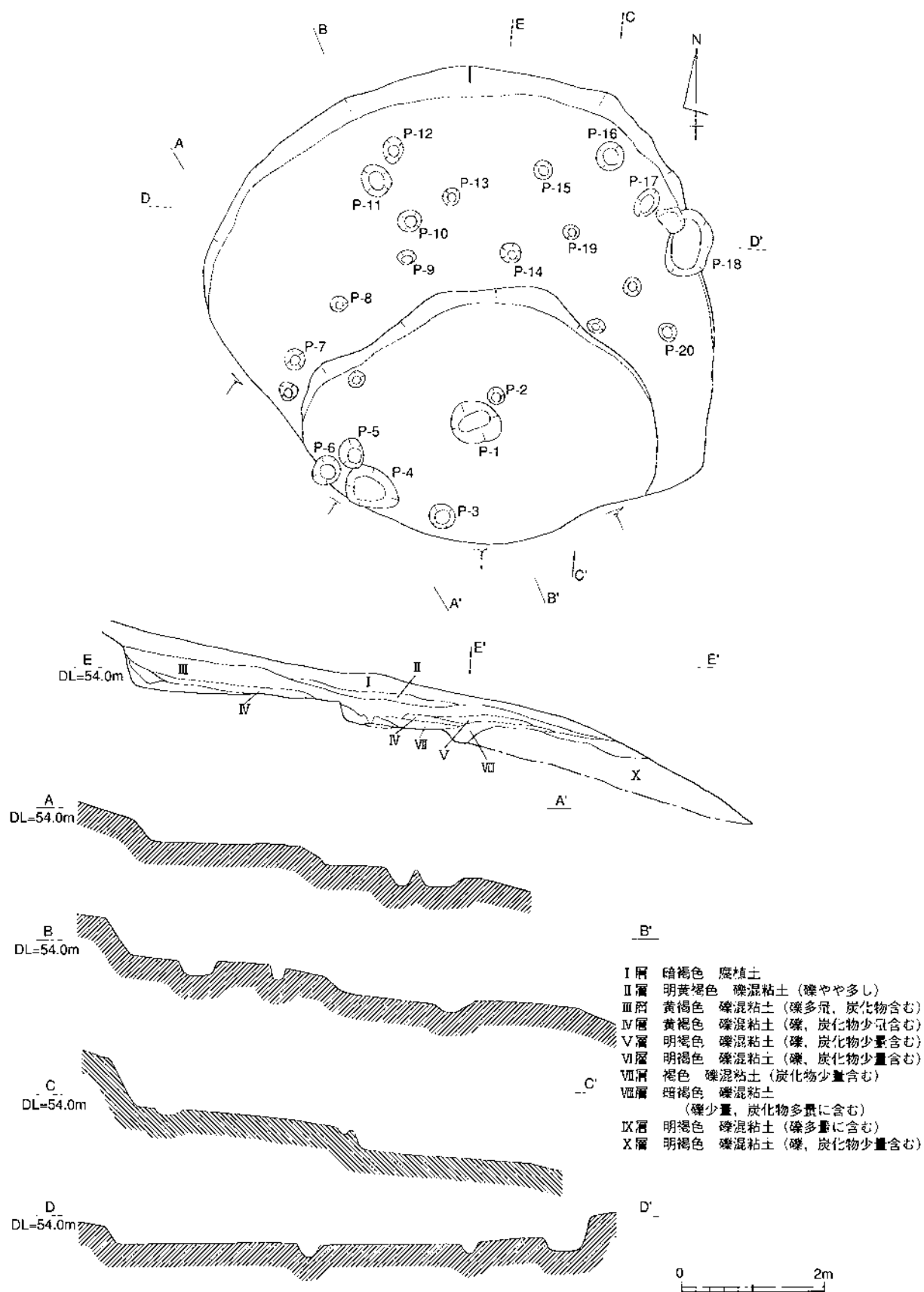


Fig. 17 ST-1 平面・セクション及びエレベーション図 (S=1/80)

られる。床面の標高は、上段が53.52m、下段が53.2m、斜面の検出面から上段への深さは最大70cm、上段と下段の差は40cmである。

主柱穴はP-5・P-8・P-14・P-20とP-3・P-7・P-11・P-16の2つの組み合わせが復元可能であるが、いずれの場合も遺構の東端と南端を構成する柱穴は失われている。

出土遺物は土器350点、石器11点、その中で図示し得るものはFig.15の石器とFig.16の土器である。時期を判断できるII縁部・胴部の破片の中で、21～23・26が下段からの出土で24・25が上段からの出土である。この中で下段床面直上から出土した遺物は26の甕胴部破片のみであり、それ以外は上段から連続して堆積した埋土(Ⅰ・Ⅱ層)中からの出土である。試掘調査時のFig.4-7～16についてもST-1出土遺物である。7の壺II縁や8・9の甕II縁も凹線は退化し、無文化が進むなど後期初頭の特徴を有する。特に7と9は下段床面直上からの出土であり、上段と下段において時期差はほとんど認められない。24～26など中期末に属する遺物があるものの、後期初頭(後期Ⅰ)に属する遺物が大半を占める。当初、上段と下段については別遺構として取り扱い、下段を拡張して上段の住居が形成されたと考えて調査を進めた。検出したピットの状況は、遺構の拡張あるいは建て替えがあったことを示しているが、埋土の堆積状況は、住居建て替えの結果上段と同一平面をなす床面が形成されたことを示しておらず、拡張・建て替えは下段の床面を活かしたままの上段部分拡張であり、遺構形成当初から上下の2段が存在した可能性もある。

ST-2 (竪穴住居2-Fig.18・19)

調査区東斜面北端において検出した遺構である。標高53.5mから54.6mにかけて形成されている。東斜面の状況を確認するために設定したTR-1の調査で確認された遺構である。傾斜度27°の急斜面に形成された遺構で、斜面の下方にあたる遺構東側部分は崩落して失われたものと考えられる。

遺構は調査対象区の北側に続いている。今回の調査で検出したのはST-2の南端に相当する地点であり、遺構全体の平面形・規模は不明である。検出された2条の壁体溝と床面が2面確認された土層堆積状況から判断して、一度拡張された竪穴住居だと判断した。ただ、柱穴の並びも明確に捉えられないという状況から、拡張の痕跡のある段状遺構である可能性もある。

検出された遺構の規模は、長さ3.8m、幅2.2mに過ぎない。遺構の大半は調査区外に残されている。床面の標高は上段(拡張後)が53.8～53.88m、下段(拡張前)が53.5～53.6m、斜面の検出面上端から上段の床面への深さは最大で60cm、下段の床面への深さは90cmである。壁体溝の規模は、上段の溝が幅15～30cm、深さ7～8cm、下段の溝が幅24～40cm、深さ10cmであり、上下段とも遺構の掘り方下端の全周にわたってめぐらされている。また、床面のP-1～P-3からは焼土が検出され(Fig.19)、P-1・P-2からは焼礫が出土している。P-1は長軸64cm短軸48cmの楕円形、P-2は長軸45cm短軸36cmの楕円形で、P-1の検出面はP-2の検出面と比較すると高くなっている。これらのピットは、焼土を含むことからST-2の炉(中央ピット)的な役割を担ったピットだったと考えている。P-1が上段の床面に伴い、P-2が下段の床面に伴う遺構だと想定される。

出土遺物はFig.18に示した51～61の弥生土器である。51のII縁端部を拡張して格子目文を有する壺II縁、54の貼付口縁で端部に刻み目を持つ土器など、畿内Ⅳ様式新段階併行で中期末に属する土

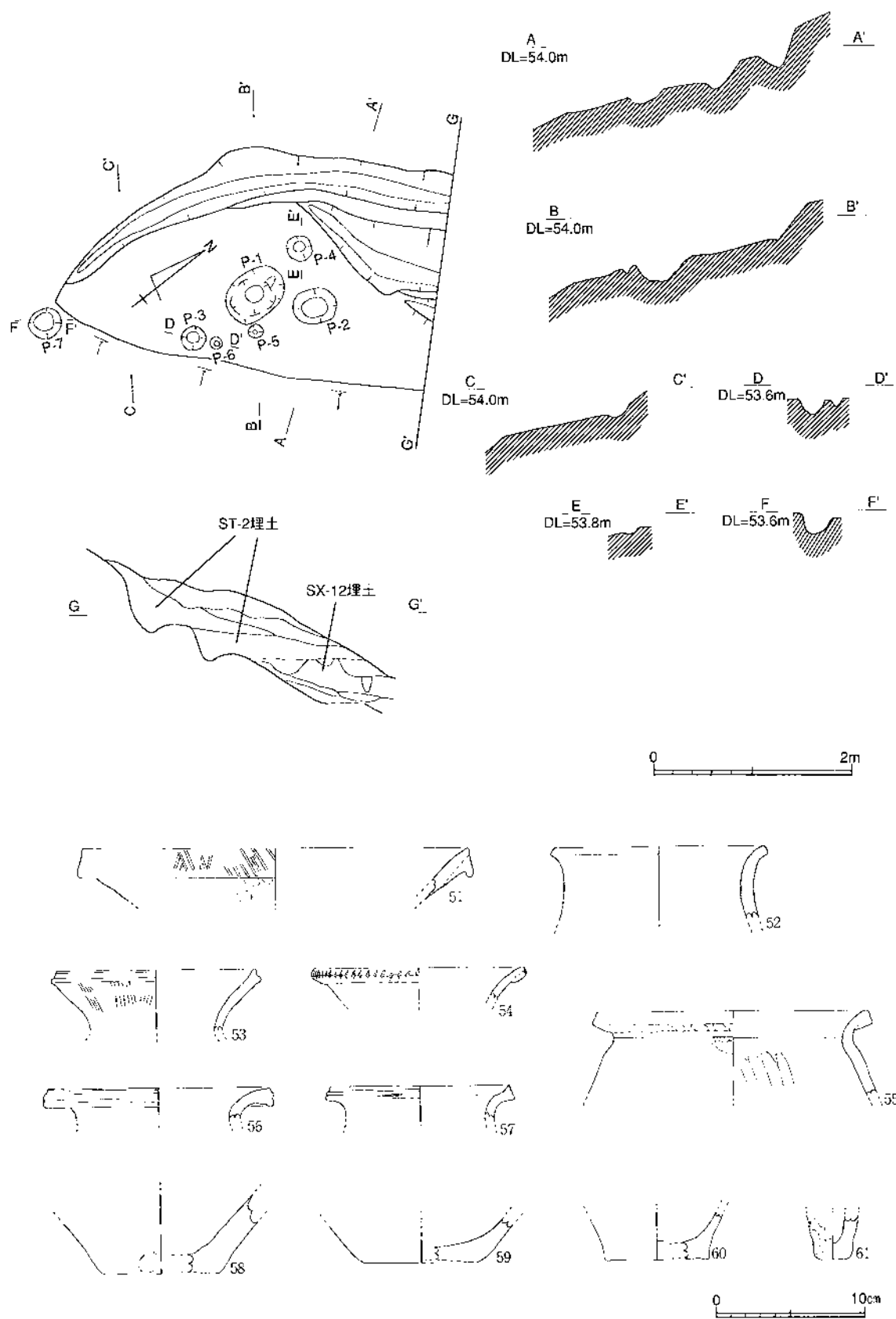


Fig. 18 ST-2 平面・セクション・エレベーション図 (S=1/60) 及び出土遺物 (S=1/4)

器もあるが、同層中から52の無文の壺や53・56・57の凹線文を有する土器なども出土している。若干、退化した凹線文の形状(53・56・57)や無文化を指向する(52)など、これらの遺物は弥生後期初頭の特徴を有する。ST-2は弥生中期末から後期初頭の短い時間幅の中で機能し、遺構の拡張は認められるものの、その時間差はほとんどない遺構だと位置づけられる。

また、61は小型土器(ミニチュア土器)である。手づくね成形による土器で模倣した器形は明確ではない。今次調査で出土した小型土器はこれ1点だが、当該期の野市町本村遺跡の小型土器の例との類似に注意を要する。

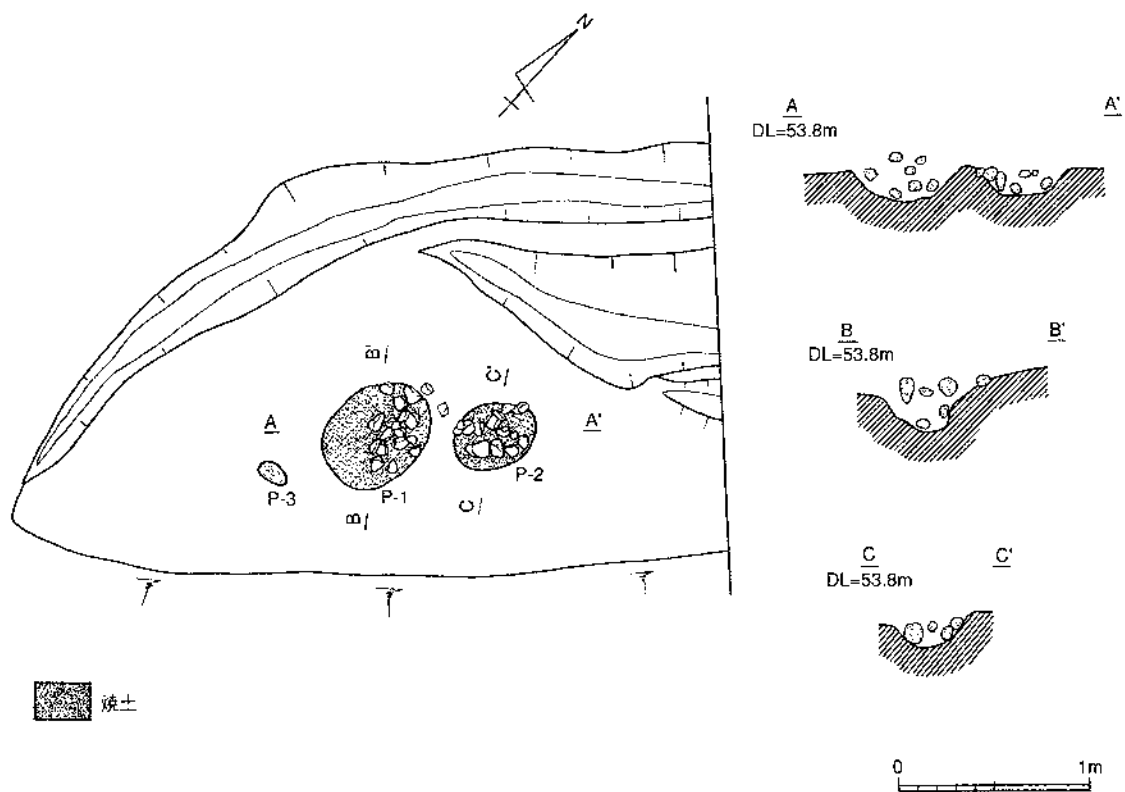


Fig. 19 ST-2 焼土及び焼礫出土状況平面・エレベーション図 (S=1/40)

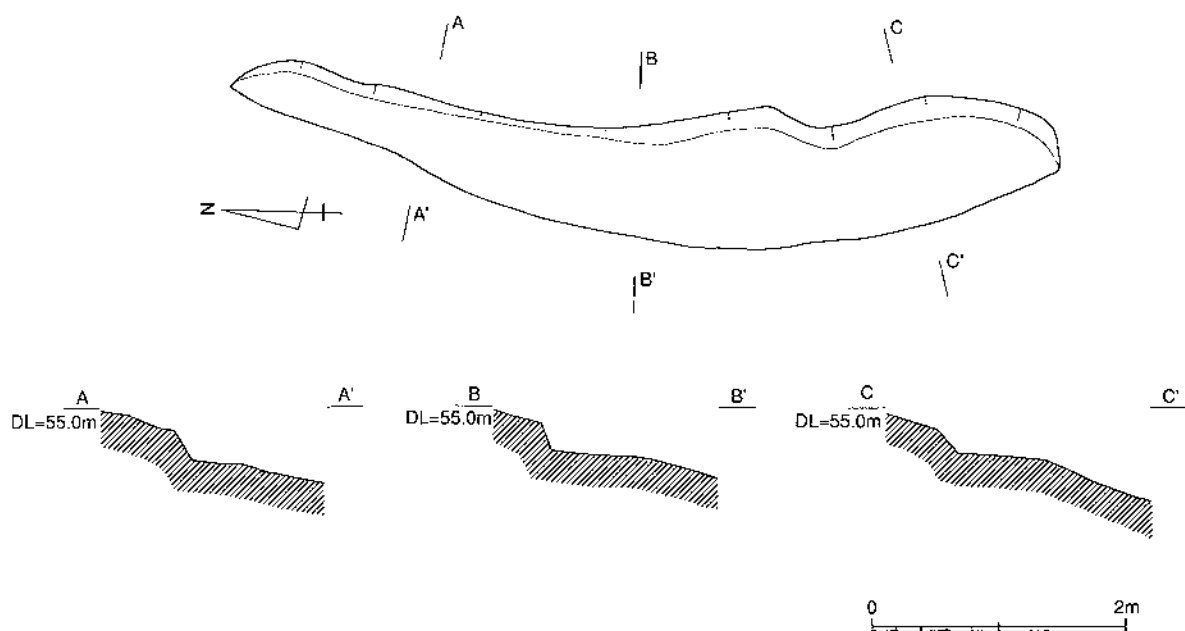


Fig. 20 SX-1 平面及びエレベーション図 (S=1/60)

SX-1 (段状遺構 1 -Fig.20)

西斜面の標高55m付近に等高線に沿って通路状に巡る遺構である。幅80cm～1.2mの平坦部を長さ9.5mにわたって削り出す。床面積は5.15㎡である。斜面検出面から平坦面までの深さは最大で25cm、平坦面にピット等は伴わない。ST-1とSX-2をつなぐ位置にあり、通路として利用されていた段状遺構だと考えている。弥生上器小片が10数点出土しているが、図示し得る遺物はない。

SX-2 (段状遺構 2 -Fig. 21)

西斜面の標高54.5m～55.0m付近の調査区北端に位置する段状遺構である。SX-1から北へ連続する。遺構面は斜面を削り出し、最大幅2.4mの下方へ向って僅かに傾斜する面をつくり出す。遺構の北半は調査区外であり未掘である。残存部は長さ7m、幅2.4mで深さは最大70cmを測り、掘方下端には、幅20cmほどの小溝を設けている。平坦面に深さ10～20cm、径20～40cmの8基のピットが検出された。遺構埋土は褐色礫混粘土層(礫を多く含む)である。

SX-2からは弥生上器が50点あまり出土している。小片が多く、時期を特定できる資料は少ない。図示可能な資料は62の平底の甕底部1点のみである。62は弥生中期末～後期初頭に属すると考えられる。

SX-3 (段状遺構 3 -Fig. 22)

西斜面標高52～53m付近のSX-2の下段で、4mほど西に位置する。斜面を削りだして平坦面をつくり出す。平坦面は長さ10m、幅2～2.4mで深さは最大100cmを測る。床面積は18.11㎡である。平坦面には深さ24～32cm、径20～50cmの6基のピットが検出されたが、上屋の構造は明瞭ではない。埋土は暗褐色礫混粘土(礫を多く含む)で分層はできなかった。

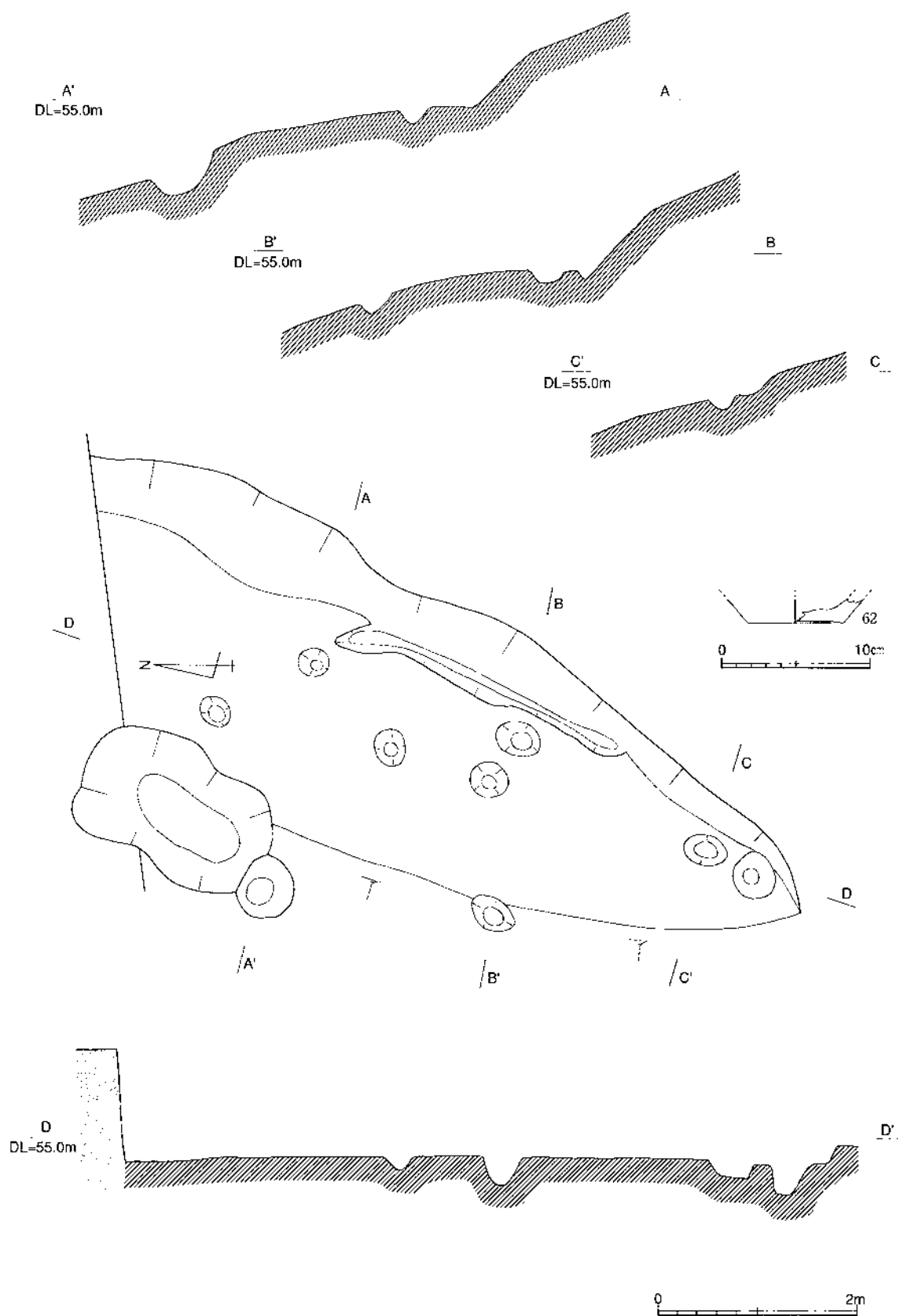


Fig. 21 SX-2 平面・エレベーション図 (S=1/60) 及び出土遺物 (S=1/4)

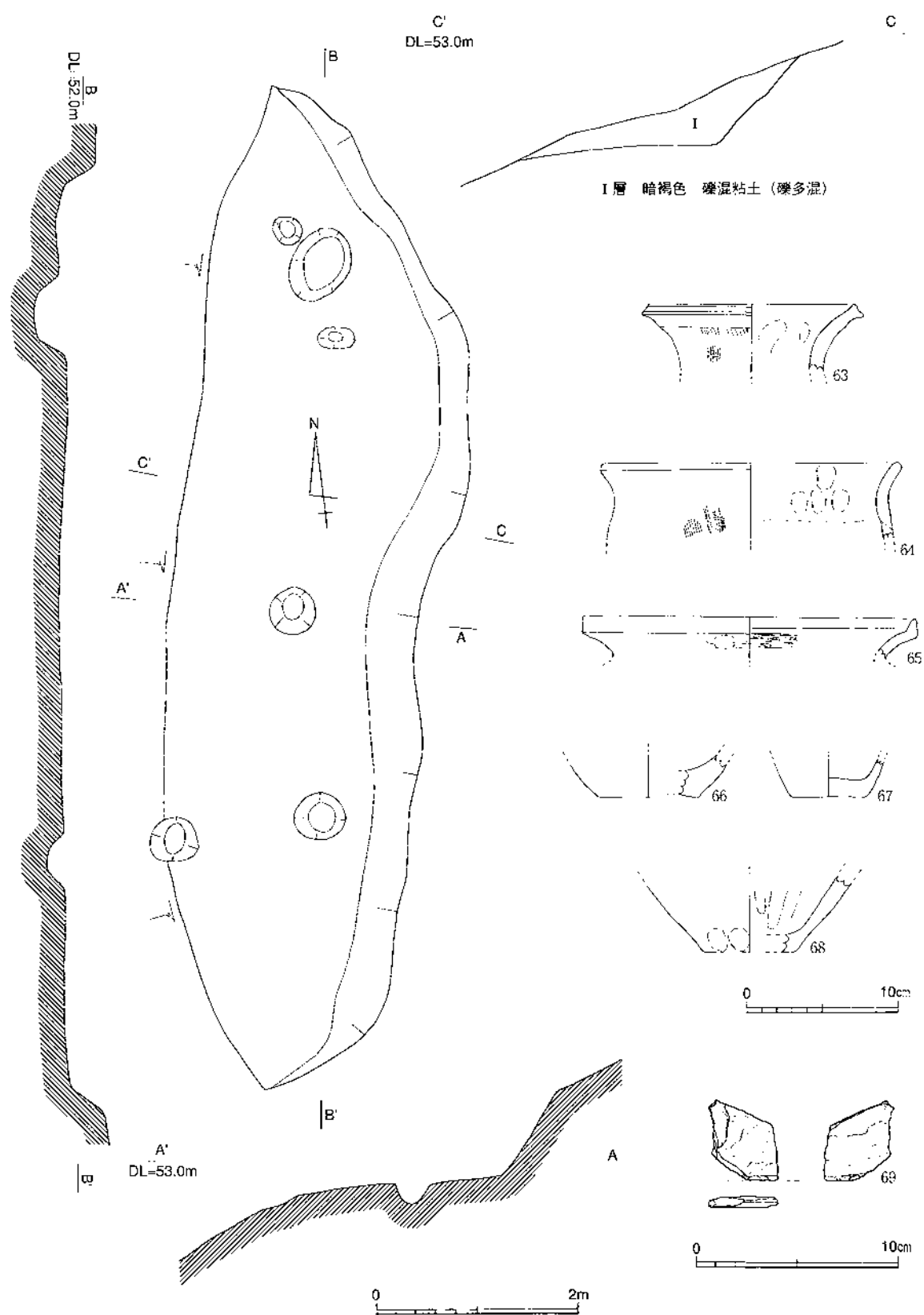


Fig. 22 SX-3 平面・セクション・エレベーション図 (S=1/60) 及び出土遺物 (S=1/4・1/3)

出土遺物は弥生土器89点で、図示可能な遺物は63～68の弥生土器と69の石包丁である。II縁部は強いヨコ方向のナデにより凹状を呈する63の壺や、無文で口唇を丸く収める64の鉢など装飾がほとんど見られなくなり、無文化を指向する後期初頭の特徴を有する土器が多い。この遺構は後期初頭に機能したものと考えられる。

SX-4 (段状遺構 4 -Fig. 23)

西斜面標高51m付近に斜面を削りだして平坦面をつくり出す。平坦面は長さ7m、最大幅1.5mで深さは最大70cmを測る。平坦面の面積は8.40m²である。平坦面には深さ20～30cm、径20～30cmの3基のピットが検出された。埋土は暗褐色礫混土(礫を多く含む)で分層はできなかった。

出土遺物は弥生土器150点で、図示可能な遺物は70～79の弥生土器と80の石包丁である。71～73は2～3条の凹線を施すが明瞭ではない。70・74・75は強い横方向のナデにより口縁が凹状を呈する土器である。これらの退化した凹線は後期初頭の土器の指標であり、無文化を指向する70の細頸壺や74・75の甕も後期初頭に属する遺物である。71の甕頸部の烈点文など弥生中期末の特徴を持つ遺物も出土しているが、これらの特徴は後期初頭まで残存する指標である。76～79の底部の形状を含め、SX-4 出土遺物は弥生中期末から後期初頭にかけての範囲で捉えられ、SX-4 は弥生後期初頭に機能した遺構だと位置づけられる。

80の石包丁は全面を研磨した磨製の石包丁で片刃の刃部を持つ。

SX-5 (段状遺構 5 -Fig.24)

西側斜面の調査区最下段に位置し、標高48.0～48.8m付近を削り出して平坦面を形成する。平坦面は最大幅1.3m、残存する長さ4.1mで、トレンチ部分を加えると約5mの長さがあったものと推定される。遺構床面からは直径36cm深さ30cmのピットが1基検出された。

出土遺物は全て弥生土器であり、図示可能遺物として81の紡錘車が一点確認されている。それ以外の上出遺物はいずれも小片で20点あまりとなっている。埋土は3層に分層できるが、いずれも褐色粘質土層であり、含まれる礫の量の多少によって分層できるに過ぎない。埋土I層が最も含有礫量が多く、最下層であるIII層は礫の量が少ない。III層中、床面直上から径24cmの礫が検出された。

遺物が少なく細かい時期の特定は出来ないが、弥生時代の遺構だと考えられる。

SX-6 (段状遺構 6 -Fig24)

西斜面の調査区北端、標高50～51m付近に位置する。平坦面の幅1.56mで、深さは最大で60cm、遺構は一部が調査区内に残るのみである。平坦面から遺構は確認されていない。残存部は長さ2.1m、それ以外は調査区外で未掘である。遺構埋土は褐色粘質土層で、上層と較べ礫をやや多く含んでいる。出土遺物は少なく、弥生土器が6点確認されたが、図示可能遺物は82の甕1点のみである。口縁は強いヨコナデで仕上げ、II唇がわずかに凹状を呈する甕II縁で、外面に煤が付着する。弥生後期初頭に属する。

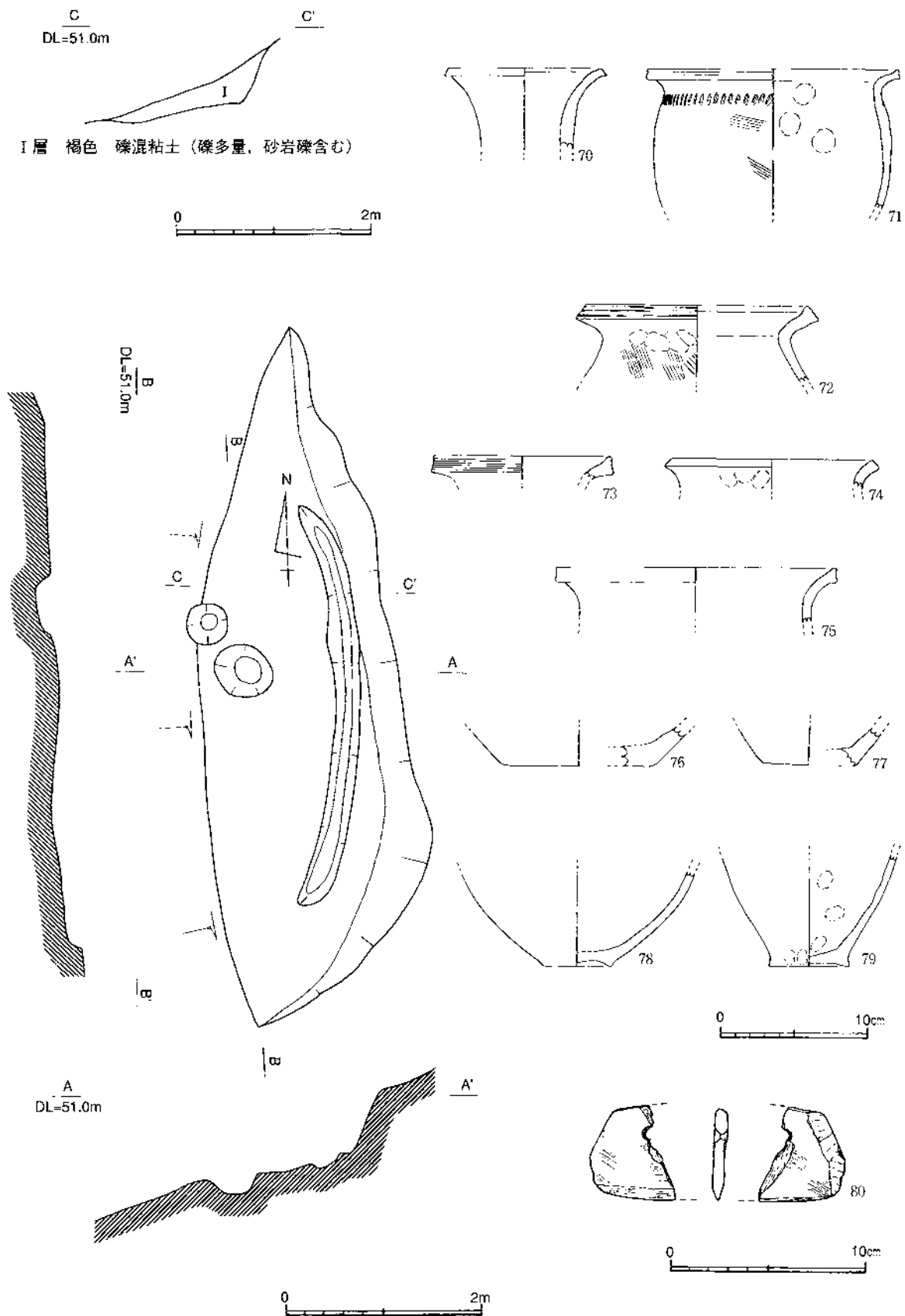


Fig. 23 SX-4 平面・セクション・エレベーション図 (S=1/60) 及び出土遺物 (S=1/4・1/3)

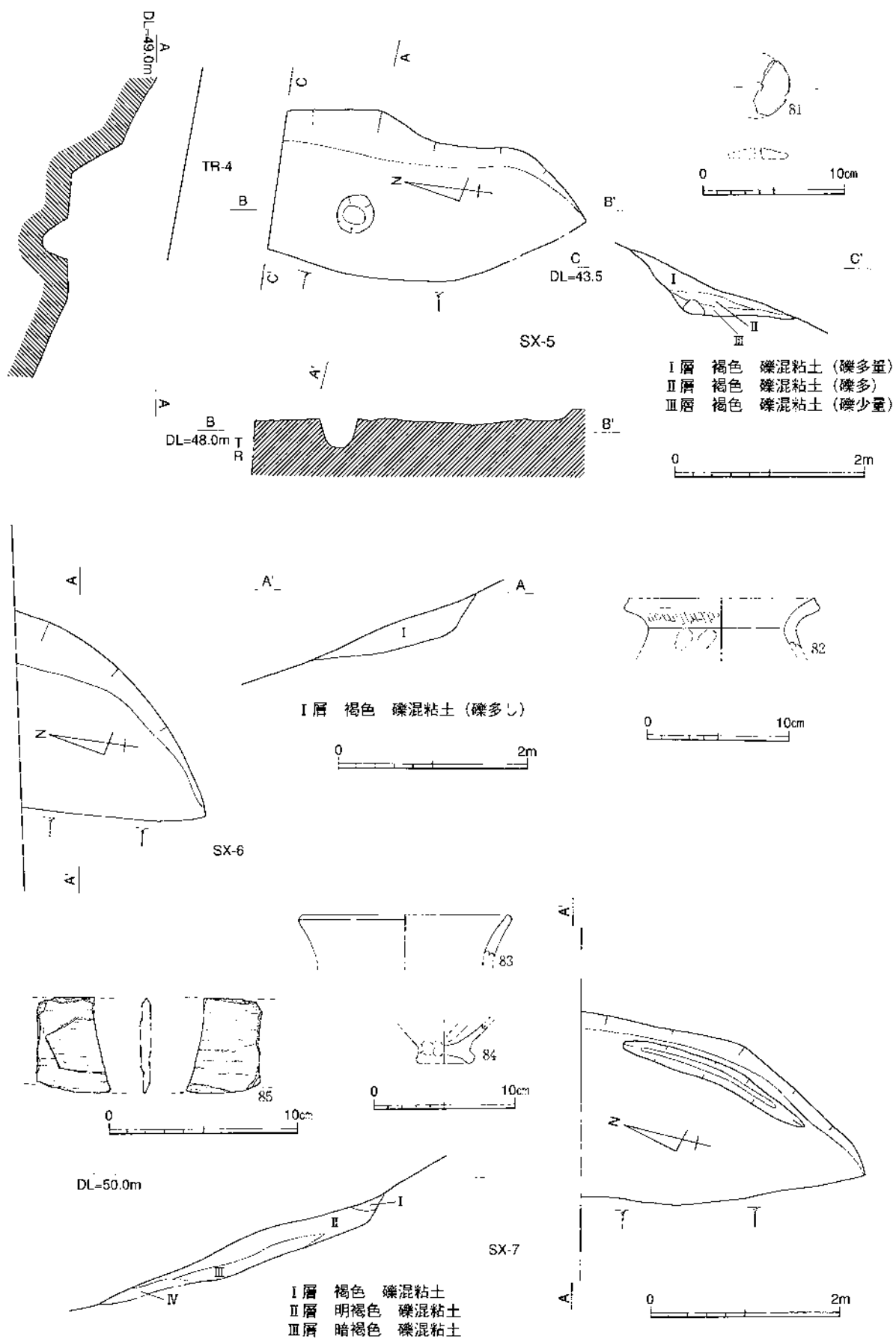


Fig. 24 SX-5, SX-6, SX-7 平面・セクション・エレベーション図(S=1/60)及び出土遺物(S=1/4・1/3)

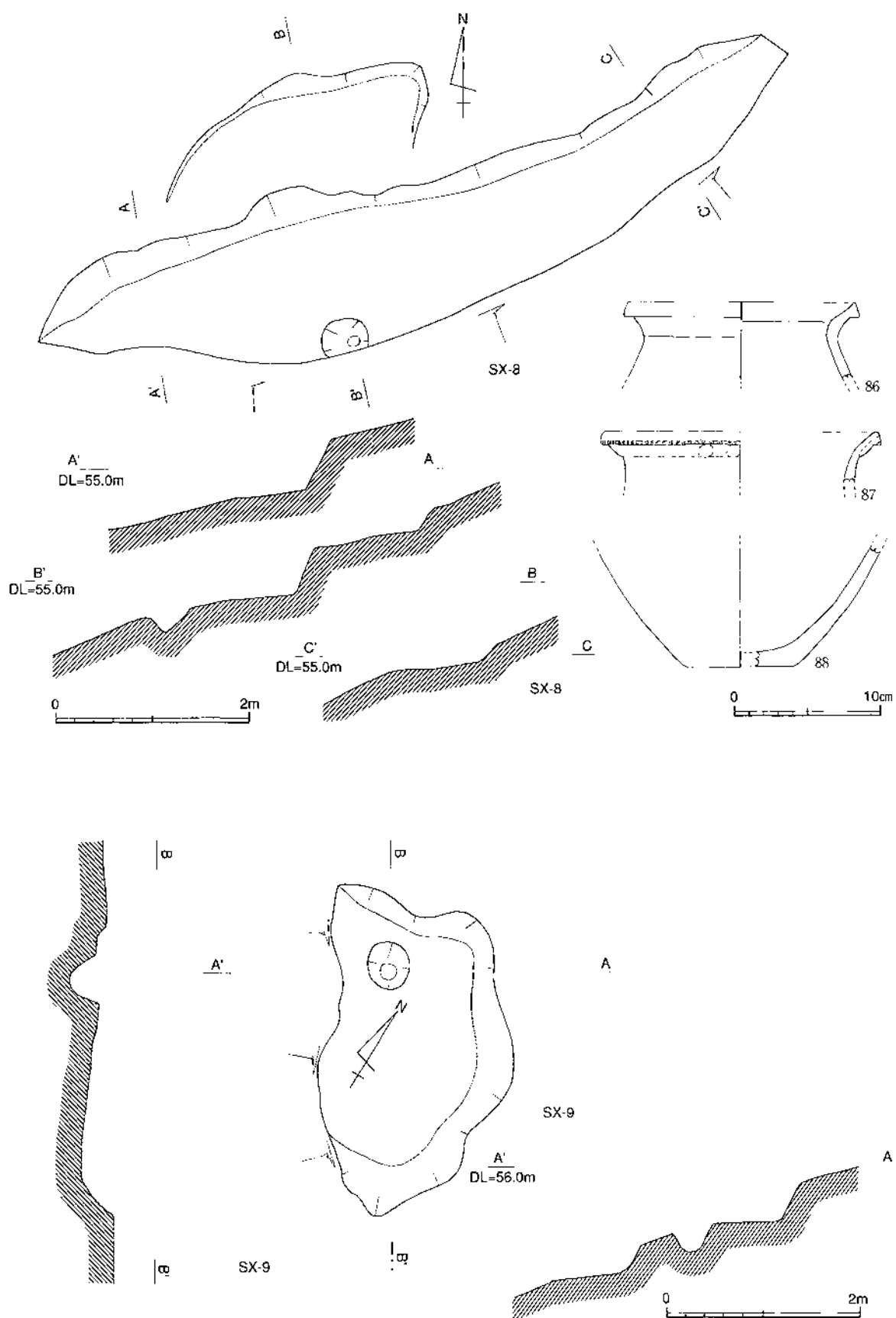


Fig. 25 SX-8, SX-9 平面・エレベーション図 (S=1/60) 及び出土遺物 (S=1/4)

SX-7 (段状遺構 7 -Fig. 24)

西斜面の調査区北端、標高49m付近に位置する。平坦面の幅1.8mで、深さは最大で34cm、遺構は一部が調査区内に残るのみである。掘り方下端に幅24cm程度の小溝を設けるものの、平坦面にそれ以外の遺構は確認されていない。残存部は長さ3m、それ以外は調査区外で今回は調査できなかった。遺構埋土はⅠ層が褐色礫混粘土(砂岩礫も含み礫多量)、Ⅱ層は明褐色礫混粘土、Ⅲ層は暗褐色礫混粘土である。Ⅱ・Ⅲ層ともに礫の含有量は少なく、直径1cm未満の小礫を少量含むのみである。

床面から炭化した種子が検出された。炭化した種子はツブラジイであり、現在でも高知平野では一般的に見られるシイである。炭化した種子以外の出土遺物は36点、その中で図示可能遺物は83・84の弥生土器と85の石包丁である。83は壺口縁、84は鉢の底部で、83は後期初頭、84は中期末から後期初頭に属する。85の石包丁は、吉野川上流域に産する結晶片岩製の打製石包丁である。

SX-8 (段状遺構 8 -Fig. 25)

東側斜面の南端ST-1とSX-10をつなぐ地点に位置する。標高54.6～55.4m付近の斜面を削り出して通路状の平坦部を形成する。平坦面の面積は8.30㎡である。平坦部は50cm～110cmの幅で、平坦部の下端に1箇所ピットを伴う。それ以外に、遺構平坦部に伴うピットなどは確認できなかった。

図示し得る遺物は、Fig. 25の86～88の3点のみであるが、図示した遺物以外に87点の弥生土器が確認されている。時期判定可能な遺物は弥生時代中期末～後期初頭に属する。ST-1と接する遺構西南に遺物の集中がみられた。

SX-8に接して、斜面上部に長さ2.5m幅60cm深さ15cm程の規模で削りとられた部分を確認したが、自然の営為によるものか人為的なものなのか判断できない。遺物は伴っていない。

SX-9 (Fig. 25)

東側斜面、SX-8とSX-10の上部の斜面を削り出して形成する。遺構は中央部をトレンチによって分断され、トレンチの南側は遺構底部が平坦に北側は土坑状にわずかに落ち込む。埋土は褐色礫混粘土で、小礫を含むものの含有量は少ない。

弥生土器小片が1点だけ出土しているものの、細かい時期の特定はできない。幅狭の通路状の遺構SX-8に接した形で遺構が形成されていることと、弥生土器の小片を含むことから周辺の遺構と同時期の弥生時代の遺構として扱っているが、他時期の可能性も残る。性格不明。

SX-10(段状遺構 9 -Fig. 26)

東側斜面、標高54.6～55.6m付近を削り出して平坦面を形成、SX-8から北側に連続する遺構である。平坦面は最大幅1.2～2m、長さ6.4m、深さは最大90cmを測り、掘り方下端には幅20cmほどの小溝を設けるが、残存状況が悪いため平坦部中央の長さ2.4mほどしか確認できなかった。平坦面の面積は10.34㎡である。平坦面に深さ10～20cm、径16～32cmの8基のピットが検出された。ピット間の関連は不明であり、上部構造の推定・復元をすることはできない。

遺構埋土はⅠ・Ⅱ層が明褐色礫混粘土、Ⅲ・Ⅳ層が黄褐色礫混粘土であり、遺構床面は赤褐色粘

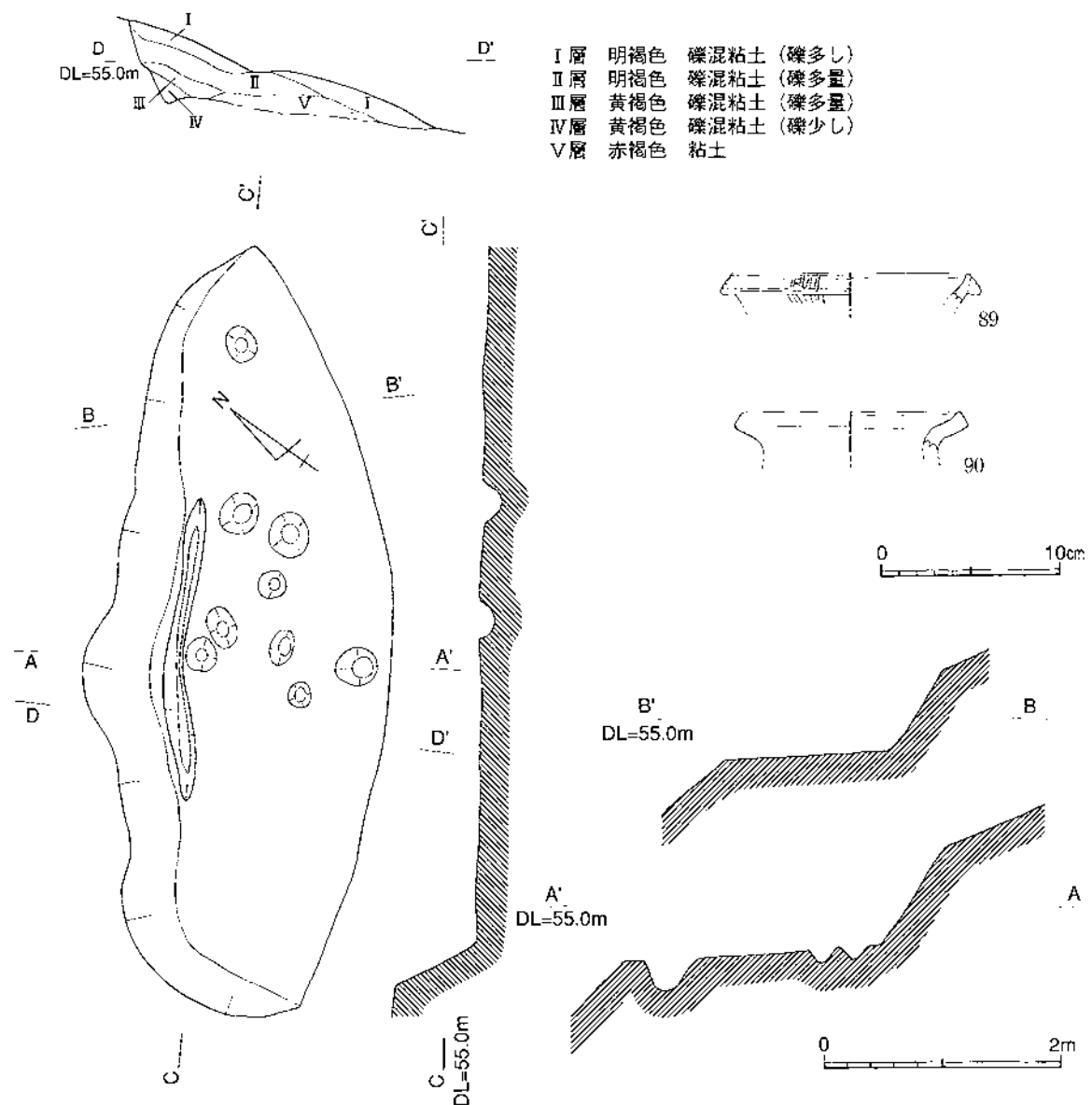


Fig. 26 SX-10 平面・セクション・エレベーション図 (S=1/60) 及び出土遺物 (S=1/4)

土(V層)である。Ⅰ・Ⅱ層、Ⅲ・Ⅳ層については含有礫の量によって分層した。Ⅱ層とⅢ層が礫を多量に含む層であり、Ⅳ層は礫をほとんど含まない。

弥生土器が30点あまり出土している。小片が多く、時期を特定できる資料は少ないが、89の壺と90の甕が確認されている。89は口縁に3条の凹線を施文し、90は強い横方向のナデにより口縁は内傾面をなす。弥生中期末～後期初頭に属すると考えられる。

SX-11(段状遺構10-Fig. 27)

東斜面調査区北端の標高56.8～57.2m付近に位置する遺構で、南端はわずかに土坑状に落ち込むが、それ以外は平坦面を削り出し、等高線に沿って調査区外へ延びる。等高線に沿って延びる幅狭の遺構で、通路状の遺構として位置づけられる。平坦面に一箇所、径30cm深さ24cmのピットが検出された以外はピット等は確認できなかった。埋土は褐色礫混粘土で含有礫は少量である。

弥生土器41点を確認されているが、図示できたのは91～93の3点のみである。91は直口壺、92は口縁端部が下方へ拡張する壺、93は口縁に凹線を有する甕である。いずれも弥生時代中期末から後期初頭の時間幅の中で捉え得る遺物である。

SX-12(斜面に立地する焼土塊集中遺構。底面が傾斜する。Fig. 28)

調査区東斜面北端の標高52.0mから53.5mにかけて、浅い土坑状の落ち込みが斜面の傾斜に沿って認められた。埋土にはぶい赤褐色粘質土、赤変した焼土が集中し、焼礫や焼けた粘土塊が遺構内から検出された。粘土塊は不整形であり、ほぼ球形に近いものもあれば、楕円形の平面形のものもあるなど一定ではない。ブロック状の小塊も多いが、最大のものでは径12cm重さ1,200gに達するものもある。径5～7cm前後、重さ100～200g前後の粘土塊が多い。小ブロックも含めた出土粘土塊合計点数は81点である。SX-12出土粘土塊の詳細は、Tab. 7に提示した。

出土遺物はこれらの焼粘土塊と弥生土器小片2点であり、弥生土器の中に図示し得る遺物はない。粘土塊の特徴については、いくつかの指摘ができる。すべての粘土塊が被熱していること、幅5mm・幅3cmなど様々な規模でいくつかの粘土塊に黒変が認められること、径5～10mm程度の小孔を持つものがあること、胎土にはチャート砂粒が多く含まれ周辺から出土する在地産の弥生土器との類似が認められること、指頭圧痕や爪痕などの観察可能な粘土塊が多いこと、植物繊維を含む粘土塊が認められること、焼土坑や窯壁など何らかの焼成遺構を構成する壁の一部と考えられる形状の粘土塊が認められること、などが焼粘土塊の観察から指摘できる事柄である。

SX-12はST-2下方斜面から検出された遺構で、ST-2の床面を形成する層の下層で確認されている。SX-12はST-2に先行して形成された遺構である。図示可能遺物はないが、出土した2点は弥生土器であり、ST-2の形成直前の時期に機能していたものと考えられ、本調査区の弥生時代の他の遺構同様、弥生中期末～後期初頭の時間幅の中に入ってくる遺構であろう。

この遺構の性格については、土器焼成に関する遺構あるいはのろし台等火を焚くこと自体を目的とした遺構などの可能性を考えたが、前者については周辺に弥生土器等の土器類が全く認められない点、後者については遺された炭化物が少なく、遺構内に多く粘土塊が残るという理由で否定的に考えている。

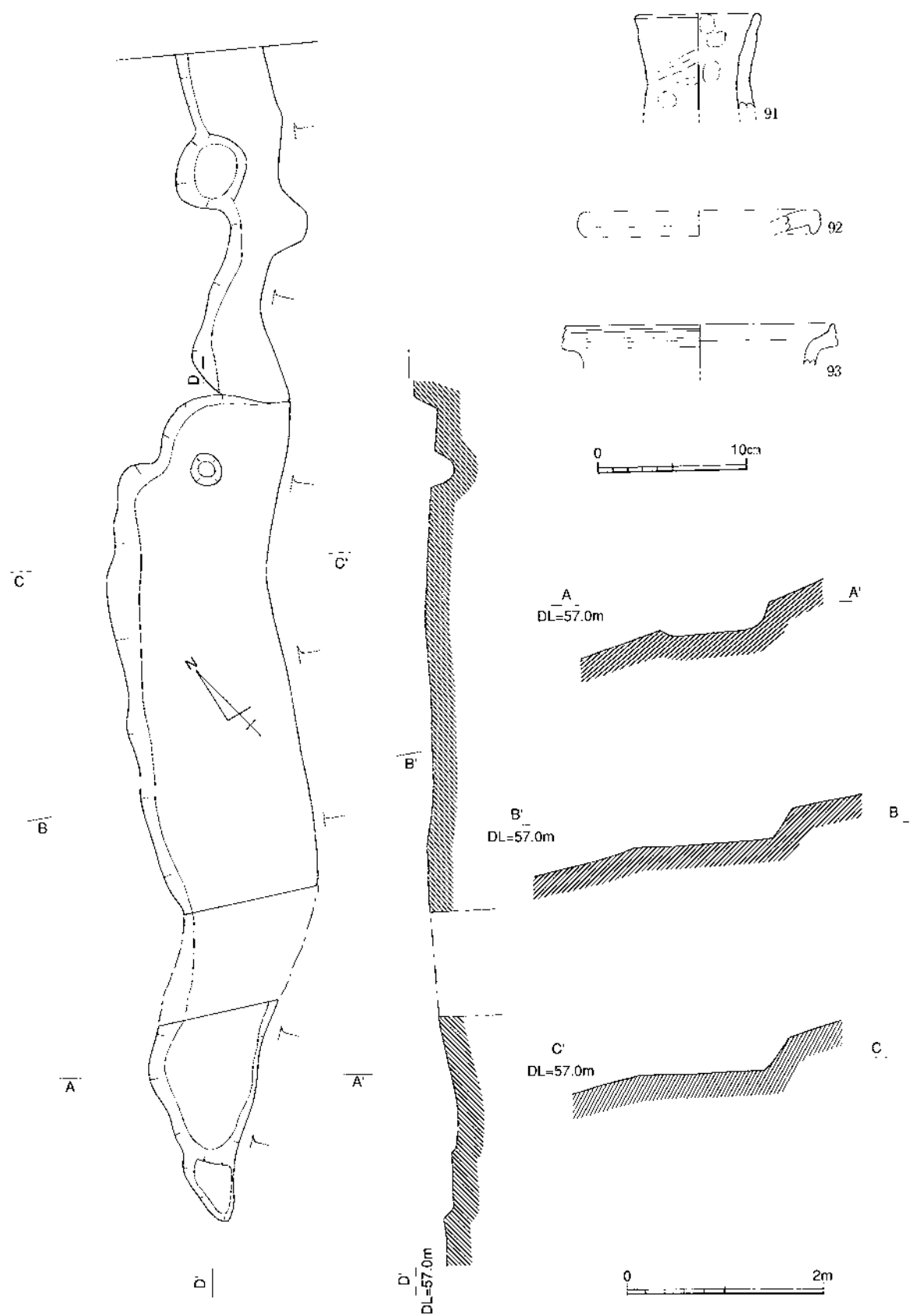


Fig. 27 SX-11 平面・エレベーション図 (S=1/60) 及び出土遺物 (S=1/4)

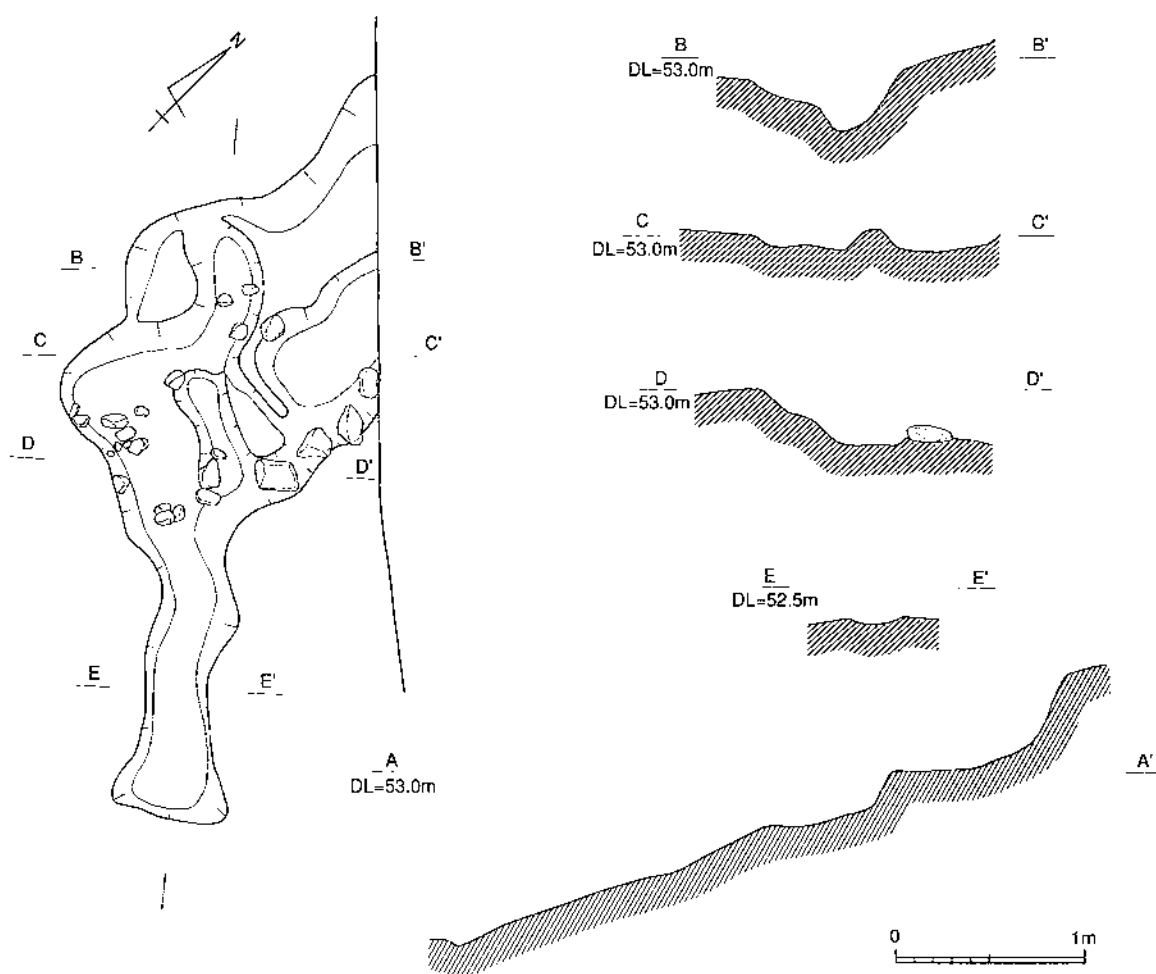
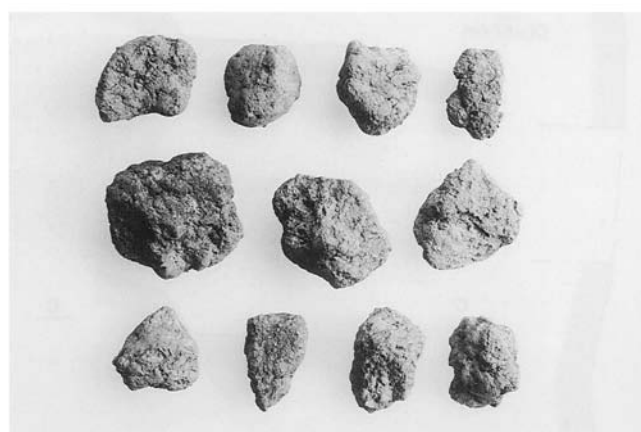


Fig. 28 SX-12 平面・エレベーション図 (S=1/40)



SX-12出土 焼粘土塊



SX-12 (斜面下方より)

Tab.7 I区 SX-12・出土焼粘土塊観察表

粘土塊サンプル 採り上げ番号	長さ	短辺	厚さ	重量	特 徴	植物繊維	粘土塊 個数
N-1	4.5	2.5	2	25	幅5mmで黒変。		2
N-2	4	4	4	87	ブロック状の小塊。		5
N-3	8	5	2	88	5mm幅で黒変。		1
N-3	7	6	3.5	135	半部分が黒変。径5～10mmの小孔を持つ。		1
N-3	8	6	6	174	半部分が黒変。指頭圧痕あり。		1
N-3	10	9	6	231	ブロック状。他に小片が10。		1
N-4	4	3	3	185	径3cm～4cmのブロック状の小塊10コ。		10
N-5	5	3	3	50	小ブロック。		2
N-7	12	12	8	1200	幅3cmで黒変。		1
N-8	7	7.5	3	140	チャート砂粒多く含み指頭圧痕が観察される。		3
N-8②	6	6	5	240	ブロック状の粘土塊10片。		10
N-9	7.5	4.5	4	125	粘土塊の半部分が黒変する。		1
N-10	3	2	2	50			2
N-12	9	7	3.5	123	指頭圧痕が観察される。チャート砂粒を多く含む。		1
N-14	7	5	2	210	1～3mmの砂粒を多く含んだ粘土塊。		8
N-14	8.5	6	3	315	壁状（板状）。		6
N-15	3	3	3	22	小片5コ。		5
N-16	6	4.5	4	90	焼成坑の壁か？		1
N-17	5	4	2	38	チャート砂粒を含む。		1
N-18	9	7	4	170	指頭圧痕。		2
N-19	8.5	4.5	2.5	165	指頭圧痕・爪痕あり。		1
N-20	5	3	3	51	他5片。		2
N-21	6	6	4.5	120	粘土塊の一方の面が湾曲し、内外面の判断可能。他に小片1。	含有	2
N-22	11	11	6.5	1200	焼成坑等を構成する壁の一部。		1
N-23	12	7	5	245	径1cm前後の小孔が開く。植物繊維を含む。	含有	1
N-23下	6	8	3	120			8
N-24	7	6	4	98		含有	2
N-26	5	5	4	110	角礫2コ。（砂岩）		
N-26	6	4	4	95	径1.2cmの小孔あり。		3

※サンプル番号に欠番あり。長さの単位はcm、重量の単位はg。

B. 包含層出土遺物(Fig. 29)

包含層出土遺物の中で、弥生時代に属する遺物についてFig. 29に示した。遺跡の範囲確定のため設定したトレンチ(TR-1～9)から出土した遺物の中で遺構から出土したことがはっきりしている遺物については、遺構の項で扱った。包含層出土遺物の総点数は540点あまりと調査面積に比べて遺物量は少ない。

土器の中で図示し得たものは94～113の20点あまりである。94～96にみられる口縁部下端の刻み目や95の貼付口縁、96・102に見られる頸部あるいは上腹部の蘆描直線文、さらには102の蘆描直線文下のヘラ状原体による列点文(ヘラ押圧文)、101・102の上腹部円形浮文など高知平野の在り土器の弥生時代中期末の特徴を持つ一群の土器とともに97・98のような口縁に凹線文を有する土器、99・100のような凹線文が退化し強いヨコナデにより口唇が凹状を呈する土器など凹線文土器あるいはその系譜の上に成立した土器が出土している。この中には97・100など胎土に雲母・角閃石を含み、明らかに高知平野以外で製作された搬入品も含まれる。106・107・112の底部の胎土も在り土器とは異なっており搬入品だと考えられる。明瞭な凹線文から退化した凹線文、そして凹線が消滅するという弥生中期末から後期初頭へと至る編年観に従えば、これらの土器は中期末から後期初頭の短い時間幅の中で捉えられる土器である。

今回の調査で確認された高杯は、遺構出土遺物・遺構外出土遺物を含めても113の1点のみであった。底部充填技法が観察される脚部～杯部の小破片で、他の遺物と同時期のものである。

包含層出土石器は114～120の7点である。全て弥生時代の石器と考えているが、叩石類の中には他時期のものが含まれる可能性もある。叩石には砂岩が利用されているが、それ以外の石器には114のスクレイパーのサヌカイト、115の打製石包丁の結晶片岩、116の磨製石包丁の泥質片岩、117の磨製石斧基部の緑色片岩など吉野川上流域・瀬戸内など他地域の多様な石材が利用される。これらの石器は、多様な交易圏を持つ高知平野弥生中期～後期社会の様相を端的に示している。115・116のように打製・磨製の石包丁が共存しているのも当該期の特徴であり、石器組成の転換を示す。遺構出土資料も含めて弥生時代の奥谷南遺跡では石器素材としてのチャートの利用は認められない点から、石材利用の在り方は弥生前期そしてそれに遡る縄文早期以来の高知平野の石材利用の伝統を踏襲しているといえる。

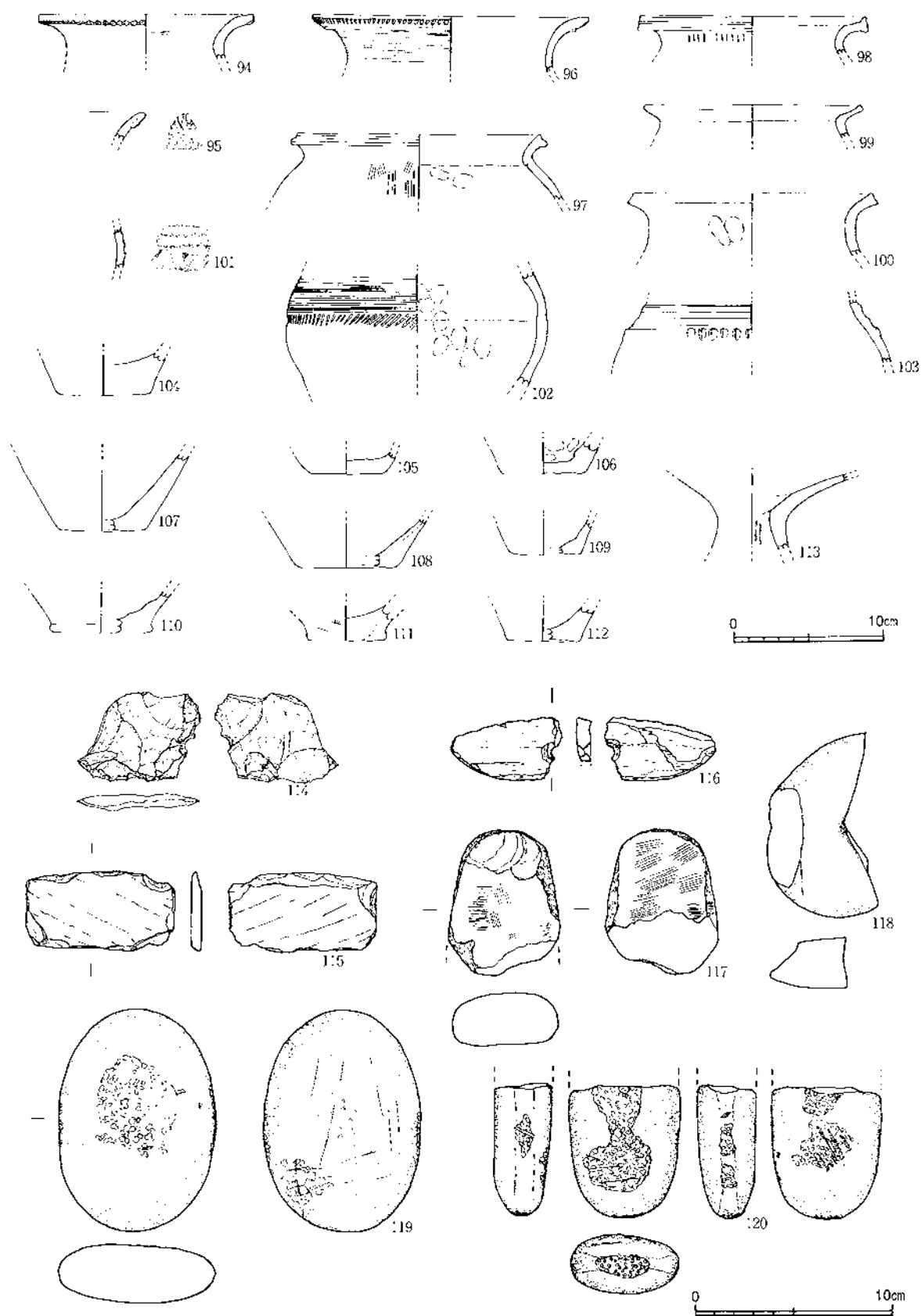


Fig. 29 I 区 包含層出土遺物 (S=1/4 · 1/3)

(2) 近世の遺構と遺物

SK-1 (土坑墓-儒墓-Fig. 30)

調査区中央北端の尾根上に位置する方形の土坑墓で、2段掘りになっている。試掘調査の時に部分的に存在が確認された。(試掘Ⅳ区TR-1) 検出面は一辺2.6mの方形で、約1.2mの深さにはほぼ垂直に掘り下げた地点に幅22~28cmの平坦面(段部)を形成し、さらに一辺1.2mの方形の土坑を深さ80cmに掘り下げた形状となっている。主軸方向はN-7°-Eの南北方向である。

遺構埋土はセクション図中のⅡ~Ⅷ層となっている。Ⅱ~Ⅶ層とⅧ層とは土の締りが異なってお

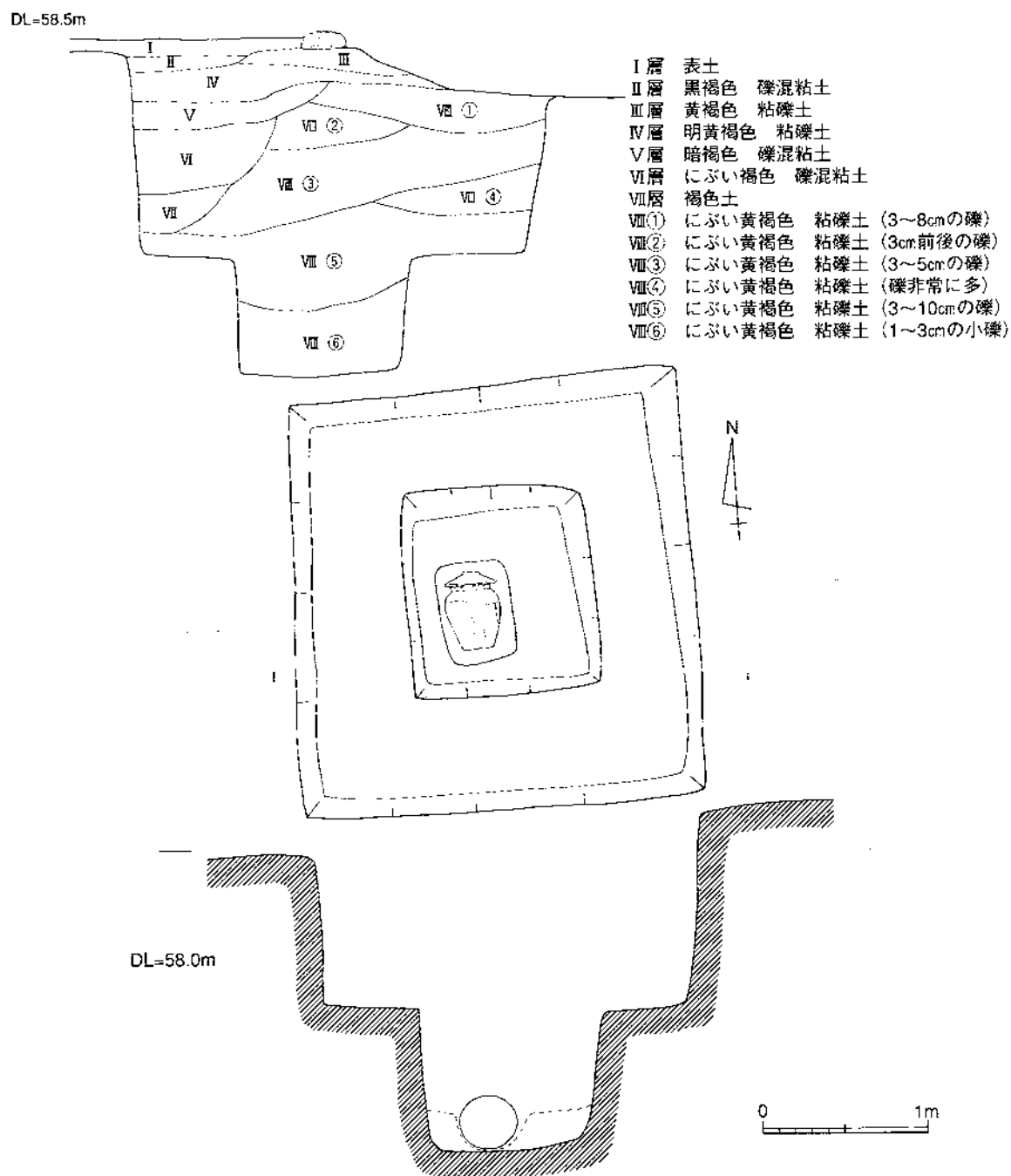


Fig. 30 SK-1 平面・セクション・エレベーション図 (S=1/40)

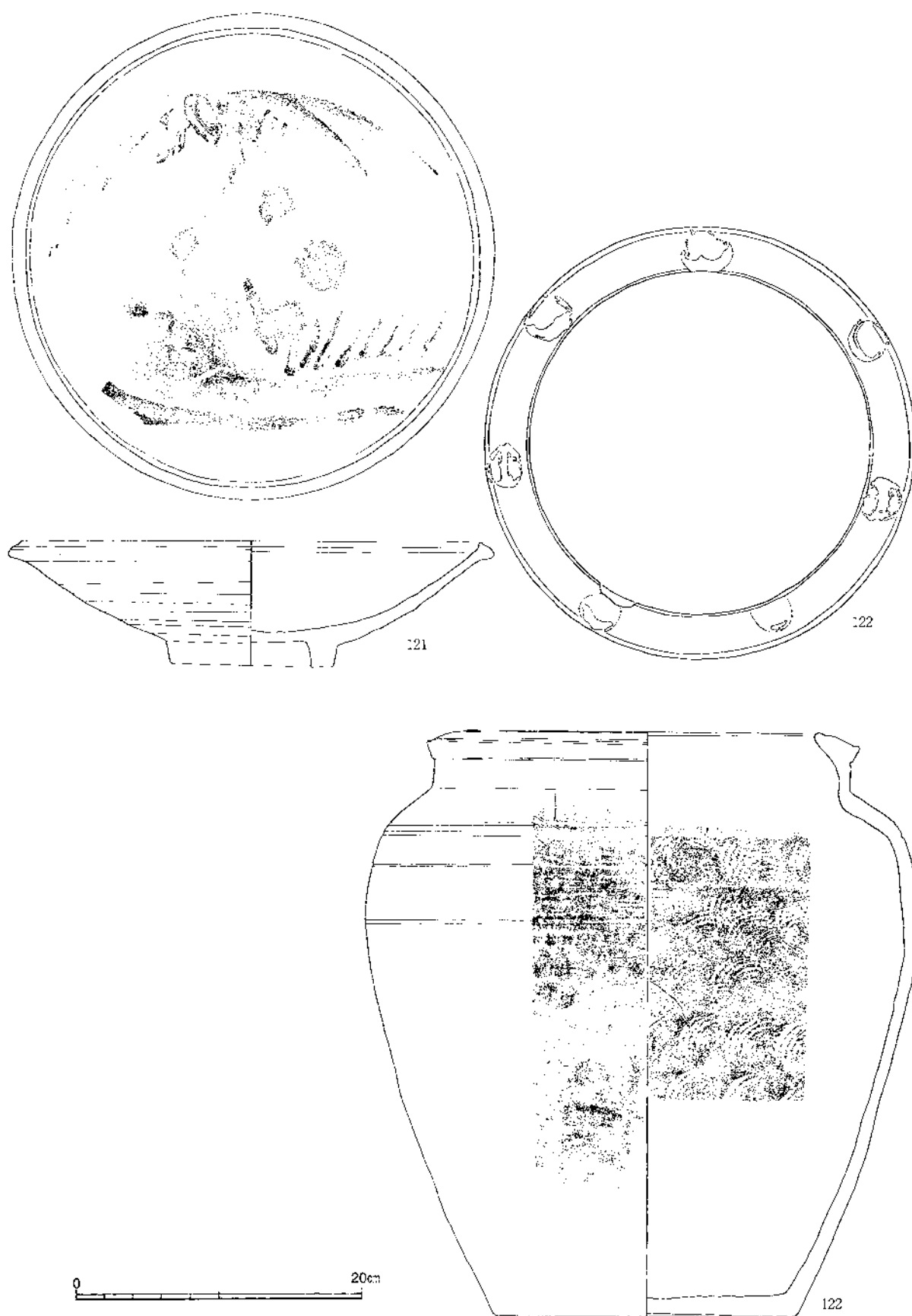


Fig. 31 SK-1 出土遺物 (S=1/4)

り、これらの層が埋積した時期の違いを示すと共にⅧ層の堆積後に一度穴が掘られたことを示している。Ⅷ層は1～6に分層可能であるが、すべて「にぶい黄褐色粘礫土」として捉えられ、含有礫の礫粒あるいは量によってのみ分層可能な層である。

遺構埋土の状況から、この土坑は遺構が形成された時期よりも新しい時期に一度掘り返されていること、そしてその時の再掘坑は2段掘りの一段目の段には及んでいたものの、それより下層の甕棺埋納坑には達してなかったことがわかる。

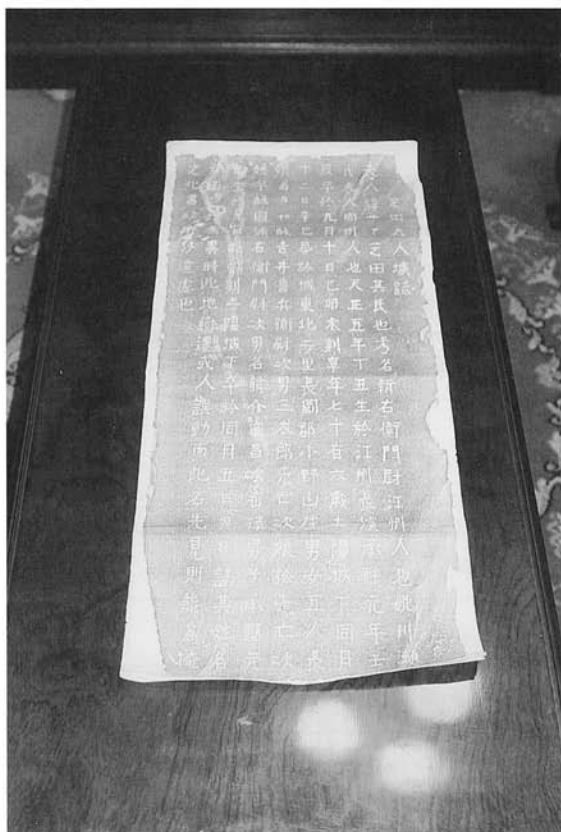
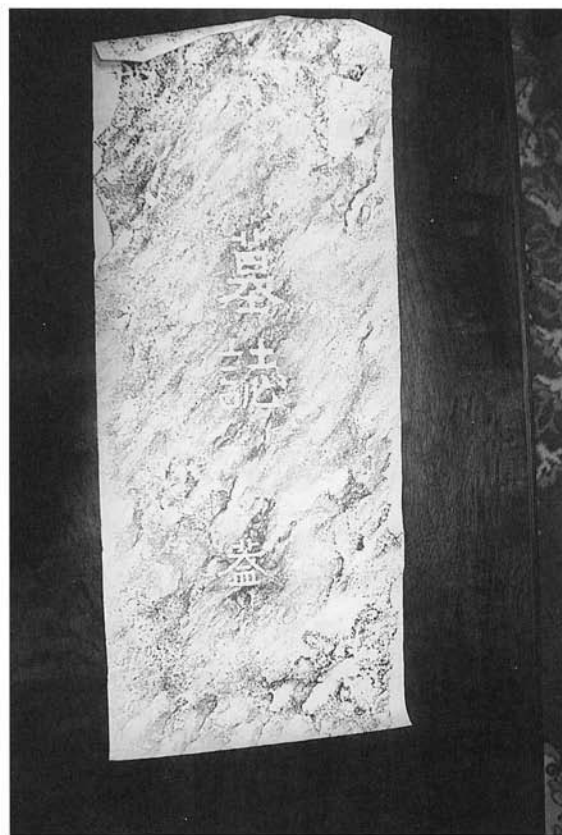
出土遺物は2点、いずれも唐津焼で、二彩唐津の鉢(Fig. 31-121)と中型甕(Fig. 31-122)であり、甕が鉢で蓋をされた形で横倒しになって埋められていた。鉢は口径30.2cm、器高9.8cmで、口縁は上下に拡張し、口唇に3条の凹線を施す。内面全体と外面中位にまで化粧がけを施した上で内面に二彩(鉄結・銅釉)によって竹文が描かれている。竹文は褐色と濃緑色に発色する。見込には5ヶ所の砂目が見られる。甕は口径24.0cm、器高40.5cmの中型甕で、内面には同心円のタタキ目、外面には平行タタキ目が残る。上胴部外面に4条の沈線が観察され、肥厚し内傾した口縁部上面には焼成時の甕どうしの融着を防ぐ貝目が7ヶ所確認された。鉢は17世紀第一四半期のもの、甕は17世紀第一四半期～第二四半期にかけてのもので、2点とも17世紀前半に製作された遺物である。

この土坑の近くからは石盤に刻まれた墓誌が出土している。1916年(大正6年)に地元の有志によって掘り出されたもので、「唐龍の墓」と書かれた記念碑が建っている。遺跡台帳には、唐流の墓として記載されており、記念碑の「唐龍」も「唐流」の誤りで儒墓のことを示すものと考えられる。以前に概要報告書等で約4m北として報告したが、その位置は記念碑の建てられている位置であり正確な石盤の出土地点は確定できなかった。唐津の鉢・甕と同じ土坑内に埋められていた可能性もある。墓誌は承応元年(1652年)銘のものである。

墓誌に記載された儒墓は本来、掛川町の鍛冶頭木原作左衛門の妻、「おさあ」のものであるはずなのだが、墓誌の石盤には生後5日で亡くなったまだ名前も付けられてない乳児についての記載が登場する。乳児に関する記載と儒墓との関係が疑問視されてきたが、今回の調査でこのSK-1に埋葬されていたのがこの乳児である可能性が強まった。すなわち、出土した甕の内面と蓋として利用された鉢の内面には、骨片が付着しており、外面観察により成人の骨ではなく、骨組織のはっきりしていない乳児又は嬰兒の骨であることが判明したのである。

墓誌に記された儒葬が、おさあのためのものだとしても、SK-1は墓誌に記載された乳児のための墓壙であるのか、おさあも含めて埋葬されていたのか、おさあ自身の墓壙は他にあり、墓誌の儒葬に関する墓壙は複数存在したのか、など今回の調査結果のみでは明らかにし得ない課題は残された。確実に言えるのは、SK-1が儒葬に伴う墓壙であり、儒葬の墓壙は2段掘の形状を持つということ、さらに石盤に記載される生後5日で死亡した乳児がこの墓壙に埋葬されたであろうということである。儒墓の墓壙の下部構造が2段掘であるということが普遍的であるのか、あるいは当地方又は本遺跡の特殊性であるのかについては今後の検討課題である。

1652年(承応元年)という墓誌の年号と17世紀前半に属するという出土遺物(121・122)の年代も整合性がある。



墓誌拓本（南国市岡豊町小蓮 和田松子氏所蔵）

SK-2 (Fig. 32)

2段掘りの土坑墓である。検出面は長軸2.8m×短軸2mの平面形である。検出面から1.2m掘り下げて段部を形成し、さらに80cm掘り下げて長軸1.8m×短軸0.8mの平面形が長方形の墓壙を形成する。段部の幅は24～40cmであり、長軸に沿った段の幅(32～40cm)が短軸(24～32cm)に比べて若干広い。主軸方向はN-7°-Eの南北方向である。

埋土はにぶい黄褐色粘礫土層であり、遺物は検出できなかった。土坑の形状、埋土等から遺物は無いものの、約4m北に位置するSK-1と前後する時期(近世)の土坑墓であると考えている。

SK-3 (Fig. 33)

中央部尾根上東斜面、標高56m付近に位置する。土坑墓であり、検出面の平面形は長軸200cm×短軸80cm、検出面から80cmの深さを持つ土坑である。主軸方向はN-7°-Eの南北方向である。

埋土は6層に分層される。Ⅰ～Ⅴ層はいずれも礫混粘土で、色調・含有礫量の違いから分層可能である。Ⅰ層褐色礫混粘土、Ⅱ層黄褐色礫混粘土(礫多)、Ⅲ層褐色礫混粘土、Ⅳ層にぶい黄褐色礫混粘土(礫少量)、Ⅴ層褐色礫混粘土(礫少量)の5層である。最下層のⅥ層は褐色粘土で礫をほとんど含まない。Ⅴ・Ⅵ層中からは十数点の角釘が検出されており、木棺直葬による土坑墓だと考えられる。

出土遺物は123の古伊万里(そば猪口)と124～129の寛永通宝である。123のそば猪口はコンニャク印判により製作されたもので、18世紀後半以降の遺物である。SK-3出土の寛永通宝は古寛永(126)、文銭(124・125)、新寛永(127～129)の3種類が確認されている。合計6枚の寛永通宝は124の表面を表側にして番号の順に融着した状態で出土した。いわゆる六文銭として副葬されたものである。寛永通宝全体が布(綿布)につつまれていたが、布は腐食しており一部を残すのみとなっていた。これらの寛永通宝が制作された初鑄年は古寛永が1637年、文銭が1668年、新寛永が1739年である。

これらの出土遺物から、SK-3の形成時期は18世紀後半以降だと考えられる。

Tab. 8 I区 SK-3 出土古銭計測表

Fig. 番号	図版 番号	銭 種	分 類	外径 (cm)	口徑 (cm)	内径 (cm)		重量 (g)	備 考
						表	裏		
33	124	寛永通宝	文銭	2.51	0.55	2.01	1.80	3.5	
33	125	寛永通宝	文銭	2.54	0.54	1.98	1.80	3.8	
33	126	寛永通宝	古寛永	2.45	0.57	1.93	1.75	3.3	
33	127	寛永通宝	新寛永	2.30	0.61	1.88	1.75	3.1	
33	128	寛永通宝	新寛永	2.38	0.60	1.98	1.85	3.1	つぶれて判読困難
33	129	寛永通宝	新寛永	2.30	0.55	1.96	1.90	2.7	

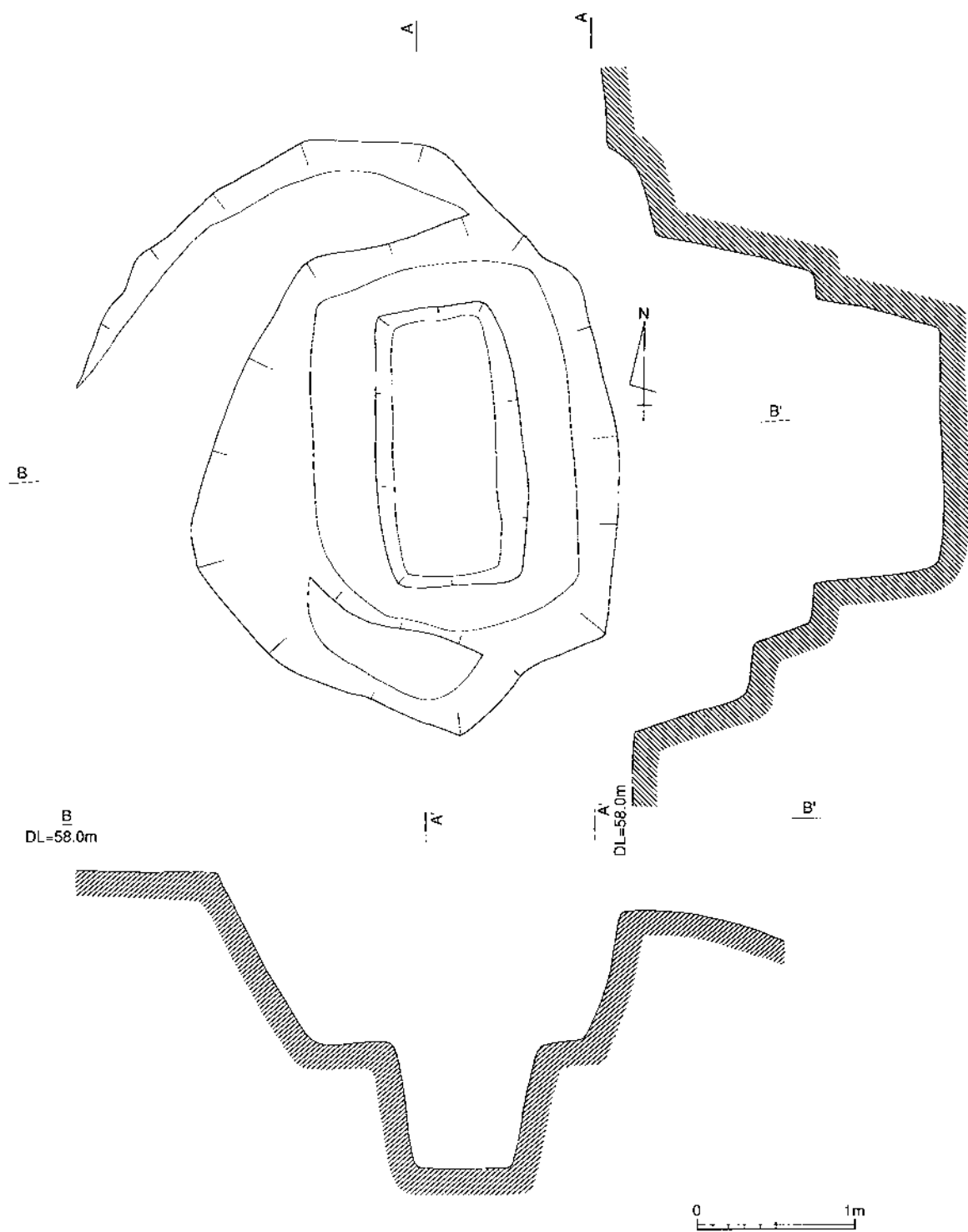


Fig. 32 SK-2 平面図・エレベーション図 (S=1/40)

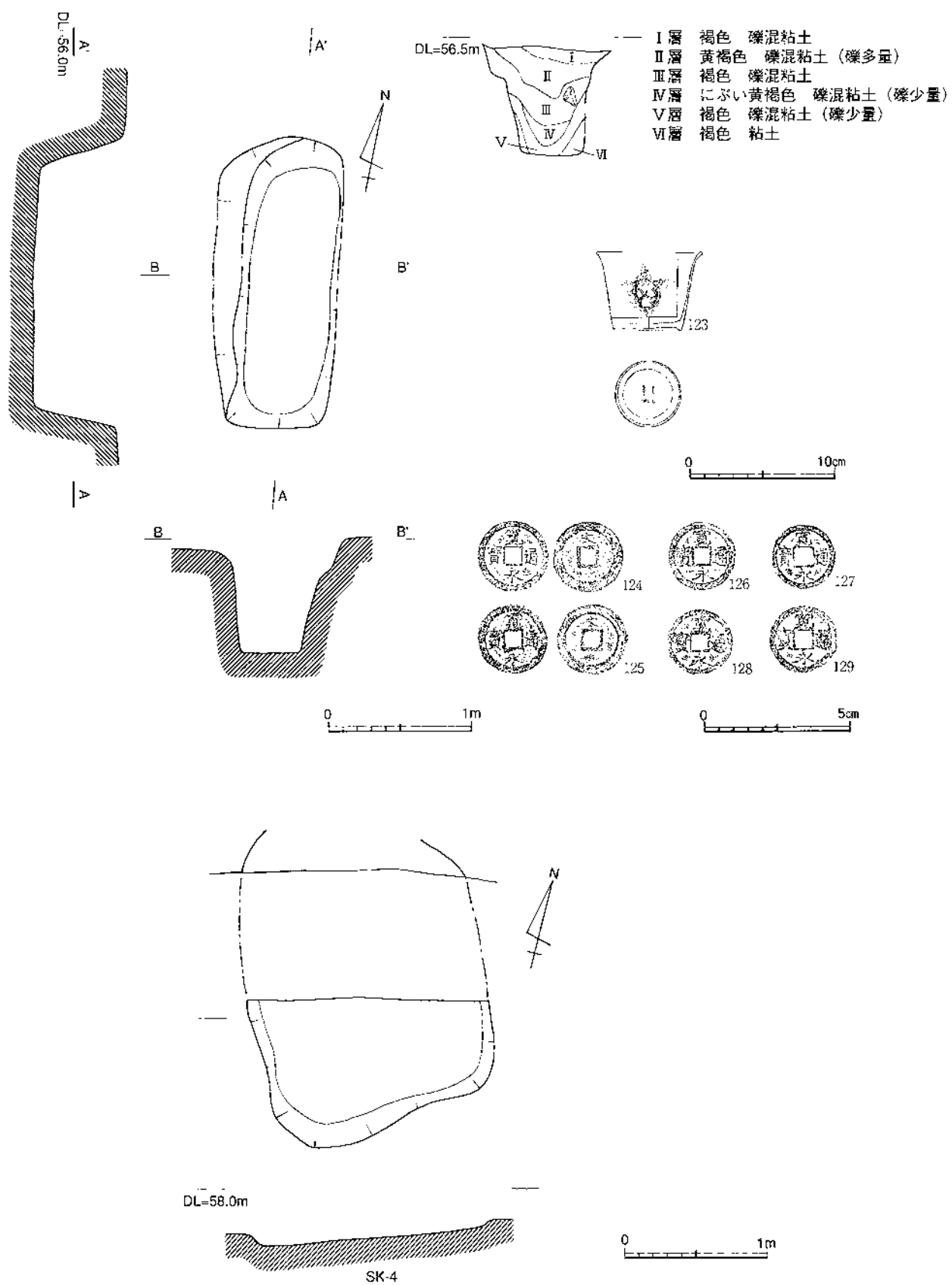


Fig. 33 SK-3, SK-4 平面・セクション・エレベーション図 (S=1/40) 及び出土遺物 (S=1/4・1/2)

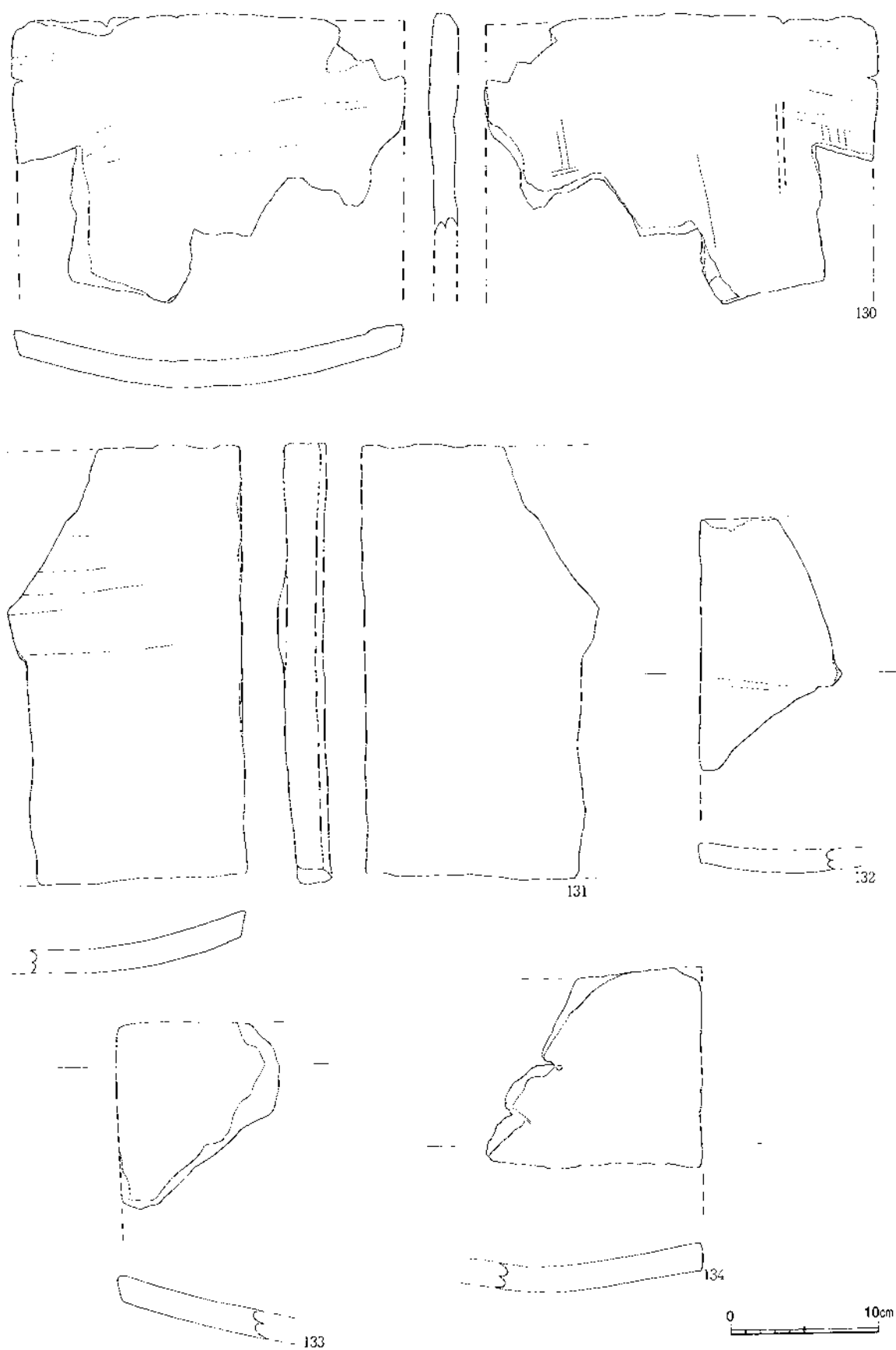


Fig. 34 SK-4 出土遺物 (S=1/4)

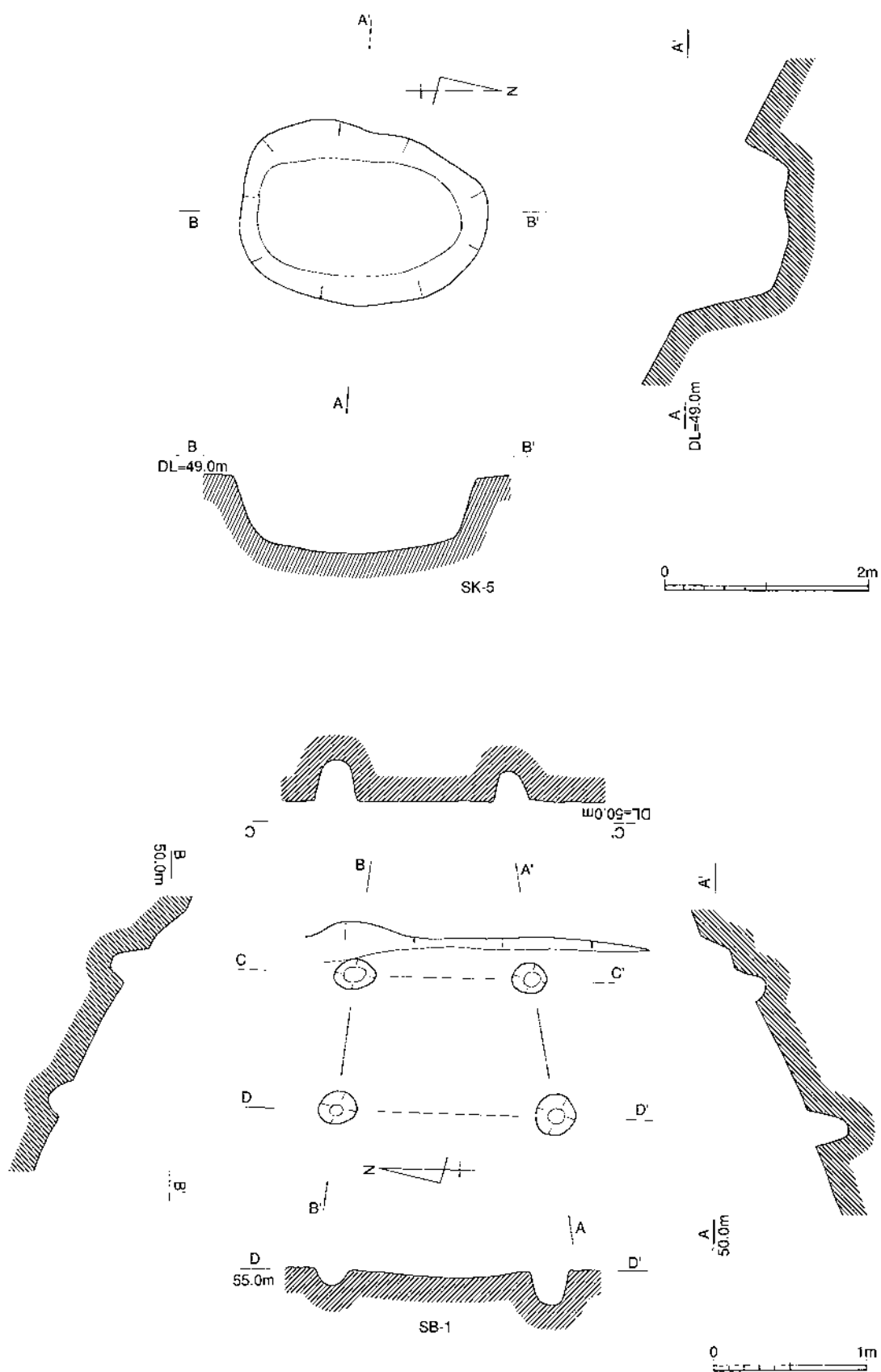


Fig. 35 SK-5, SB-1 平面・エレベーション図 (S=1/60・1/40)

SK-4 (Fig. 33・34)

中央部屋根上に位置する。1.4m×2.4mの不整形の土坑で深さ12cmの浅い皿状を呈する。出土遺物は平瓦25点であり、そのうち130～134の5点をFig. 34に図示した。いずれも粘土塊からの切り離しに鉄線を使用した「コビキB類」手法である。また、出土した瓦には全く炭素の吸着が認められない点も特徴的である。これらの瓦は近世の遺物であり、正確な焼成時期はわからないものの、コビキB類手法出現後、瓦全面に炭素吸着が一般化する以前の比較的短い時期に限定される遺物だと考えられる。ただし瓦の廃棄時期は特定できない。SK-4は近世以降に属する遺構ではあるものの形成時期を特定できる材料はなく、時期不明の遺構である。

形成時期不明ではあるが出土遺物が近世瓦であることから、近世の項で取り扱うこととする。

※「コビキB類」手法については

森田克行「考察 IV屋瓦 4.畿内における近世瓦の成立について」『摂津高槻城 高槻市文化財調査報告書 第14冊』高槻市教育委員会を参考にした。

(3) その他の時代の遺構と遺物

A. 遺構

SK-5 (Fig. 35)

西斜面に形成された長軸1.2m×短軸0.9mの平面形楕円形を呈する土坑である。標高48～49m付近に形成されており、土坑中からは蛇紋岩風化礫が集中して確認された。遺物は出土しておらず、遺構の形成時期を特定することはできない。

SB-1 (Fig. 35)

西斜面に位置する1間×1間の掘立柱建物である。柱穴は直径24～28cmで埋土は黄褐色粘質土である。斜面に立地し、柱間距離92～144cmと小規模なものである。この遺構の周辺に形成された段状遺構等の配置により弥生時代の遺構である可能性もあるが断定できない。

B. 包含層出土遺物

包含層から出土遺物としてFig. 36-135～138が挙げられる。135は搬入品の黒色土器B類、136～138は在地の土師器である。所属時期は10世紀前後、古代に属する遺物である。

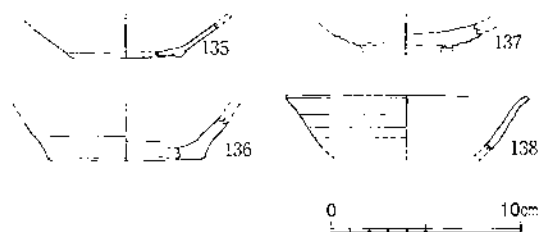


Fig. 36 I区 包含層出土遺物（古代）(S=1/4)

Tab.9 I 区 出土遺物観察表(1)

Fig. 番号	図版 番号	出土地点 層位	種別	器種	法重 (cm)				特徴 (形態・手法等)	胎土	色調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
16	21	ST-1	弥生土器	壺・口縁	18.0				頸部は緩やかに屈曲しつつ、開いて丸く収めた口唇に至る。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
16	22	ST-1	弥生土器	壺・口縁	14.4				頸部はくの字状に屈曲し口状を呈する口縁に至る。口縁部は強い横方向のナデによって仕上げる。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
16	23	ST-1	弥生土器	壺・口縁	14.9				口縁部は横方向の強いナデにより上方に若干拡張、口唇は内傾する面をなし凹状を呈する。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
16	24	ST-1	弥生土器	壺・口縁	14.4				頸部はくの字状に強く屈曲、口縁部は横方向の強いナデにより上下に拡張する。口唇は内傾する面をなし3条の凹線文あり。外面に縦方向の刷毛目が残る。	チャート砂粒を やや多く含む。	浅黄褐色	浅黄褐色	
16	25	ST-1	弥生土器	壺・口縁	13.0		16.0		上腹部に最大径があり、頸部でくの字状に屈曲して口縁に至る。口縁は横方向の強いナデで仕上げ、上端が若干拡張、下端もわずかに肥厚する。口唇は内傾面をなす。内面指頭圧痕、外面刷毛目が残るが、器表の磨耗顯著で腹部下半の調整不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	棕色	棕色	
16	26	ST-1	弥生土器	壺・胴部					胴部小片。上腹部でヘラ状原体による列点文あり。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
16	27	ST-1	弥生土器	壺・胴部					胴部小片。上腹部で外面に縦線起帯を貼付(残1条)、上下に飾指起帯。縦線起帯下に凹形点文貼付。器壁の厚さ4mm前後と薄手の土器。	チャート細砂粒を 含む。	浅黄褐色	灰黄色	
16	28	ST-1	弥生土器	壺・底部			10.8		平底。厚さ20~25mm。調整不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	明赤褐色	明赤褐色	
16	29	ST-1	弥生土器	壺・底部			9.0		平底。内面に指頭圧痕。	チャート砂粒を やや多く含む。	黄灰色	浅黄褐色	
16	30	ST-1	弥生土器	壺・底部			8.2		平底の底部から胴部は上方へ内湾気味に立ち上がる。内面指頭圧痕、外面は磨耗顯著で調整はほとんどわからないが、わずかにヘラ磨きを観察される。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
16	31	ST-1	弥生土器	壺・底部			5.0		内面コピナデ、外面刷毛調整が観察できるが磨耗のため不明瞭。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	明黄褐色	
16	32	ST-1	弥生土器	壺・底部			5.6		平底の底部から胴部は上方へ内湾気味に立ち上がる。内面刷毛後ナデ。底面付近に指頭圧痕が残る。外面は磨耗顯著で調整はほとんどわからない。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
16	33	ST-1	弥生土器	壺・底部			6.0		平底の底部から内湾気味に立ち上がる。内面指頭圧痕残る。外面調整不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	浅黄褐色	にぶい 黄褐色	
16	34	ST-1	弥生土器	壺・底部			6.2		わずかに上げ底気味の底部。外面に刷毛目が残るが、それ以外の調整は不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
16	35	ST-1	弥生土器	壺・底部			5.2		平底。調整不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	棕色	棕色	
16	36	ST-1	弥生土器	壺・底部			7.8		平底。調整不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	明黄褐色	明褐色	
16	37	ST-1	弥生土器	壺・底部			4.2		平底の底部から内湾気味に立ち上がる。器表の磨耗顯著で指頭圧痕がわずかに残るのみ。	チャート砂粒を やや多く含む。	灰色	灰黄褐色	
16	38	ST-1	弥生土器	壺・底部			7.0		平底で底部外縁部はつまみ出されるように外方へ拡張。内外面に指頭圧痕が残る。	チャート砂粒を 多く含む。	黒色	にぶい 黄褐色	
16	39	ST-1	弥生土器	壺・底部			4.4		平底。調整不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
16	40	ST-1	弥生土器	壺・底部			6.2		わずかに上げ底気味の底部。外面にヘラ磨きが残るが、それ以外は磨耗のため調整不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	棕色	明赤褐色	
16	41	ST-1	弥生土器	壺・底部			4.3		平底で周縁がわずかに突出する。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 棕色	にぶい 棕色	
16	42	ST-1	弥生土器	壺・底部			7.4		平底。器表の磨耗顯著で調整不明瞭だが、内外面とも刷毛調整の後ナデで仕上げる。	チャート砂粒を やや多く含む。	浅黄褐色	浅黄褐色	
16	43	ST-1	弥生土器	壺・底部			4.6		平底。内面コピナデ、外面タテ方向の板ナデ。	チャート砂粒を やや多く含む。	黒色	にぶい 棕色	
16	44	ST-1	弥生土器	壺・底部			6.3		平底。外面タテ方向の板ナデ。	チャート砂粒を やや多く含む。	棕色	棕色	
18	51	ST-2	弥生土器	壺・口縁	15.8				口唇は内傾面をなし、ヘラ状原体による格子目文を施文。口唇は下唇を拡張する。	チャート砂粒を 多く含む。	にぶい 棕色	棕色	
18	52	ST-2	弥生土器	壺・口縁	14.0				口縁、頸部無文で口唇は内傾面をなす。磨耗顯著で調整不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	棕色	棕色	
18	53	ST-2	弥生土器	壺・口縁	13.2				口縁は強い横方向のナデで仕上げる。口唇は上下唇を拡張、口唇は内傾面をなす。外面は刷毛後ナデで仕上げる。	胎土は精選され、 チャート・角閃石 を少量含む。	棕色	棕色	
18	54	ST-2	弥生土器	壺・口縁	14.0				貼付口縁。口唇に刻み目あり。外面の指頭圧痕以外の調整は不明。	チャート多量(赤 色チャート)多く 含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
18	55	ST-2	弥生土器	壺・口縁	18.1				貼付口縁。口縁は横方向の強いナデで仕上げ、口唇は内傾面をなし、ナデのためわずかに凹状を呈している。内面コピナデ、外面刷毛後ナデで仕上げる。外面に横付着。	雲母・角閃石を 含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
18	56	ST-2	弥生土器	壺・口縁	14.8				口唇は強い横方向のナデにより上下に拡張、2条の凹線文を施す。	チャートも多く、 雲母・角閃石・結晶片 も確認される。	灰黄色	灰黄色	
18	57	ST-2	弥生土器	壺・口縁	12.0				口唇は強い横方向のナデにより上下に拡張、2条の凹線文を施す。外面に横付着。	精選された胎土。 雲母を少量含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
18	58	ST-2	弥生土器	壺・底部			8.0		平底。わずかに指頭圧痕が観察される以外は調整不明。	チャートやや多し。	灰白色	にぶい 黄褐色	

Tab.10 I 区 出土遺物観察表(2)

Fig. 番号	図版 番号	出土地点 層位	種 別	器 種	法 量 (cm)				新 裁 (彫刻・手法等)	胎 土	色 調		備 考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
18	59	ST 2	弥生土器	壺・底部				7.6	平底。内面ナデ、外面磨耗のため調整不明。	チャート多し。 雲母をわずかに含む。	灰色	にぶい 黄褐色	
15	60	ST 2	弥生土器	壺・底部				6.8	平底。一旦くびれた後内湾気味に外上方に立ち上がる。	チャートやや多し。	にぶい 黄褐色	褐色	
16	61	ST 2	弥生土器	小型土器			3.6	2.4	平底の底部から胴部は筒状に立ち上がる。内外面に指頭圧痕残る。	チャートやや多し。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	
21	62	SX 2	弥生土器	壺・底部				6.3	平底。内面剥離して調整不明。外面、ナデ。	チャートやや多し。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
22	63	SX 3	弥生土器	壺・口縁	13.4				口縁は大きくランパ状に凹状を呈する1段に至る。内面指頭圧痕、外面刷毛後ナデ。	チャート砂粒少量含む。	褐色	にぶい 黄褐色	
22	64	SX 3	弥生土器	壺・口縁	19.3				口縁は緩やかに外反して丸く収める口縁に至る。内面指頭圧痕、外面刷毛後ナデ。	チャートやや多し。	明赤褐色	褐色	
22	65	SX 3	弥生土器	壺・口縁	22.0				口縁は胴部を上方へ拡張する。内外面とも横方向の刷毛後ナデで仕上げる。	チャート砂粒少量含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
22	66	SX 3	弥生土器	壺・底部				6.4	平底。調整不明。	チャート砂粒多し。	にぶい 黄褐色	褐色	
22	67	SX 3	弥生土器	壺・底部				2.8	平底。調整不明。	チャート砂粒多し。長石・雲母含む。	赤褐色	にぶい 赤褐色	
22	68	SX-3	弥生土器	壺・底部				6.0	平底。内面コピナデ、外面指頭圧痕残り、ナデで仕上げる。	チャート砂粒少量含む。角閃石・長石・雲母含む。	褐色	褐色	
23	70	SX 4	弥生土器	壺・口縁	10.4				直立する胴部から口縁はランパ状に開き、凹状を呈する内傾面をなす口唇に至る。口唇下縁下方へ拡張。内面ナデ、外面タテ方向の板ナデ。	チャート砂粒を やや多く含む。	黄灰色	浅黄色	
23	71	SX-4	弥生土器	壺・口縁 ～胴部	17.0		16.2		胴部で強く屈曲し大きく開いて、1条の凹線を施す（凹状を呈する）1段に至る。口縁は横方向の強いナデで仕上げる。内面指頭圧痕、外面刷毛後ナデ。	チャート砂粒少量含む。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	
23	72	SX 4	弥生土器	壺・口縁	15.0				胴部でくの字状に強く屈曲、内傾面をなす口唇に至る。口唇は上下に拡張、3条の凹線を施す。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
23	73	SX-4	弥生土器	壺・口縁	12.0				口縁部小片。口唇は内傾面をなし上下に拡張、3条の凹線を施す。	チャート砂粒少量含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
23	74	SX-4	弥生土器	壺・口縁	13.6				口縁は横方向の強いナデで仕上げ、口唇は内傾する面をなす。	チャート砂粒を やや多く含む。	褐色	褐色	
23	75	SX-4	弥生土器	壺・口縁	19.0				口縁は横方向の強いナデで仕上げ、口唇はわずかに凹状を呈し、内傾する面をなす。	チャート砂粒を 少量含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
23	76	SX 4	弥生土器	壺・底部				10.2	平底。摩耗顯著で調整不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	黄灰色	灰黄色	
23	77	SX 4	弥生土器	壺・底部				6.0	底部小片。内面指頭圧痕が残る。	チャート砂粒少量含む。	にぶい 黄褐色	明赤褐色	
23	78	SX-4	弥生土器	壺・底部				4.8	上げ底（高台状）の底部から、胴部は内湾して立ち上がる。内面ナデ、外面刷毛後ナデ。	チャート砂粒を やや多く含む。	淡赤褐色	にぶい 黄褐色	
23	79	SX-4	弥生土器	壺・底部				5.4	上げ底気味の底部から、胴部は一旦くびれた後内湾気味に立ち上がる。内外面とも指頭圧痕が観察されるが、それ以外の調整は不明。	チャート砂粒が多し。4mm前後の砂粒も含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 褐色	
24	81	SX 5	弥生土器	紡錘車					全長4.2cm、厚さ0.8cm、口径0.5cm。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
24	82	SX 6	弥生土器	壺・口縁	13.0				口縁は横方向の強いナデで仕上げ、口唇は内傾面をなし、ナデのためわずかに凹状を呈している。内面ナデ、外面刷毛後ナデで仕上げる。外面に擦付着。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
24	83	SX-7	弥生土器	壺・口縁	14.4				直立した口縁からわずかに開き気味に内傾面をなす口唇に至る。口縁は無文。	チャート砂粒を やや多く含む。	浅黄色	浅黄色	
24	84	SX 7	弥生土器	台付壺				3.5	短く八の字状に開いた胴部。胴部はつまみ出すように成形する。内面コピナデ、外面指頭圧痕が残る。	チャート砂粒を 多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
25	86	SX 8	弥生土器	壺・口縁	15.6				胴部はくの字状に屈曲、上下に拡張し内傾面をなす口唇に至る。外面に擦付着。	胎土は精選されており、雲母・角閃石を含む。	褐色	褐色	
25	87	SX 8	弥生土器	壺・口縁	18.8				貼付口縁。口唇は内傾面をなし、下縁を拡張して刻み目を施す。磨耗が著しく、指頭圧痕以外の調整は不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	褐色	明黄褐色	
25	88	SX 8	弥生土器	壺・底部				7.4	平底の底部から胴部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。調整不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	浅黄色	にぶい 黄褐色	
26	89	SX 10	弥生土器	壺・口縁	13.3				横方向の強いナデにより口唇は上下に拡張、内傾面をなし3条の凹線を施す。凹線に直行して、口唇にヘラ先による圧痕文（表現方法？）を施す。内面ナデ、外面刷毛後ナデ。	胎土は精選されており、チャート砂粒を少量含む。	浅黄色	浅黄色	
26	90	SX-10	弥生土器	壺・口縁	12.3				口唇は上方へわずかに肥厚（拡張）、内傾面をなす。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	
27	91	SX 11	弥生土器	壺・口縁	8.2				胴部は直立し、わずかに開き気味に口縁に至る。口唇は丸く収める。口縁は横方向の強いナデで仕上げる。外面刷毛後ナデ。内外面共に指頭圧痕が残る。	胎土は精選されており、雲母・角閃石を含む。	黄灰色	黄灰色	直口壺
27	92	SX 11	弥生土器	壺・口縁	15.6				大きく開く口縁。胴部は下方へ拡張する。摩耗のため調整・施文とも不明。	チャート砂粒を やや多く含む。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	
27	93	SX 11	弥生土器	壺・口縁	18.0				口縁は横方向の強いナデで仕上げ、胴部は上方へ拡張する。口唇は面をなし2条の凹線を施す。	胎土は精選されている。角閃石を含む。	褐色	にぶい 褐色	
29	94	検出時	弥生土器	壺・口縁	14.4				口唇は面をなし、下縁に刻み目を施す。内面に横方向の刷毛が観察できるが、それ以外の調整は不明。	チャート砂粒を 少量含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	

Tab.11 I 区 出土遺物観察表(3)

図版 番号	図版 番号	出土地点 層位	種 別	器 種	注 記 (cm)				特 徴 (形態・手法等)	胎 土	色 調		備 考
					口径	器高	口径	底径			内面	外面	
29	95	C1	弥生土器	壺・口縁					貼付口縁、外面に刻み目あり。	チャート砂粒を多く含む。	浅黄褐色	浅黄褐色	
29	96	I 区	弥生土器	壺・口縁	18.8				大きく開く口縁、口縁部外面にヘラ状原体による刻み目を施す。口縁下に微隆起帯を貼付、微隆起帯下に横筋による平行線を施文。磨耗部で調整不明。	チャート砂粒を多量含む。	浅黄褐色	浅黄褐色	
29	97	TR-5	弥生土器	壺・口縁					横方向の強いナデにより口縁は上下に拡張、凹状を呈する。内面ナデ、外面刷毛後ナデ。	チャート砂粒をやや多く含む。雲母が少量観察される。	浅黄褐色	浅黄褐色	破入品・産地不明。
29	98	TR-8	弥生土器	壺・口縁	15.1				横方向に強いナデにより口縁は上下に拡張、内面凹をなす。口縁に2条の凹線を施文する。内面ナデ、外面刷毛後ナデ。	チャート砂粒をやや多く含む。	にぶい黄褐色	橙色	
29	99	TR-1	弥生土器	壺・口縁	14.1				頸部はくの字状に強く屈曲、口縁は上方に若干拡張する。磨耗部で調整不明。	チャート砂粒をやや多く含む。	褐色	褐色	
29	100	I 区	弥生土器	壺・口縁	16.0				直立した頸部から外反して口縁に至る。口縁は内面凹をなし横方向のナデのためわずかに凹状を呈する。	チャート砂粒をやや多く含む。雲母・長石・角閃石わずかに含む。	褐色	褐色	
29	101	I 区(H)	弥生土器	壺・胴部					胴部小破片。2条の微隆起帯が残り、微隆起帯下に凹形浮文を貼付する。	チャート砂粒を多く含む。	にぶい黄灰色	にぶい黄灰色	
29	102	TR-7 S 皿	弥生土器	壺・胴部				17.6	上胴部に横筋沈線(直線文)を施文し、その下に列点文を施文。内面に指頭圧痕が残る。	チャート砂粒をやや多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
29	103	検出時 No.2	弥生土器	壺・胴部				19.0	上胴部に3条の微隆起帯を貼付、微隆起帯の間には横筋沈線による直線文、微隆起帯下には小筋上横筋を貼付。	チャート砂粒を多く含む。	にぶい黄褐色	褐色	
29	104	TR-5	弥生土器	壺・底部				6.2	平底。内面に指頭圧痕が残る。	チャート砂粒をやや多く含む。	褐色	褐色	
29	105	TR-5・6	弥生土器	壺・底部				4.6	平底。調整不明。	チャート砂粒をやや多く含む。角閃石を含む。	にぶい黄褐色	黄灰色	
29	106	I-4・5	弥生土器	壺・底部				5.6	平底。内外面に指頭圧痕が残る。	精選された胎土。雲母・長石・角閃石を含む。	にぶい黄褐色	明赤褐色	
29	107	検出時 No.1	弥生土器	壺・底部				2.8	平底。調整不明。	チャート砂粒を多く含む。雲母・角閃石を含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
29	108	TR-1 E 皿	弥生土器	壺・底部				6.5	平底。調整不明。	チャート砂粒を多く含む。	灰黄褐色	淡黄色	
29	109	TR-8 (C-4)	弥生土器	壺・底部				4.7	平底。調整不明。	チャート砂粒を少量含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
29	110	I 区	弥生土器	壺・底部				6.5	平底。外縁部は外方へつまみ出される、調整不明。	チャート砂粒を少量含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
29	111	TR-8 (C-4)	弥生土器	壺・底部				5.0	平底。内面に指頭圧痕、外面に刷毛目が残る。	チャート砂粒をやや多く含む。	灰黄褐色	灰黄褐色	
29	112	I 区 (E-5)	弥生土器	壺・底部				5.0	平底。調整不明。	長石・角閃石・雲母を含む。	黒褐色	明赤褐色	胎土から判断すると破入品。
29	113	I 区 (E-5)	弥生土器	高杯・脚部					高杯の脚部へ杯部の境界。底部充填技法、脚部に紋目が残るが磨耗部でそれ以外の調整は不明。	チャート砂粒を多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
31	121	SK-1	陶器(伊津)	壺	24.0	40.5	37.6	29.8	口縁部は厚肉し内傾する。口縁部に貝目が残る。(7ヶ所)上胴部から底部に4条の沈線。内面同心円タタキ目、外面平行タタキ目。中型壺で肩から浅黄色の自然釉が下方に流れる。脚部下半に手のひらの痕跡が残る。	精選された胎土。	灰黄色	にぶい赤褐色	17世紀第二四半期。
31	122	SK-1	陶器(伊津)	鉢	32.0	9.8		11.4	高台は断面逆台形で削り出して作出する。口縁は上下に拡張し、口唇面に3条の凹線が施される。外面中位以下高台付近までは露胎する。化粧がけを内面全体と外面中位にまで施した上で、見込みに、漆(鉄釉・銅釉)による竹文を描く。17世紀第一四半期のものである。	精選された胎土。	白色の化粧がけに釉は褐色と濃緑色。	下草が露胎、露胎部は濃緑色。	17世紀第一四半期のもので佐賀県西郷で焼かれたものだが、窯跡を特定することはできなかった。
33	123	SK-3	陶器(伊方里)	そば猪口	7.4	5.5		4.7	口縁は溝反りであり、高台は断面逆台形を呈する。コンキヤク印判による。全面に白色～灰白色釉、口縁は青みを帯びる。	完形品ゆえに不明。	白色～灰白色	白色～灰白色	18世紀後半以降。
34	130	SK-5	瓦(近世)	平瓦				1.1～1.8	門面にコビキB手法が観察される。門面凸面共にナデにより丁寧に仕上げられる。炭素吸着は認められず、所謂「模瓦」ではない。全長27cm、厚さ1.1～1.8cmで全長は不明。	0.2mm前後の細砂粒を含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
34	131	SK-5	瓦(近世)	平瓦	29.9			1.6	門面にコビキB手法が観察される。門面凸面共にナデにより丁寧に仕上げられる。炭素吸着は認められず、所謂「模瓦」ではない。全長29cm、厚さ1.6cmで全長は不明。	0.2mm前後の細砂粒を含む。胎土中に直径12cmの小礫が認められる。	灰黄色	灰黄色	
34	132	SK-5	瓦(近世)	平瓦				1.6	門面にコビキB手法が観察される。門面凸面共にナデにより丁寧に仕上げられる。炭素吸着は認められず、所謂「模瓦」ではない。厚さ1.6cmで全長全幅共に不明。	0.2mm前後の細砂粒を含む。	灰黄色	灰黄色	
34	133	SK-5	瓦(近世)	平瓦				1.8	門面にコビキB手法が観察される。門面凸面共にナデにより丁寧に仕上げられる。炭素吸着は認められず、所謂「模瓦」ではない。厚さ1.8cmで全長全幅共に不明。	0.2mm前後の細砂粒を含む。	浅黄色	浅黄色	

Tab.12 I 区 出土遺物観察表(4)

Fig. 番号	図版番号	出土地点 層位	種別	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	胎土	色調		備考
					全長	全幅	高さ	厚さ			内面	外面	
34	134	SK-5	瓦 (新世)	平瓦				1.6	門面にコビキB手法が観察される。門面凸面共にナデにより丁寧に仕上げられる。灰土敷着は認められず、所謂「薄瓦」ではない。厚さ1.6cmで全長全幅共に不明。	0.2cm前後の細砂粒を含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
36	135	I区 (E-5)	黒色土器	碗・底部				5.9	高台は断面逆三角形。器壁は2〜3mmと非常に薄い。	精選されている。ガラス質の微細砂を含む。	黒褐色	にぶい黄褐色	舶来品。黒色土器B類。
36	136	TR-8 (D-4)	土師器	杯・底部				7.8	ヘラ切り。	精選された胎土。微細土を含む。	浅黄褐色	浅黄褐色	在地
36	137	検出時 C-8	土師器	杯・底部				4.8	輪高台だが剥落し、高台形状不明。底部ヘラ切り。	精選された胎土。	浅黄褐色	浅黄褐色	在地
36	138	I区	土師器	杯・口縁					わずかに輪反の1線。	精選された胎土。	浅黄褐色	浅黄褐色	在地

Tab.13 I 区 出土遺物観察表(5) 石器

Fig. 番号	図版番号	出土地点		器種	法量				石材	特徴
		調査区	隣接道構		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
15	45	I	ST-1	石鏃	2.7	1.9	0.3	1.8	サヌカイト	刃部は若干外湾する。わずかに凹状の基部。
15	46	I	ST-1・S-2	砥石	12.7	8.9	6.2	1,660	砂岩	粒子の細かい砂岩。表面に擦痕が残る。
15	47	I	ST-1	叩石	8.4	7.0	5.3	355	砂岩	門縁利用。端部に敲打痕あり。
15	48	I	ST-1	叩石	7.8	(4.6)	3.5	(141.9)	砂岩	中央部で折損。側縁全面に敲打痕が観察される。
15	49	I	ST-1 南端崖面	叩石	4.2	3.3	2.3	45.2	砂岩	階門形の砂岩小鏃。側縁にわずかに敲打痕が認められるが明確ではない。
15	50	I	ST-1	叩石	4.3	3.7	2.2	46.9	砂岩	側縁にわずかに敲打痕が認められる。
22	69	I	SX-3・ 口智	石包丁	(3.4)	(3.9)	0.6	8.6	結晶片岩	小破片であり全体形は不明。打製石包丁。
23	80	I	SX-4	石包丁	(3.7)	4.8	0.6	(15.6)	泥質片岩	全面を研摩して仕上げる。片刃の磨製石包丁。穿孔されるが、穿孔部で折損している。刃部は直線的。背面は研摩され面をなす。
24	85	I	SX-7	石包丁	(3.9)	5.0	0.5	(13.2)	結晶片岩	打製石包丁。刃部は平行で直線的。折損しており、残存部は三分の程度と推定される。
29	114	I・C-8	検出面	スクレイパー	4.5	6.3	0.8	16.6	サヌカイト	平行四辺形状の剥片の隣り合う2側縁に刃部を作出する。
29	115	I	不明	石包丁	7.4	4.0	0.5	25.0	結晶片岩	台林の産地は吉野川水系と想定。直線的な両刃の刃部を持つ石包丁。打製石包丁であり、剥離によって刃部を形成する。表裏面は自然面。
29	116	I	TR-8	石包丁	(5.6)	3.2	0.7	(17.0)	泥質片岩	刃部は外湾し、擦痕が観察される。穿孔部で折損しており、孔数は不明。
29	117	I	検出面	磨製石斧	(7.3)	5.5	2.6	(198)	緑色片岩	磨製石斧の基部で刃部折損。表裏面ともに研摩痕。
29	118	I	TR-5	叩石	9.0	(5.0)	2.6	(152)	砂岩	中央で折損。側縁と表面に敲打痕あり。
29	119	I・F-3	検出時	叩石	11.1	7.9	2.9	387.8	砂岩	側縁、表裏面ともに敲打痕あり。
29	120	I	検出時 No.2	叩石	(6.7)	5.6	3.0	(170)	砂岩	中央で折損。端部、両側縁、表裏面ともに敲打痕あり。

第2節 II区の結果

1. II区調査の概要

遺跡西端の標高55～58mの尾根先端頂部周辺をII区として設定する。試掘調査時のTR-1～4の4ヶ所のトレンチの調査により、南東側の先端部に2条の石列が検出された。調査当初は調査前地形の測量結果(Fig. 37—中央部がマウンド状に若干盛り上がっているという地形形状の特徴を持つ)と、検出された土器が弥生後期末であったことから、古墳出現前夜の墳丘を有する墓域の墳丘末端を画する石列の可能性を考えて調査を進めていた。尾根の伸びる中軸方向に即してグリッドを設定(Fig. 38)、東西方向A～F、南北方向1～10の4mグリッドに沿って、バンクを残しながら頂部及び斜面の上層を確認しながら調査を進めていった。ところが、試掘調査同様、南東側の尾根先端部を除けば石列は何処にも検出されず、マウンドの形成も確認できなかった。グリッド杭C6を中心とする十字バンク(Cライン・6ライン)を残して検出作業を進めた結果、4ヶ所の長方形の遺構が検出され、当初墳丘末端を画すると考えていた石列は土坑の四周を画するものだということが明らかになった。

土層堆積状況からも墳丘あるいは墳丘の痕跡は確認できなかった。バンクを除去して遺構の検出作業を進めた結果、上面に礫を伴う長方形の遺構が3ヶ所、上面礫を伴わない遺構が3ヶ所、土器埋納遺構が1ヶ所、25～70cmの小円形遺構が7ヶ所検出され、また南東側斜面には礫が崩落したブロックが数カ所確認された。遺構は地山岩盤あるいは基盤層の礫混粘土を掘り込んで形成されている。これらの遺構は6基の土坑墓と1基の土器棺墓、7基のピット状遺構である。ピットの中には深さ1m近くのものもあるが、ピット相互の関連やどのような機能を有したピットだったのかは明らかではない。土坑墓と土器棺墓は、その主軸方向から2群に分けられる。墓群の数が少ないこと、遺構間の切合いがないこと、検出された土器型式(南四国弥生後期末・ヒビノキⅡ式)が一型式であることから、これらの遺構は比較的短期間に形成されたものと推定される。

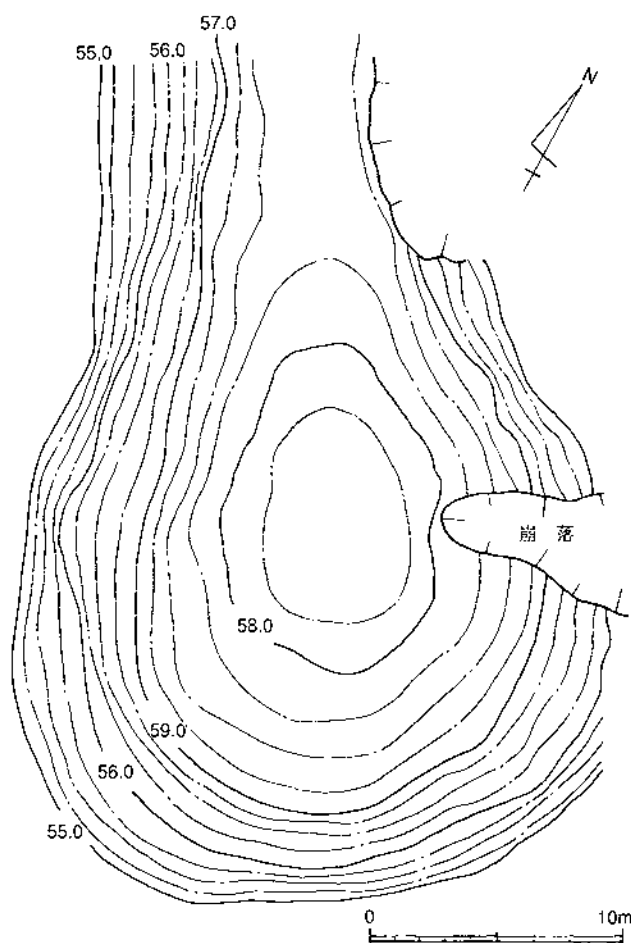


Fig. 37 奥谷南遺跡 II区 調査前地形 (S=1/300)
—25cm等高線—

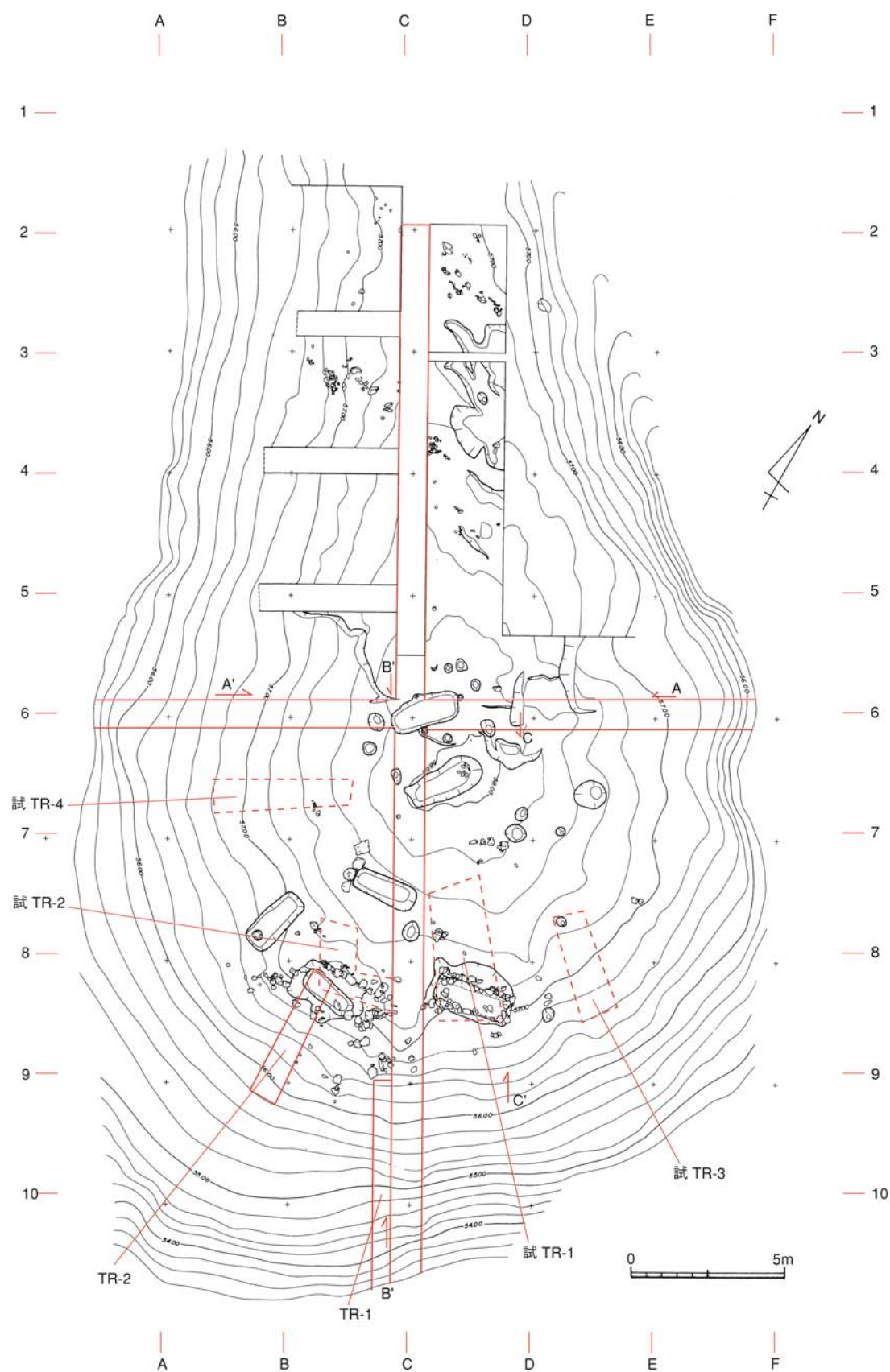


Fig. 38 II区 トレンチ及びグリッド (S=1/200)

礫の集中する土坑が何カ所も認められたことで、高知平野では類例のない遺構の重要性を考え、出土礫については全て10分の1スケールで実測の上、後世の遺構復元も視野に入れ、検出された礫を持ち帰り検討を加えるという調査方法を採用した。当初はすべての出土礫を持ち帰る方向で調査を進めていたのだが、調査の過程で実測はしたものの持ち帰ることのできなかった礫も若干ある。提示した検出礫のデータは、これらの礫を除外したデータではある。出土礫により各土坑の傾向と石質別の礫利用の在り方を読み取ることができる。

Ⅱ区においては、進入路を確保できないという理由で、重機等の機械力に頼ることができず、全て人力による調査となった。この地点は高知県屈指の自然林が残されていた場所で、尾根上には伐採後の巨木の株が散在し、その根は岩石を抱き抱えるように地山岩盤に入り込んでいた。如何にして遺構を破壊せず木株を取り除くのが調査開始時の課題であり、調査は樹木の巨根との闘いでもあった。調査員の無理難題に対して、各作業員が経験と知恵を結集し、無事この課題を克服することができた。作業員諸氏に感謝したい。



2. 基本層序

遺構の形成される標高57～58mの頂部付近の傾斜は緩やかで、急なところでも5～7°概ね5°未満の若干の盛り上がりがある程度の平坦に近い地形である。頂部に続く斜面は24～25°の傾斜から30°前後の急斜面へとつながり、尾根の東西の斜面の急な地点では40°に達する急坂が比高差30～35mの谷部地形変換点まで続いている。また、南東側尾根先端部では30°の斜面が標高45m付近の地形変換点まで続き、その先には平坦な尾根が続いている。ここは調査区外であり、墓地として利用されている。

Ⅱ区には表土の薄い堆積が見られ、地点によっては流出して失われているところもある。

尾根長軸方向はA-A'の1方向、長軸に直行する方向はB-B'、C-C'の2方向のセクションを示した。Ⅰ層が表土である暗褐色腐食土層、Ⅱ層が黄褐色礫混粘土層であり、頂部周辺で地山岩盤状に堆積しているのはこの2層だけである。Ⅰ・Ⅱ層併せても岩盤上15～30cm前後の薄さの堆積を示す地点が多く、厚いところでも40～50cmまでの厚さであった。岩盤は明黄褐色の風化泥岩の岩体で、遺構埋土は明黄褐色礫混粘土、地山と同組成の小礫を多く含んでいる。遺構や周辺から検出された礫の石質は砂岩・石灰岩・チャートで遺構埋土に含有される小礫・細礫とは異なっている。

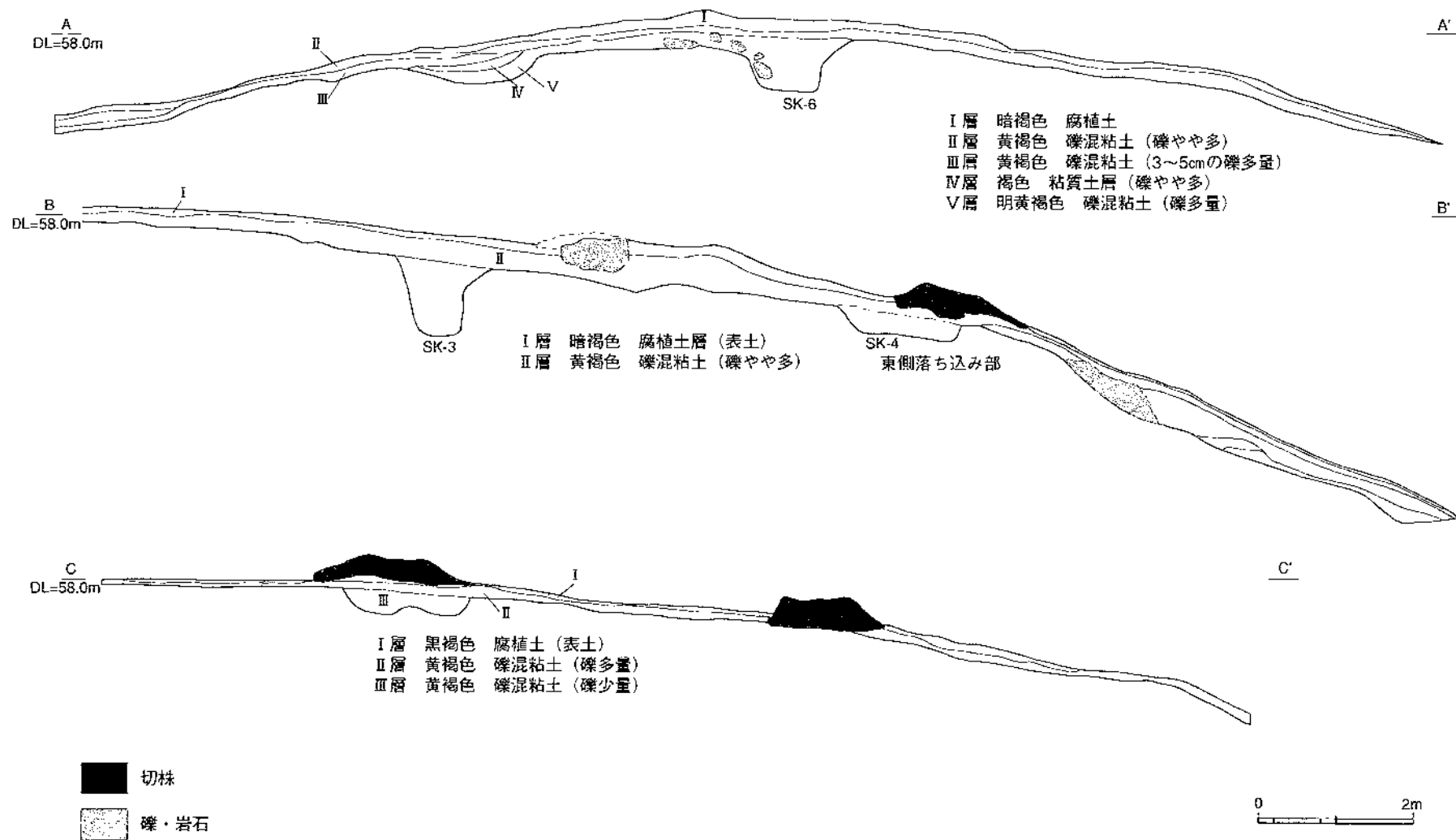


Fig. 39 II区 基本層序(S=1/80)

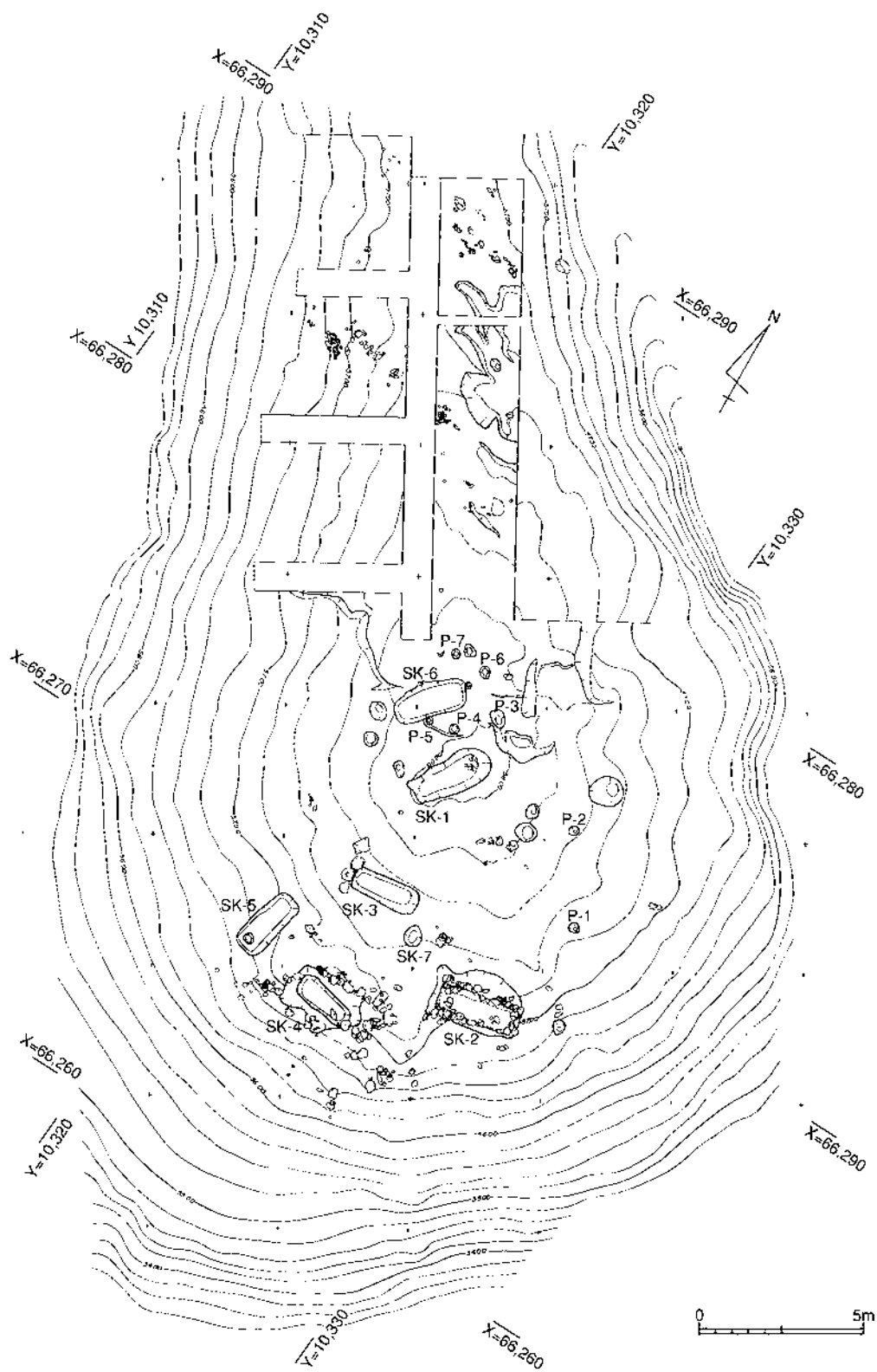


Fig. 40 II区 遺構平面全体図 (S=1/200)

3. 遺構と遺物

(1) 弥生時代の遺構と遺物

遺構名については、混乱を避けるため調査時の名称をそのまま使用した。土坑墓群については、調査終了後の検討により1群・2群の二つのグループに分けて整理作業を進めたため、遺構の提示は遺構番号の順ではなく、このグループに従って1群→2群の順で行う。

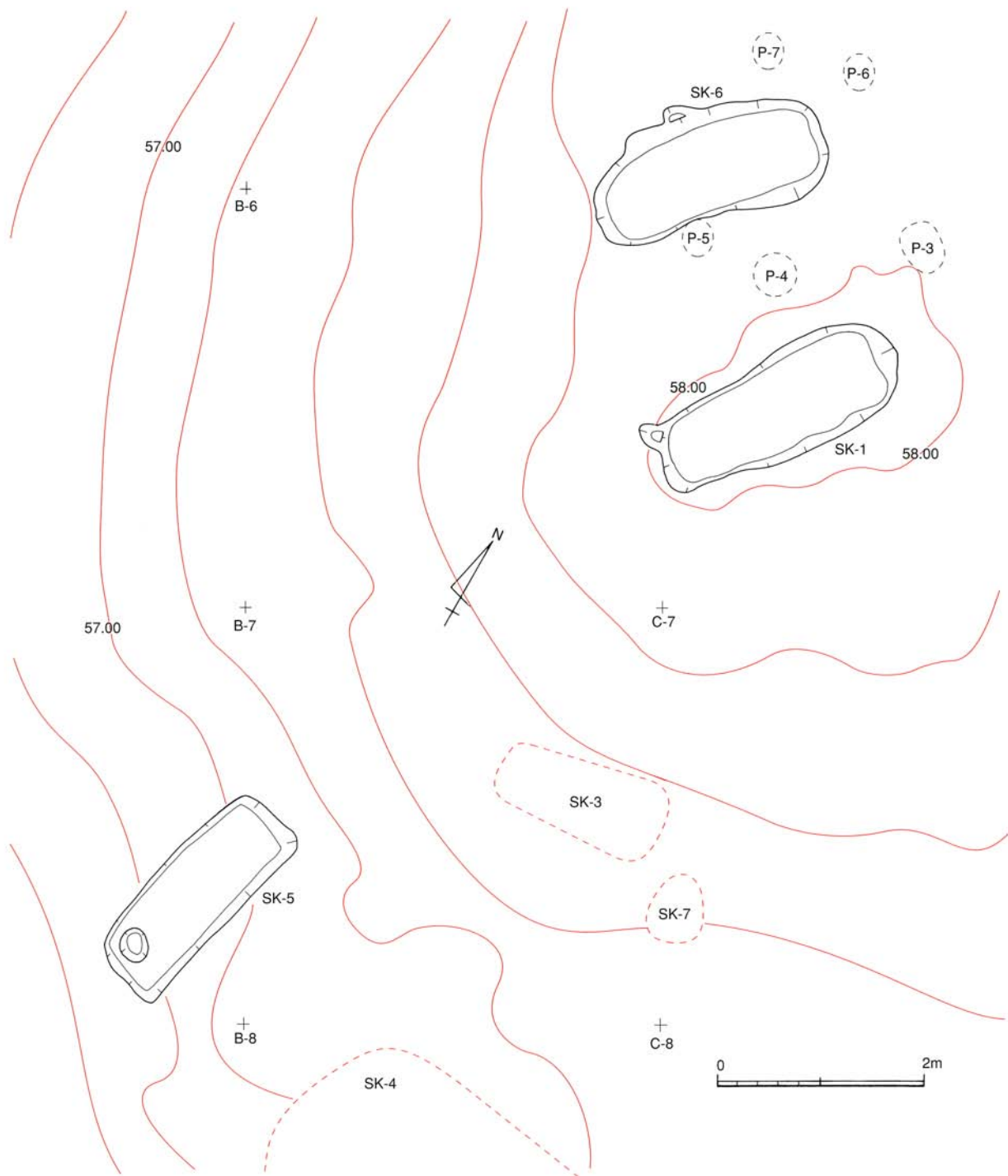


Fig. 41 1群遺構配置図 (S=1/60)

A. 第1群 長軸が南北方向(N-16°-E~N-40°-E)を向いている一群(Fig. 41)

SK-1(土坑墓1)、SK-6(土坑墓2)、SK-5(土坑墓3)

SK-1(土坑墓1-Fig. 42)

標高58mの尾根頂部付近に形成された遺構で、SK-6と軸方向、規模をほぼそろえて形成される。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸254cm、短軸78~100cm、深さは46~52cm。北東側に向かうにつれて幅が広がり、北東側3分の1程の地点から床面が若干高くなっていることから、北東が頭位方向だと推定される。また、北東隅には床面に張りついた形で5~20cm大の砂岩角礫が散在している。礫重量は1kg未満の小型の礫が主で、最大のもので1.2kg程度である。

主軸方位はN-37°-Eである。埋土は明黄褐色礫混粘土であり、径1~2cmの小礫を含むものの含有量は少ない。

弥生土器の小破片が遺構検出時に確認されているが、埋土中からは砂岩礫以外に時期を示す遺物は出土していない。

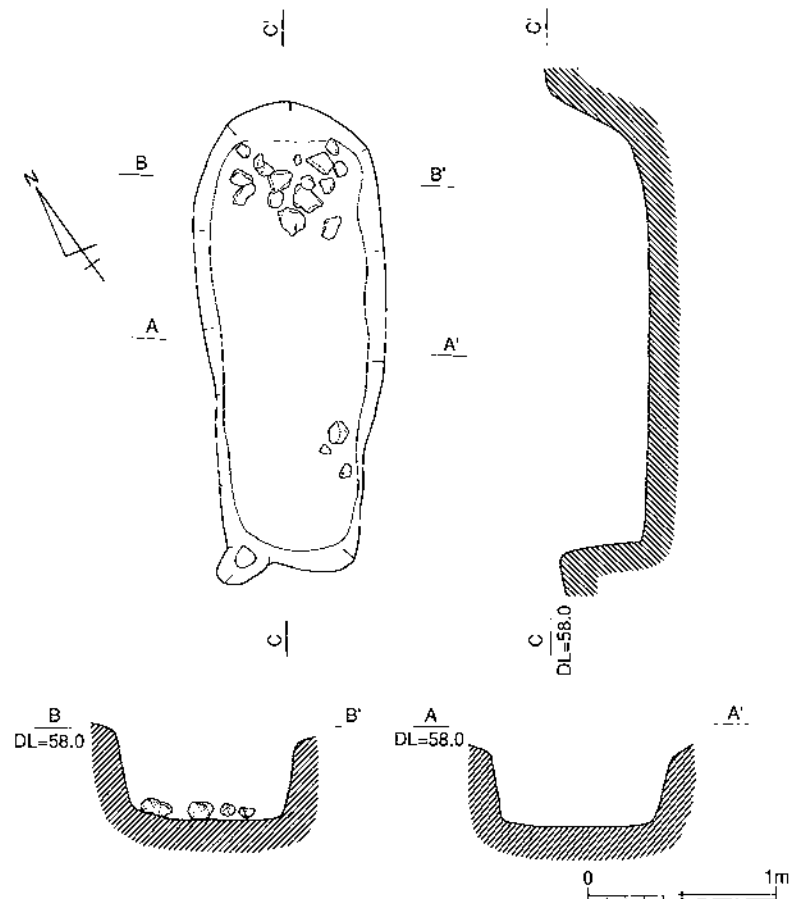


Fig. 42 SK-1 遺構平面・エレベーション図 (S=1/40)

SK-6(土坑墓2-Fig. 43)

SK-1の南東側1.5mはなれた場所に位置する。SK-1・SK-6の2基はⅡ区の尾根最頂部に軸方向、規模をほぼそろえて形成される。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸230cm、短軸102cm、深さは44~56cmである。土坑内からは最大のもので径30cm程度の礫が検出されている。礫は大部分が砂岩であり、それ以外にチャート礫が検出されているものの合計2点と例外的である。重量から出土礫をみると1~10kgの範囲に全体の約85%が含まれる。この大きさがSK-6から検出される礫の中心で、1kg未満の小型礫や20kg以上に達する礫は含まれていない。礫は土坑中央部からも検出されているが、集中していた

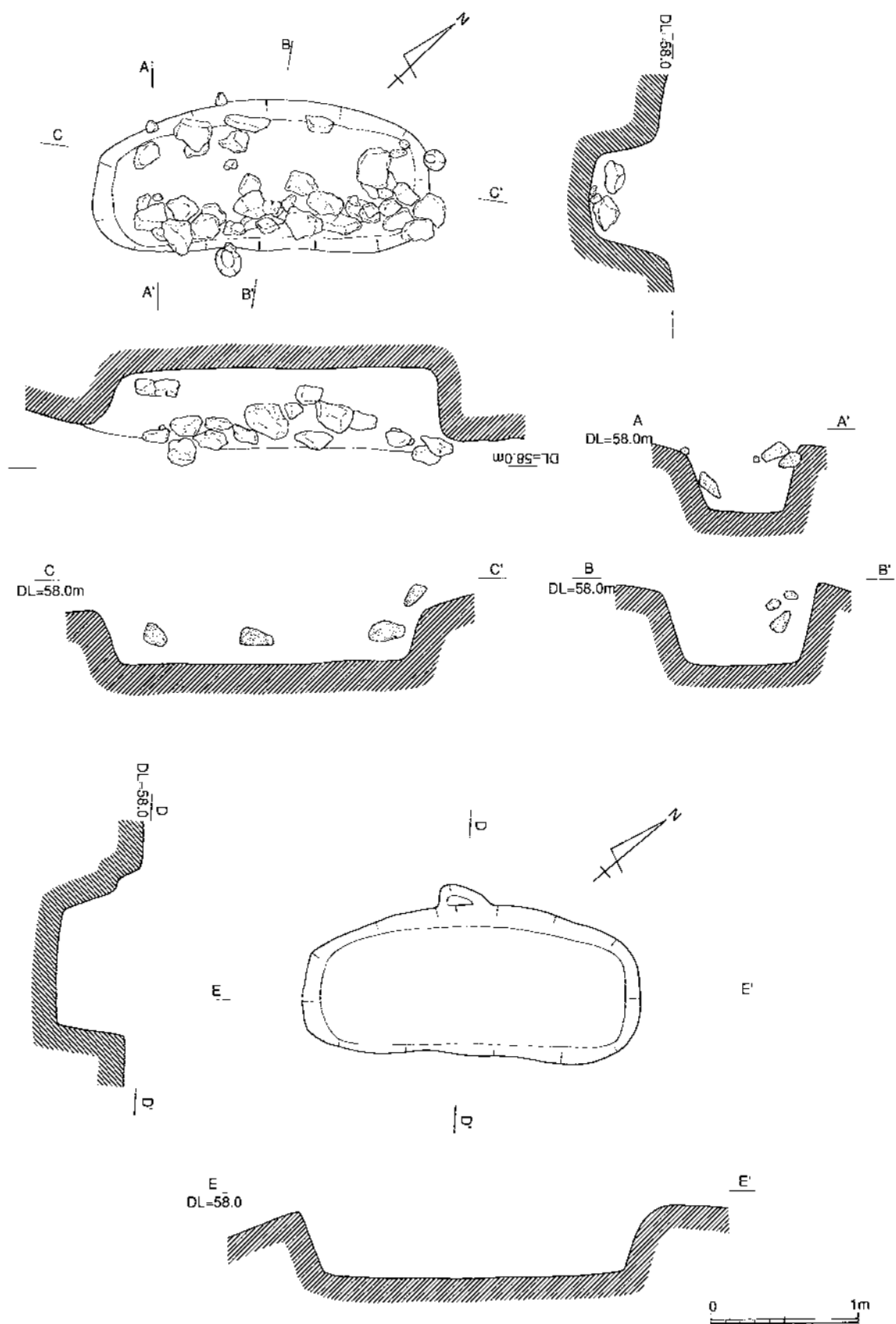


Fig. 43 SK-6 礫出土状況・東南側面・完掘状況平面・エレベーション図 (S=1/40)

のは南東側壁面と北東側壁面であり、南東・北東側と較べるとやや少ないものの北西側壁面からもまとまって確認された。埋葬後の陥入によって、中央部へ崩れ落ちた礫があるものの、地山を掘り込んで墓壇を構築した後、木棺と推定される棺と墓壇との空隙へ礫を投入したものと考えられる。主軸方向はN-40°Eである。埋土は明黄褐色礫混粘土で、径1～2cmの小礫を含んでいる。

砂岩礫以外の出土遺物は確認できなかった。

SK-5 (土坑墓3-Fig. 44)

尾根南側の頂部から斜面への変換点付近、標高57.6～57.2mの10°前後の傾斜を持つ地点に形成される。

平面形は長方形を呈し、長軸216cm、短軸82cm、深さは最大で50cmである。北側埋土上層に直径40cmの砂岩礫と10～16cmの小角礫(チャート・砂岩・石灰)が10個ほど含まれる。直径40cmの砂岩礫は立方体状の角礫で、遺構北西端の遺構上面で検出され遺構埋土内への埋没が認められた。(Fig. 44)南側床面には平面形34×26cmの楕円形で、深さ14cmの落込みが検出された。主軸方向はN 16°-Eである。埋土は、明黄褐色礫混粘土層でSK 1・SK-6と同じ埋土である。

遺構の北端で、弥生後期末に属するタタキ目を持つ土器の小片が10点あまり確認されている。図示可能遺物は出土していない。

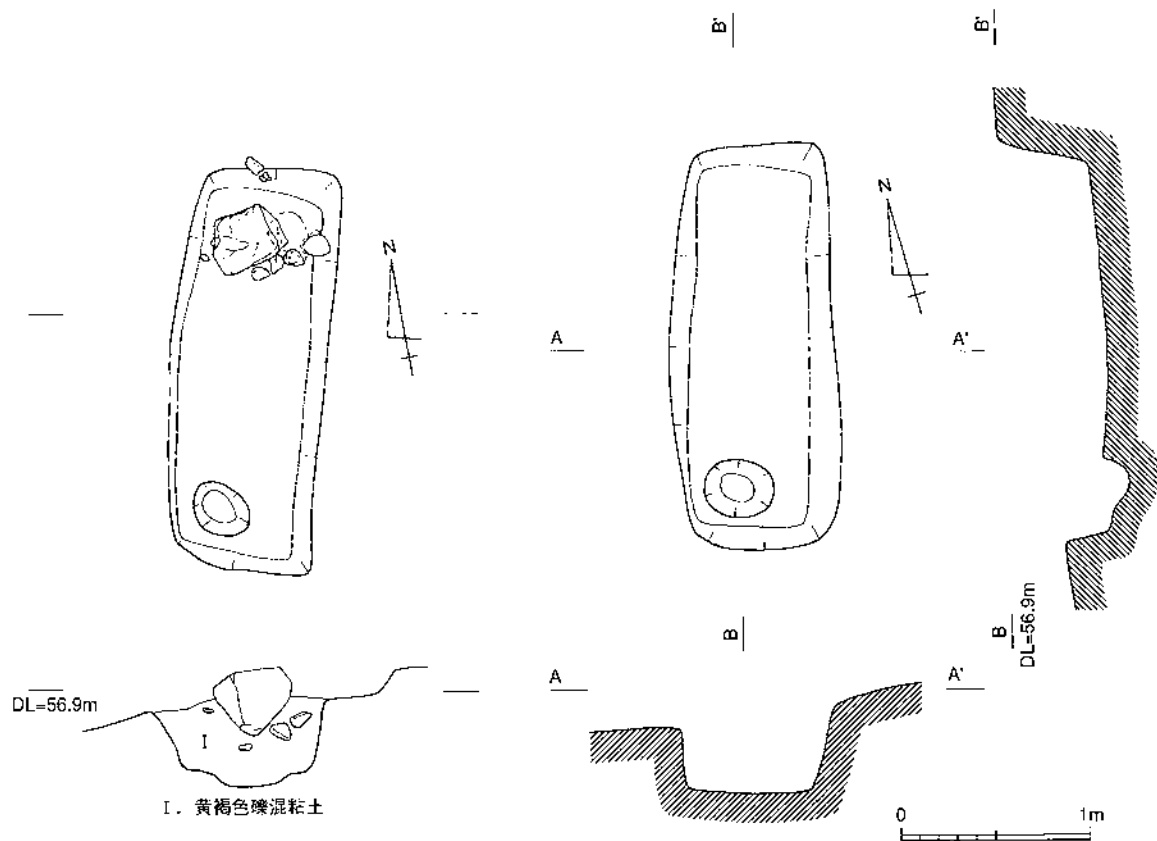


Fig. 44 SK-5 礫出土状況及び完掘状況平面・セクション及びエレベーション図 (S=1/40)

B. 第2群 長軸方向が東西方向を向いている一群 (Fig. 45)

SK-2 (土坑墓4)・SK-3 (土坑墓5)・SK-4 (土坑墓6)・SK-7 (土器棺墓1)

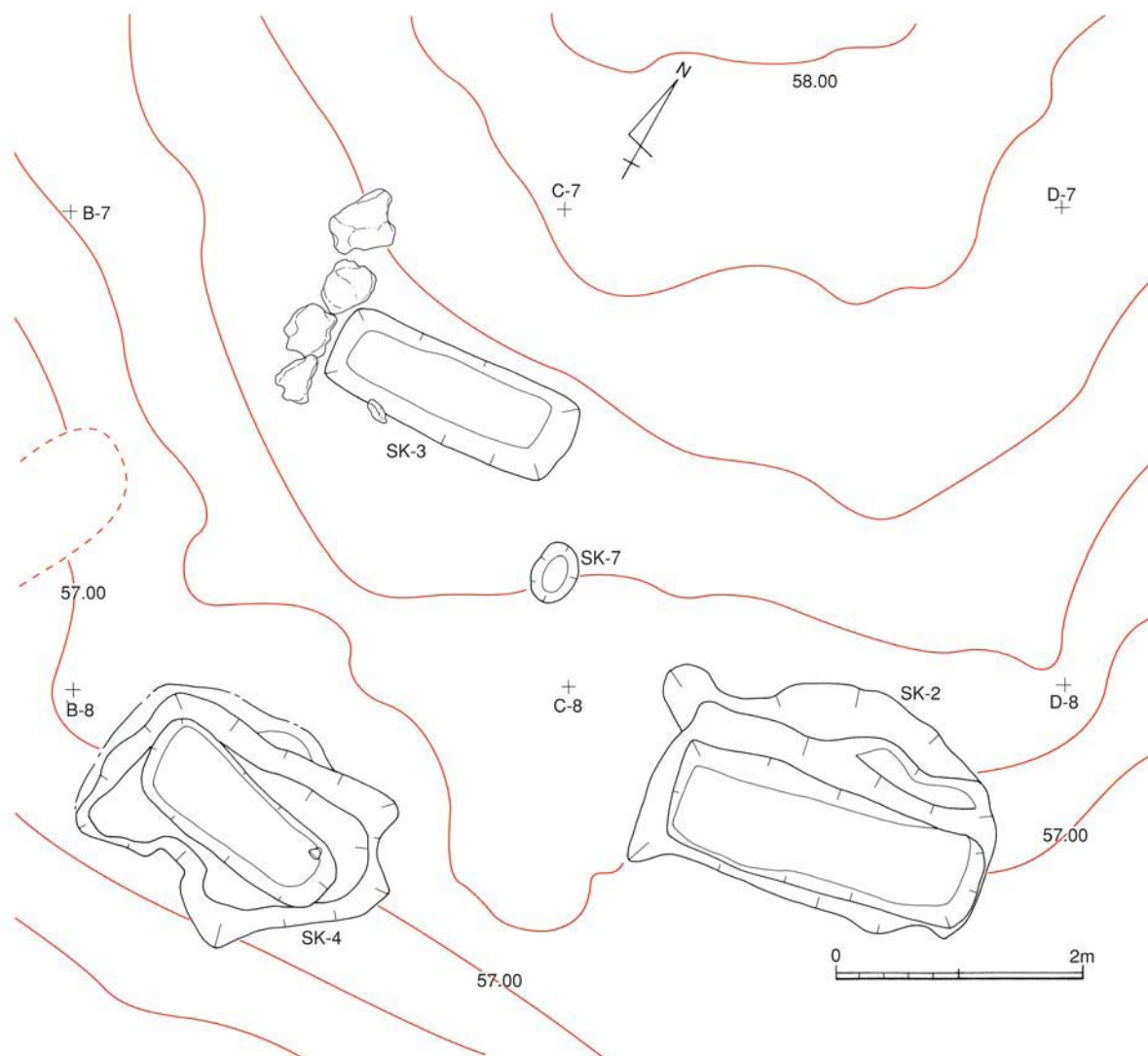


Fig. 45 2群遺構配置図 (S=1/60)

SK-2 (土坑墓4 -Fig. 46・47)

遺構形成地点は標高57m付近で、南北方向に若干の傾斜が認められる。尾根先端部でSK-2よりもさらに南側の斜面は傾斜が急になる変換点に位置する。

墓壙の平面形は長方形で長軸260cm、短軸80～88cm、墓壙上面からの深さは60cmである。墓壙の北側は墓壙を形成するために削られて、地山の傾斜よりも緩やかな傾斜をなし、部分的に幅12～20cmほどの傾斜面を持つ小段が形成される地点もある。

主軸方向はN-80°-Eの東西方向である。

試掘調査から本調査の当初の段階では、検出された礫列を墳丘末端を画する石列と考えていたの

だが、調査を進める中で土坑の四周を構成する礫であることが明らかになった。1～2群の土坑墓群中、最も礫が集中した土坑墓であり、土坑の四周から組み合わせられたかのような状態で礫が検出され、中央からは礫が平面的に集中して検出されている。これらの中央部から検出された礫は、遺構形成時には上面を覆っていた礫で陥没した状況で検出されたと推定される。数cm大の小礫から45kgに達する礫まで、測量して取り上げた礫の総数は178点にのぼる。SK-2から検出された礫の中1～10kgの階層の礫が60%（個数%）を占め、主体をなす。礫の石質の違いにより、出土礫個数から比較すると砂岩礫が主体で73.7%、それに続くのがチャート礫の22.1%、石灰石は4.2%と少

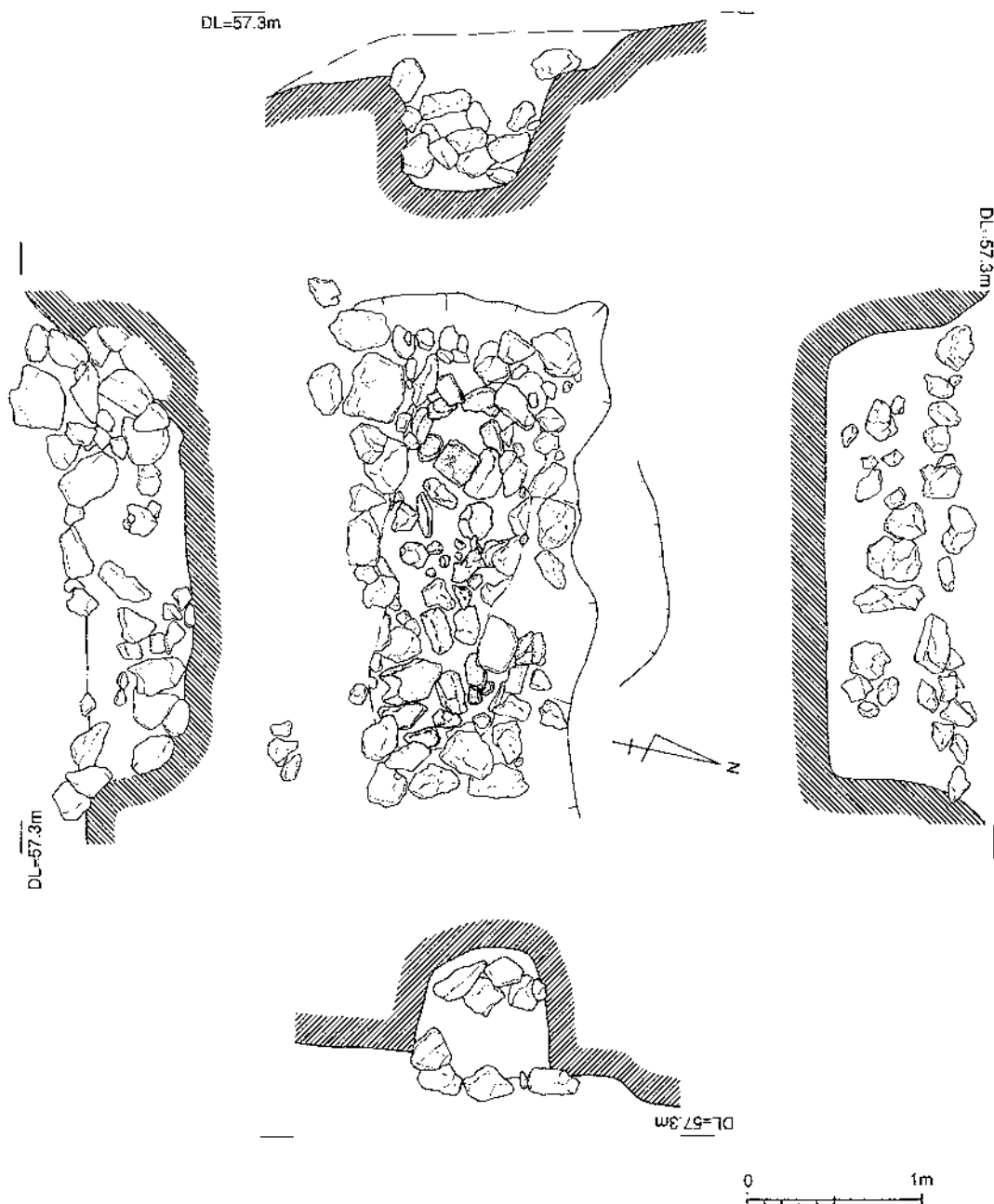


Fig. 46 SK-2 礫出土状況及び側面図 (S=1/40)

量である。

これらの礫の検出地点も興味深い。墓壙内においては大半が砂岩であり、チャートは陥入した礫に認められるものの多くは遺構上面から検出されている。石灰石が検出されたのは遺構上面においてのみである。石材が選択的に使用されていたことが礫出土状況から予想される。

遺構埋土はⅠ～Ⅲ層ともに明黄褐色礫混粘土であり、構成する礫量の違いによって分層されるに過ぎない。Ⅰ層は小礫を含有する量が少なく、それに比べⅡ層は若干含有量が多くなっている。Ⅲ層は数cm大の礫が認められるものの小礫はほとんど含まない。

出土遺物として弥生土器が挙げられるが、図示し得る遺物は認められなかった。遺構埋土を乾燥させふるいにかけて遺物の検出に努めたが、弥生土器以外に遺物は検出されず副葬品は皆無である。

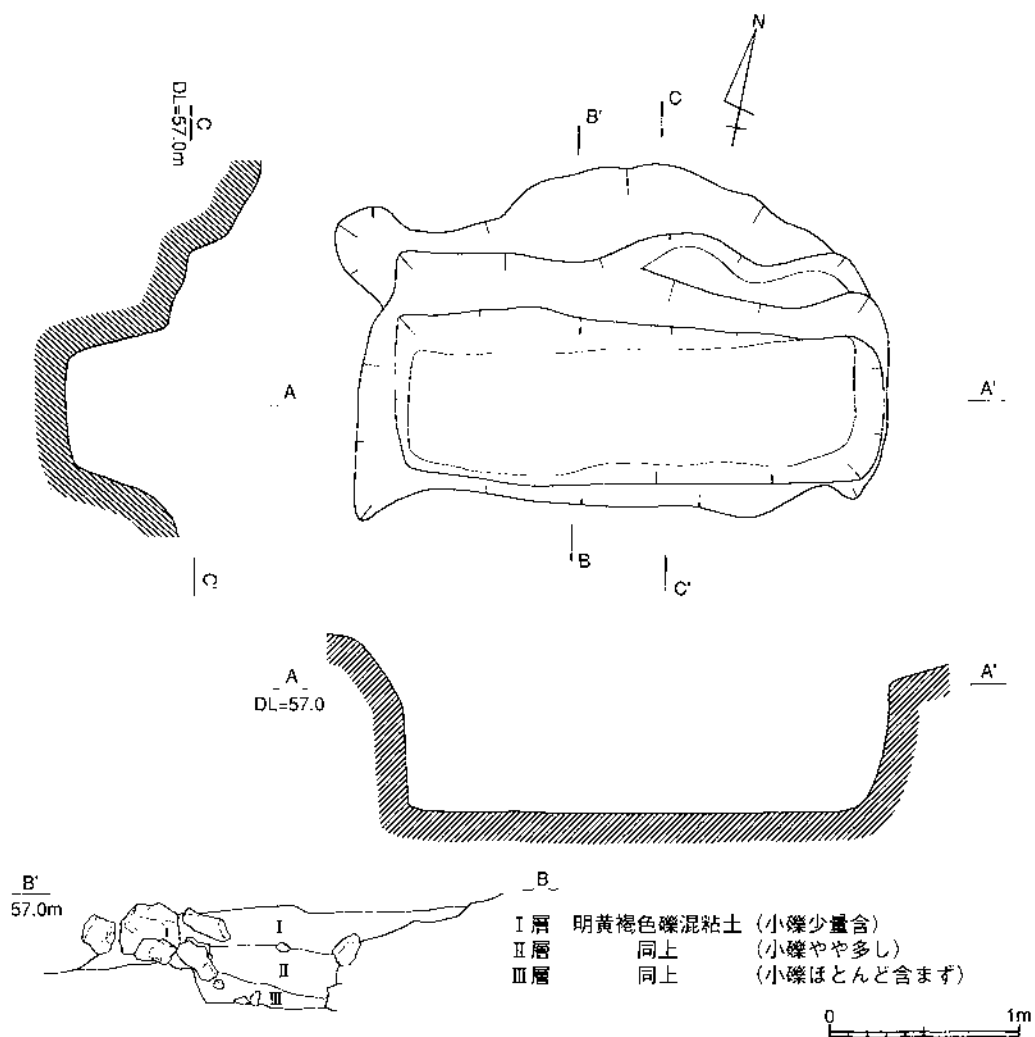


Fig. 47 SK-2 完掘状況平面・セクション及びエレベーション図 (S=1/40)

SK-3 (土坑墓5-Fig.48)

遺構形成地点は57.5～57.6mの尾根頂部先端で、北から南に向かってわずかな傾斜は認められるもののほぼ平坦な地点に構築されている。

平面形は長方形で、長軸210cm、短軸68～80cm、深さは最大で68cmである。土坑検出面の西側からは4個の石灰岩・チャート礫が検出された。礫は長さ40～65cm、厚さ12～25cm、重量は最大のもので56kgに達し、土坑長軸方向に直行する方向に整然と並べられている。南から北に向かって、石灰1点・チャート3点の順で、15・31.5・40・56kgと徐々に大きくなっている。礫列の東側には10～20cm大の石灰石の礫が点在している。

墓坑の主軸方向はN-84°-Eである。これに対し4便の礫が並ぶ方向はN-6°-Eとほぼ直行している。埋土は明黄褐色礫混粘土であり、小礫の含有量は少ない。遺構内からは1kg未満の小型の礫が数点確認されたのみで、SK-2・SK-6のような1～10kgを中心とした大きさの砂岩礫の墓坑内への溜入は認められなかった。

出土遺物は弥生土器の小片が20点ほどであり、図示可能遺物はFig.53 142である。142は甕あるいは鉢の底部で、直径3.8cmほどの平底の部分を残す。全体形は不明である。磨耗顕著だが、外面底面付近にタタキ目が見られる。弥生後期末末に属する遺物（ヒビノキⅡ式土器）である。

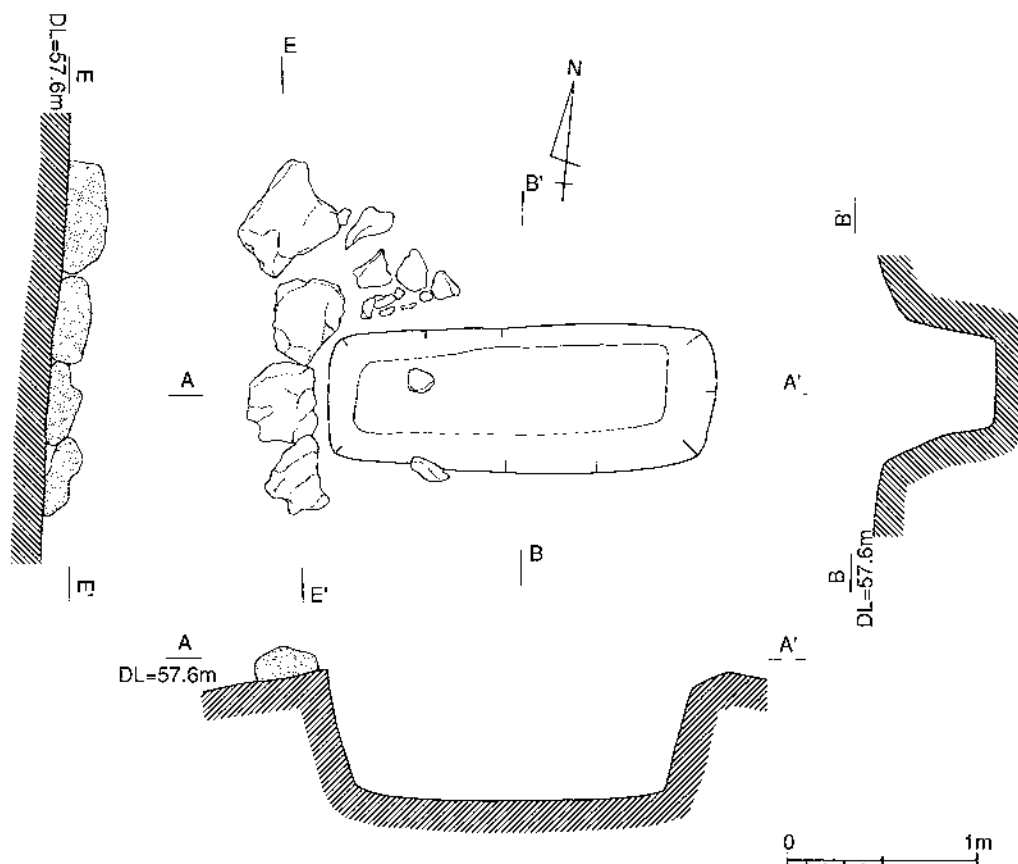


Fig. 48 SK-3 完掘状況平面・エレベーション図及び礫検出状況 (S=1/40)

SK-4 (上坑墓6-Fig. 49・50)

遺構形成地点は標高57m付近で、SK-2とはほぼ同レベルである。尾根南側の傾斜変換点付近にあり、遺構上面に検出された東西方向の礫の方向は、N 85° EとSK-2・SK-3の主軸方向とはほぼ同一方向を示す。

SK-2同様試掘調査時に石列を検出し、当初は墳丘末端構成礫として扱っていたのだが、これらの礫は、土坑上面に整然と列状に並べられた石列であることが判明した。石列の覆土は、調査区全体の表上下から検出される黄褐色礫混粘土(Ⅱ層)で、墳丘等の痕跡は確認できなかった。石列は、東西方向2列(N-85°-E)と南北方向2列(N-21°-E)の石列が遺構検出面の四周を囲むように並べられている。西側と南側の列には礫の欠落した部分も認められ、近接する斜面にはブロック状にまとまった礫が検出された。西と南の石列構成礫が斜面下方に崩落したものと考えられる。石列は地点によっては2～4段に積み重ねられて構築されている。上面検出石列構成礫も含めたSK-4出土礫では全体の60%近くが石灰石で占められており、他の土坑と比較しても突出している。石列を構成する石灰石の中には、自然の営為により中央に穴が空いた形のものなど明らかに特異な形状を示す礫も多く、特別な形の礫を選択してこの丘陵状に運び込んだ明確な意図が読み取れる。

遺構(墓壙)は2段に成形される。上面は長軸260cm、短軸170cm、東側に80cm・140cmの2辺を持つ不整五角形の平面形で、36～50cm程掘り下げた地点に幅20～36cmの傾斜面を成す段を形成する。下段の墓壙の平面形は隅丸長方形で、長軸188cm、短軸60～72cm、検出面からの深さ92～96cm、段部からの深さ40～60cmである。

上面の不整五角形の土坑は石列に規定された方向で、ほぼ東西方向N-89°-Wを示す。これに対して下段の長方形の土坑はN-81°-Wと東西方向ではあるが石列の方向とはわずかに異なっている。

遺構埋土はFig. 49に示したとおりである。Ⅰ層が明黄褐色礫混粘土、Ⅱ～Ⅳ層が黄褐色礫混粘土、Ⅴ層が明黄褐色礫混粘土で、含有礫・植物など若干の色調の違い等により分層可能な層である。墓壙が形成される基盤層は黄褐色粘土層であり層中にわずかに小礫を含んでいる。

出土遺物は後期末に属する弥生土器である。埋土をSK-2同様乾燥してふるいにかけてが、その他の副葬品は認められなかった。図示可能遺物はFig.53-141の壺で、口縁部は検出することができなかったが、底部から頸部まで復元することができた。磨耗が著しいものの、胴部全面にはタタキ目があり、内面には刷毛目と指頭圧痕が認められる。形態的にはわずかに平底を残し、最大径(39cm)が胴部中位の卵形である。弥生後期末(ヒビノキⅡ式土器)に属する。141の壺は、検出時には横位でN-72° Eの方向で出土し、上面約3分の1は失われていた。頸部上面から20×9cmの、胴部から8×8cmのいずれも砂岩の角礫が検出されている。意図的に土器を破壊した様な礫の出土状況と下層に墓壙となり得る土坑があることから、この土器(141)は供献用の土器だと考えられる。

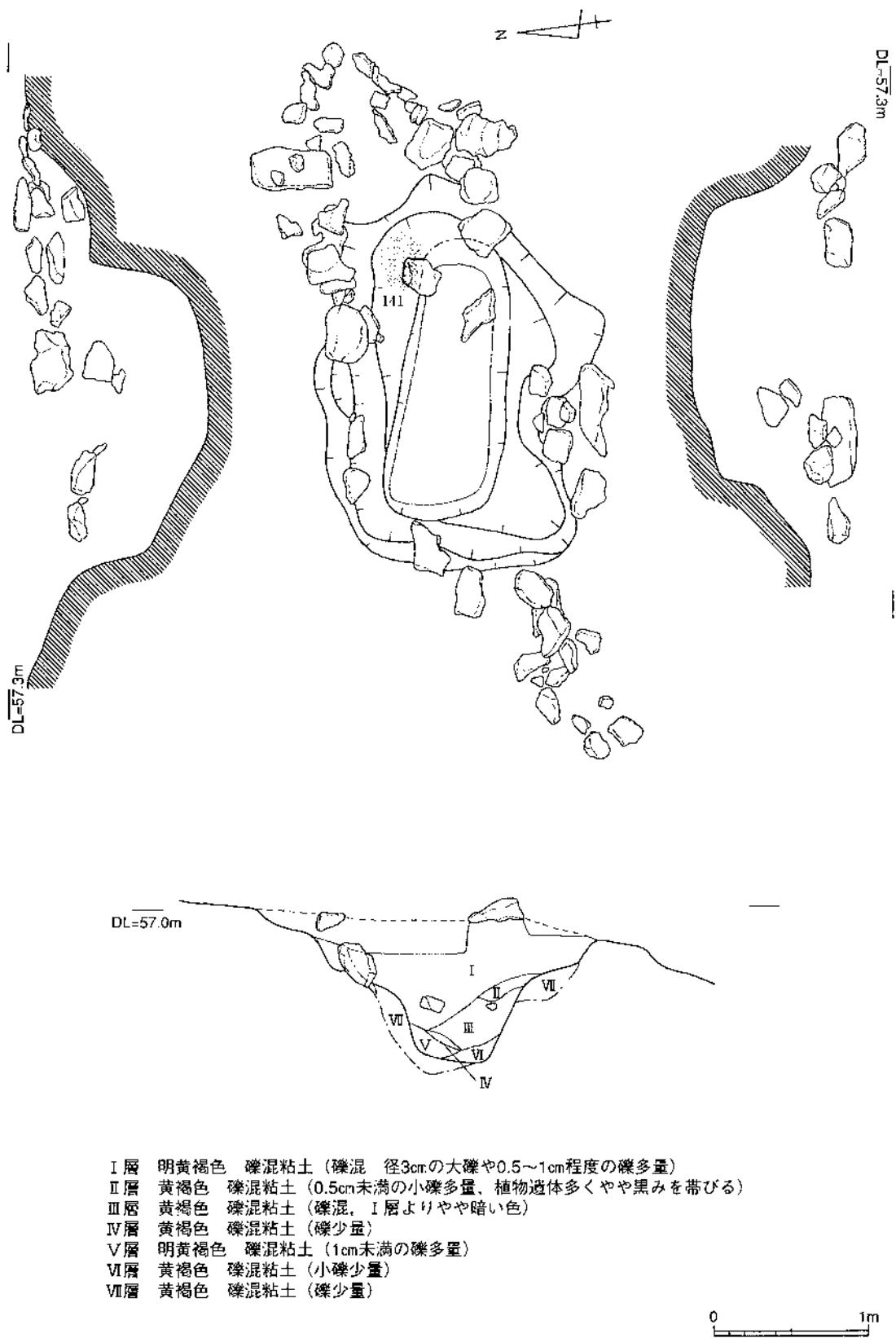


Fig. 49 SK-4 礫出土状況平面・セクション及びエレベーション図 (S=1/40)

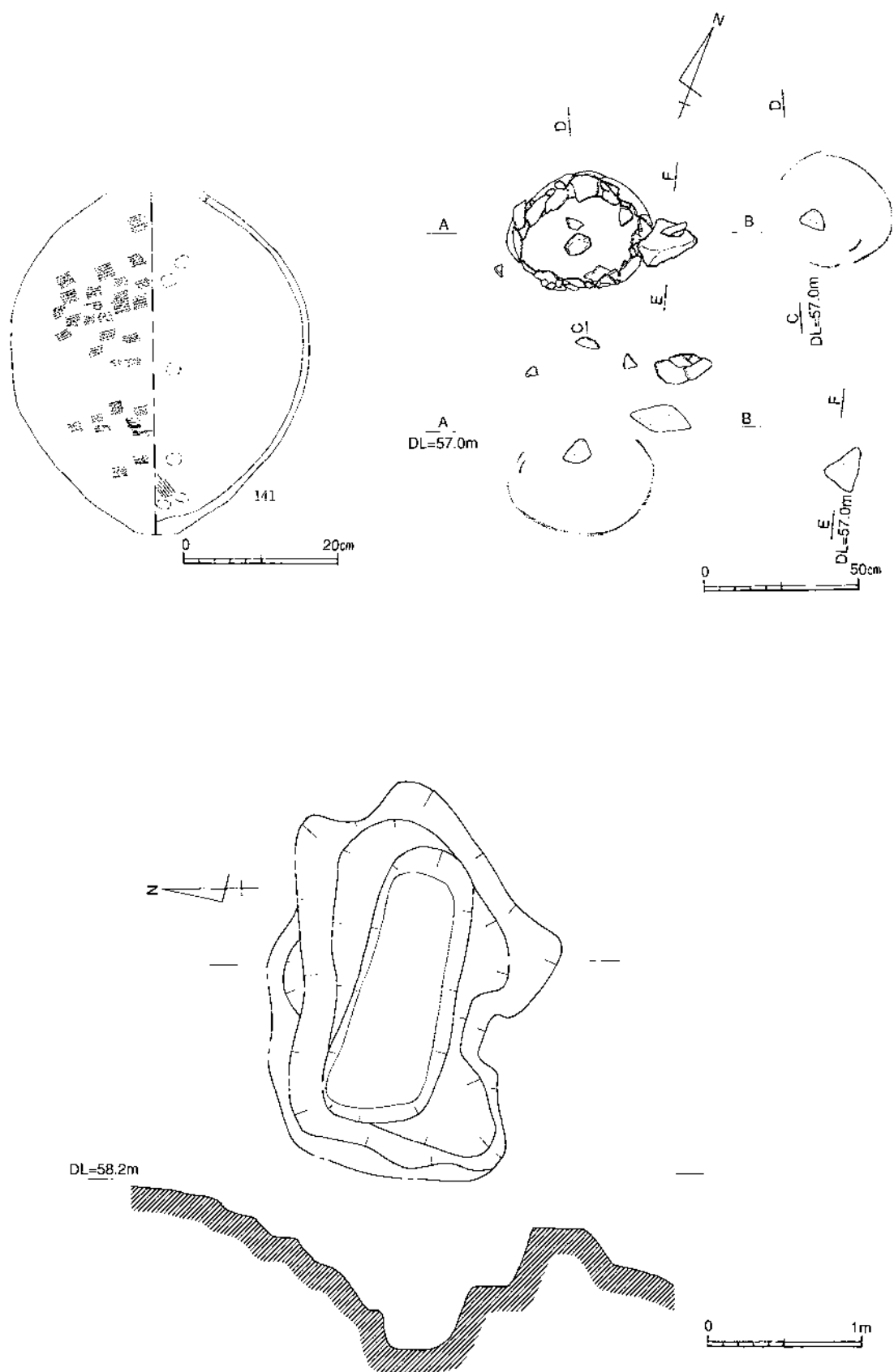


Fig. 50 SK-4 完掘状況平面・エレベーション図(S=1/40)及び遺物出土状況(S=1/20), 出土遺物(S=1/8)

SK-7 (土器棺墓 1 - Fig. 51)

SK-2・SK-3・SK-4の3つの土坑に囲まれた地点、Cラインのバンク除去後に検出された遺構で、土器棺の方向はN-4°-WとSK-2～4の主軸方向にはほぼ直行する方向(南北方向)になっている。標高57.2m付近に形成され、北から南へ若干の傾斜がある。

土坑の平面形は50×38cmの楕円形で、地山岩盤を掘り込んで形成されており、土器はこの土坑にへばり付くような状況で出土している。(Fig. 51)遺構が形成された地山は北から南へ約10°の傾斜を持っており、土器もこの傾斜に沿って口縁部を北に埋納されていた。地山より上面のバンク堆積土中にプランや層の違いは確認できず、土器自体はバンク中から検出できたものの土坑のプランは地山岩盤での検出となった。この土坑内においては礫は検出されていない。

出土した遺物の中で図示可能なものはFig. 53-139・140の壺と鉢である。139の壺は、口縁形状が不明だが頸部の内径12.6cm、底部から頸部までの高さ43.2cm、最大径(35.6cm)が胴部中位にあり卵形を呈している。磨滅して観察不能な部分もあるものの、ほぼ全面にタタキ目があり底部には刷毛目が観察される。底部はわずかに平底を残す。140の鉢も底部には平底を残し、磨耗顕著のため調整は不明瞭だが、外面にタタキ目、内面に指頭圧痕が観察される。139・140ともに弥生後期終末ヒビノキⅡ式土器の範疇で捉えられる特徴を持つ土器である。139が土器棺の棺身として利用され、140は蓋として利用された可能性が高いが、検出時に原位置を保っておらず、140が139の壺の中に落ち込んだ状態で出土している。

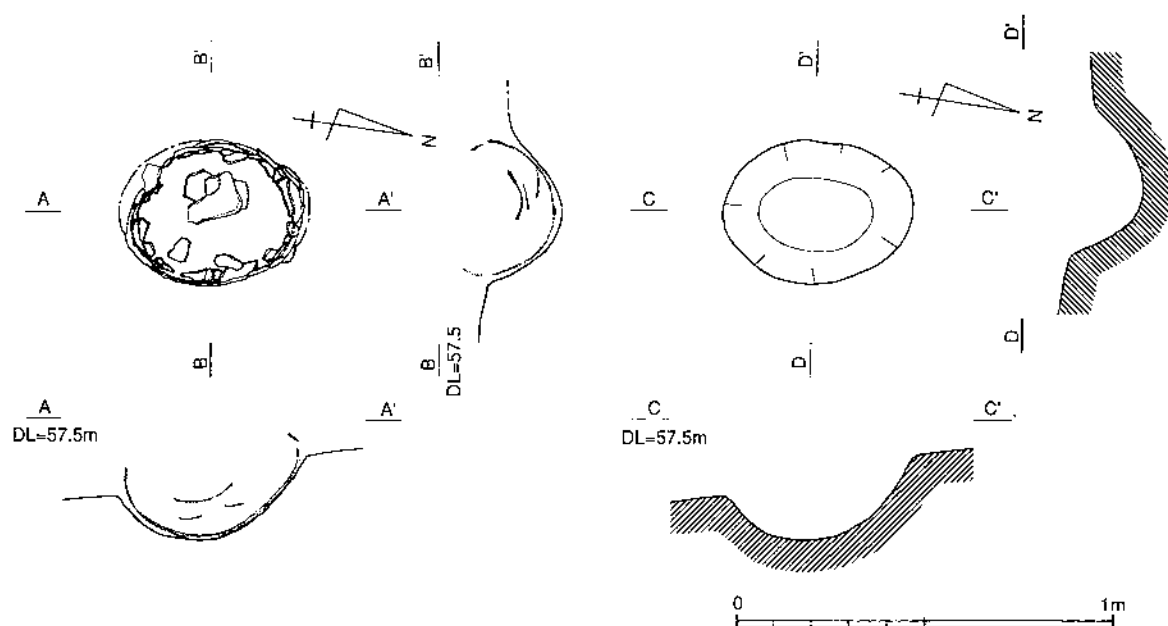


Fig. 51 SK-7 弥生土器出土状況・完掘状況平面及びエレベーション図 (S=1/20)

P-1～P-7 (Fig. 52)

Ⅱ区からは、ピット状の遺構が7基検出された。自然地形とみられる小規模な落込みもあったが、ここに取り上げたものは、人為的に形成されたことが明瞭なピットである。直径20cm前後、検出面からの深さ20cm程度の小規模なものから、P-3のような直径60～70cm、深さ1m近い規模を持つものまで確認されている。埋土はいずれも、明黄褐色礫混粘土であり、遺構検出時には周囲の地山とほとんど区別がつかない。

調査区内におけるピットの位置はFig. 40のとおりである。どのような目的で形成されたピットなのか明らかではない。周辺の遺構出土遺物が弥生時代後期終末に限定されるため、同時期の遺構として扱ったが、他時期のピットが含まれる可能性もある。

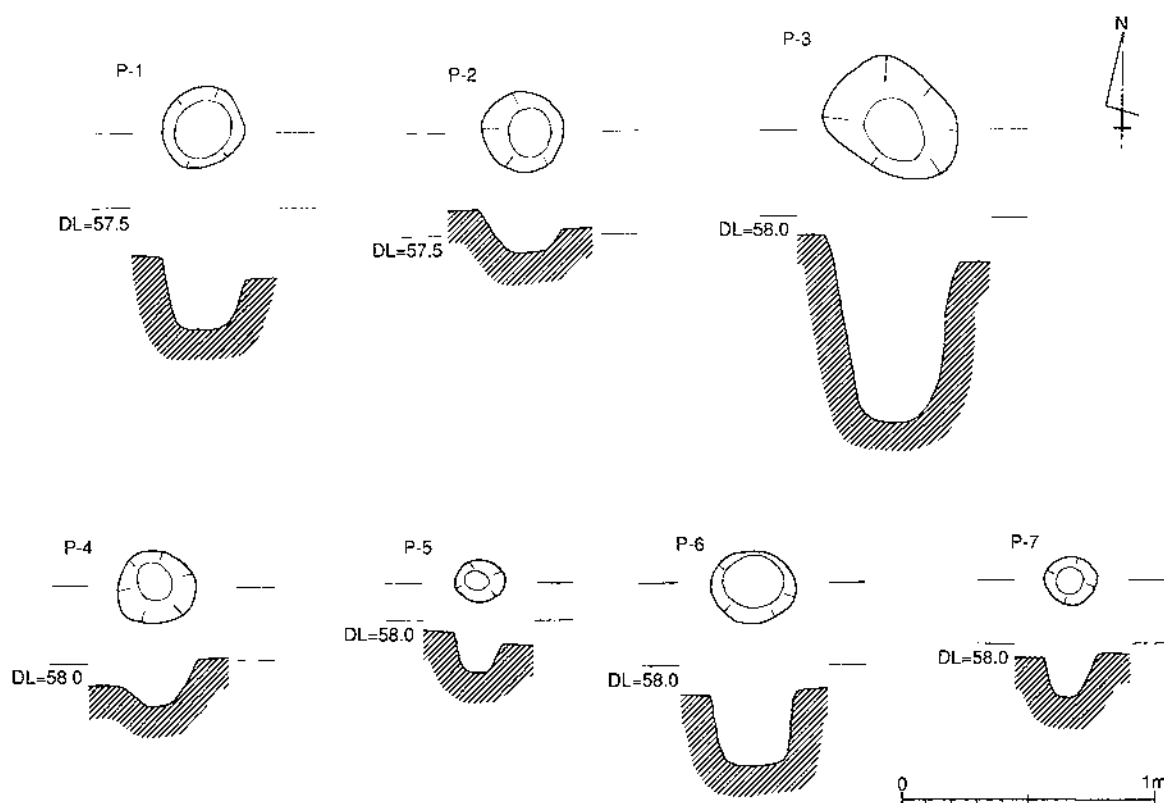


Fig. 52 P-1～7 平面及びエレベーション図 (S=1/30)

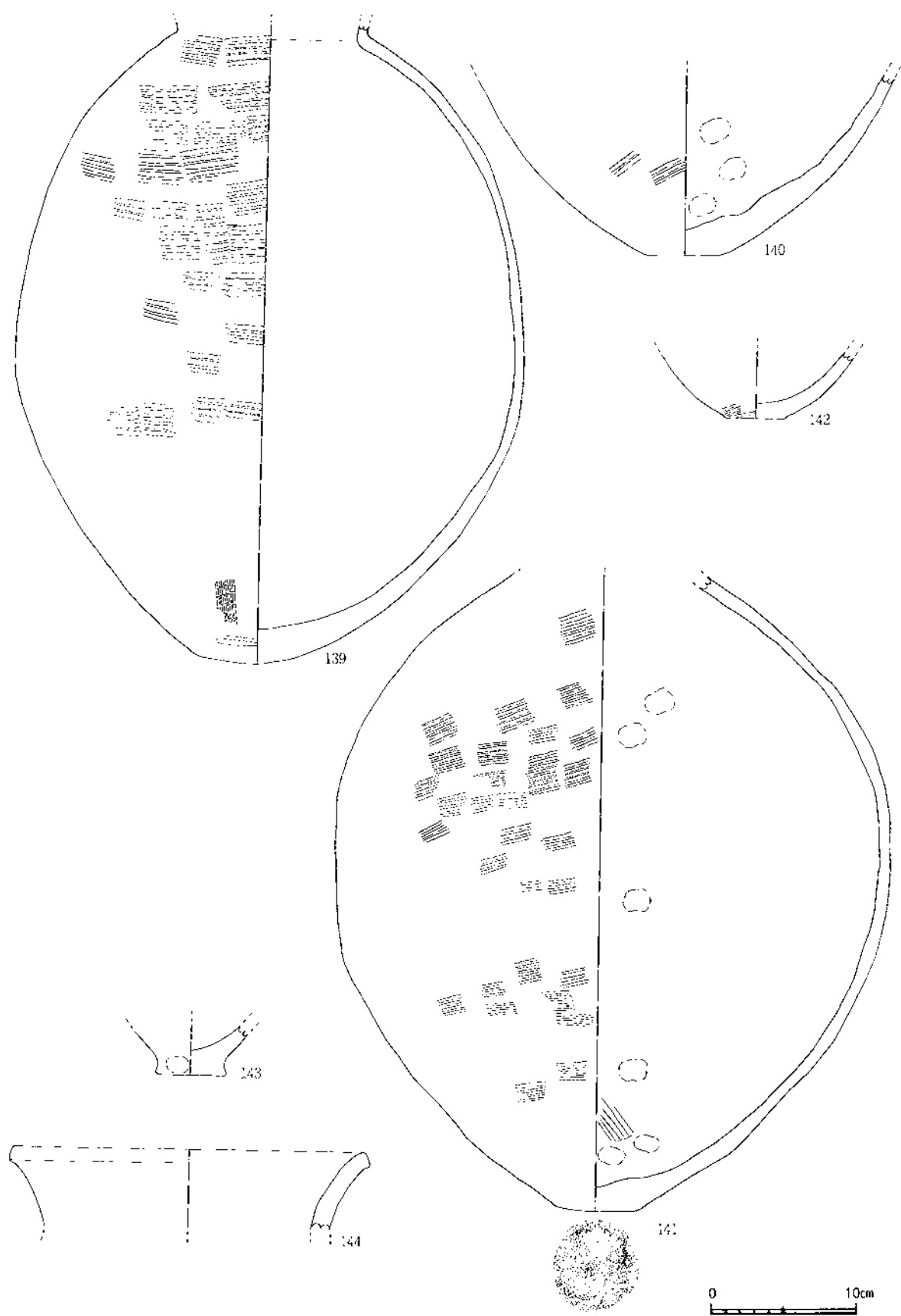


Fig. 53 II区 出土遺物—弥生土器— (S=1/4)

Tab.14 II区 出土遺物観察表

Fig. 番号	図版 番号	出土地点 層位	種別	器種	法 量 (cm)			特徴 (形態・手法等)	胎土	色 調	
					口径	高さ	底径			内面	外面
53	139	SK-4	弥生土器	壺		35.2	6.0	底部はわずかに平底を残す。最大径が胴部中位に来る卵形の器形であり、頸部で強く屈曲する。頸部上位は欠損し、口縁形状不明。外面全面に叩き目があり、底部付近に刷毛調整が観察される。摩耗顕著。	2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	にぶい黄褐色	浅黄褐色
53	140	SK-4	弥生土器	鉢			4.5	わずかに平底を残す底部。摩耗顕著だが、外面に叩き目、内面に指頭圧痕が観察される。	2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	にぶい黄褐色	浅黄褐色
53	141	SK-7	弥生土器	壺		38.4	5.6	わずかに平底を残す底部。胴部は球形に大きく膨らむ。外面全面に叩き目、内面に指頭圧痕が残る。胴部下半に一部刷毛目がある部分あり。摩耗顕著。	2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	陶灰色	黄褐色
53	142	SK-3	弥生土器	鉢			4.0	底部はわずかに平底を残す。摩耗顕著で調整不明瞭だが、右あがりの叩き目が観察可能である。	2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	棕色	棕色
53	143	II層	弥生土器	壺			4.8	平底。外縁は外方につまみ出され、指頭圧痕が残る。	2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
53	144	II層	弥生土器	壺	24.5			ラッパ状に大きく開く口縁。残存率10%程度の破片。口縁は内側面をなす。摩耗顕著で調整不明瞭。	2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	棕色	棕色

Tab.15 II区出土礫計測表 (SK-1～6、遺構外)

II区出土礫について、遺構ごと及び遺構外出土礫としてまとめた。遺構上面出土のものは遺構に属するものとする。図面との対応関係は示していないが、基本的に採り上げ番号の数字が小さい礫ほど上方の礫(最初に採り上げたもの)となっている。数字の欠番は地山に由来する泥岩小礫(0.1kg未満)あるいは遺物の所在不明で計量ができなかったものである。

SK-6

整理番号	採上番号	石質	重量(kg)	整理番号	採上番号	石質	重量(kg)
1	4	チャート	2.0	21	20	砂岩	5.0
2	26	チャート	11.0	22	21	砂岩	5.0
3	43	砂岩	0.2	23	1	砂岩	6.0
4	42	砂岩	0.8	24	5	砂岩	6.0
5	45	砂岩	1.5	25	16	砂岩	6.0
6	46	砂岩	1.8	26	31	砂岩	6.0
7	44	砂岩	2.0	27	6	砂岩	7.0
8	14	砂岩	2.5	28	12	砂岩	7.0
9	9	砂岩	3.0	29	13	砂岩	7.0
10	10	砂岩	3.0	30	23	砂岩	7.0
11	22	砂岩	3.0	31	34	砂岩	7.0
12	36	砂岩	3.0	32	18	砂岩	7.5
13	41	砂岩	3.0	33	19	砂岩	8.0
14	30	砂岩	3.5	34	7	砂岩	10.0
15	40	砂岩	3.5	35	8	砂岩	10.0
16	2	砂岩	4.0	36	不明	砂岩	10.0
17	3	砂岩	4.0	37	不明	砂岩	12.0
18	17	砂岩	4.0	38	24	砂岩	13.5
19	33	砂岩	4.0	39	不明	砂岩	16.0
20	19	砂岩	5.0				

SK-1

整理番号	採上番号	石質	重量(kg)
1	19	砂岩	0.1
2	8	砂岩	0.2
3	10	砂岩	0.2
4	6	砂岩	0.3
5	15	砂岩	0.3
6	20	砂岩	0.3
7	1	砂岩	0.5
8	4	砂岩	0.5
9	7	砂岩	0.5
10	9	砂岩	0.5
11	11	砂岩	0.5
12	13	砂岩	0.5
13	17	砂岩	0.5
14	2	砂岩	0.6
15	5	砂岩	0.8
16	18	砂岩	0.8
17	12	砂岩	1.0
18	16	砂岩	1.1
19	3	砂岩	1.2
20	14	砂岩	2.0

SK-5

整理番号	採上番号	石質	重量(kg)
1	5	チャート	0.5
2	2	チャート	1.3
3	4	砂岩	0.6
4	1	砂岩	2.5
5	3	石灰石	1.0
6	6	石灰石	1.0

SK-2

整理番号	採上番号	石質	重量(kg)	整理番号	採上番号	石質	重量(kg)	整理番号	採上番号	石質	重量(kg)	整理番号	採上番号	石質	重量(kg)
1	106	チャート	0.2	40	82	砂岩	0.2	79	97	砂岩	1.8	118	102	砂岩	6.0
2	109	チャート	0.2	41	111	砂岩	0.2	80	158	砂岩	1.9	119	57	砂岩	6.3
3	132	チャート	0.2	42	113	砂岩	0.2	81	6	砂岩	2.0	120	169	砂岩	6.5
4	163	チャート	0.3	43	153	砂岩	0.2	82	10	砂岩	2.0	121	84	砂岩	6.8
5	25	チャート	0.5	44	159	砂岩	0.2	83	12	砂岩	2.0	122	70	砂岩	7.0
6	117	チャート	0.5	45	156	砂岩	0.3	84	19	砂岩	2.0	123	125	砂岩	7.0
7	121	チャート	0.5	46	164	砂岩	0.3	85	24	砂岩	2.0	124	143	砂岩	7.0
8	138	チャート	0.5	47	168	砂岩	0.3	86	140	砂岩	2.0	125	99	砂岩	7.5
9	148	チャート	0.5	48	175	砂岩	0.3	87	146	砂岩	2.0	126	141	砂岩	7.5
10	165	チャート	0.5	49	72	砂岩	0.4	88	176	砂岩	2.0	127	46	砂岩	8.0
11	152	チャート	0.6	50	133	砂岩	0.4	89	101	砂岩	2.2	128	90	砂岩	8.0
12	118	チャート	0.8	51	155	砂岩	0.4	90	34	砂岩	2.5	129	9	砂岩	9.0
13	15	チャート	1.6	52	173	砂岩	0.4	91	52	砂岩	2.5	130	124	砂岩	9.0
14	120	チャート	1.0	53	4	砂岩	0.5	92	17	砂岩	3.0	131	5	砂岩	10.0
15	123	チャート	1.0	54	20	砂岩	0.5	93	18	砂岩	3.0	132	48	砂岩	10.0
16	128	チャート	1.0	55	135	砂岩	0.5	94	36	砂岩	3.0	133	58	砂岩	10.0
17	47	チャート	1.5	56	144	砂岩	0.5	95	93	砂岩	3.0	134	71	砂岩	10.0
18	121	チャート	1.5	57	167	砂岩	0.5	96	174	砂岩	3.0	135	127	砂岩	10.0
19	49	チャート	2.0	58	171	砂岩	0.5	97	44	砂岩	3.5	136	26	砂岩	11.0
20	108	チャート	2.6	59	178	砂岩	0.5	98	151	砂岩	3.5	137	27	砂岩	11.0
21	14	チャート	3.0	60	91	砂岩	0.6	99	40	砂岩	3.6	138	131	砂岩	11.0
22	122	チャート	3.0	61	115	砂岩	0.6	100	32	砂岩	4.0	139	54	砂岩	11.5
23	110	チャート	4.0	62	166	砂岩	0.6	101	34	砂岩	4.0	140	56	砂岩	11.5
24	39	チャート	5.0	63	116	砂岩	0.7	102	51	砂岩	4.0	141	53	砂岩	12.5
25	149	チャート	5.0	64	103	砂岩	0.8	103	75	砂岩	4.0	142	43	砂岩	13.0
26	31	チャート	8.0	65	157	砂岩	0.8	104	98	砂岩	4.0	143	129	砂岩	13.0
27	74	チャート	9.0	66	8	砂岩	1.0	105	55	砂岩	4.5	144	31	砂岩	15.0
28	81	チャート	9.0	67	33	砂岩	1.0	106	98	砂岩	4.5	145	69	砂岩	16.0
29	80	チャート	10.0	68	92	砂岩	1.0	107	136	砂岩	4.5	146	126	砂岩	16.5
30	73	チャート	10.5	69	142	砂岩	1.0	108	37	砂岩	5.0	147	21	砂岩	20.0
31	83	チャート	11.6	70	145	砂岩	1.0	109	41	砂岩	5.0	148	29	砂岩	25.0
32	2	チャート	12.0	71	170	砂岩	1.0	110	130	砂岩	5.0	149	22	砂岩	45.0
33	50	チャート	12.0	72	172	砂岩	1.0	111	150	砂岩	5.0	150	38	石灰石	0.1
34	78	チャート	20.0	73	177	砂岩	1.0	112	45	砂岩	5.5	151	3	石灰石	0.3
35	137	チャート	23.3	74	105	砂岩	1.1	113	95	砂岩	5.5	152	35	石灰石	3.0
36	107	砂岩	0.1	75	139	砂岩	1.2	114	7	砂岩	6.0	153	1	石灰石	6.0
37	154	砂岩	0.1	76	114	砂岩	1.3	115	22	砂岩	6.0	154	23	石灰石	8.0
38	160	砂岩	0.1	77	96	砂岩	1.6	116	23	砂岩	6.0				
39	79	砂岩	0.2	78	112	砂岩	1.6	117	42	砂岩	6.0				

SK-4

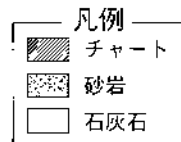
整理番号	採上番号	石質	重量(kg)	整理番号	採上番号	石質	重量(kg)	整理番号	採上番号	石質	重量(kg)	整理番号	採上番号	石質	重量(kg)
1	50	チャート	0.5	17	26	砂岩	1.5	33	3	石灰石	1.0	49	35	石灰石	3.0
2	2	チャート	1.0	18	48	砂岩	1.5	34	5	石灰石	1.0	50	36	石灰石	3.0
3	62	チャート	5.0	19	49	砂岩	3.5	35	19	石灰石	1.0	51	64	石灰石	3.0
4	58	チャート	5.3	20	1	砂岩	4.0	36	21	石灰石	1.0	52	65	石灰石	3.0
5	21	チャート	8.4	21	52	砂岩	4.0	37	29	石灰石	1.0	53	68	石灰石	3.5
6	15	チャート	17.5	22	38	砂岩	5.5	38	37	石灰石	1.0	54	34	石灰石	5.0
7	61	チャート	23.0	23	51	砂岩	5.7	39	73	石灰石	1.0	55	32	石灰石	5.5
8	22	チャート	31.5	24	22	砂岩	7.0	40	28	石灰石	1.2	56	66	石灰石	5.5
9	40	チャート	41.0	25	16	砂岩	10.0	41	2	石灰石	1.5	57	57	石灰石	6.0
10	30	砂岩	0.5	26	67	砂岩	16.0	42	12	石灰石	1.5	58	39	石灰石	6.5
11	31	砂岩	0.5	27	59	砂岩	40.0	43	24	石灰石	1.5	59	11	石灰石	12.0
12	60	砂岩	1.0	28	4	石灰石	0.3	44	6	石灰石	2.0	60	13	石灰石	12.0
13	70	砂岩	1.0	29	7	石灰石	0.5	45	15	石灰石	2.0	61	14	石灰石	14.0
14	71	砂岩	1.3	30	8	石灰石	0.5	46	72	石灰石	2.0	62	63	石灰石	19.0
15	18	砂岩	1.5	31	10	石灰石	0.5	47	27	石灰石	2.5	63	33	石灰石	24.0
16	23	砂岩	1.5	32	13	石灰石	0.5	48	25	石灰石	3.0	64	47	石灰石	28.5

SK-3

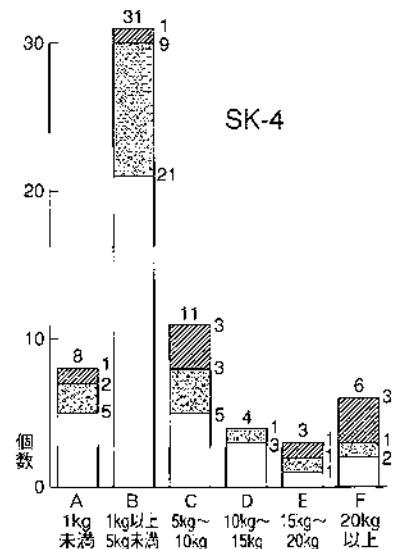
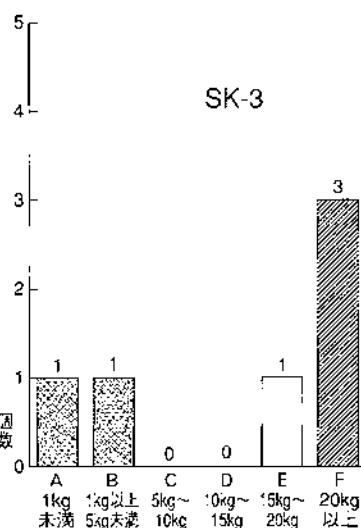
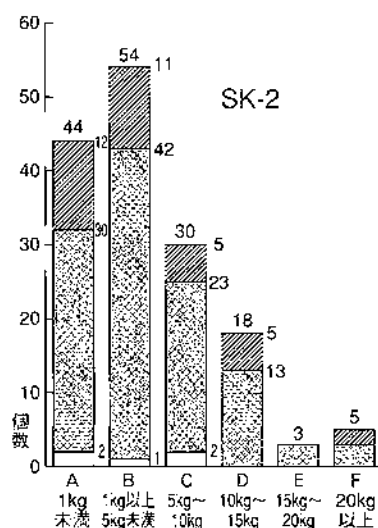
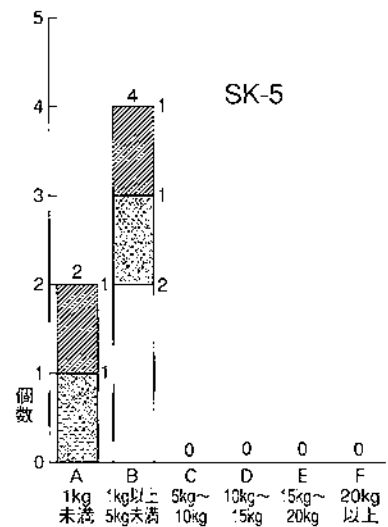
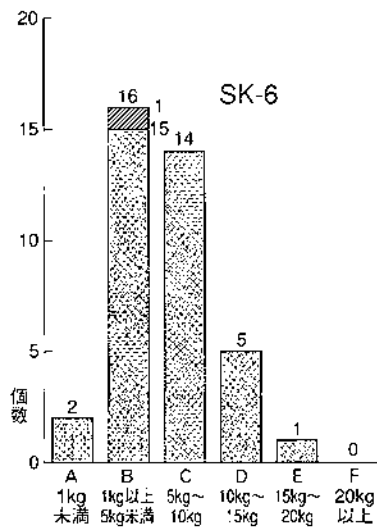
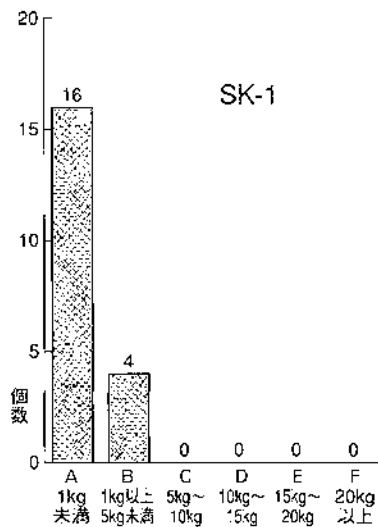
整理番号	採番	石質	重量(kg)
1	3	チャート	31.5
2	2	チャート	40.0
3	1	チャート	56.0
4	6	砂岩	0.5
5	5	砂岩	1.5
6	4	石灰石	15.0

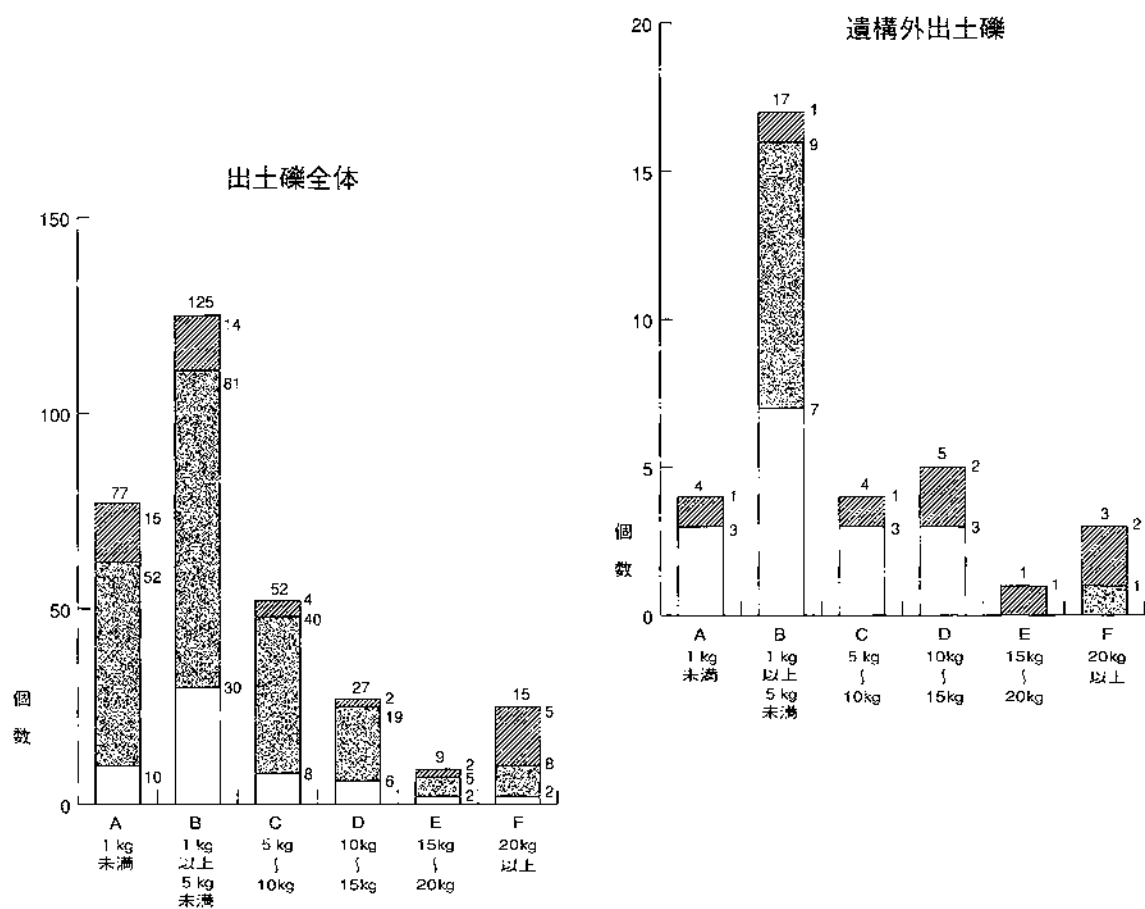
遺構外出土礫

整理番号	石質	重量(kg)	整理番号	石質	重量(kg)	整理番号	石質	重量(kg)
1	チャート	0.3	13	砂岩	3.0	25	石灰石	2.0
2	チャート	1.0	14	砂岩	3.0	26	石灰石	2.0
3	チャート	6.0	15	砂岩	4.0	27	石灰石	3.5
4	チャート	18.0	16	砂岩	13.0	28	石灰石	4.0
5	チャート	24.0	17	砂岩	14.0	29	石灰石	5.3
6	チャート	26.0	18	砂岩	21.0	30	石灰石	6.0
7	砂岩	1.5	19	石灰石	0.5	31	石灰石	7.0
8	砂岩	2.0	20	石灰石	0.5	32	石灰石	10.0
9	砂岩	2.0	21	石灰石	0.5	33	石灰石	12.0
10	砂岩	2.0	22	石灰石	1.2	34	石灰石	13.0
11	砂岩	2.0	23	石灰石	1.5			
12	砂岩	2.3	24	石灰石	1.7			



出土礫重量階級別グラフ





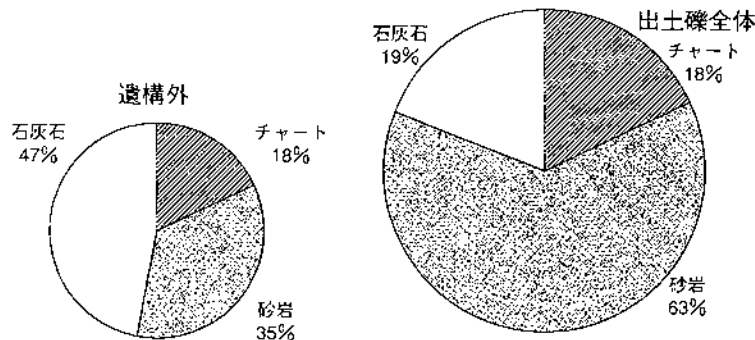
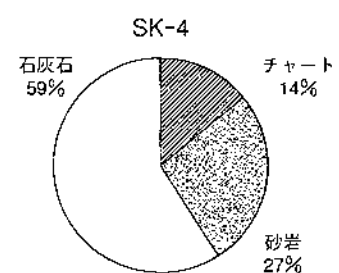
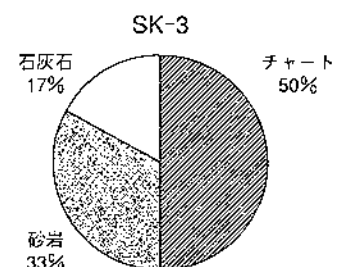
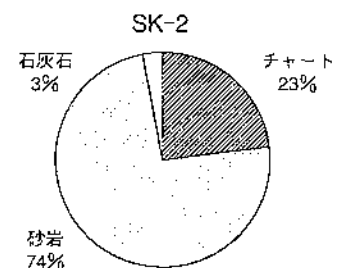
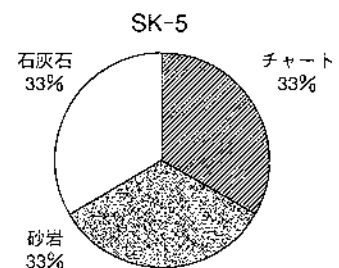
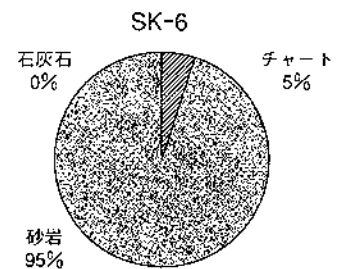
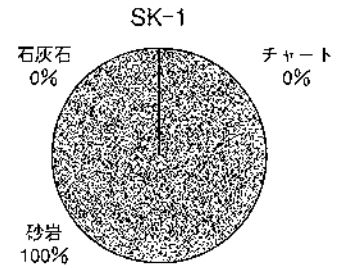
Tab.16 II区 出土礫重量階級別一覽表

遺構 重量階級	SK 1 (土坑墓1)	SK 6 (土坑墓2)	SK 5 (土坑墓3)	SK 2 (土坑墓4)	SK 3 (土坑墓5)	SK 4 (土坑墓6)	遺構外	計
1 kg 未満	16	2	2	44	1	8	4	77
1 kg 以上 5 kg 未満	4	16	4	54	1	31	17	127
5 kg 以上 10 kg 未満	0	14	0	30	0	11	4	59
10 kg 以上 15 kg 未満	0	5	0	18	0	4	5	32
15 kg 以上 20 kg 未満	0	1	0	3	1	3	1	9
20 kg 以上	0	0	0	5	3	6	3	17
計	20	38	6	154	6	63	34	321

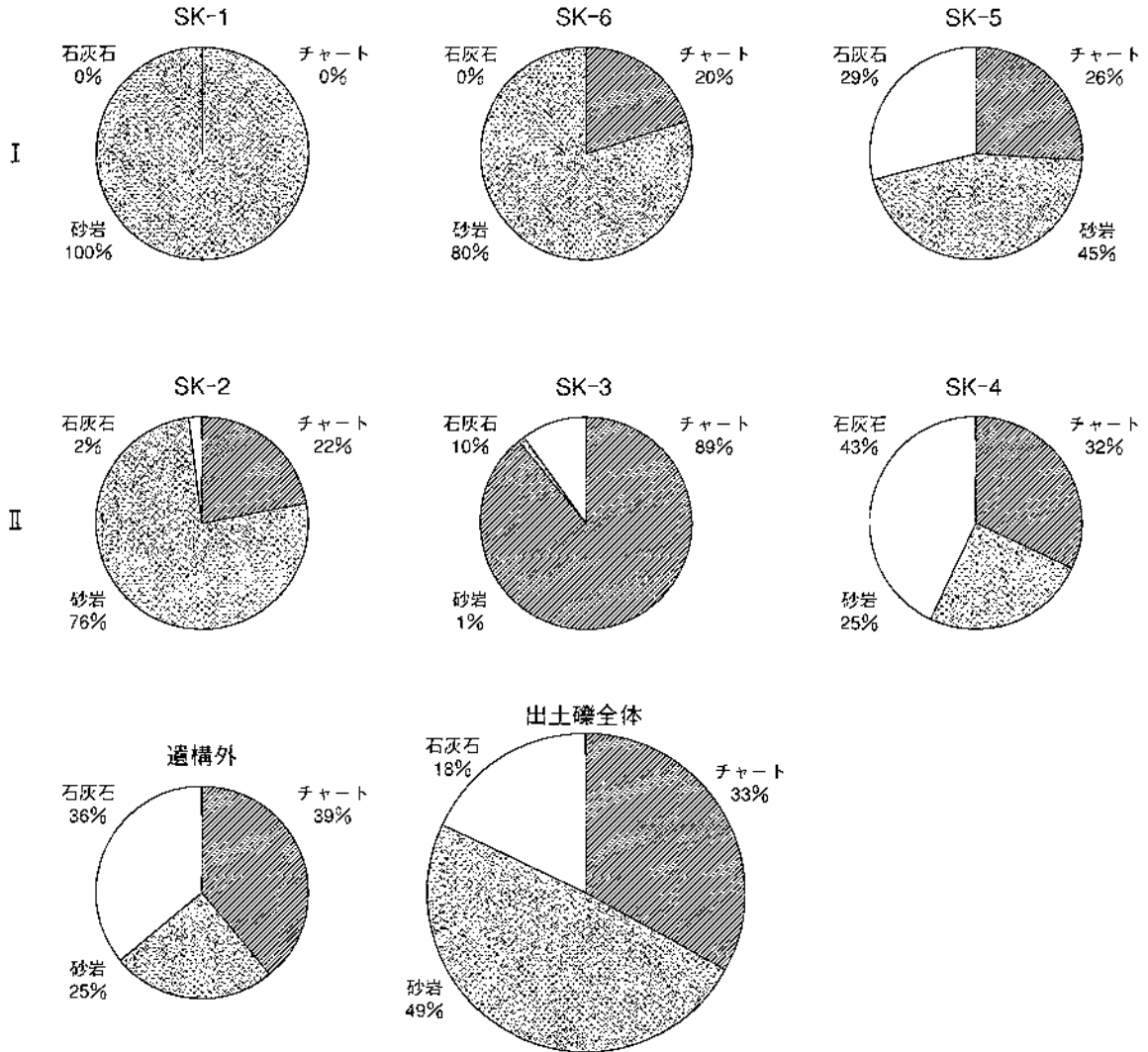
Tab.17 II区 出土礫石質別一覧及び個数・重量%

遺構		石 質			計
		チャート	砂岩	石灰石	
SK 1 (土坑墓1)	個数	0	20	0	20
	個数%	0.0	100.0	0.0	100.0
	重量(kg)	0.0	12.4	0.0	12.4
	重量%	0.0	100.0	0.0	100.0
SK 6 (土坑墓2)	個数	2	37	0	39
	個数%	5.1	94.9	0.0	100.0
	重量(kg)	13.0	51.8	0.0	64.8
	重量%	20.1	79.9	0.0	100.0
SK 5 (土坑墓3)	個数	2	2	2	6
	個数%	33.3	33.3	33.3	100.0
	重量(kg)	1.8	3.2	2.0	7.0
	重量%	25.7	45.7	28.6	100.0
SK-2 (土坑墓4)	個数	35	114	5	154
	個数%	22.7	74.0	3.2	100.0
	重量(kg)	162.3	545.3	17.4	725.0
	重量%	22.4	75.2	2.4	100.0
SK 3 (土坑墓5)	個数	3	2	1	6
	個数%	50.0	33.3	16.7	100.0
	重量(kg)	127.5	2.0	15.0	144.5
	重量%	88.2	1.4	10.4	100.0
SK-4 (土坑墓6)	個数	9	17	37	63
	個数%	14.3	27.0	58.7	100.0
	重量(kg)	133.3	106.0	180.0	419.3
	重量%	31.8	25.3	42.9	100.0
遺構外	個数	6	12	16	34
	個数%	17.6	35.3	47.1	100.0
	重量(kg)	75.3	48.8	70.8	194.9
	重量%	38.6	25.0	36.3	100.0
出土礫全体	個数	57	204	61	322
	個数%	17.7	63.4	18.9	100.0
	重量(kg)	513.2	769.5	285.2	1567.9
	重量%	32.7	49.1	18.2	100.0

出土礫個数比



出土礫重量比



(2) その他の時代の遺物

(表採資料)

表採資料として特記しておきたいのは、尾根上出土の文化11年銘の瓦である。現在へと続く信仰の対象となっていた祠を構成する瓦である。表採した地点はⅡ区の尾根から南東に続いて延びる尾根の、標高45m付近の地形変換点である。(Fig. 54参照)

表採地点、写真、墨書された銘文の内容をここに記録する。

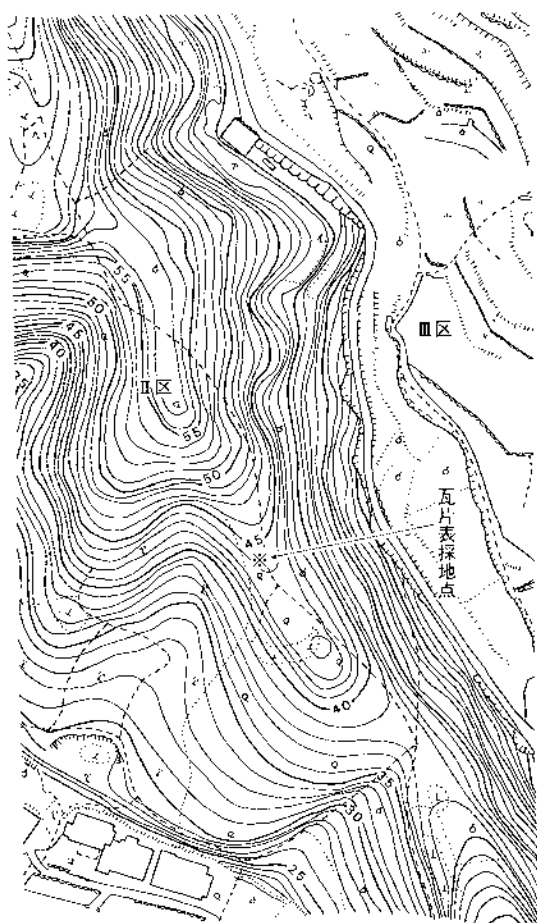
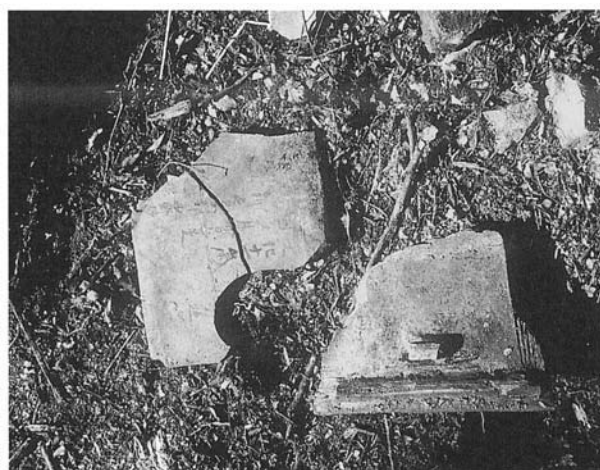


Fig. 54 文化11年銘瓦表採地点



第3節 Ⅲ区の成果

1. Ⅲ区調査の概要

Ⅲ区はⅠ区の尾根とⅡ区の尾根に挟まれた谷の南岸一帯であり、調査前は水田（棚田）として利用されていた。緩斜面を削り出して、下段を埋め立て境界に石垣を築いて全部で5段の水田面を形成しており、最下段は幅12～20m長さ52mと広い面積を持つが、上段は3～5mの幅で等高線に沿って広がる典型的な小区画の棚田となっている。山腹から湧き出した伏流水が水田の境界の石垣に沿って流れ、Ⅲ区南側を流れる谷川へと流れ込んでいる。谷自体の開く方向は南東であり、棚田周辺の日当たりも良い。



Ⅲ区の景観

平成5年度の試掘調査の段階では試掘Ⅰ区として調査を進め、TR-1～11の11ヶ所の調査を実施した。(Fig. 3・Fig. 4・Tab. 1参照) 縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などが出土したが、断片的な資料で遺構の形成も確認できなかった。それゆえ、本発掘調査に際しては遺物の比較的集中した地点から調査を着手し、遺跡全体の広がりを確認し集中地点に限定した調査にしようとA区・B区と小区画の調査小区を設定した上で調査を進めた。各区において予想外に遺物の集中や遺構が検出されたため、最終的には谷川の北岸一帯、約3,000㎡の面積を対象とした調査となった。

Ⅲ区全体をカバーする公共座標に即した4mグリッドを設定、Fig. 55のように東西方向A～P、南北方向1～18として遺構・遺物の測定の基準とした。また、地点によっては調査の順番にA区からG区までの設定した調査小区名による遺物の取り上げを行ったが、Ⅲ区においては公共座標による4mグリッドと調査小区呼称を併用して報告する。

Ⅲ区からは縄文時代前期から近世に至る幅の広い時期の遺物が検出された。しかし、その中で縄文時代中期の遺物が大半を占めており、それ以外の時期の遺物は少量で断片的である。9世紀初頭に属する土師器・Ⅲ (Fig. 4-1) など注目される遺物もあるものの、縄文中期の遺物以外は包含

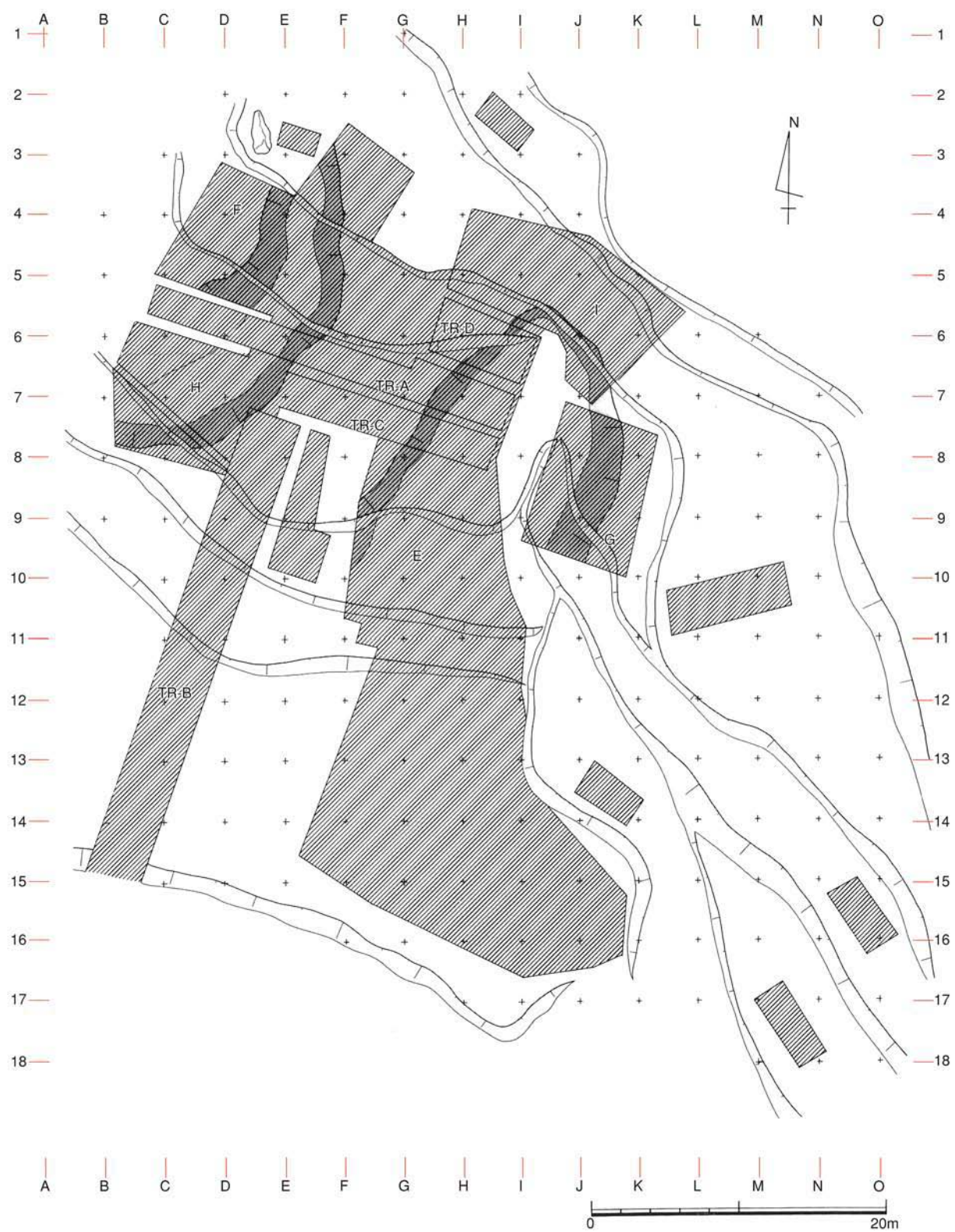


Fig. 55 Ⅲ区 全体図 (S=1/400)

層あるいは形成時期不明の自然流路中からの出土である。Ⅲ区には北側の山腹から南の谷川に向かって傾斜する2つの谷状地形があり、その間に舌状に延びる微高地が形成される。これらの2つの小谷は、南側を東流する谷に向かって流れ込んでいたものと考えられる。西側の谷状地形は何時期かにわたる土石流堆積物で埋積されている。谷状地形の岸に相当する部分にはピットと包含層の形成が認められ、一定量の縄文中期土器が確認された。遺構の範囲が狭く、その性格は特定できない。後世の土石流等によって、遺構の多くの部分が削りとられたものと考えられる。東側の谷状地形は西側とは全く様相が異なっている。土石流堆積物等は全く認められず、堆積物は粘土及びシルト質粘土である。植物を多く含む腐植土や砂層なども部分的に認められるものの、大部分の粘土及びシルト質粘土により、東側は湿地あるいはそれに近似した滞水が見られる地形であったと考えられる。東側小谷の包含層中にも縄文時代中期の土器がまとまって検出され、谷の底からは7基の堅果類貯蔵穴が確認されている。

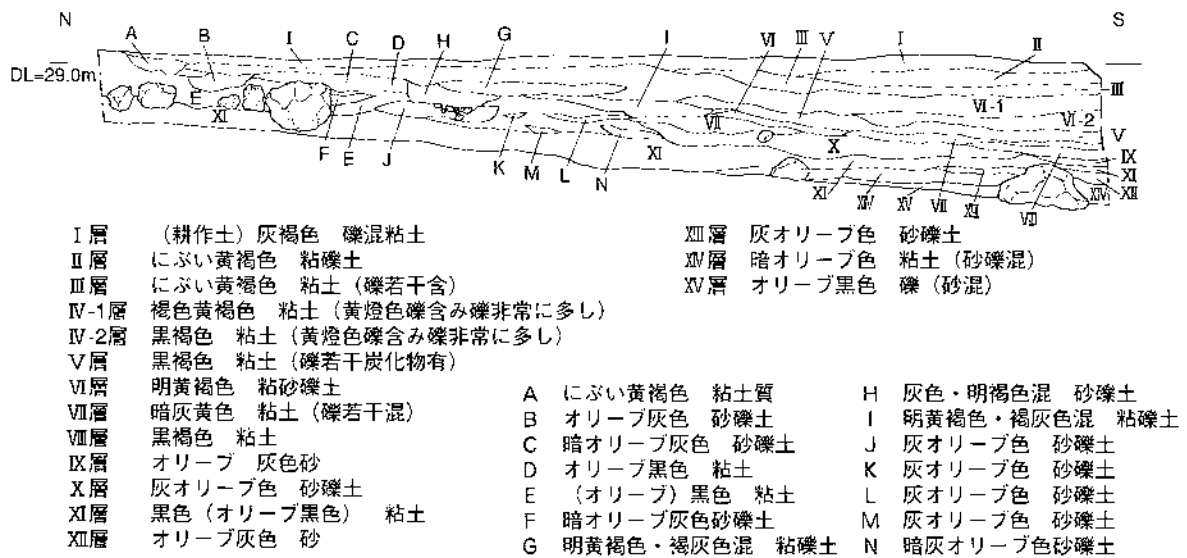
2. 基本層序 (Fig. 56・57)

今回の調査地点の全域は水田化されており、部分的に流出・地形改変等が認められるものの、それ以外の地点ではI層(表土層)は全て水田耕作土である灰褐色粘土であった。

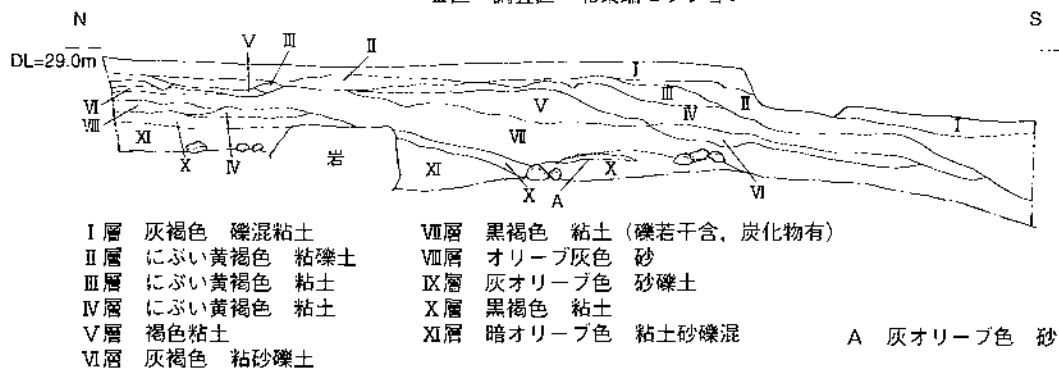
下層の堆積状況は地点によって大きく異なっている。斜面上方では棚田を造成するために削り出され埋め立てられた地点が多く、最下段の水田も西半分については水田化に際して削られたためか表土の下は床土を除くとすぐ岩盤になる。部分的には改変を受けているにせよ、往時の状況を比較的良好に留めているのは中段の水田面と最下段東側(南側)である。西側・東側ではその様相を異にし、南側の堆積状況も異なっている。

土層堆積状況の詳細についてはFig. 56とFig. 57のとおりである。簡単にまとめれば西の谷状地形に堆積しているのは礫を主体とした褐色～黄褐色の粘礫土層であり、その間に互層として褐色礫混粘土層の堆積が認められる。これに対して東の谷状地形に堆積しているのは、粘土層が大半であり、その互層として砂層、粘土・砂主体の粘砂礫上層が幾重にも堆積、それを繰り返している。主に堆積しているのは粘土層であり、これは南側についても同様である。

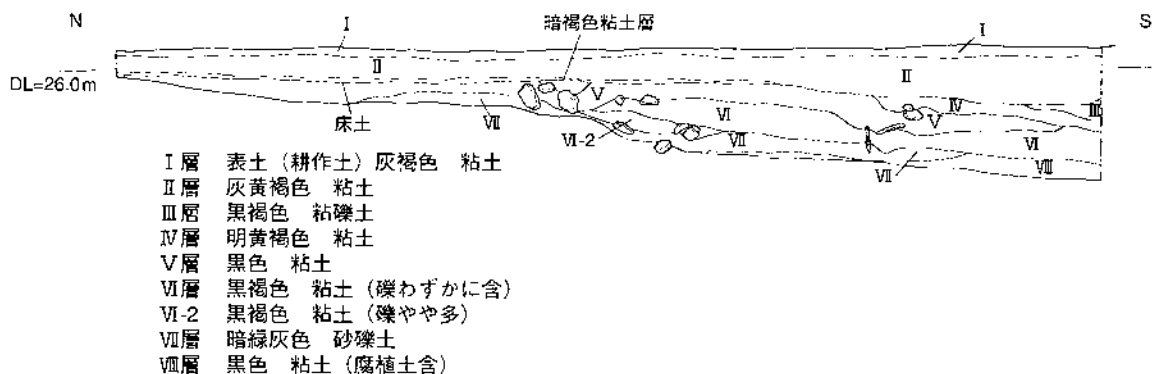
西側の谷状地形と東側の谷状地形は、ともに埋積され水田として利用されていたのだが、その埋積される過程・環境は大きく異なっているといえよう。



III区 調査区 北東端セクション



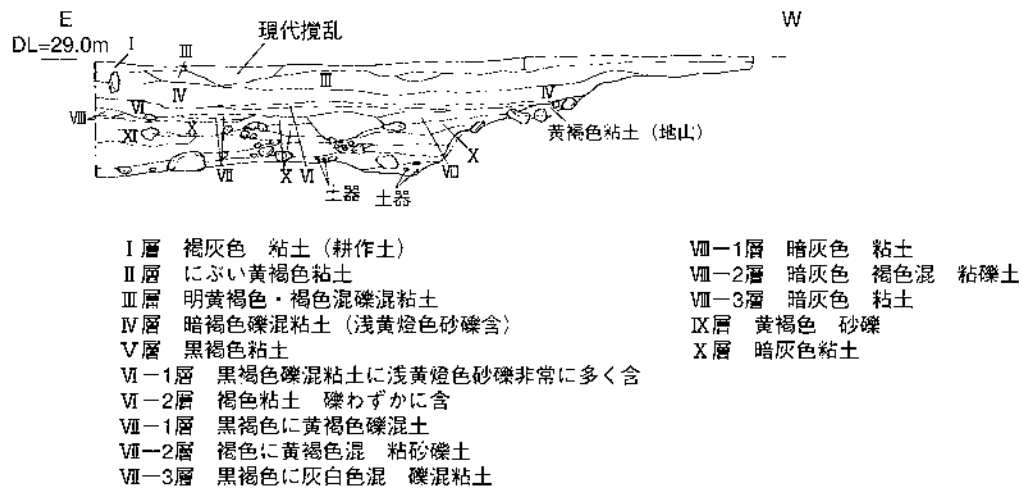
III区 TR-E 東壁セクション



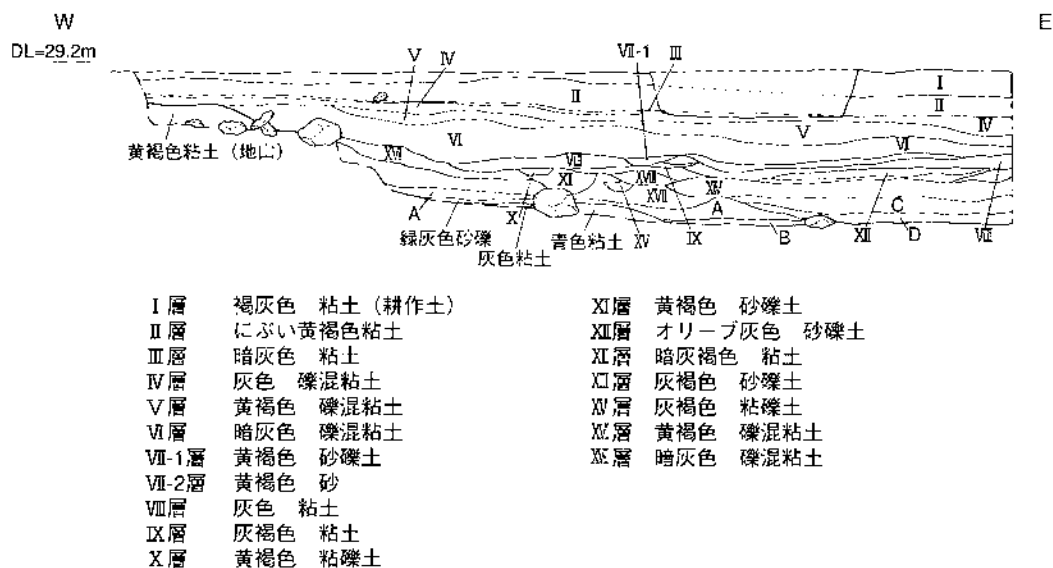
III区 調査区 南半セクション

0 2m

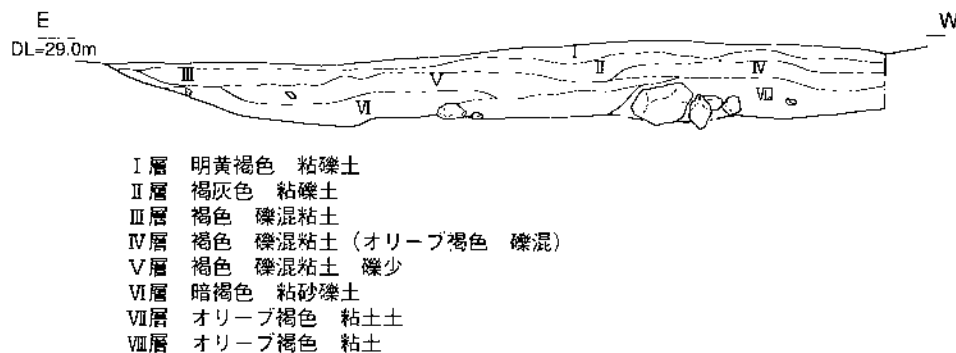
Fig. 56 III区 基本層序(1)南北方向 (S=1/80)



Ⅲ区 TR-A 南壁セクション (バンク北壁)



Ⅲ区 TR-C 南バンク セクション



Ⅲ区 H 東西方向 セクション



Fig. 57 Ⅲ区 基本層序(2) (S=1/80)

3. 遺構と遺物

(1) 縄文時代前期の遺物

縄文時代前期に属する遺構は確認できなかったが、縄文中期の遺構及び包含層から前期の土器が出土している。(Fig.58-146～149) いずれも前期初頭の羽島下層式土器併行である。

縄文時代前期に属する146～149の4点とも外面に押し引きによる刺突文を有する深鉢で、最大のもので5×6cm程度の小破片である。146が後述する縄文中期の貯蔵穴SK-4の埋土からの出土で、他の3点は包含層中からの

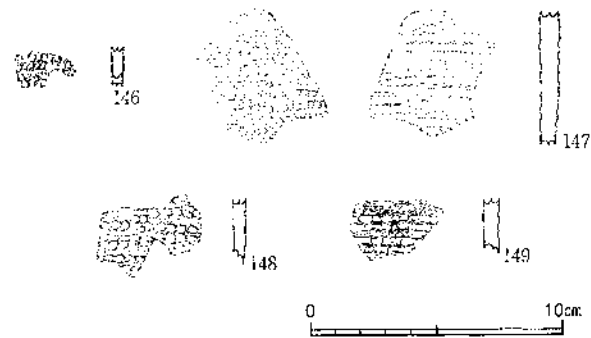


Fig. 58 出土遺物（縄文時代前期）（S=1/3）

出土である。146には補修孔とみられる径5mmの小孔(焼成後穿孔)が穿たれている。

高知平野で縄文前期の遺物が確認されたのは、西隣の谷間の微高地先端に位置する南国市栄エ田遺跡、浦戸湾西側の丘陵上の高知市チドノ遺跡に次いで3例目である。

(2) 縄文時代中期の遺構と遺物

谷川に流れ込んでいたであろう東西の谷状地形の間に延びる舌状の微高地と両側の谷状地形の堆積土中から縄文時代中期後半～末の遺構・遺物が検出されている。包含層出土資料が多いが、少量の前期土器を除くと他時期の資料はない。

A. 東側谷状地形の遺構

谷状地形の底部から杭列・土坑（SK-1～8）を検出した。土坑の中でSK-2～SK-8は堅果類の貯蔵穴である。

SK-1 (Fig. 59)

谷状地形低地部で検出された小土坑で、長軸62cm短軸40cmの楕円形の平面形を呈し深さ24cmである。遺物は出土していない。谷底部で検出された貯蔵穴（SK-2～8）に隣接して同一粘土層上に確認された遺構であり、遺物は確認されなかったものの縄文時代中期の遺構だと考えられる。

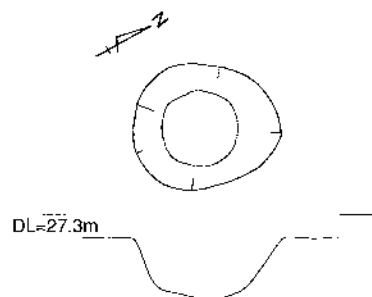


Fig. 59 SK-1 平面及びエレベーション図（S=1/30）

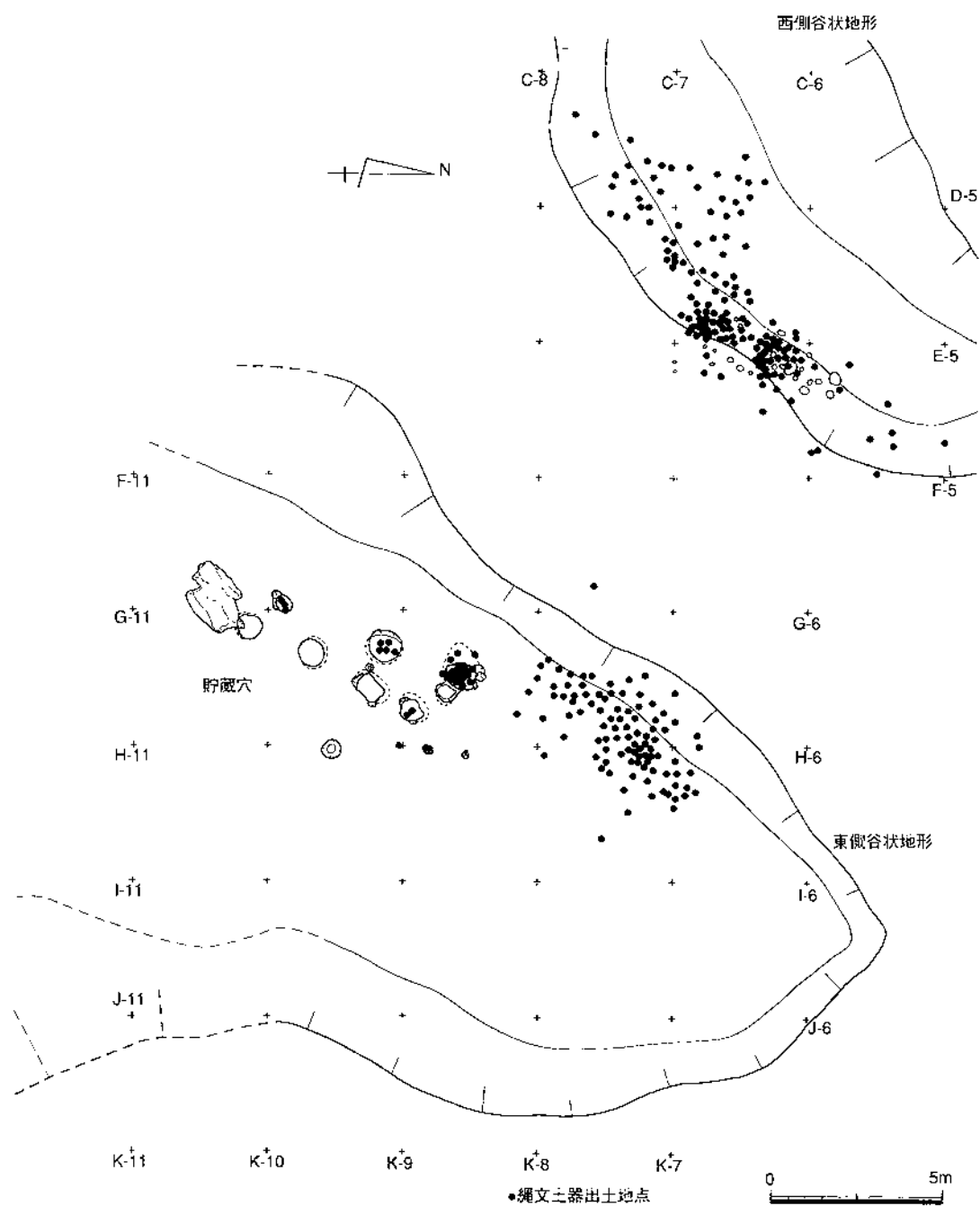


Fig. 60 縄文時代中期の遺構と土器出土地点 (S=1/200)

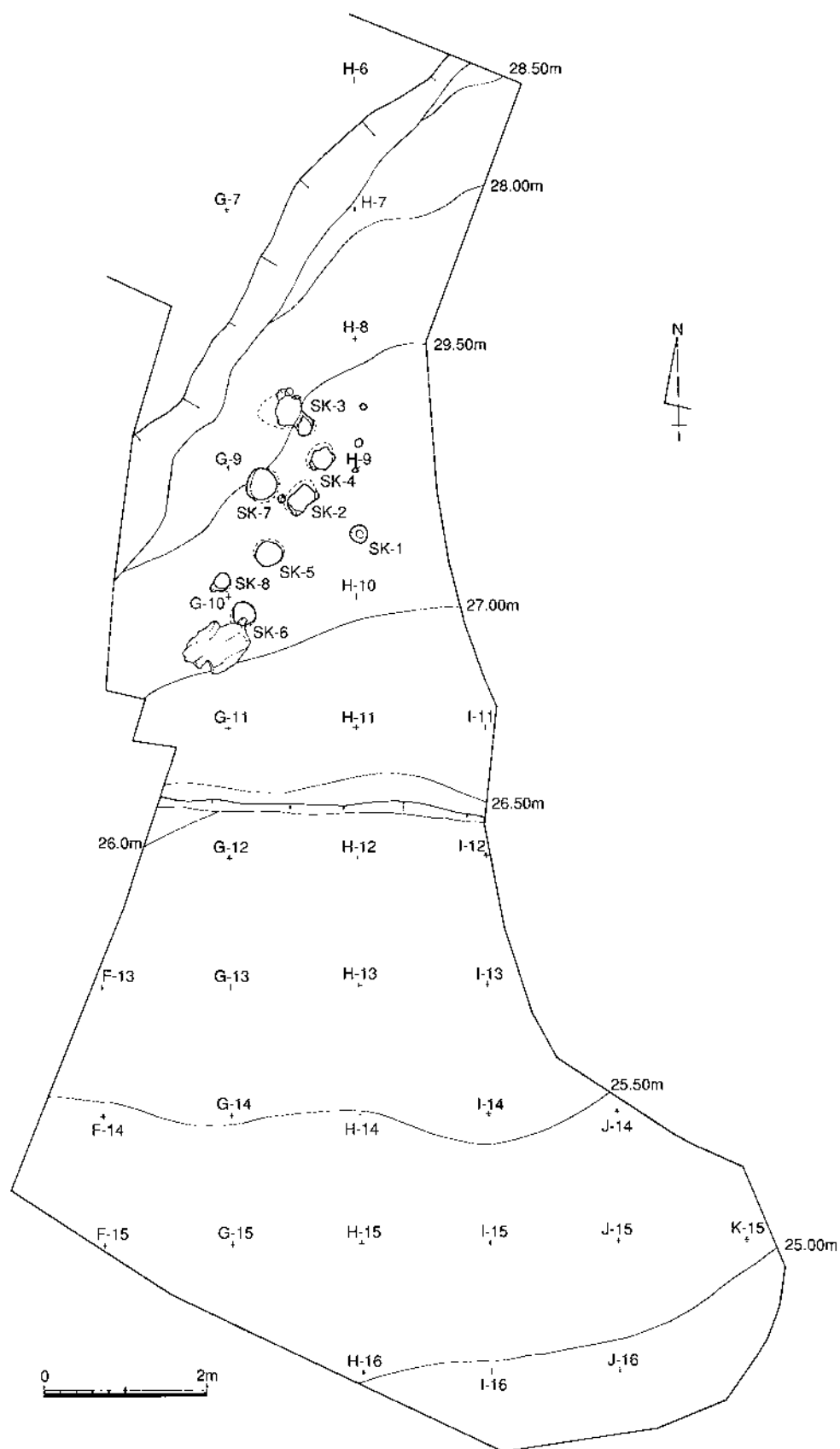


Fig. 61 東側谷部検出遺構と地形 (S=1/80)
 —等高線は遺構が検出された粘土層—

堅果類貯蔵穴(SK-2～SK-8)

7基検出した貯蔵穴だが、全ての遺構から堅果類が検出された。貯蔵穴の規模・形態・推定容積・水洗したサンプル重量・堆積状況・出土遺物・堅果類の総数・種類の順番に記述を進めていく。なお、渡辺誠名古屋大学教授のご指導により、堅果類総数と基部・先端部の数のカウントを行い、貯蔵穴ごとの違いの把握に努めた。

また貯蔵穴の比較のため、総数(先端を含む個体)÷基部を比率として算出、さらにサンプル重量1kg当たりの堅果類の数を堅果類集中度として指数化、各貯蔵穴の比較に使用した。これは一般的な指数ではなく、当遺跡貯蔵穴間の比較のための指数であることをお断りしておきたい。また堅果の種類については、形態から分類したため、破損した個体や先端が潰れた個体では明瞭に分類できず、特定し得た個体を数で示さずに量で示すことにする。

なお、出土堅果類の形態からの種類特定に際しては、渡辺誠教授並びに恒石直和氏（高知市子ども科学図書館指導員）に直接ご指導していただいた。

SK-2 (Fig. 62)

隅丸長方形の平面形を呈する。規模は長軸80cm短軸60cmで最深部は57cmを測る。北側25cm西側10cm南側20cmが掘り込まれ、フラスコ状を示す袋状土坑の形態を持つ。推定容積は約275リッ

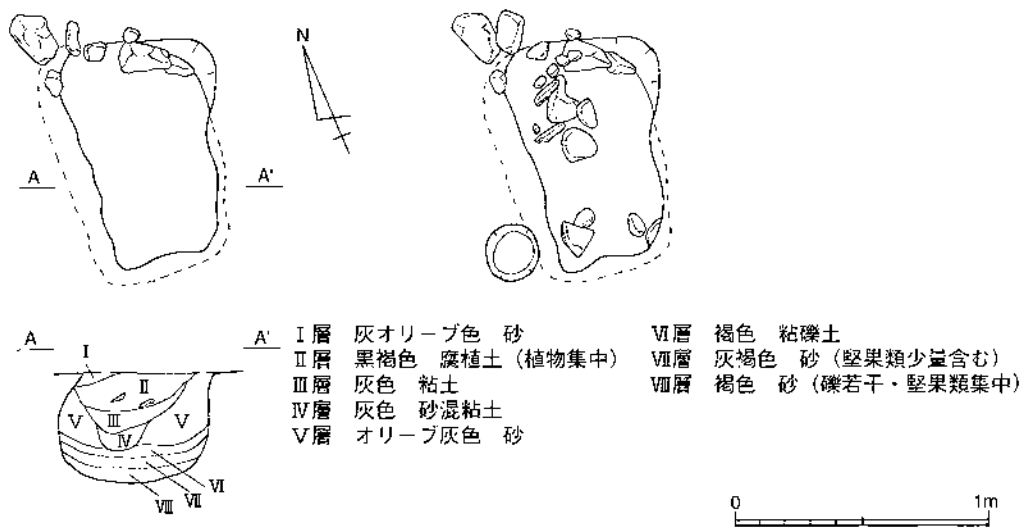


Fig. 62 SK-2 完掘状況平面・礫出土状況及びセクション図 (S=1/30)

トルで、水洗による精査を実施した埋土サンプル重量は約245kgである。

貯蔵穴のセクションはFig. 61に示したとおりであり、砂層と粘土層が植物集中土層を挟んで順番に堆積しており、堅果類の集中は貯蔵穴最下層である褐色砂層（礫を若干含む）に認められた。II層である黒褐色腐植土層には重なり合った木の葉や小枝などの植物と共に木片や直径5cm程度の木の小枝も多く認められた。埋土中には2～3cmを中心とする礫や1cm未満の小礫は多く含まれているものの、5cmを越える礫は少なく10cmに達する礫は3個確認されたのみである。礫はいずれ

も周辺で産するチャートの自然礫である。植物遺体・堅果類以外の出土遺物は検出できなかった。

出土した堅果類の総数は990点、基部は140点であり基部に対する堅果類総数の比率は7.07である。また堅果類集中度は4.04と奥谷南遺跡の貯蔵穴の中では平均的な値を示している。

出土した堅果の種類は、アカガシ・コナラ・アラカシ・シリブカガシで、アカガシの量が多く、アラカシ・シリブカガシは少量であった。

SK-3 (Fig. 63・64)

中央部は不整形の平面形を呈し、南西方向と北西方向に張り出し部を持つ。土坑の規模は直径約90cmで最深部72cm、西方向に向って最大54cm掘り込まれ袋状土坑の形態を示す。土坑は南東側に検出面からの深さ15~30cmの張り出し部分を持つ。土坑張り出し部の規模は最も長い部分で長さ60cm、幅40~60cmである。推定容積は約460リットルで、水洗による精査を実施した埋土サンプル重量は約320kgである。サンプル採取地点のサンプル番号はFig.63に示した。

貯蔵穴のセクションはFig.64のとおりであり、砂層と粘土層が植物集中上層を挟んで順番に堆積しており、堅果類の集中は貯蔵穴最下層である褐色砂層（IX層—礫を若干含む）に認められた。VII層である黒褐色腐植土層には重なり合った木の葉や小枝などの植物と共に木片や直径5cm程度の木の枝も多く認められ、集中度こそ低いもののIX層と同量の堅果類が検出されている。

埋土中には直径20cmを超える礫が多く含まれており、壁奥には長辺50cm以上の礫も残されていた。側壁の奥深くに埋め込まれたこれらの巨大な礫は組み合わせられており、粘土層を掘り込んで形成された側壁を支える役割を果たしていたものと考えられる。礫はいずれも周辺で産するチャートの自然礫である。

埋土I層の上面を覆う粘土層を縄文土器包含層の第IV層ということでJ-IV層と設定して土器を採り上げた。このJ-IV層はSK-3上面検出礫の間に入り込んで部分的に堆積していた層で、調査の段階ではSK-3と別に考えていたが、土器出土範囲及び層の広がりからSK-3の埋土の最上層だと考えられる。出土遺物は土器片302点(SK-3として採り上げたもの84点、J-IV層としたもの218点)、石器6点と網代2点、その中で図示した遺物はFig.67-150・162~170(J-IV層)の土器と156の石匙、そして160・161の網代である。150は条痕地の粗製深鉢、162~168は条痕地に沈線で文様を施文する。口縁形状が解る個体は1点(162)のみで、内外面に沈線を有し口唇には刻目を持っている。163・169は貝殻腹縁による擬縄文を持つ。156は縦長のサヌカイト製の石匙で、押圧剥離により刃部は形成されている。

出土遺物の中で編物の存在を示す網代は注目される。2点確認された網代(160・161)は、ともにサンプル23として採り上げたサンプル土に付着していたもので、VII層である黒褐色腐植土層(植物集中)からの出土となる。160は14.0×13.2cm、161は3.2×3.2cm程度の平面残存状況であり、編物であることは間違いないが全体形状は不明で、カゴ類であるかどうか判断することはできない。網代の材質は木本類であるイヌビワ属クワ科の散孔材であり、網代の編み方は「二本超え二本潜り一本送り」である。この編物は堅果類を貯蔵する容器として利用されていたと推定される。

出土した堅果類の総数は1554点、基部は437点であり基部に対する堅果類総数の比率は3.56であ

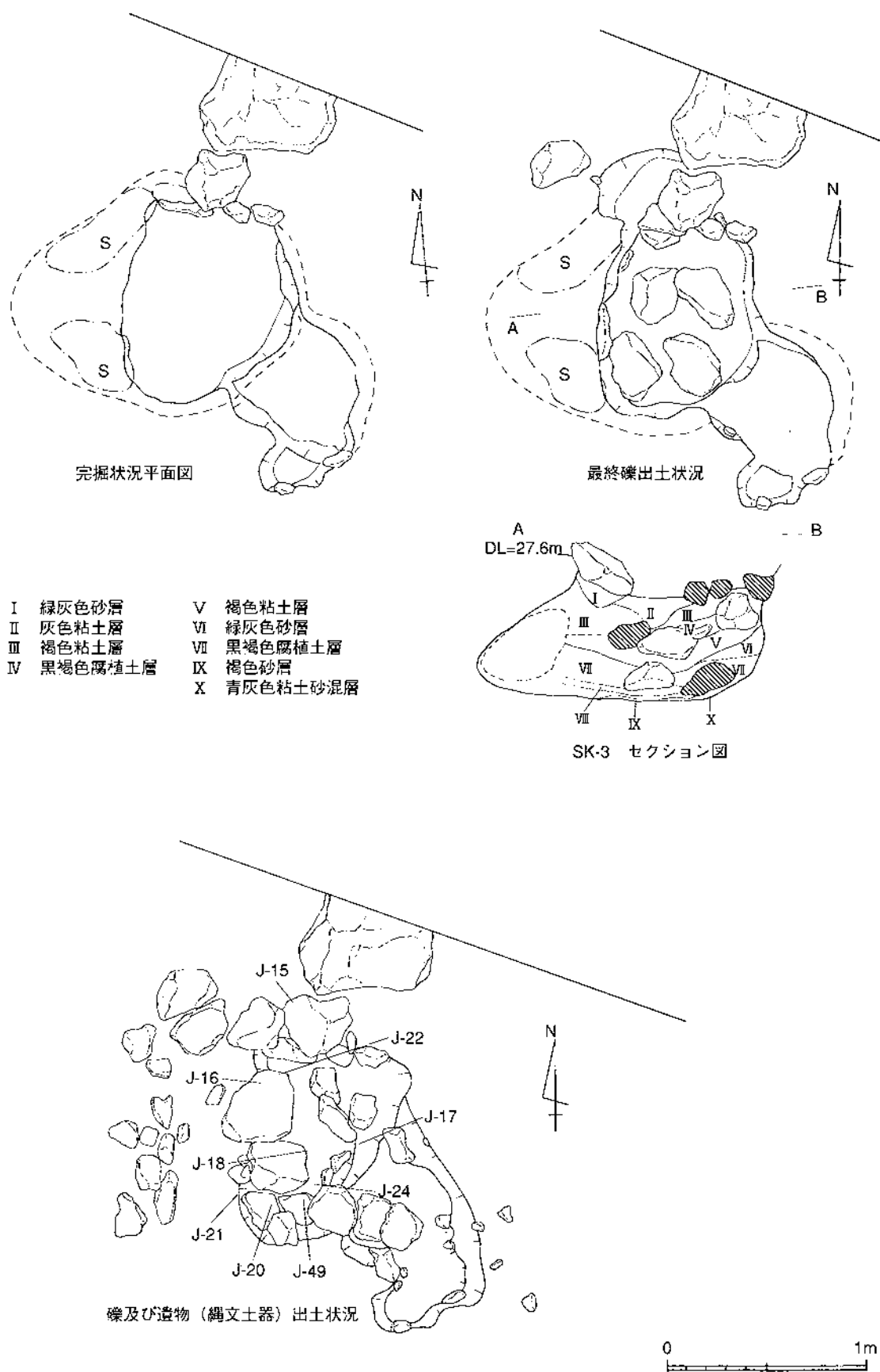


Fig. 64 SK-3 完掘状況平面・礫出土状況及びセクション図 (S=1/30)

る。また堅果類集中度は4.85と最も高い数値を示している。

出土した堅果類の種類は、アカガシ・クヌギ・コナラ・シリブカガシであり、アカガシが多くシリブカガシは少量であった。

SK-4 (Fig.65)

不整円形の平面形を呈する。直径60cm、深さは最深部で48cmを測る。推定容積は約135リットルで、水洗による精査を実施した堀土サンプル重量は約116kgである。貯蔵穴の模式図はFig. 65のとおりであり、最上層（埋土Ⅰ層）に植物が集中する腐植土層があり、下層のⅡ～Ⅴ層が粘土層と砂層の互層となっている。砂層中に粘土が混ざり「砂混粘土層」として報告したが、粘土が若干混じる砂層といった様相を示す。堅果類の集中は貯蔵穴最下層であるオリーブ灰色砂混粘土層に認められた。

埋土中には径20cmから42cmに達する礫が多く含まれている。礫はチャート礫であり、小礫も併せて遺構検出面から最下層まで、各層に礫が確認された。側壁は奥に10～20cmほど掘り込まれ袋状の構造を示していたが、側壁を支えるかのように置かれる礫(径30cm内外)も認められた。礫を組み合わせ、側壁を支える構造を造り出したものと考えられる。

SK-4からの植物遺体以外の出土遺物としてFig. 67-158・159の石器類が挙げられる。いずれもチャートであり、158は背腹同方向の剥離を持つ剥片で、背面は階段状剥離を示している。159は押圧剥離により刃部を形成しようとした痕跡のある石鏃の未製品である。

出土した堅果類は、総数427点、基部は57点であり基部を含む個体に対する堅果類総数の比率は

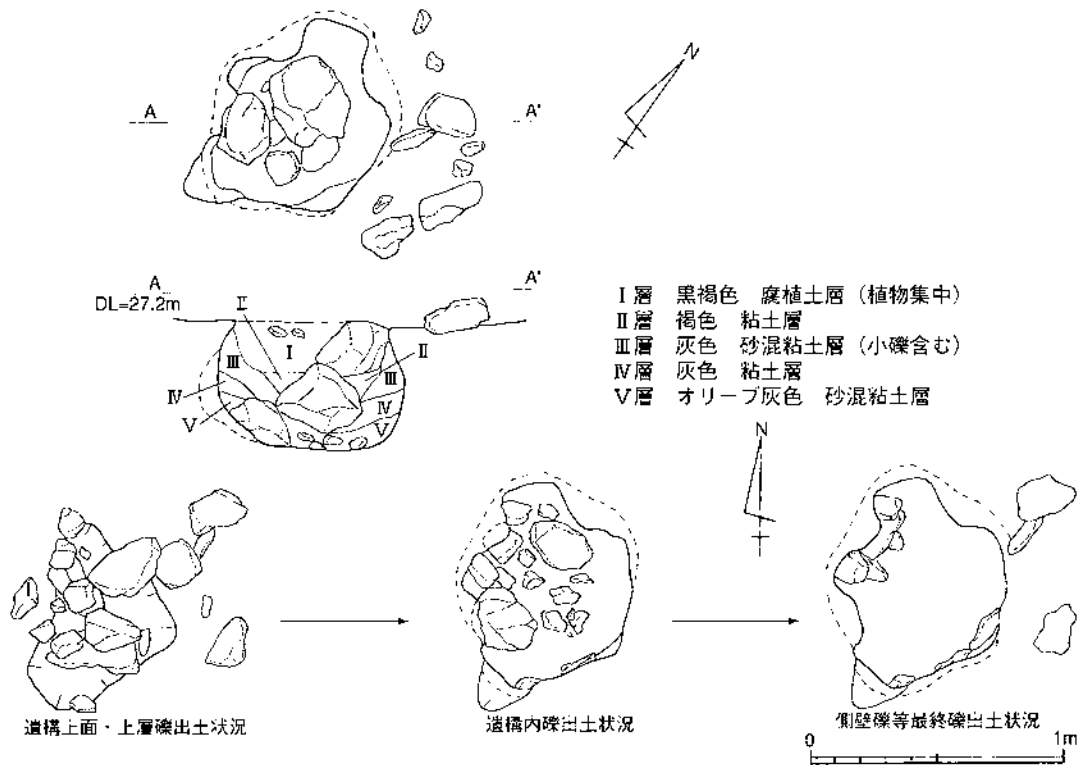


Fig. 65 SK-4 完掘状況平面・礫出土状況及びセクション図 (S=1/30)

7.49と貯蔵穴の中では比較的高い数値を示している。また堅果類集中度は4.25と平均的な値よりも若干高い。

出土した堅果の種類はアカガシ・コナラ・アラカシ・ツブラジイであり主体をなすのはアカガシで、ツブラジイはごく少量が含まれているに過ぎない。

SK-5 (Fig. 66)

円形に近い楕円形の平面形を呈する。直径72～82cm、深さは最深部で27cmを測る。四周が3～10cm程フラスコ状に掘られ、袋状土坑の形態を示す。推定容積は約118リットルで、水洗による精査を実施した埋土サンプル重量は約105kgである。貯蔵穴のセクションはFig. 66のとおりであり、I層の砂混粘土層の下層II・III層の褐色粘土層、特にIII層に植物が集中する。IV層の砂層の下が最下層の青灰色粘土層で堅果類が集中している。この粘土層には砂も混じり、砂混粘土層に近い層である。埋土中には小礫が含まれ、10～15cm大の礫が4個ほど検出されているものの、長さ5cmを越える礫は少ない。礫はいずれもチャートの自然礫である。出土遺物は堅果類及び植物遺体と土器21点、石器14点である。土器は全て小片・細片で石器も剥片類であり、図示し得る遺物はなかった。

出土した堅果類は総数497点、基部は88点であり基部に対する堅果類総数の比率は5.65である。堅果類集中度は4.73であり、SK-3に次ぐ高い数値を示している。

出土した堅果の種類はツブラジイとコナラである。主体となるのはツブラジイでコナラは少量含まれているに過ぎない。

SK-6 (Fig. 66)

径74cmの不整円形で最深部24cmの浅い皿状の土坑である。壁奥は6～8cmほど挟れる袋状土坑の形状を呈する。推定容積は約85リットルで、水洗による精査を実施した埋土サンプル重量は約62kgである。堅果類・植物遺体以外の遺物は出土していない。

埋土はIII層で粘土混じりの砂層（オリーブ灰色～I・III層）が黒褐色の腐植土が集中する粘土質シルト層（II層）を挟む形で堆積していた。遺構に含まれる礫は1～3cm前後の小礫が中心で、8～13cm程度の握り拳大の礫は合計10個程度と量的に少なかった。礫はすべてチャート礫であり、遺構面南端で検出された210cm×150cmのチャート岩の一部分（長さ30cm程度）が遺構の底面に張り出している。

出土した堅果類の種類はアカガシ・アラカシ・シリブカガシ・コナラであり、クスノキ科の植物の種子も含まれていた。アカガシが多く、貯蔵された堅果類の主体となっている。コナラは若干含まれているが、ほとんど認められない。

SK-7 (Fig. 66)

不整円形の平面形を呈する。径90～96cmで最深部75cm、遺構の南東側が5cmほど掘り込まれわずかに袋状土坑の形状を呈する。他の貯蔵穴と比較すると側壁が掘り込まれる度合いが弱く、垂直に近い壁面を成す部分もある。推定容積は約445リットルで、水洗による精査を実施した埋土サン

ブル重量は約216kgである。

埋土はⅦ層でⅠ～Ⅵ層が粘土層と砂礫層の互層となっており（Ⅰ粘土Ⅱ砂礫Ⅲ粘土Ⅳ・Ⅴ砂礫Ⅵ粘土）、最下層であるⅦ層は砂層である。Ⅳ・Ⅴ層に植物の集中（腐植土層）が認められる。いずれも小片ではあるがⅡ～Ⅴ層にかけて縄文土器が90点、石器が11点出土している。Fig.67-151～153、159が図示し得る遺物で、152は粘土帯を巻き込んで成形したものだが、用途は不明の上製品である。151は肥厚部を持つ深鉢、153は平底の底部でともに条痕地の土器、159はサヌカイト製の石鏃である。

埋土中には2～3cmを中心とする礫や1cm未満の小礫は多く含まれている。Ⅲ～Ⅵ層にかけて5～20cm大のチャートの自然礫が検出されている。

出土した堅果類の総数は311点、基部は50点であり基部に対する堅果類総数の比率は6.22また堅果類集中度は1.43であり貯蔵穴中最低である。

出土した堅果類はシイ類及び少量ではあるがコナラが確認されている。残存する堅果類で判断すると、他の貯蔵穴で一般的なアラカシ・アカガシがほとんどなく、堅果類集中度が低い点、形態が異なる点などから他の貯蔵穴とは異なる目的で利用されていた可能性もある。

SK-8 (Fig. 66)

不整円形の平面形を呈する。直径42cm、深さは最深部で48cmを測る。推定容積は約62リットルで、水洗による精査を実施した埋土サンプル重量は約52kgである。埋土はⅠ層から順番に砂層・粘土層・砂礫混じり粘土層・砂混じり粘土層であり、Ⅳ層が堅果類の集中する褐色砂混じり粘土層となっている。土器12点石器剥片2点が出土している。Fig.67-154は沈線文と半截竹管状原体による刺突文を持つ有文深鉢である。

Fig.66に示した10～15cm前後の礫以外には、小礫を含むのみである。埋土に含まれる礫は全てチャート礫である。

出土した堅果類の総数は155点、基部は2点であり基部に対する堅果類総数の比率は77.05と4～8前後である他の貯蔵穴と較べ著しく高い数値を示している。また堅果類集中度は2.98と平均的な値よりも若干小さい。

出土した堅果類はアカガシ・コナラ・アラカシであり、アカガシが最も多く、アラカシは少量である。

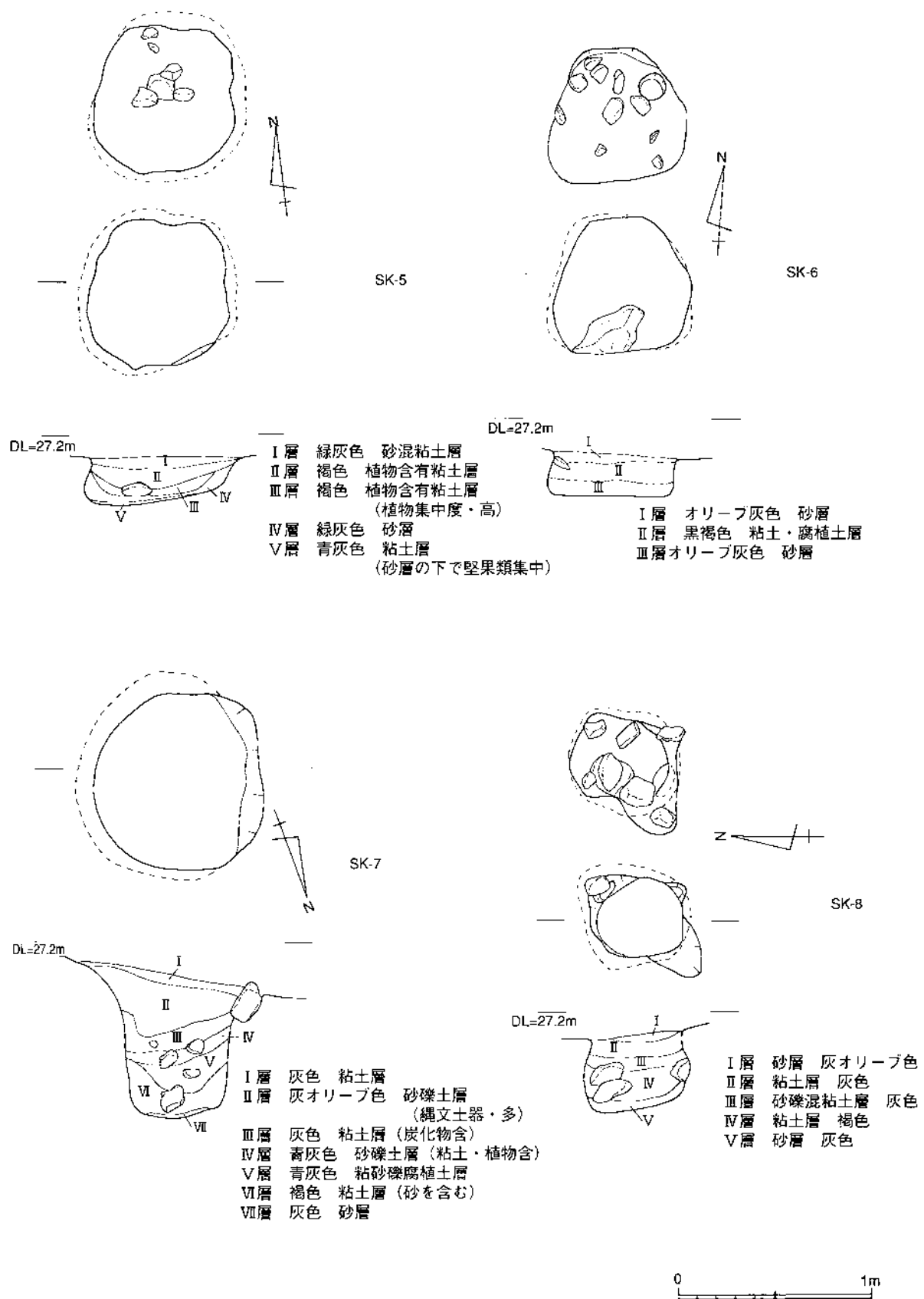
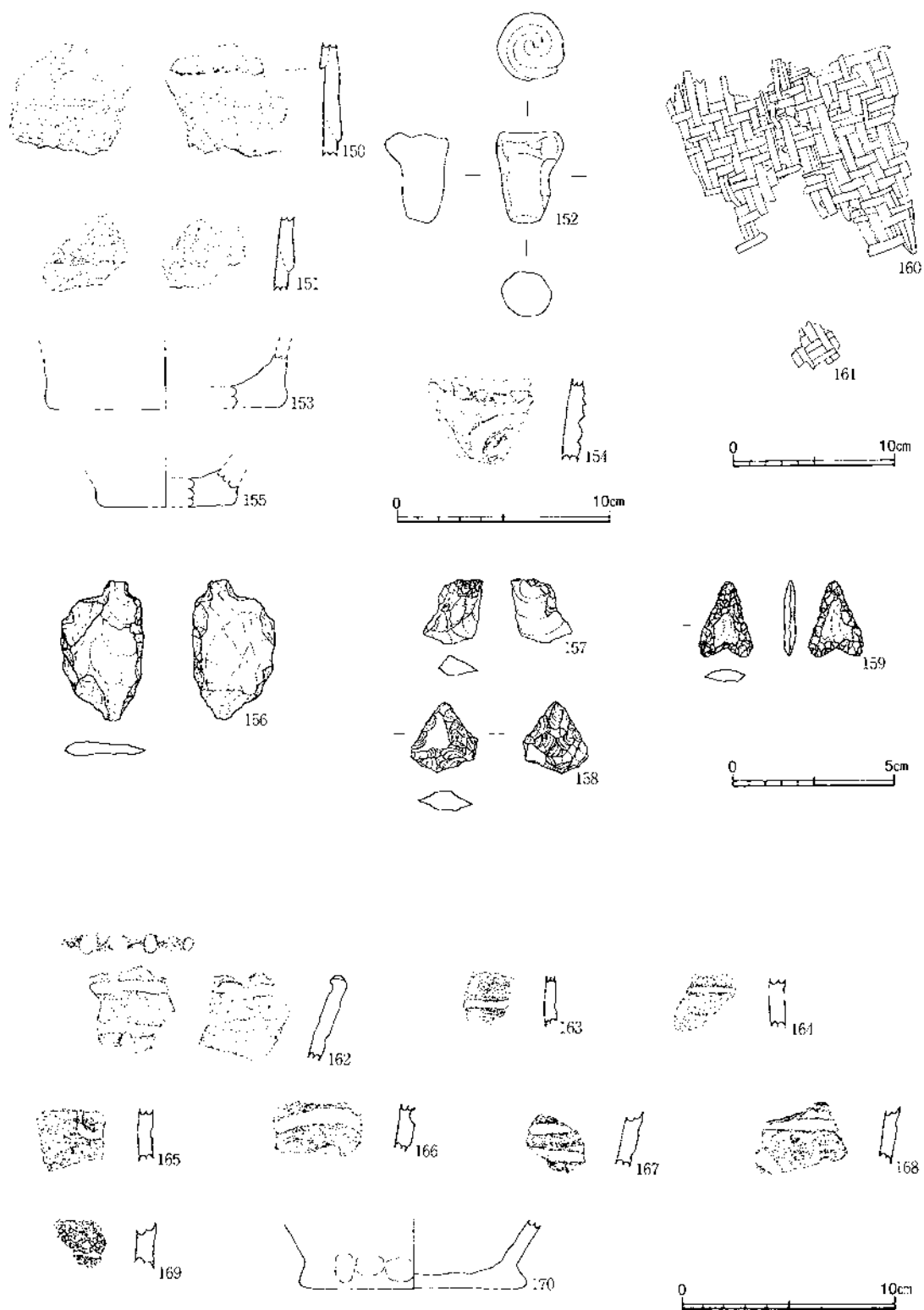


Fig. 66 SK-5~8 完掘状況平面・礫出土状況及びセクション図 (S=1/30)



SK-3—150, 156, 160~161

SK-3 (J-IV層) 162~170

SK-4—157, 158

SK-7—151~153, 159

SK-8—154, 155

Fig. 67 遺構出土遺物 (S=1/3・1/4・1/2)

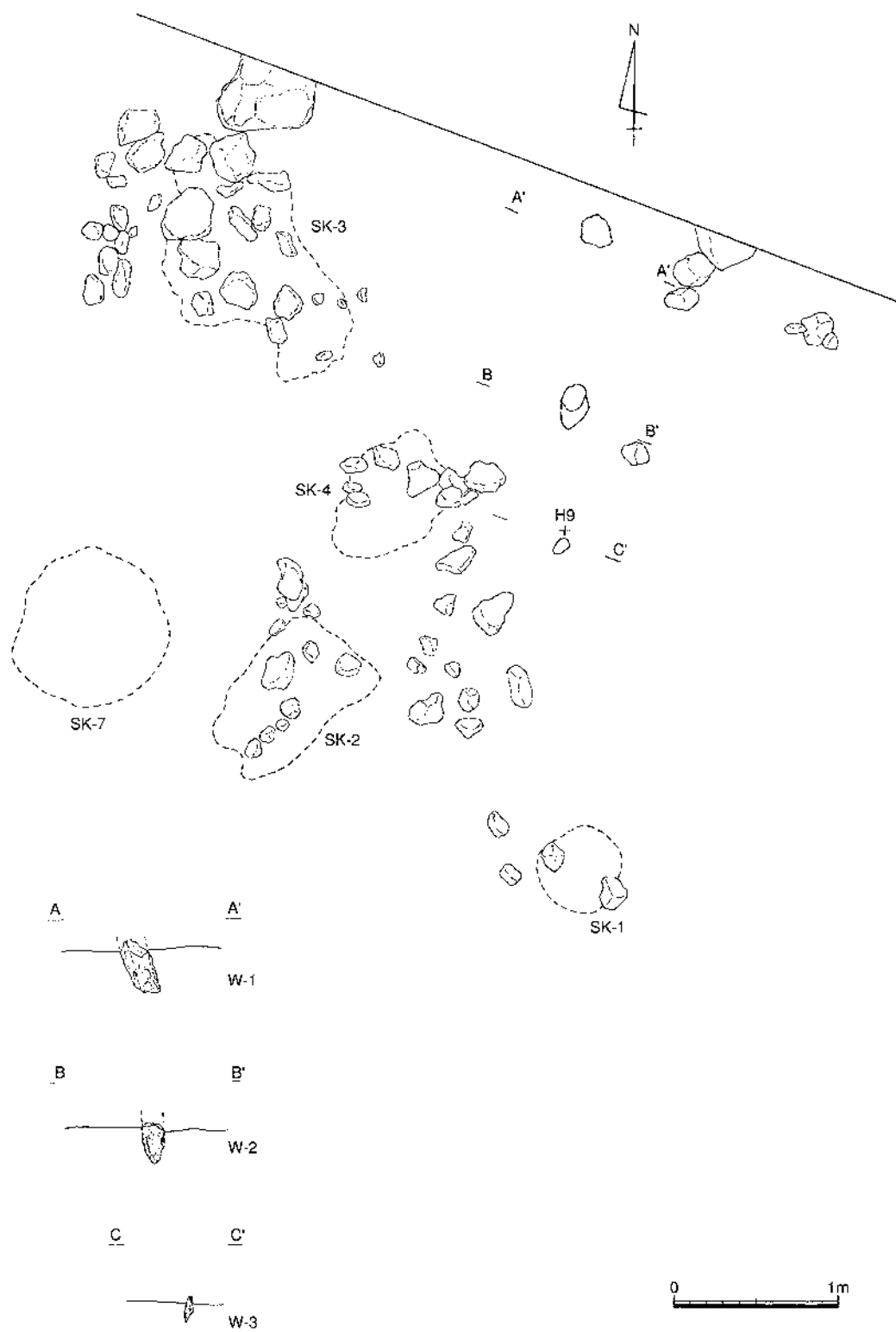


Fig. 68 貯蔵穴 上面礫・杭検出状況及び杭断面図 (S=1/40)

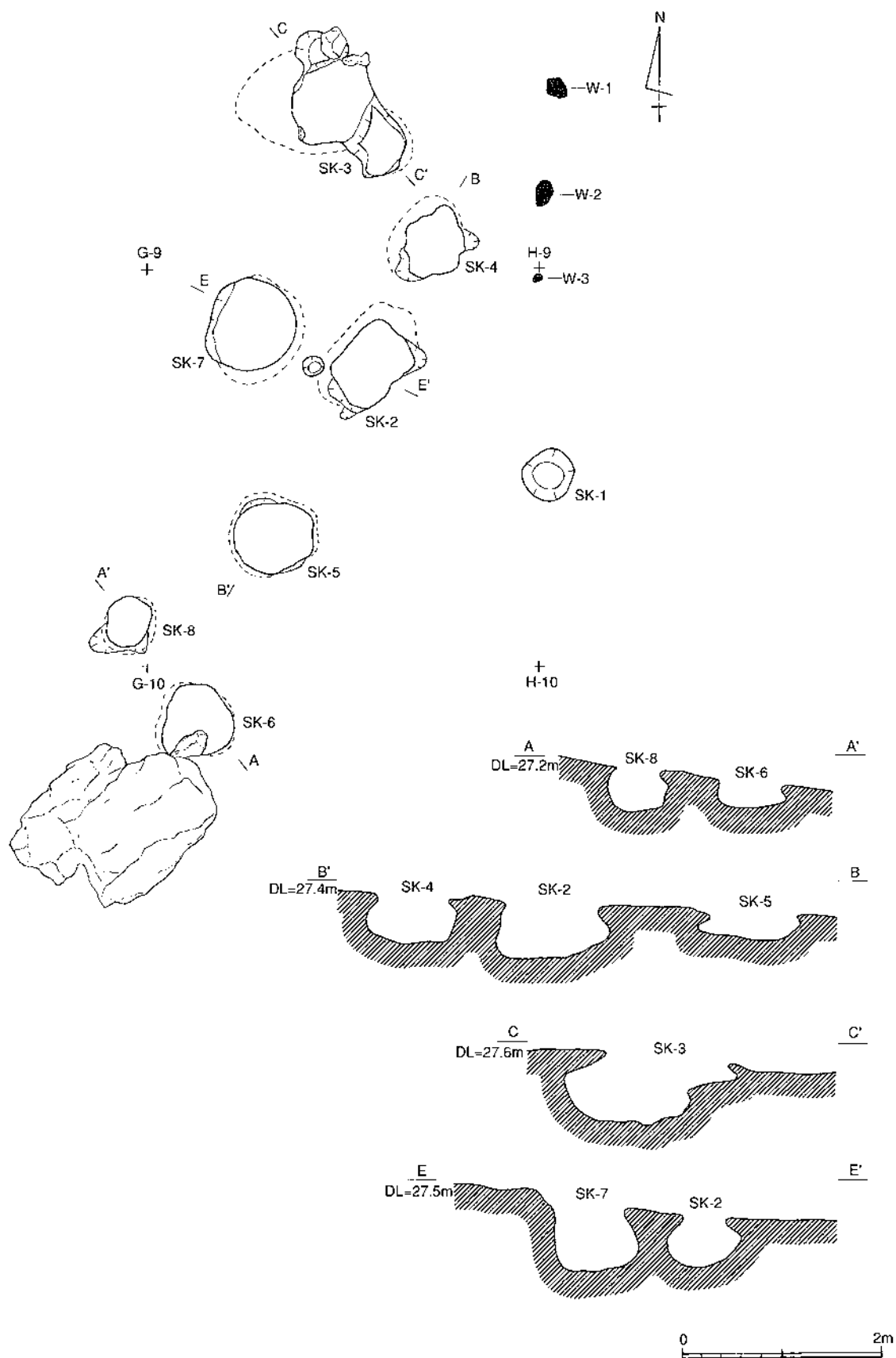


Fig. 69 貯蔵穴(SK-2~SK-8)完掘状況平面・エレベーション図 (S=1/60)

Tab.18 Ⅲ区 SK-2層別堅果類出土状況

SK 2	層名 (色調)	層名 (土質)	対応するサンプル呼称	サンプル重量 (g)	堅果類 (先端)	堅果類 (基部)	堅果類集中度
I層	灰オリーブ色	砂層	N-1、B-1	7,000	18	0	2.57
II層	黒褐色	腐植土層 (植物集中)	N-3、B-2	12,000	34	3	2.64
III層	灰色	粘土層	N-6、B-3	7,100	27	0	3.80
IV層	灰色	砂混粘土層	N-7、N-8、B-3-③、 B-3-④	7,900	37	1	4.68
V層	オリーブ灰色	砂層	B-4	27,850	60	2	2.15
VI層	褐色	粘礫土層	N-9、N-10、N-11、 B-5	63,500	105	5	1.65
VII層	灰褐色	砂層 (堅果類を少量含む)	N-12、B-6砂層	28,700	171	0	5.96
VIII層	褐色	砂層 (礫を若干含み、堅果類 集中)	N-13、最F層ドングリ集中、 B-7ドングリ集中	18,750	254	8	13.55
その他				71,400	284	121	3.98
合計				245,100	990	140	4.04

Tab.19 Ⅲ区 SK-3層別堅果類出土状況

SK 3	層名 (色調)	層名 (土質)	対応するサンプル呼称	サンプル重量 (g)	堅果類 (先端)	堅果類 (基部)	堅果類集中度
I層	緑灰色	砂層	1・2・4・10	9,980	83	0	8.32
II層	灰色	粘土層	11	1,470	0	0	0.00
III層	褐色	粘土層	3・7・8・9・12・14・ 15・16	26,510	35	0	1.32
IV層	黒褐色	腐植土層 (植物集中)	13	880	2	0	2.27
V層	褐色	粘土層	17・18・19・20・21	12,580	50	0	3.97
VI層	緑灰色	砂層	5・6・26	8,290	68	0	8.20
VII層	黒褐色	腐植土層 (植物集中)	22・23・24・25・30	127,600	455	140	3.57
VIII層	灰色	砂層	31	3,000	18	0	6.00
IX層	褐色	砂層 (堅果類集中)	32	31,000	480	116	15.48
X層	青灰色	粘土層		26,200	122	39	4.66
その他				73,200	241	81	3.29
合計				320,720	1,554	376	4.85

Tab.20 Ⅲ区 SK-4層別堅果類出土状況

SK 4	層名 (色調)	層名 (土質)	対応するサンプル呼称	サンプル重量 (g)	堅果類 (先端)	堅果類 (基部)	堅果類集中度
I層	灰オリーブ色	砂層	N-1、最土層	16,100	6	3	0.37
II層	黒褐色	腐植土層 (植物集中)	N-2	5,000	35	0	7.00
III層	灰色	粘土層	N-3	12,600	108	42	8.57
IV層	灰色	砂混粘土層	N-4	12,600	52	3	4.13
V層	オリーブ灰色	砂層	N-5	1,200	1	2	0.83
VI層	褐色	粘礫土層	N-6	4,100	1	0	0.24
VII層	灰褐色	砂層 (堅果類を少量含む)	N-7-1、N-7-2	8,700	9	7	1.03
VIII層	褐色	砂層 (礫を若干含み、堅果類 集中)	N-8北壁ざわ、西壁奥、最 下層	40,270	215	0	5.34
合計				100,570	427	57	4.25

Tab.21 Ⅲ区 SK-5層別堅果類出土状況

SK 5	層名 (色調)	層名 (土質)	対応するサンプル呼称	サンプル重量 (g)	堅果類 (先端)	堅果類 (基部)	堅果類集中度
I層	緑灰色	砂混粘土層	北端サンプル	1,600	7	1	4.38
II層	褐色	粘土層 (植物含有)	北端サンプル2	17,400	65	18	3.74
III層	褐色	粘土層 (植物集中)	北壁ざわ、西壁ざわ、 南サンプル2	39,650	108	42	2.72
IV層	緑灰色	砂層	北端サンプル4、南サンプル4	9,160	70	12	7.64
V層	青灰色	粘土層 (堅果類集中)	5 砂、南サンプルドングリ集中	37,340	247	15	6.61
合計				105,150	497	88	4.73

Tab.22 Ⅲ区 SK-6層別堅果類出土状況

SK 6	層名 (色調)	層名 (土質)	対応するサンプル呼称	サンプル重量 (g)	堅果類 (先端)	堅果類 (基部)	堅果類集中度
I層	オリーブ灰色	砂層	南サンプル1、北端サンプル1	14,300	21	5	1.47
II層	黒褐色	腐植土層 (植物集中)	南サンプル2、北端サンプル2	24,570	32	12	1.30
III層	オリーブ灰色	砂層	サンプル3底面へばりつき	23,500	100	3	4.26
合計				62,370	153	20	2.45

Tab.23 Ⅲ区 SK-7層別堅果類出土状況

SK-7	層名 (色調)	層名 (土質)	対応するサンプル呼称	サンプル重量(g)	堅果類 (先端)	堅果類 (基部)	堅果類集中度
I層	灰色	粘土層		0	0	0	0.00
II層	灰オリーブ色	砂礫層	II層	7,800	8	0	1.03
III層	灰色	粘土層	埋土III層	72,600	20	13	0.28
IV層	青灰色	砂礫土層	埋土IV層	72,250	106	13	1.47
V層	青灰色	粘砂礫腐植土混層	埋土V層	41,800	166	19	3.97
VI層	褐色	粘土層		0	0	0	0.00
VII層	灰色	砂層		0	0	0	0.00
その他				22,350	11	5	0.57
合計				216,800	311	50	1.43

Tab.24 Ⅲ区 SK-8層別堅果類出土状況

SK 8	層名 (色調)	層名 (土質)	対応するサンプル呼称	サンプル重量 (g)	堅果類 (先端)	堅果類 (基部)	堅果類集中度
I層	灰オリーブ色	砂層		0	0	0	0.00
II層	灰色	粘土層	埋土I	1,400	0	0	0.00
III層	灰色	砂礫混粘土層	埋土II	3,800	20	0	5.26
IV層	褐色	砂混粘土層	IV層、埋土IVドングリ集中	7,000	61	0	8.71
V層	灰色	砂層	IVV層、埋土V	7,100	71	0	10.00
不明				32,700	3	2	0.09
合計				52,000	155	2	2.98



Ⅲ区 貯蔵穴

B. 西側谷状地形谷際から微高地にかけて形成された遺構（ピット）（Fig. 70-2）

P-1～13

西側の谷状地形周辺では谷の落ち際にピット状の遺構が形成されていた。遺構の上面にはⅠ層の縄文中期土器を含む包含層が形成され、2層に分層される遺構形成面の下層にも同時期の遺物が含まれている。谷の東側の舌状の微高地の表土は10cm程度の厚さで、その下層が縄文土器包含層である。包含層形成時にこの地点はほとんど傾斜のないフラットな地形だったことがわかる。

表土除去後検出された不整形プランをSX-1として調査を進めたが、遺物の集中は認められるものの明確な掘方を把握することはできなかった。遺物集中地点と周辺の同層位の遺物についてはSX-1として採り上げたものの、調査途中で自然地形の浅い落込みであるという結論に達した。しかし、集中して出土する遺物や炭化物の様相は、ここが上方からの流れ込みによって形成されたのではなく、この地点周辺が生活面であったことを示している。SX-1として把握していた地点には縄文土器包含層第1層（J-I層）が堆積し、その残存状態が良好な地点として理解したのだが、このJ-I層を除去した下から直径12cmから45cm程度の規模のピット（P-1～13-Fig.70-2）を検出した。これらのピットは、舌状微高地では地山直上、谷状地形の落ち際には縄文土器包含層第2層（J-II層）上面という連続して捉えられる当時の生活面上に形成される。ピットの埋土は褐色小礫混粘土であり、炭化物の集中するピット（P-5・P-6）も確認されている。

壁溝も残されておらず、竪穴の痕跡もほとんど認められなかったため、SX-1として採り上げた土器も全て包含層J-I層出土遺物として取り扱い、図版の上でも一括して分類した。報告書作成の最終段階になって、SX-1の広がりやP-1～13の広がりとはほぼ重なり、東側の岩盤については上面の包含層も含めて後世の削平を受けたもので、西側については谷の浸食作用によって一旦削られた後岩盤と同じ黄褐色土が堆積したと考えるのが最も妥当な解釈であることに気付いた。

このP-1～13を含む遺構面が竪穴住居の床面である可能性を考慮する必要がある。西側谷状地形の遺構面については、柱穴を伴う生活面として捉えるのではなく、炬を伴う竪穴住居の床面として捉える方がより適切である。遺構面上面で検出された土器（SX-1として採り上げた土器）は一括性が高い資料だと考えるべきである。これらの土器については、縄文土器観察表の備考の部分にSX-1出土だと分るように記載することとし、それについての詳述は第V章第1節の中で行う。

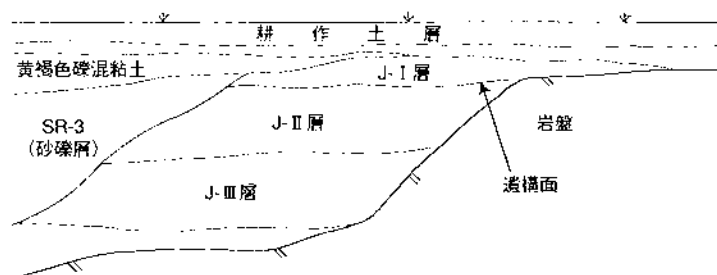


Fig.70-1 西側谷状地形谷落ち際 堆積状況模式図

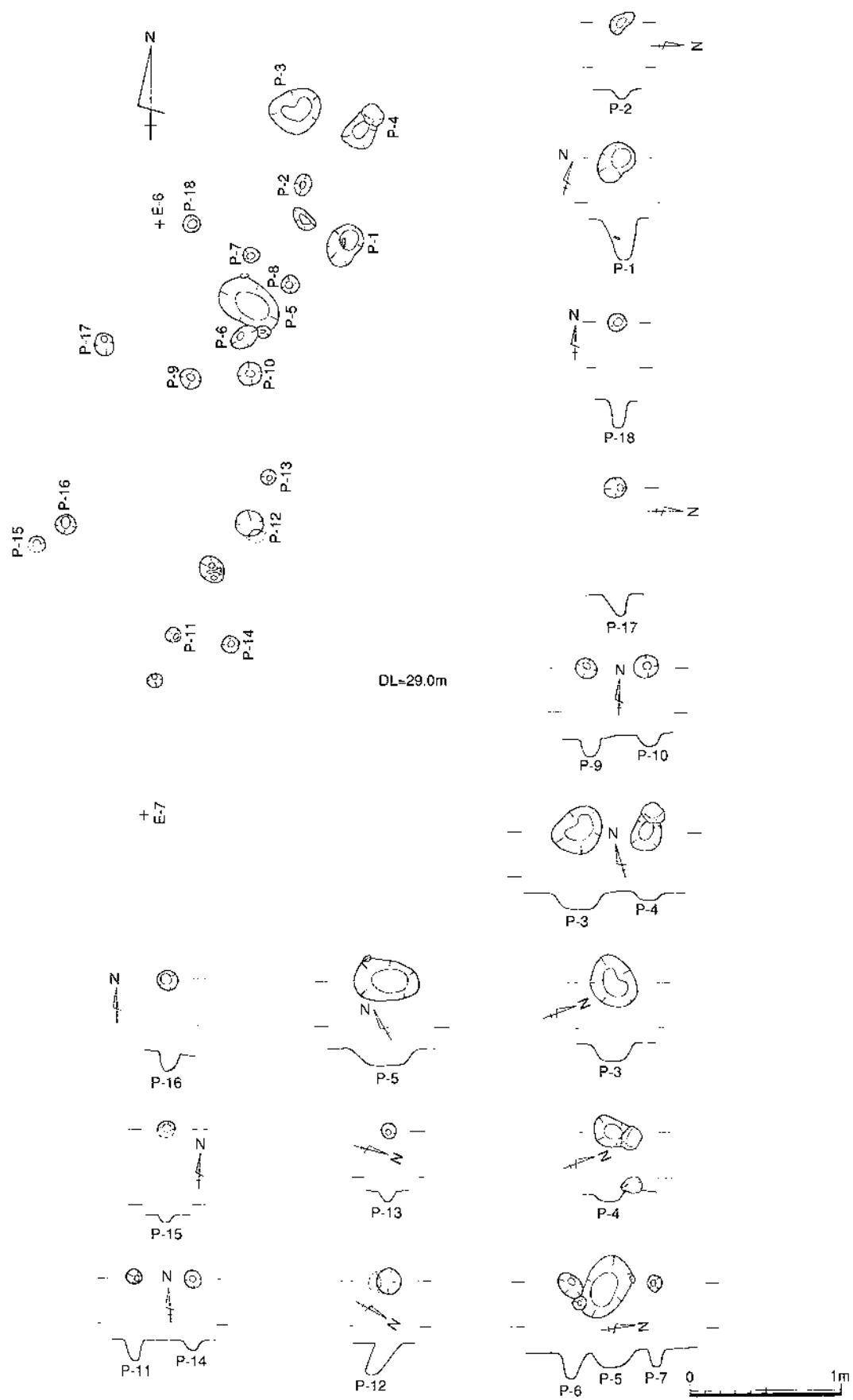


Fig. 70-2 P-1~13平面・エレベーション図 (S=1/40)

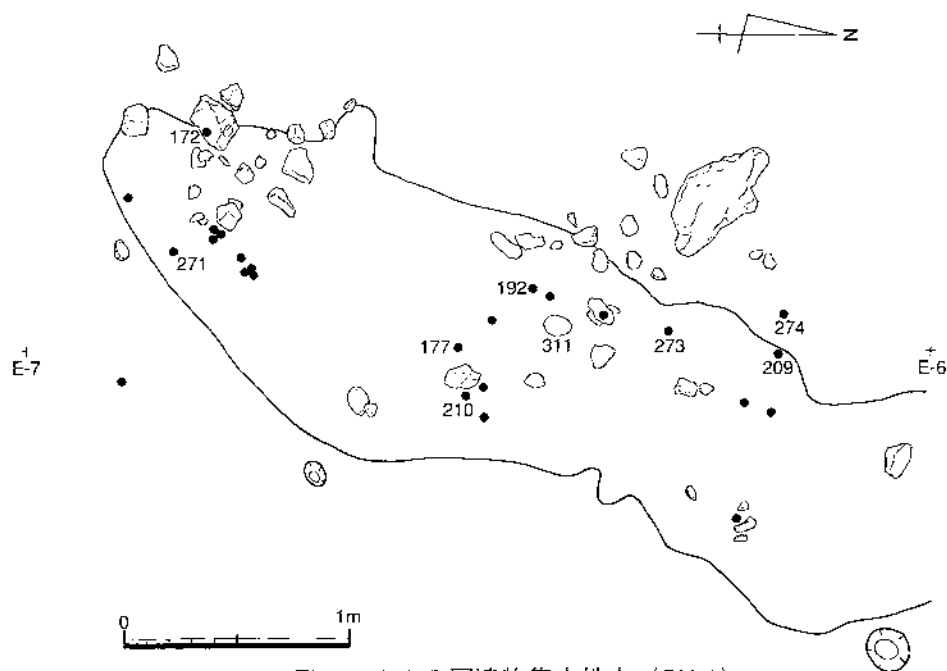


Fig.70-3 J-I 層遺物集中地点 (SX-1)

C. 包含層出土遺物 (Fig. 71~Fig. 79)

縄文時代中期の出土遺物として、縄文土器約2,500点、石器53点、貯蔵穴から出土した堅果類・植物遺存体・網代などが挙げられる。この中で、縄文土器2,200点、石器20点あまりがJ-I層~J-III層として設定した包含層中から出土している。なお貯蔵穴周辺で遺構直上に堆積した地層をJ-IV層として土器集中地点の遺物採り上げを行ったが、土器はSK-3の上面で検出されたのみである。J-IV層はSK-3上面構成礫中に堆積した粘土層で、J-IV層出土土器はSK-3に伴うものと理解して遺構出土遺物の項で扱った。またJ-I層として取り扱った土器のうち、D-6~E-6の遺物集中部(SX-1として採り上げ)から出土した遺物は住居跡出土の可能性はあるが、ここでは、他の包含層出土遺物とともに取り扱い、住居跡出土の可能性については後述する。

縄文土器

約2,200点の包含層出土遺物の中で図示可能遺物はFig. 71~76-171~291の121点である。遺物から層ごとの明確な時期差を読み取ることはできない。形態上の特徴から有文深鉢1類~4類、粗製深鉢に土器を分類した上で、その分類にしたがって提示する。底部は出土地点別に一括して提示し、形態的な分類は文中に記述する。出土地点、出土層位は観察表に示す。

有文深鉢(Fig. 71~75)

1類(Fig. 71・72)

無地に沈線で文様を施文するものの中で、口縁部に波頂部が認められないものを1類とする。1類として示す土器は、器表に条痕を残さずナデで仕上げていること、沈線を持つこと、口縁形態は波状又は平縁であり波頂部を持たないこと、という諸要素を満たす個体である。171・173・175など口縁部が波状を呈するものと174・176など波状を呈さないものがある。胴部小破片の無地に沈線を施文する個体についても1類としたが内面に条痕の残るものと内外面ともに条痕の認められないものがある。沈線のタッチは強く、沈線によって表面が盛り上がるものが多い。



Fig. 71 包含層出土遺物—繩文時代中期土器(1) (S=1/3)

図示した個体の中には小片が多く、文様のモチーフが明らかではないものが多い。その中で、171・173・174・175・176・178・179・184は個体の残存率が比較的良く、文様の様相が判る。171は口縁下に横位の微隆起帯を形成、隆起帯上位の2cmの幅を口縁部文様帯として列点文をめぐらせる。胴部には、一部逆L字型の方形区画文を沈線で施文する。確認できた範囲では区画文の横の連続は認められない。173は口縁下に2本の平行沈線を持ち、その下に縦位の短沈線を横方向に連続させる。平行沈線と直下の縦位連続沈線という類似するモチーフは174にも認められるが、異なる点は平行沈線の間に山形文が施文される(174)ことであり、口縁部と胴部の境界を区分する隆起部・屈曲部の位置も異なるなど相違点も多い。口唇に刻目を持つのは同じであるが、波状口縁(173)に対し、平縁(174)である点なども異なる点である。176・179など楕円の中に沈線を持つもの、175の逆S字状の蛇行沈線、178・184の横方向に細長い楕円の区画文を持つものもある。177は口縁部外面が肥厚し、肥厚部に2本の沈線を持つ。肥厚部はやや下垂している。

2類(Fig. 73)

波頂部を有するものを2類とする。無地に沈線で区画文を施文するもの(224・226・227・228)、沈線を持たないもの(229～231)、貝殻縁辺による擬縄文を有するもの(225)がある。波頂部は深鉢の口縁部周囲のピークを構成するものと思われるが、全体の形状を復元可能な個体は残っていない。224・226・227にはそれぞれ刺突による小孔が穿たれ、器面を飾っている。229～231は同一個体である可能性が高い。

3類(Fig. 74)

条痕地に沈線で文様を施文するものを3類とする。1類と同様、沈線による区画文等の文様を施文したものである。1類の中の小分類とした方がよいかもしれないが、外面に明瞭に条痕が残ることも一つの特徴を示すと考え、3類として設定した。図示したものは12点と少なく、小片が多いため文様のモチーフが確認できるものはほとんどない。233・234・237・238・241など沈線による区画文だと推定されるが、文様の全体形は不明である。234・241など細長い楕円の区画文が想定される。SK-3の項で報告したJ-IV層出土遺物は、大半が条痕地に沈線で施文され、3類に分類される土器である。

4類(Fig. 75)

磨消縄文を有するものを4類とする。縄文原体による縄文施文のものと貝殻腹縁による擬縄文を施文するものがある。縄文原体によるものをA、擬縄文をBとして分類した。4-A類は246・248～251、4-B類は245・247・252・253である。4-A類の縄文原体はいずれもRLであり、LRは一点も認められない。

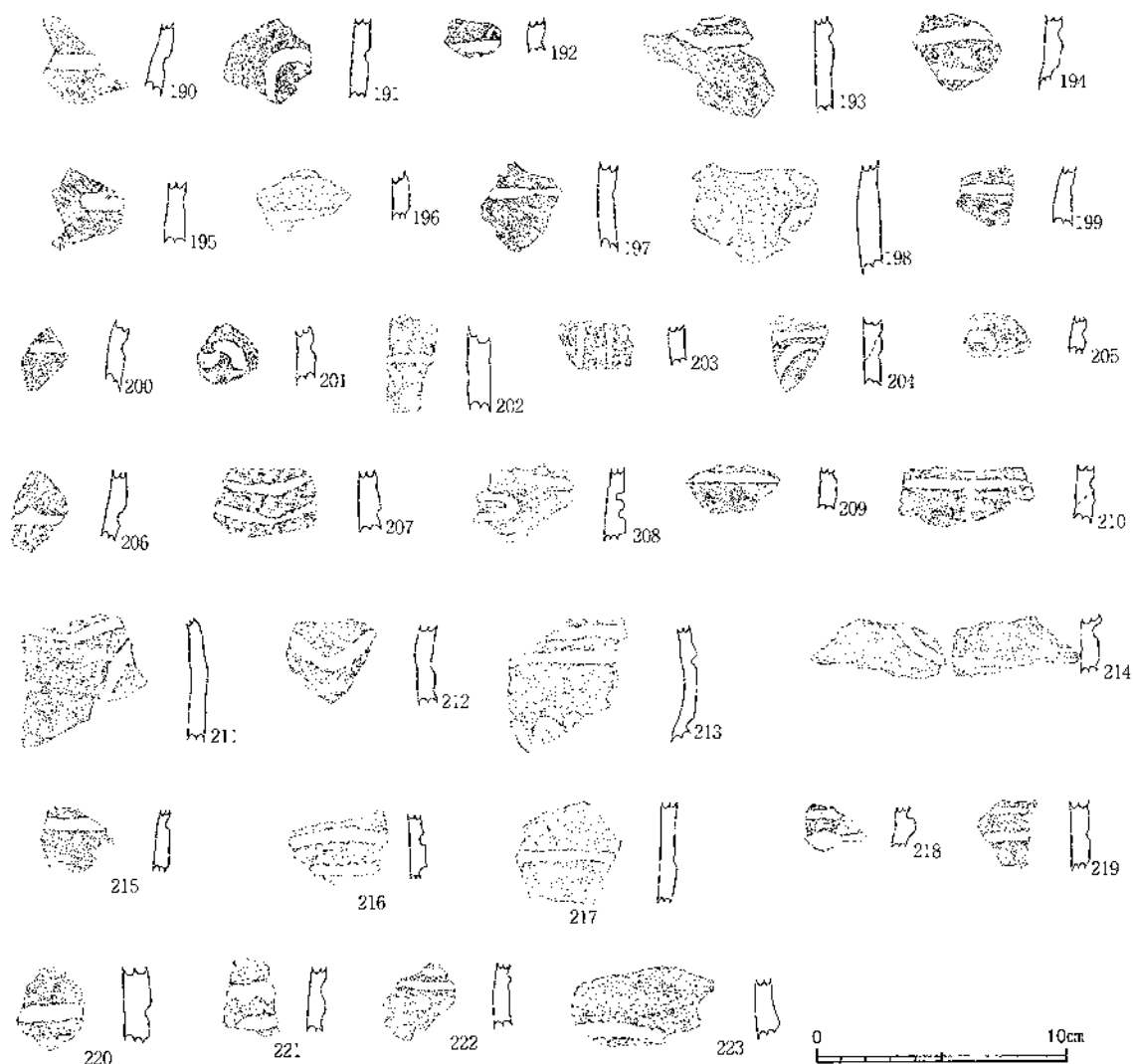


Fig. 72 包含層出土遺物—繩文時代中期土器(2) (S=1/3)



Fig. 73 包含層出土遺物—繩文時代中期土器(3) (S=1/3)

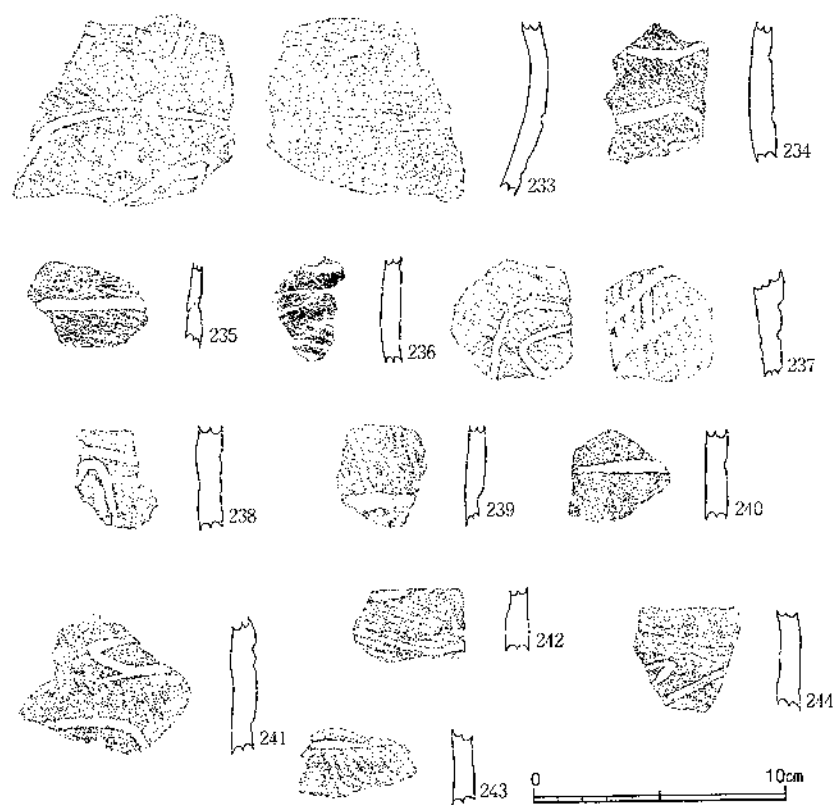


Fig. 74 包含層出土遺物—繩文時代中期土器(4) (S=1/3)

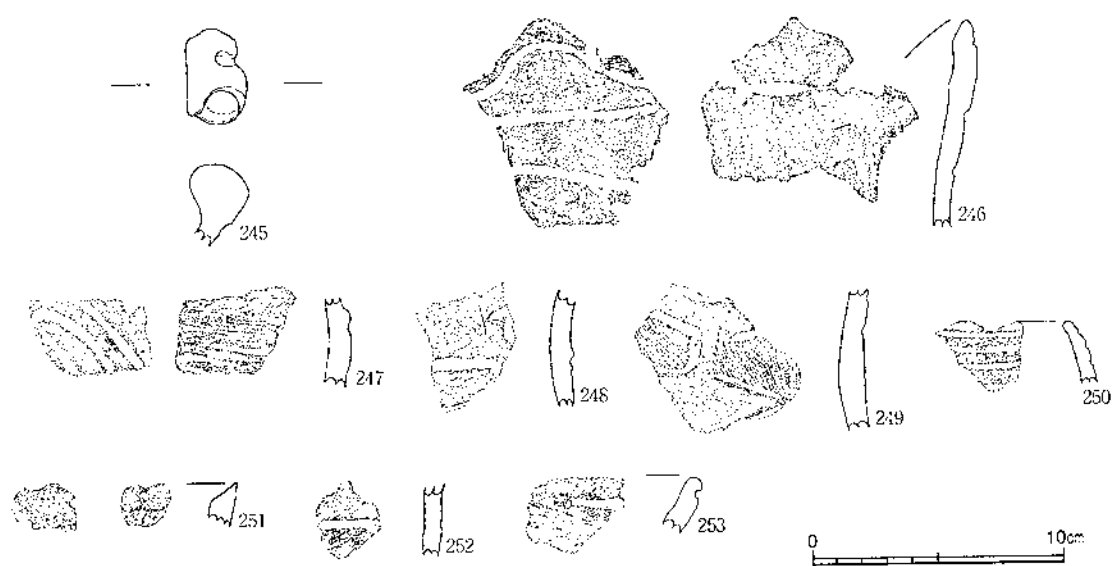


Fig. 75 包含層出土遺物—繩文時代中期土器(5) (S=1/3)

粗製深鉢(Fig. 76・77)

文様の認められない条痕地の深鉢を粗製深鉢として分類した。口縁形態の違いにより、以下のA～Dに分けられる。

- A. 外面肥厚するもの
- B. 内面肥厚するもの
- C. 口縁内外面の肥厚がなく、口唇が面をなすもの
- D. 口縁内外面の肥厚がなく、口唇を丸くおさめるもの

口縁の外面が肥厚するもの(254・258)・内面が肥厚するもの(255・261)・口唇が面をなすもの(256・257)・口唇を丸くおさめるもの(259・260・262・263・268・269)と、A:B:C:Dが、およそ1:1:1:2の比率である。実測可能な個体数が少なく、全体の比率とは異なるものの、およその傾向は反映されていると考えられる。奥谷南遺跡の縄文時代中期の粗製深鉢にはA～Dのバリエーションがあり、「口縁部が肥厚せず、まるくおさめる」形態が中心であるといえる。

なお、今回の出土資料中に口唇に刻目を持つ粗製深鉢は確認できなかった。

底部(Fig. 77・78)

胴部～口縁部へと連続して復元可能な個体はなく、口縁あるいは胴部との対応関係は不明である。底部周辺のみ限定した形態から分類することができるに過ぎない。平底・上げ底・底面に凹状のくぼみを持つもの・高台状の底部の4形態をA～Dとして分類した。

- A. 平底
 - 1. くびれ弱い
 - 2. くびれ強く、外底は外方へ拡張
 - 3. 特にくびれが強く、外底は大きく外方へ拡張する。
- B. 上げ底
- C. 底面に凹状の凹み部を持つ。底面外周と中央部が接地面となっている。
- D. 高台状の底部

実測した底部31点中、A-1は10点(270・272・274・279・282・288・289・294・295・297)、A-2は12点(271・273・276～278・281・283・284・287・292・293・296)、A-3は1点(299)、Bは4点(280・285・286・298)、Cは2点(291・300)、Dも2点(275・290)である。平底の土器が70%を越え、特に、やや強くくびれて外方へわずかに拡張する形態的特徴を持つものが中心となっている。A-3の底部外周が突出するように外方へ拡張するもの、Cの底面に凹状の凹み部を持つ底部、Dの高台状の底部は、それぞれ2点以下と割合は少ない。

包含層出土遺物から、当該期の土器には平底の底部が多数を占めることがわかる。量は少ないものの、底面に凹状に凹みを持つタイプは当該期に特徴的な底部だと考えられ、注意を要する。

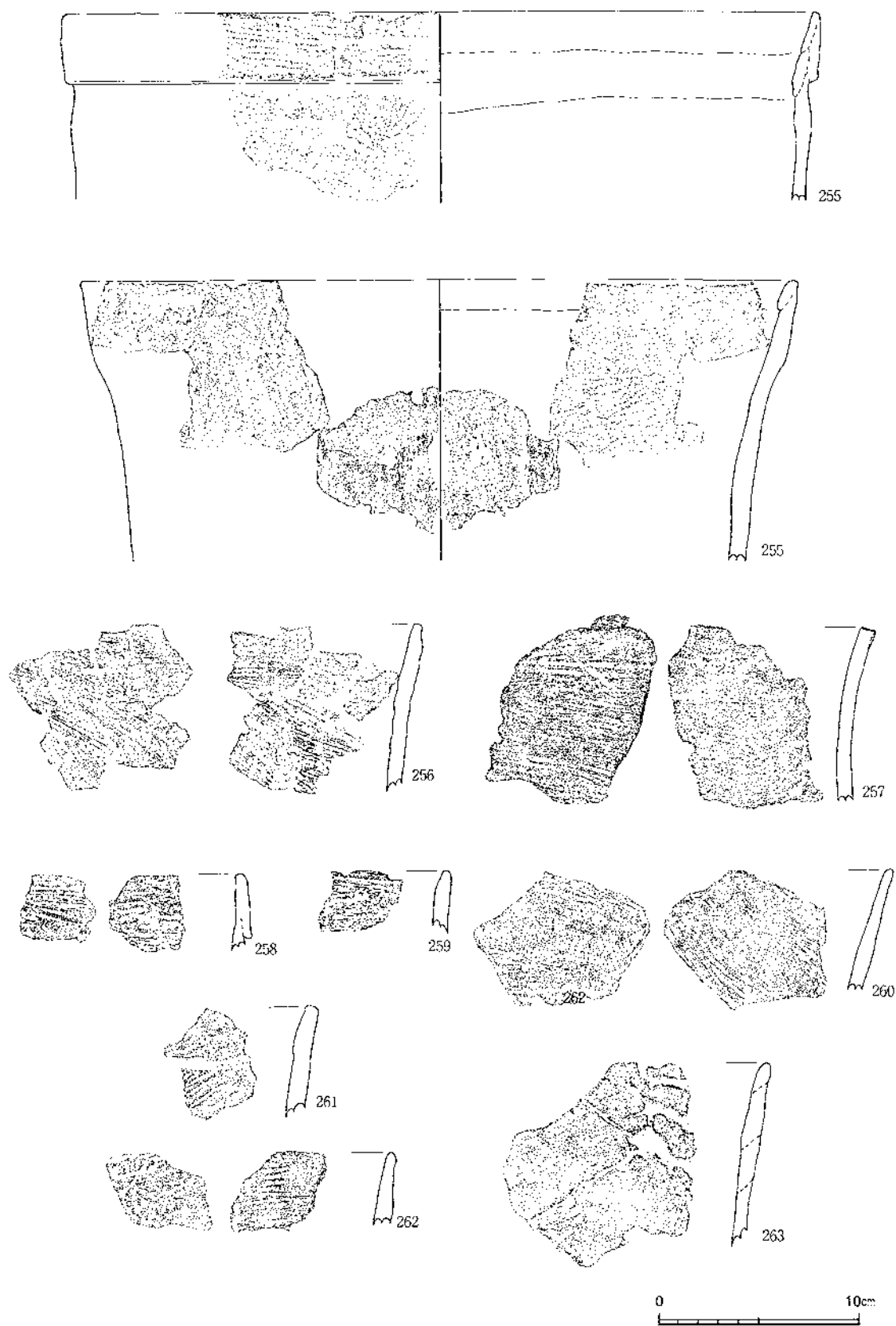


Fig. 76 包含層出土遺物—繩文時代中期土器(6) (S=1/3)

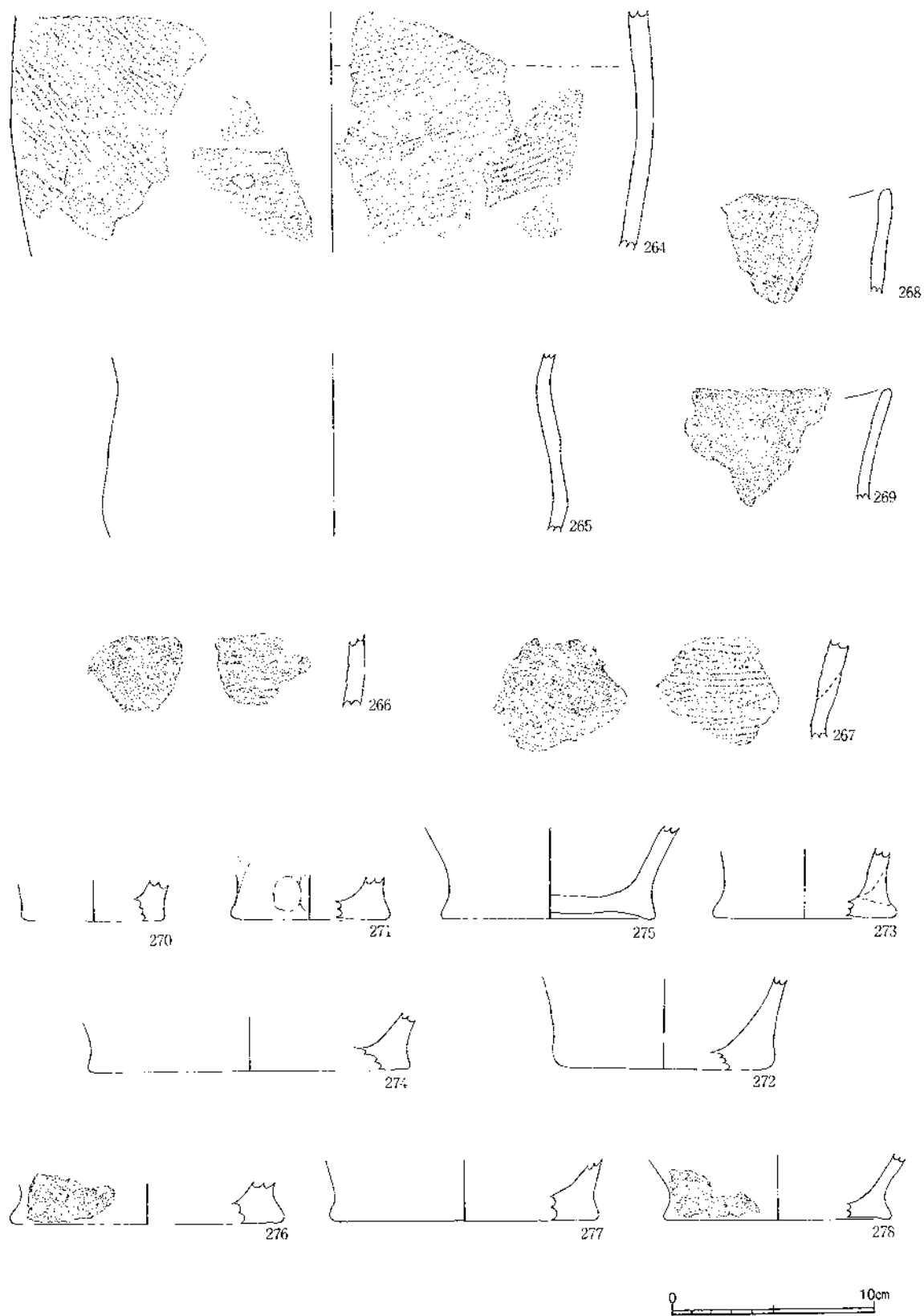


Fig. 77 包含層出土遺物—繩文時代中期土器(7) (S=1/3)

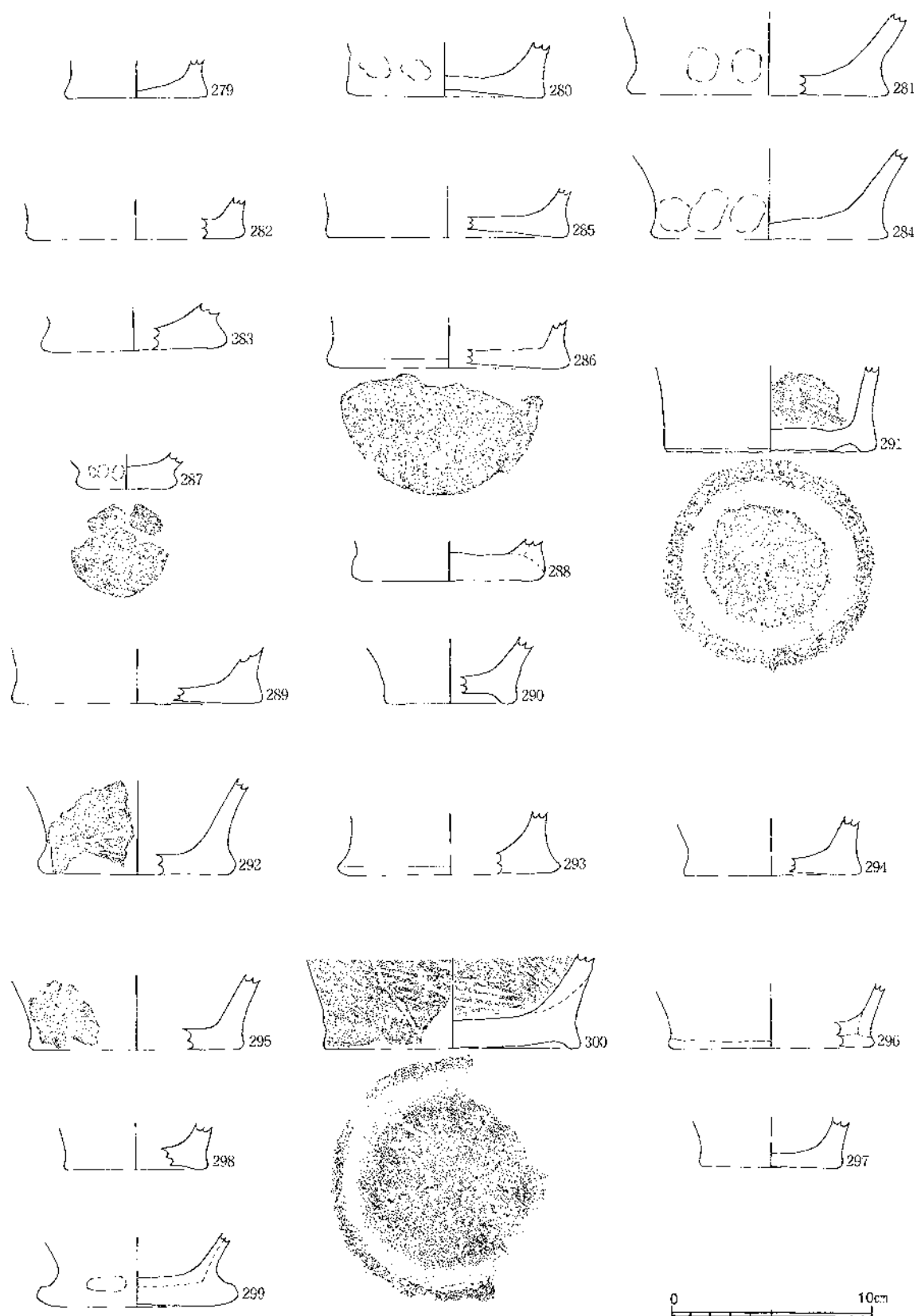


Fig. 78 包含層出土遺物—繩文時代中期土器(8) (S=1/3)

石器 (Fig. 79・80)

包含層出土の石器としては、石鏃2点(301・302)、楔形石器1点(303)、磨製石斧2点(304・305)、石錘1点(306)、叩き石・凹み石8点(307~314)が挙げられる。石質・特徴は観察表の通りであるが、石鏃はサヌカイト、楔形石器はチャート、磨製石斧は蛇紋岩(305)及び緑色片岩(304)、叩き石・石錘は307の棒状叩き石(緑色片岩)以外は砂岩と、器種に応じた石材利用が徹底している。

楔形石器は南四国では従来、明確に認識されていなかった器種である。1992年の木屋ヶ内遺跡の調査で、まとまって出土して以来注意されるようになった。楔形石器の用途には諸説あるが、303は石鏃の材料ではなく、骨・石器など何らかの加工に使用された道具だと考えられる。叩き石・凹み石類(307~314)は図示した遺物以外にも出土している。植物食利用を示しており、堅果類貯蔵穴との関連も推察される。

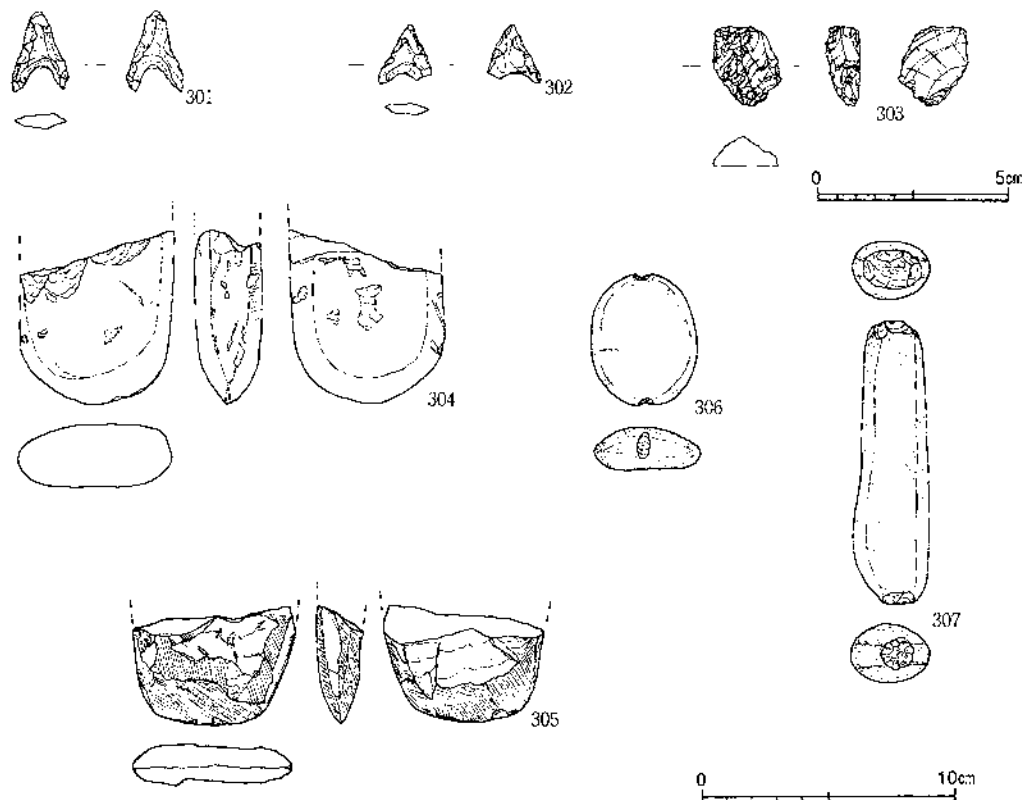


Fig. 79 包含層出土遺物—縄文時代石器(1) (S=1/2・1/3)

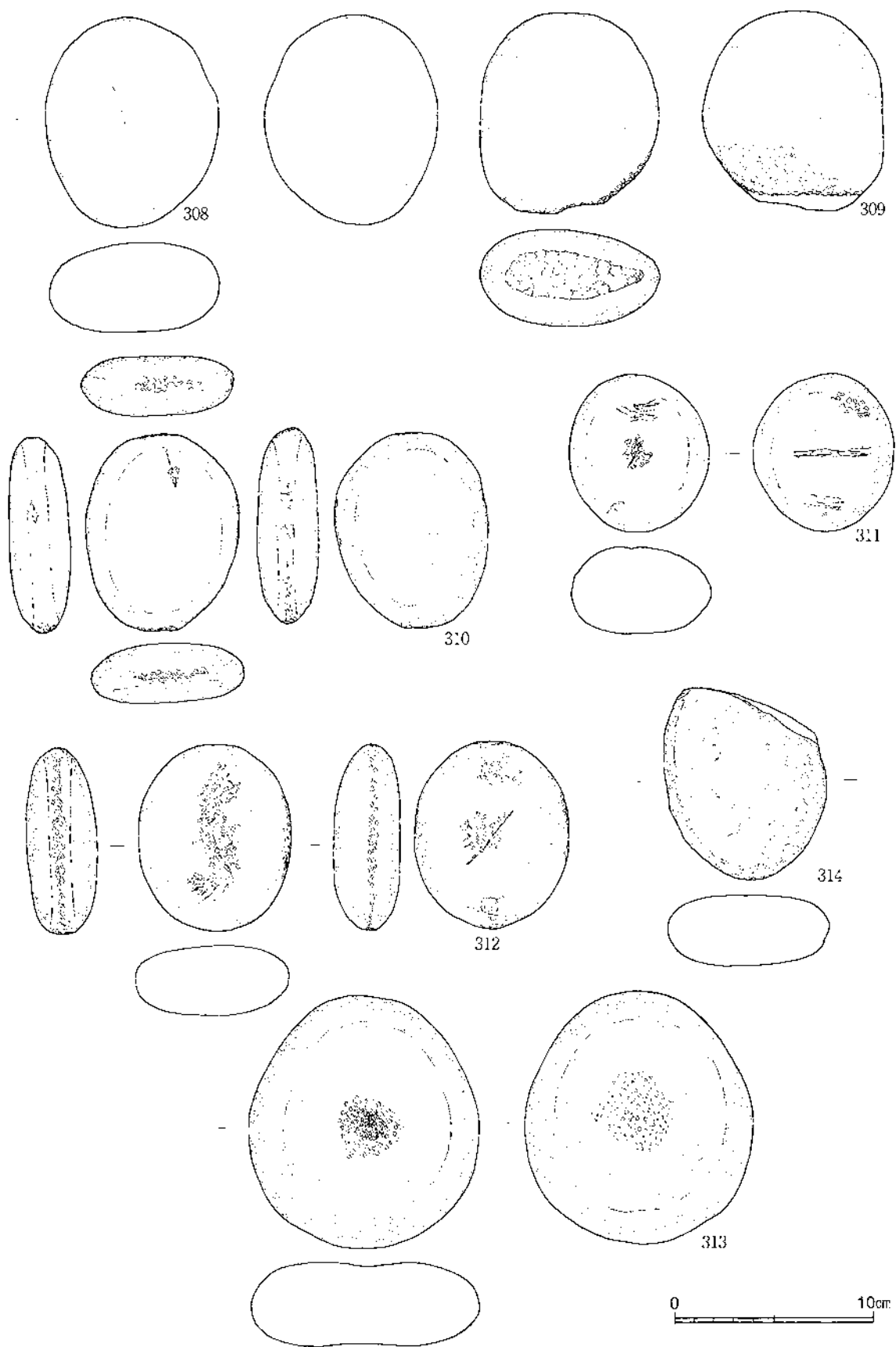


Fig. 80 包含層出土遺物—縄文時代石器(2) (S=1/3)

Tab.25 Ⅲ区 出土遺物観察表—縄文土器(1)

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量	分類	調査	特徴	胎土	色 内面	色 外面	備考
58	146	SK-4	深鉢		前期	ナデ。	内面に採付者。外面に押し引きによる刺突文。径5mmの小孔を穿つ。施成後穿孔で通孔と考えられる。	精選されており、細砂粒を含む。尖片あり。	褐灰色	黒褐色	
58	147	(B) II層	深鉢		前期	内面横方向の条痕。	押し引きによる刺突文。(左→右)	精選されており、細砂粒を含む。	灰黄色	灰黄褐色	
58	148	(H) No.1	深鉢		前期	内面に条痕。	押し引きによる刺突文。(左→右)	微細砂少量含む。	暗灰黄色	暗灰黄色	
58	149	(H) No.3	深鉢		前期	内面条痕のうちナデ、外面ナデ。	外面に押し引きによる刺突文。2列1単位の連続押し引き。	チャート砂粒多量含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
67	150	SK-3	深鉢			内外面条痕。	条痕地の深鉢。粘土帯接合部に段を生じる。段部は内外面交互に現われる。外縁接合。	チャート砂粒多し。特に赤色チャートを多く含む。	浅黄色	にぶい黄褐色	
67	151	SK-7	深鉢			内外面条痕。摩耗著しい。	条痕地の深鉢。粘土帯接合部に段を生じる。外縁接合。	チャート砂粒多し。	灰黄色	灰黄色	
67	152	SK 7	器種不明土製品			全面に指頭圧痕。摩耗著しい。	粘土帯を反時計回りに巻いて棒状に成型。	チャート砂粒多し。	浅黄色	灰黄色	
67	153	SK 7	深鉢			内面に条痕。それ以外は摩耗のため不明。	平底の底部。	チャート砂粒多し。	浅黄色	灰黄色	
67	154	SK 8里土IV層	深鉢			ナデ。	肥厚部があり、肥厚部に刺突による刻目を施す。洗滌で拭いた中に竹筴条の原体で刺突を施す。沈線のタッチは強く、内面がわずかに盛り上がる。沈線跡の上下を残す。	チャート砂粒多し。	にぶい黄褐色	黒褐色	
67	155	SK 8里土IV層	深鉢			不明。	平底。	チャート砂粒を多量に含む。	灰黄色	灰白色	
67	162	G-8 J-I層・J-20	深鉢		沈線	内面に条痕残る。	内面に沈線。口唇に刻目。	チャート砂粒含む。炭灰片少量。	灰黄色	灰黄色	
67	163	G-8 J-I層・J-14	深鉢		沈線	ナデ。	外面に沈線と貝殻線による縦縞文。	チャート砂粒含む。赤色チャート多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
67	164	G-8 J-I層・J-31	深鉢		沈線	不明。	沈線。	チャート砂粒多し。	灰黄色	灰黄色	
67	165	G-8 J-I層・J-26	深鉢		沈線	不明。	沈線。	チャート・長石を含む。	暗褐色	暗褐色	
67	166	G-8 J-I層・J-8	深鉢		沈線	内面条痕。	沈線。	チャート砂粒含む。炭灰片少量。	灰黄色	灰黄色	
67	167	G-8 J-I層・J-8	深鉢		沈線	内面条痕。	沈線。	チャート砂粒多し。	灰黄色	灰黄色	
67	168	G-8 J-I層・J-20	深鉢		沈線	内面に条痕残る。	内面が盛り上がるほどの強いタノチの沈線。	チャート砂粒含む。炭灰片少量。	灰黄色	灰黄色	
67	169	G-8 J-I層・J-33	深鉢		縦縞文	不明。	外面に貝殻線による縦縞文。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
67	170	G-8 J-I層・J-33	深鉢		底部	ナデ。	平底の底部。底面厚縁を外方へ拡張する。	チャート砂粒多量を含む。赤褐色の砂岩小礫含む。	灰白色	にぶい黄褐色	
71	171	D-6 J-I層・No.51~55	深鉢	口径17.6	1類	内面横方向のナデ。	口縁外面が若干肥厚し幅1.5cmほどの文様帯を構成。ヘラ状原体による列点文を施す。文様帯の下が隆起する。胴部外面は無地で沈線による区画文施文。	チャート砂粒やや多し。	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
71	172	J-I層No.4	鉢?		1類	不明。	外面に2条の沈線が残る。	チャート砂粒やや多し。	黄褐色	浅黄褐色	
71	173	C-7 J-II層No.57	深鉢		1類	不明。	口縁下5cmでわずかに屈曲し、屈曲部から口縁までが文様帯を構成する。口縁外面には断断リ字型の2条の横断沈線を巡らせ、その下に長さ2.0~2.8cmの縦位の沈線を連続して施す。屈曲部直位は無文。口縁は波状で、口径は棒状原体による刻目を施す。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
71	174	D-7 J-II層No.17	深鉢	口径28.4	1類	不明。	口縁に刻目あり。上方から刻目施文により、口縁内面肥厚。外面に沈線により文様施文。口縁下に2本の平行線の間に山形文を施す文様帯があり、その下は尖帯状にわずかに隆起、さらに下方胴部には縦位の沈線を連続施文。沈線のタッチは強く裏面が盛り上がる。	チャート砂粒多量を含む。	にぶい黄褐色	橙色	
71	175	J-II層 No.35	深鉢		1類	不明。	波状口縁。棒状原体により頂部1ヶ所に刻目を施す。外面に沈線で施文。口径に平行な直線と、逆S字状に延びる曲線。	チャート砂粒多し。	暗褐色	橙色	
71	176	(A) 中央検出前	深鉢		1類	内面は条痕のうちナデで仕上げる。外面不明。	口唇は面をなし内面がわずかに肥厚。外面に沈線で文様施文。	チャート砂粒多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	

Tab.26 Ⅲ区 出土遺物観察表—縄文土器(2)

F.g. No.	図版 番号	出土地点・層位	器種	法量	分類	調整	特 徴	胎 土	色 調		備考
									内面	外面	
71	177	集中Ⅱ1層	深鉢		Ⅰ類	内面ナデ。 外面条痕残ナデ。	口縁外面が粘土貼付により肥厚する。口縁外面にしっかりしたタッチで深い沈線による直線2条施文。	チャート砂粒多し。	暗灰黄色	にぶい褐色	
71	178	(A) Ⅱ層	深鉢		Ⅰ類	内面条痕後ナデ。	液状口縁。口唇は丸みを帯びた面をなす。外面に逆S字状に能行する沈線と径4mmの刺す突による小穴施文。	チャート砂粒多し。	褐色	にぶい褐色	
71	179	H-6 Ⅲ層	深鉢		Ⅰ類	不明。	口唇に刻目あり。口唇わずかに肥厚。外面に沈線で文様施文。	チャート砂粒多し。	にぶい褐色	にぶい褐色	
71	180	(A) Ⅲ層	深鉢		Ⅰ類	内面ナデ。	口唇は丸く収め、外面に沈線で文様施文。	チャート砂粒多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
71	181	(A) Ⅲ層	深鉢		Ⅰ類	内面に指頭圧痕残る。	外面に棒状厚体による沈線で文様施文。沈線のタッチは強く、沈線脇の土手を残す。	チャート砂粒多し。 赤色チャート多し。	浅黄色	浅黄色	
71	182	表採	深鉢		Ⅰ類	内面ナデ。	無地に沈線で施文。口唇は面をなす。	チャート砂粒やや多し。	にぶい褐色	にぶい褐色	
71	183	(A) Ⅳ層No.3	深鉢		Ⅰ類	内面条痕。	無地に沈線。	チャート砂粒やや多し。	灰色	にぶい褐色	
71	184	バンクBⅡ1層	深鉢		Ⅰ類	内外面ナデ。不明瞭。	無地に沈線で施文。厚托のため、残存状況不良。	チャート、長石を含む。	黒褐色	にぶい赤褐色	
72	185	(A) Ⅳ層No.5	深鉢		Ⅰ類	内面ナデ。	無地に沈線。	チャート、長石を含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
71	186	(C) Ⅳ層	深鉢		Ⅰ類	内面条痕。	無地に沈線。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
71	187	(C) Ⅳ層	深鉢		Ⅰ類	内面条痕後ナデ。	無地に沈線。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
71	188	(C) Ⅳ層	深鉢		Ⅰ類	不明。	外面に沈線。	チャート細砂粒多し。雲母片含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
71	189	(C) Ⅳ層	深鉢		Ⅰ類	内面ナデ。	外面に沈線。	チャート細砂粒やや多し。雲母片含む。	黒褐色	にぶい黄褐色	
72	190	(A) Ⅴ層No.3	深鉢		Ⅰ類	内面条痕、外面ナデ。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。赤色チャートが多い。雲母含有微量。	にぶい黄褐色	褐色	
72	191	(A) Ⅳ層No.18			Ⅰ類	内面条痕、外面ナデ。	外面に沈線。	精選された胎土。微細砂粒を含み、雲母・長石・角閃石が確認される。	にぶい黄褐色	褐色	
72	192	(A) Ⅳ層No.18			Ⅰ類	調整不明。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	灰色	にぶい黄褐色	
72	193	集中Ⅱ1層No.42			Ⅰ類	内面条痕、外面ナデ。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。雲母・長石・角閃石が確認される。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	194	D-6・Ⅱ層			Ⅰ類	調整不明。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	褐色	にぶい褐色	
72	195	D-6・Ⅱ層			Ⅰ類	内面調整不明。外面に条痕が観察される。	外面に沈線。	チャート砂粒多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	196	D-6・Ⅱ層			Ⅰ類	内面条痕後ナデ。外面不明。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。雲母・長石・角閃石を含む。	にぶい褐色	にぶい褐色	
72	197	D-7・Ⅱ層			Ⅰ類	内外面ナデ。	外面に沈線。	チャート砂粒少量含む。	褐色	褐色	
72	198	D-7・Ⅱ層			Ⅰ類	調整不明。	無地に沈線で文様施文。	チャート砂粒やや多し。	褐色	褐色	
72	199	D-7・Ⅱ層			Ⅰ類	内外面ナデ。	外面に沈線。	チャートの細砂粒を含む。長石・角閃石が観察される。	褐色	褐色	
72	200	D-7・Ⅱ層			Ⅰ類	調整不明。	外面に沈線。	チャート砂粒少量含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	201	D-7・Ⅱ層			Ⅰ類	調整不明。	外面に横S字状の沈線あり。	チャート砂粒少量含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	202	D-6・Ⅱ層			Ⅰ類	調整不明。	外面に沈線。	チャート砂粒多し。	灰白色	灰白色	
72	203	D-7・Ⅱ層			Ⅰ類	調整不明。	外面に沈線。	チャート砂粒含む。	褐色	褐色	
72	204	D-7・Ⅱ層			Ⅰ類	調整不明。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	褐色	褐色	
72	205	D-7・Ⅱ層			Ⅰ類	調整不明。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	206	D-7・Ⅱ層			Ⅰ類	調整不明。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	207	D-7・Ⅱ層			Ⅰ類	調整不明。	外面に沈線。	チャート砂粒を多く含む。赤色チャート多し。	にぶい褐色	にぶい褐色	
72	208	集中Ⅱ1層 No.20			Ⅰ類	内面ナデ。	外面に能行する沈線で施文する。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい褐色	

Tab.27 Ⅲ区 出土遺物観察表—縄文土器(3)

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法系	分類	調整	特徴	胎土	色調 内面	色調 外面	備考
						調整	特徴	胎土	内面	外面	
72	209	集中1J1層No.20			1類	内面条痕。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	棕色	
72	210	集中1J1層No.23			1類	内面ナデ、外面調整不明。	外面に沈線。	細砂粒を含み、チャート・長石・角閃石が確認される。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	211	(A) JⅢ層No.13			1類	内面条痕後ナデ、外面ナデ。	外面に沈線。強いタッチの沈線で、無縁に沈線のみ。	径1mm前後のチャート砂粒を多く含む。	にぶい棕色	にぶい黄褐色	
72	212	(A) JⅢ層No.3			1類	内面条痕後ナデ。	外面に沈線。裏が盛り上がるほど強いタッチの沈線。	チャート砂粒を多く含む。角閃石を含む。	棕色	にぶい黄褐色	
72	213	(A) JⅢ層No.35			1類	内外面ナデ。	外面に沈線で文様施文。平行線と波状に蛇行する沈線。沈線のタッチは強く、裏側が盛り上がる。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	214	(A) JⅢ層No.19			1類	内面条痕。	外面に沈線で文様施文。沈線跡の上下が残る。	チャート砂粒やや多し。	にぶい棕色	にぶい黄褐色	
72	215	(A) JⅢ層			1類	内外面ナデ。	外面に沈線で文様施文。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	216	(A) JⅢ層No.19			1類	内外面ナデ。	外面に沈線。	チャート砂粒多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	217	(A) JⅢ層No.19			1類	内面条痕後ナデ、外面ナデ。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
72	218	(A) JⅢ層No.105			1類	調整不明。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	にぶい褐色	にぶい褐色	
72	219	(D) JⅢ層			1類	調整不明。	対面に沈線。2 状残る。	1～2mm前後のチャート、赤石を多く含む。	にぶい黄褐色	棕色	
72	220	B-5・包含層			1類	内外面ナデ。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	黄褐色	
72	221	Ⅲ層No.14			1類	内外面ナデ。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい褐色	
72	222	C-7・No.1			1類	内外面ナデ。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。	にぶい褐色	にぶい褐色	
72	223	Ⅲ層No.14			1類	内外面ナデ。	外面に沈線。	チャート砂粒やや多し。長石を含む。	にぶい黄褐色	明黄褐色	
73	224	(C) JⅢ層	深鉢		2類	調整不明。	波頂部を有する深鉢。波頂部外面と側面に沈線による文様を施文。内面のピーク2ヶ所に刺突による少孔(直径4mm)を穿つ。	チャート砂粒やや多し。長石を含む。	にぶい黄褐色	にぶい褐色	
73	225	D6サブトレNo.1	深鉢		2類	内外面ナデ。	波頂部を有する深鉢。	1～2mmのチャート砂粒多し。赤色チャートを含む。	にぶい褐色	褐色	
73	226	(A) No.26	深鉢		2類	内外面ナデ。	波頂部を有する深鉢。波頂部外面と側面に沈線による文様を施文。内面のピーク2ヶ所に刺突による少孔(直径4mm)を穿つ。	1～2mmのチャート砂粒多し。少量の長石・雲母を含む。	灰褐色	にぶい黄褐色	
73	227	D6サブトレJⅢ層No.4	深鉢		2類	調整不明。	波頂部を有する深鉢。波頂部左側面の破片で側面に沈線による文様を施文。輪郭が2ヶ所に分離する。側面に刺突による少孔(直径4mm)を穿つ。	1～2mmのチャート砂粒やや多し。少量の長石を含む。	褐色	褐色	
73	228	JⅢ層	深鉢		2類	内外面ナデ。	波頂部を有する深鉢。波頂部右側面の破片で側面に沈線による文様を施文。	チャート砂粒多し。	にぶい褐色	にぶい褐色	
73	229	D7JⅢ層	深鉢		2類	内外面ナデ。	波頂部を有する深鉢。波頂部右側面の破片で側面に沈線による文様を施文。	チャート砂粒多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
73	230	D7JⅢ層No.17	深鉢		2類	内外面ナデ。	波頂部を有する深鉢。波頂部右側面の破片で側面に沈線による文様を施文。	チャート砂粒多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
73	231	D-7JⅢ層No.17	深鉢		2類	内外面ナデ。	波頂部を有する深鉢。波頂部右側面の破片で側面に沈線による文様を施文。	チャート砂粒多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
73	232	D4	深鉢		2類	内外面ナデ。	波頂部を有する深鉢。波頂部右側面の破片で側面に沈線による文様を施文。	チャート砂粒多く、雲母・角閃石を含む。	黒褐色	褐色	
74	233	(A) (SR)	深鉢		3類	内面条痕後ナデ。外面条痕。	条痕地に沈線。	チャート砂粒多し。	灰白色	にぶい黄褐色	
74	234	D-6 JⅢ層	深鉢		3類	内面条痕後ナデ。外面条痕。内面条痕。	条痕地に沈線で文様を施文する。	0.2～1mmのチャート砂粒を多く含む。雲母・長石をわずかに含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
74	235	(A) (SR) No.49	深鉢		3類	外面条痕後ナデ。	外面に沈線あり。	赤色チャート多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
74	236	(C) JⅢ層	深鉢		3類	内外面条痕。	外面に沈線あり。	チャートやや多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
74	237	(A) JⅢ層No.48	深鉢		3類	内外面条痕。	外面に強いタッチの沈線。	チャートやや多く含む。	明黄褐色	にぶい黄褐色	
74	238	(F) JⅢ層	深鉢		3類	内外面条痕。	外面に沈線あり。	チャート砂粒少量含む。	棕色	褐色	

Tab.28 Ⅲ区 出土遺物観察表—縄文土器(4)

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量	分類	調整		特 徴	胎 土	色 調		備考
						内 面	外 面			内 面	外 面	
74	239	バンク②JⅢ層No.3	深鉢		3類	内外面条痕。	外面に沈線あり。		チャート多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
74	240	SRJバンク②No.3	深鉢		3類	外面条痕。	外面に沈線あり。		チャート砂粒多量に含む。赤色チャート多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
74	241	SRJバンク②No.3	深鉢		3類	内面ナデ、外面条痕。	外面に沈線あり。		チャート砂粒多く含む。赤色チャート多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
74	242	SRJバンク②	深鉢		3類	内面ナデ、外面条痕。	外面に沈線あり。		チャート砂粒多く含む。赤色チャート多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
74	243	SRJバンク②	深鉢		3類	内面に指頭圧痕残る。外面条痕。	外面に沈線あり。		チャート砂粒多く含む。赤色チャート多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
74	244	SRJバンク②	深鉢		3類	内面ナデ、外面条痕。	外面に沈線あり。		0.5～1mmのチャート砂粒を多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
75	245	E5JⅠ層	深鉢		4類	ナデ。	肥厚する口縁。小片で沈線と貝殻破縁による模範文が観察される。磨消縄文。		チャート砂粒多く含む。赤色チャート多し。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
75	246	JN2層	深鉢		4類	内面ナデ、外面ナデ。	流状口縁で、2本沈線による磨消縄文。縄文原体はRL。		チャート砂粒多く含む。赤色チャート多し。	褐色	灰白色	
75	247	D6JⅠ層	深鉢		4類	内面条痕、外面ナデ。	貝殻破縁による模範文。磨消縄文。		チャート砂粒多く含む。	浅黄色	灰黄色	
75	248	JN2層	深鉢		4類	調整不明。	2本沈線による磨消縄文。縄文原体はRL。		チャート砂粒多く含む。赤色チャート多し。砂粒は0.5～4mm。	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
75	249	E5 包含層	深鉢		4類	調整不明。	縄文施文後沈線で区画文を施し縄文を磨消す。磨消縄文。縄文原体はRL。		チャート砂粒多く含む。	褐色	にぶい赤褐色	
75	250	E10 Ⅷ層	鉢		4類	ナデ。	縄文施文後沈線で区画文を施し縄文を磨消す。磨消縄文。縄文原体はRL。		チャートの細砂粒を多量に含む。	黒色	にぶい褐色	
75	251	JⅠ層	鉢		4類	ナデ。	口唇は強くつまみ出され、稜をなす。内外面に縄文施文。		チャート砂粒多く含む。	褐色	にぶい黄褐色	
75	252	E5JⅡ層	鉢		4類	ナデ。	外面に沈線と磨消文。		チャート砂粒やや多く含む。	にぶい赤褐色	褐色	
75	253	(A)JⅢ層	鉢		粗製深鉢	ナデ。	口縁部小片。外面に沈線と磨消文。		チャート砂粒多く含む。雲母・長石・角閃石を少量含む。	にぶい褐色	にぶい黄褐色	
76	254	C7JⅡ層	深鉢		粗製深鉢	薬面条痕後ナデ、外面横位の条痕。	口縁は外面に幅3～3.5cmの粘土糊の貼付により肥厚する。土器成型時の粘土糊の結は2cm前後。		0.5～4mm大のチャート砂粒を多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
76	255	バンクCJⅢ層	深鉢		粗製深鉢	内面横位の条痕、外面条痕後ナデ、口唇はナデにより仕上げる。	外面に1ヶ所、径6mmの刺突あり。口唇が内面に肥厚する。		0.5～4mm大のチャート砂粒を多く含む。	褐色	褐色	
76	256	(A)JN2層	深鉢		粗製深鉢	内外面条痕。	口唇はわずかに内傾する面をなす。		0.5～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
76	257	D6JⅡ層	深鉢		粗製深鉢	内外面条痕。	口唇は面をなし、刻み目を有する。		0.5～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
76	258	JⅠ層	深鉢		粗製深鉢	内外面条痕。	口唇は面をなし、口唇面に条痕が観察される。外面は幅3.5cmの肥が溝を穿つ。		0.5～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	褐色	褐色	
76	259	C7JⅡ層	深鉢		粗製深鉢	内外面条痕。	口唇は丸く収める。		0.5～1mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	明黄褐色	明黄褐色	
76	260	JⅡ層	深鉢		粗製深鉢	内外面条痕。口縁部後ナデ。	口唇は丸く収める。		0.5～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	浅黄色	浅黄色	
76	261	JN2層	深鉢		粗製深鉢	内外面条痕。	口唇は面をなし。		0.5～4mm大のチャート砂粒をやや多く含む。雲母・角閃石を少量含む。	にぶい褐色	明赤褐色	
76	262	JN2層	深鉢		粗製深鉢	内面条痕、外面条痕後ナデ。	口唇は面をなし。		1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	褐色	褐色	
76	263	バンク②JⅢ層No.4	深鉢		粗製深鉢	条痕後ナデ。	口唇は丸く収める。内傾縁合。		1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	明黄褐色	にぶい黄褐色	
77	264	バンク①JⅡ層	深鉢		粗製深鉢	内外面条痕。	胎部破片。		1～3mm大のチャート砂粒を多量に含む。	にぶい黄褐色	にぶい褐色	

Tab.29 Ⅲ区 出土遺物観察表—縄文土器(5)

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量	分類	調整	特 徴	胎 土	色 調		備考
									内面	外面	
77	265	(A) (SR) No.31	深鉢		粗製深鉢	調整不明。	胴部破片。	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。	にぶい黄棕色	にぶい棕色	
77	266	D 6J I 層	深鉢		粗製深鉢	内外面条痕。	胴部破片。	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。	灰黄色	灰黄色	
77	267	C 7J II 層 No.58	深鉢		粗製深鉢	内外面条痕。	胴部破片。	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。	棕色	にぶい黄棕色	
77	268	(A) (SR) J Ⅲ層 No.11	深鉢		粗製深鉢	内外面横方向のナデ、指頭圧痕が残る。	口縁部は液状を呈する。	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	にぶい黄棕色	にぶい黄棕色	
77	269	C-7 No.63	深鉢		粗製深鉢	ナデ。	口縁部は液状を呈する。	0.5~4mm大のチャート砂粒を多く含む。	にぶい棕色	にぶい棕色	
77	270	集中I J I 層 No.13	深鉢	底径 7.0	底部	調整不明。	平底。	0.5~1mm大のチャート砂粒を多量に含む。	にぶい黄棕色	棕色	SX 1
77	271	集中I J I 層 No.7	深鉢	底径 7.4	底部	外面に指頭圧痕が残る。	平底。	1mm前後のチャート砂粒を多く含む。	浅黄色	にぶい棕色	SX-1
77	272	D-6 J I 層	深鉢	底径 11.0	底部	調整不明。	平底。	チャート砂粒を多量に含む。	にぶい黄棕色	棕色	
77	273	集中I J I 層 No.14	深鉢	底径 9.0	底部	内外面ともナデで仕上げられる。	平底で底部外縁はつまみ出して外方へ拡張する。	チャート砂粒を多量に含む。長石を含む。	にぶい黄棕色	棕色	SX 1
77	274	集中I J I 層 No.36	深鉢	底径 15.6	底部	内外面条痕後ナデ。	平底で底部外縁はつまみ出して外方へ拡張する。	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	棕色	にぶい黄棕色	SX 1
77	275	集中I J I 層 No.39	深鉢	底径 12.8	底部	内面条痕。外面指頭圧痕。	わずかに高台状を呈する上げ底の底部。	0.5~6mm大のチャート砂粒を多く含む。	にぶい黄棕色	にぶい黄棕色	
77	276	JN層 No.48	深鉢	底径 12.8	底部	外面条痕後ナデ。	平底。	チャート砂粒を多く含む。	にぶい黄棕色	にぶい黄棕色	
77	277	(A) (SR) JN層	深鉢	底径 13.2	底部	調整不明。	平底。	チャート砂粒を多く含む。	黄棕色	棕色	
77	278	(A) (SR) JN層 No.44	深鉢	底径 12.8	底部	調整不明。	平底。	チャート砂粒を多く含む。	黄灰色	にぶい褐色	
78	279	バンク② JN層 No.6	深鉢	底径 6.8	底部	器表摩耗顕著。	平底。	チャート砂粒を多く含む。	灰白色	浅黄棕色	
78	280	(C) JN層 No.4	深鉢	底径 9.8	底部	内外面とも条痕後ナデ、指頭圧痕が残る。	上げ底。	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。	黄灰色	にぶい黄棕色	
78	281	(A) (SR) JN層 No.51	深鉢	底径 12.4	底部	外面条痕後ナデ。指頭圧痕残。	平底で底部外縁はつまみ出して外方へ拡張する。	チャート砂粒を多く含む。	灰白色	灰白色	
78	282	C-6	深鉢	底径 10.8	底部	調整不明。	平底。	チャートの細砂粒を多く含む。	浅黄色	浅黄色	
78	283	C 6	深鉢	底径 9.2	底部	外面条痕後ナデ。指頭圧痕残。	平底。	チャート砂粒を多く含む。	にぶい黄棕色	にぶい黄棕色	
78	284	(A) (SR) JN層 No.30	深鉢	底径 11.6	底部	内外面条痕。外面底面付近に指頭圧痕残る。	平底の底部。底部外縁は外方へつまみ出され、拡張する。	チャート砂粒を多く含む。赤色チャートが多く認められる。	灰白色	にぶい棕色	
78	285	(A) (SR)	深鉢	底径 12.0	底部	内面調整不明。外面条痕後ナデ。	わずかに上げ底気味の底部。体部は上方へ立ち上がる。外縁は外方へつまみ出す。	チャート砂粒を多く含む。	浅黄棕色	にぶい棕色	
78	286	客土	深鉢	底径 12.1	底部	器表の摩耗顕著で調整不明。	わずかに上げ底気味の底部。体部は上方へ立ち上がる。	チャート砂粒を多量に含む。	黄灰色	にぶい棕色	
78	287	C-7J II 層	深鉢	底径 5.0	底部	内外面とも条痕後ナデが残る。	径5cmほどの平底から、体部は内湾気味に立ち上がる。底部周縁のみの小片。	0.5~1mmチャート砂粒を少量含む。	褐色	にぶい棕色	
78	288	C-7J II 層 No.13	深鉢	底径 9.5	底部	内面条痕後ナデ、外面不明。	平底。外縁わずかに拡張。	チャート砂粒を多量に含む。	にぶい黄棕色	棕色	
78	289	D-6J II 層 No.2	深鉢	底径 12.4	底部	調整不明。	平底。外縁わずかに拡張。	チャート砂粒を多量に含む。	にぶい黄棕色	棕色	
78	290	C 7J II 層	深鉢	底径 6.4	底部	内面調整不明。外面条痕後ナデ。	高台状の底部。	チャート砂粒を多く含む。	灰黄褐色	灰黄褐色	

Tab.30 Ⅲ区 出土遺物觀察表一繩文土器(6)

Fig. No.	図 番 号	出土地点・層位	器種	法量	分類	調 整	特 徴	胎 土	色 調		備考
									内面	外面	
78	291	C 71 層 No.59	深鉢	底径 19.5	底部	体部内面条痕、底面ナデ、指頭圧痕残る。外面条痕、底面付近に指頭圧痕。	体部はわずかに開き気味に直立。底面外周が幅1cmの高台状(?)を呈し、その内側に環状のしっかりとした凹部を形成する。	1~4mmのチャート砂粒を含む。	にぶい褐色	にぶい黄褐色	
78	292	(A) 111層	深鉢	底径 9.8	底部	内面わずかに条痕が観察される。外面条痕後ナデ。	平底の底部で、外縁が突出(拡張)した後、体部は開き気味に上方へ立ち上がる。	1~2mmのチャート砂粒多く、雲母・長石の微細砂粒も含む。	にぶい黄褐色	褐色	
78	293	(A) 111層	深鉢	底径 11.2	底部	調整不明。	平底。外縁は外方へ拡張する。	0.5~5mmのチャート砂粒多く、長石粒も観察される。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
78	294	バンク② 111層 No.1	深鉢	底径 8.6	底部	内面条痕。外面調整不明。	わずかに上げ底気味。	チャート砂粒を多く含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
78	295	(A) 111層	深鉢	底径 10.4	底部	内外面条痕。	平底。	チャート砂粒多く、長石粒も観察される。	にぶい黄褐色	浅黄褐色	
78	296	(A) (SR) 111層	深鉢	底径 10.0	底部	調整不明。	平底。外縁は外方へ拡張する。	0.5~1mmのチャート砂粒を多く含む。	にぶい黄褐色	黄灰色	
78	297	バンクD 111層	深鉢	底径 7.0	底部	器表の摩耗著しく、調整不明。	平底。	0.5~3mmのチャート砂粒を多量に含む。	にぶい黄褐色	褐色	
78	298	H 6 バンク① 111層	深鉢	底径 7.0	底部	調整不明。	わずかに上げ底気味の底部。外縁は若干外方へ拡張気味。	0.5~2mmのチャート砂粒を多量に含む。	灰黄褐色	明赤褐色	
78	299	バンク② 111層 No.4	深鉢	底径 10.0	底部	内面わずかに条痕残る。外面条痕後指頭圧痕。	平底の底部。外縁部は外方へ強くつまみ出すことによって拡張する。	1cm前後のチャート砂粒を多く含む。	褐灰色	にぶい黄褐色	
78	300	バンク② 111層 No.3	深鉢	底径 12.8	底部	内面条痕、底面付近ナデ、指頭圧痕残る。外面条痕、底面付近に指頭圧痕。	高台状の底部で、底面外縁の高台の内側は凹状に強くくぼみ、円形の溝を構成する。	1~4mmのチャート砂粒を多く含む。	明灰黄色	にぶい黄褐色	

Tab.31 Ⅲ区 出土遺物觀察表一石器

Fig. No.	図版番号	出土地点		器械	法 量				石 材	特 徴
		調査区	所在地		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)		
67	156	Ⅲ	SK 4	石匙	4.4	2.6	0.5	5.9	サヌカイト	押圧剥離により刃部作形。縦板石匙でつまみは上端石寄りにつられる。
67	157	Ⅱ	SK 4	銅片	2.2	1.2	0.7	1.6	チャート	背腹両端方向同一。背面は連続剥離で、階段状剥離が認められる。
67	158	Ⅲ	SK-4	石匙未製品	2.4	2.1	0.6	2.2	チャート	押圧剥離により直線的な刃部を意図する未製品。
67	159	Ⅱ	SK-V	石鋸	2.4	1.7	0.4	1.1	サヌカイト	刃部は直線的で刃角は鋭角、基部挟りはやや深い。
79	301	Ⅲ	J1層・No.9	石鋸	2.1	0.9	0.4	0.5	サヌカイト	刃部は直線的で刃角は鋭角、基部挟りは深い。摩耗著しい。
79	302	Ⅲ・C 7	J1層・No.14	石鋸	1.5	1.3	0.3	0.4	サヌカイト	刃部は直線的で刃角は鋭角、基部挟りはやや深い。基部一部欠損。
79	303	Ⅲ	TR B	クサビ	2.2	1.6	0.8	3.2	チャート	背腹剥離方向は対面であり、クサビとして利用されたと考えられる。主要剥離面(腹面)を挟り、利片の形状を呈する。
79	304	Ⅲ・TRE	銅板・S-1	磨製石斧	(6.8)	6.0	2.5	(170)	緑色片岩	刃部を研磨して作出する。基部は折損。
79	305	Ⅲ	表探	磨製石斧	(4.7)	6.3	1.6	(73)	凝紋岩	側縁も含め、刃部全体を研磨して作出する。基部は折損。
79	306	Ⅲ・TRE	J1層・S 4	石錘	5.2	4.2	1.6	48.5	砂岩	扁平な凹隙を利用、長軸の両端をわずかに打ち欠く。
79	307	Ⅲ・パンク2	J1層・S-2	叩石	11.1	3.1	2.3	110	緑色片岩	棒状の叩石で、両端に敲打痕あり。
80	308	Ⅲ・C-7	J1層・No.18	叩石	13.5	8.7	4.5	615	砂岩	側縁にwすかに敲打痕が観察される。縁礫を利用。
80	309	Ⅲ	J1層・No.2	叩石	10.0	9.0	4.9	577	砂岩	側縁に敲打痕あり。縁礫を利用。
80	310	Ⅲ	J1層・S 10	叩石	9.9	7.7	3.0	331	砂岩	両端と側縁に敲打痕あり。扁平な縁礫を利用。
80	311	Ⅲ	J1層・No.2	叩石	7.9	7.0	4.5	317	砂岩	表面に顕著な敲打痕が認められ、凹状を呈する。裏面に敲打痕と縁未痕が残る。側縁に敲打痕あり。
80	312	Ⅲ	SR1・S 3	叩石	9.4	8.7	3.5	370	砂岩	基部・側縁ほぼ全面に敲打痕あり。表裏面共に中央に敲打痕が認められる。
80	313	Ⅲ・TRB	J1層・S-2	凹み石	12.6	11.5	4.2	970	砂岩	表裏面ともに中央部に敲打により凹状を呈する。
80	314	Ⅲ・TRH	No.7	叩石	9.2	8.1	3.5	388	砂岩	側縁に敲打痕あり。表裏面とも、全体に敲打痕が認められる。

(3) その他の時代の遺構と遺物

A. 遺構

杭列(Fig. 81)

全域の杭列を検出できたわけではないが、一部の石垣の下から2列の杭列を確認した。杭が打ち込まれていたのは粘土層であり、杭が打ち込まれた時、湿地であったと考えられる。杭は石垣を支えるためのものであったとみられ、現代の石垣形成時にも同様の事例が知られている。

遺物が出土しておらず、正確な時期の比定は出来ない。

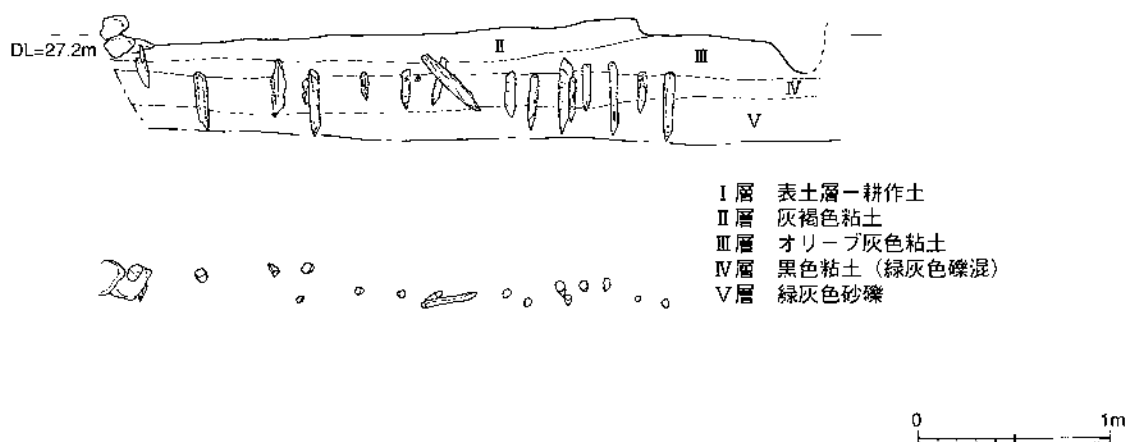


Fig. 81 杭列平面・断面図 (S=1/40)

B. 包含層出土遺物(Fig. 82)

弥生時代から近世にかけての遺物が出土している。遺物の出土量は少なく、総出土点数も400点にすぎない。その中で、図化可能遺物7点(315~321)についてFig. 79に示した。

315は弥生土器壺底部、しっかりした平底である。316は土師器壺底部、丸底であり古墳時代初頭に属するものと考えられる。317~319は須恵器で、320は瓦器碗である。断面三角形の高台を貼付し、見込にはヘラ磨きによる平行暗文が認められる。321は土師器碗であり、古代から中世への移行期のものだが、詳細な時期の特定はできない。

出土遺物には小破片が多く、図示できないものが多い。出土地点は、西側谷全域と東側谷の縄文時代中期の包含層よりも上面の包含層からで、堅果類貯蔵穴を検出した南側一帯(E区)の上層から出土している。図示し得た遺物以外で最も多かったのは、弥生後期末~古墳時代初頭に属するタタキ目をもつ土器で250点ほどが出土している。図示できなかったが、弥生中期末~後期初頭の特徴を示す土器も出土している。これらの弥生土器や古墳時代初頭の土師器は東側谷状地形の弥生時代以降に形成された包含層中から出土しており、西側の谷では認められない。量は少ないものの、須恵器の小破片など古代の遺物は東西の谷から検出されている。

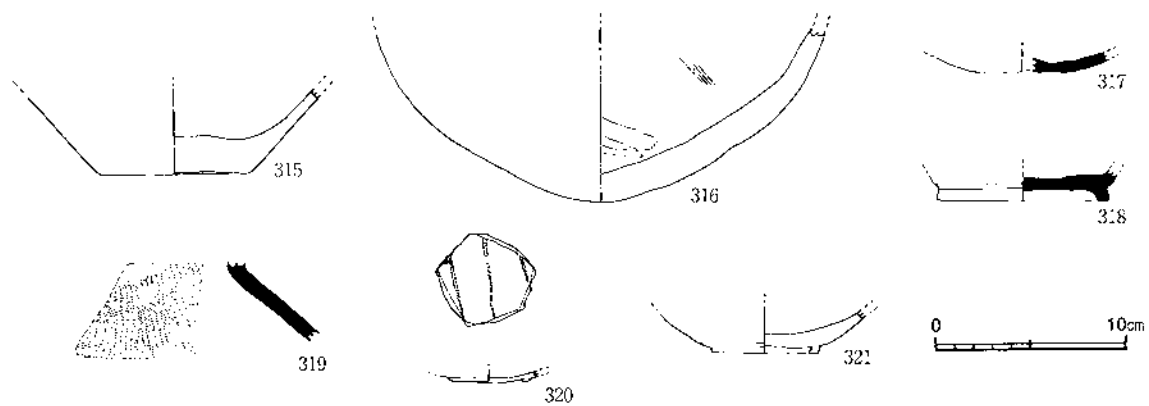


Fig. 82 包含層出土遺物—弥生時代以降 (S=1/4)

Tab.32 Ⅲ区 出土遺物観察表—弥生時代以降

Fig. 番号	図版 番号	出土地点 層位	種別	器種	法 容 (cm)				特徴 (形態・手法等)	胎 土	色 調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
82	315	I (B-6)	弥生土器	壺				7.8	平底。厚耗顯著で調整不明。	チャート砂粒を多量に含む。	浅黄褐色	浅黄褐色	
82	316	TR-A No.8	土師器	壺				1.2	丸底の底面。	チャート砂粒を多く含む。	浅黄褐色	浅黄褐色	古墳時代前期
82	317	II-E M層 No.15	須恵器	坏					小片。外面回転ケズリ。	精選された胎土。径0.5～1mmの白色鉱物を含む。	灰白色	灰白色	古墳時代
82	318	II-E M層 No.11	須恵器	壺				9.0	高台は断面台形でハの字状に開く。	精選された胎土。径0.5～1mmの白色鉱物を含む。	灰色	灰色	古代
82	319	II-E M層 No.19	須恵器	甗					胴部小片。外面平行タタキ後刷毛。	精選された胎土。	灰色	灰色	古代
82	320	II-F V層	瓦器	碗				4.4	見込に暗文。高台は扁平な蒲鉾状。	微細砂を含む。	黒色	灰白色	12C
82	321	III-F	土師器	碗				5.0	輪高台。底部切り離し技法不明瞭。	0.2～0.5mmの砂粒やや多く含む。	灰白色	灰白色	12C

調査の成果 追記

観察表の中での出土地点・層位の記載について

縄文土器の検出された地点は、東西の谷状地形落ちぎわの2ヶ所に大別される。東側旧谷状地形の落ちぎわに形成された包含層及び遺構出土土器、西側旧谷状地形落ちぎわに形成された包含層及び遺構面出土土器として採り上げたのだが、双方ともに上層からJ-I → J-II → J-IIIとしたため混乱が生じた。堆積順序は間違いないのだが層の内容は異なる。東側のJ-I～III層はシルト質粘土層に小礫が若干含まれる層であるのに対し、西側のJ-I～III層は小礫混じりの粘土層と、全く異なる層である。

観察表の中で、東側谷状地形についてはトレンチ状の調査区を(A)・(C)・(D)・バンクB・バンク①・バンク②などと標記する。旧流路ということでSR Jと記した地点も東側谷状地形に属する。縄文土器を検出した層も上層からJ-N層(粘土層)→J-I層 → J-II層 → J-III層 → J-IV層の順番となり、J-IV層はSK-3最上層である。

西側谷状地形は、集中1やC-5・C-6・D-5・D-6などのグリッド標記で示している。包含層上層からJ-I層 → J-II層 → J-III層であり、ともに礫混じり粘土層ではあるが、含有礫量及び色調が異なっており、J-I層は褐色～暗褐色、J-II・III層はにぶい黄褐色に発色している。J-II層上面には遺構が形成される。

追加実測土器(観察表)

条痕地で沈線を持つ土器(3類)、磨消縄文の土器(4類)など整理過程でのチェックミスにより図版に載せることができなかった土器が何点かある。その中で、6点について示しておきたい。

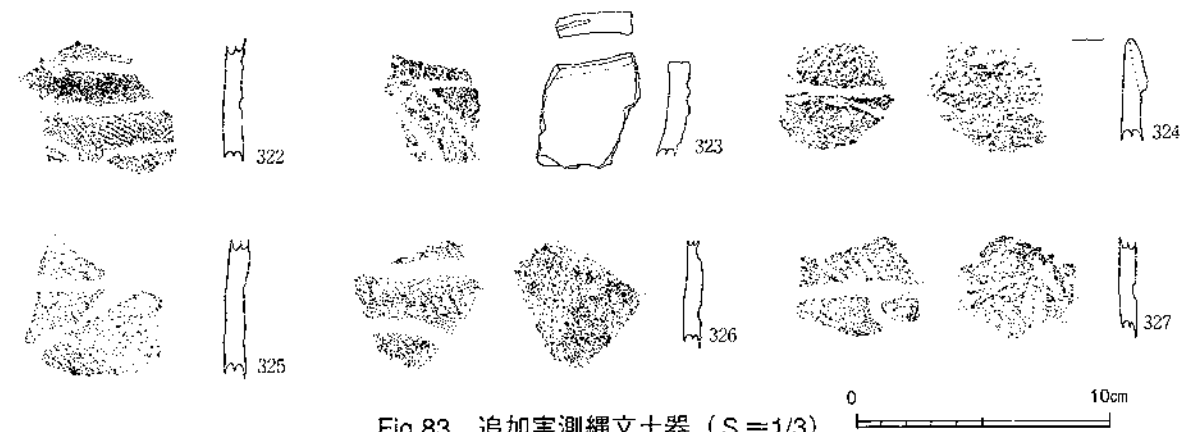


Fig.83 追加実測縄文土器 (S=1/3)

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	分類	調整	特徴	胎土	色調	
								内面	外面
83	322	D6・サブトレイ・J-II層	深鉢	有文深鉢4類	内外面ナデ。	磨消縄文。縄文原体はRI。管状原体による刺突文。	チャート砂粒やや多し。	にぶい黄褐色	にぶい褐色
83	323	D6・サブトレイ・J-II層	深鉢	有文深鉢1類	内外面ナデ。	無地に沈線で施文。波状口縁。	チャート砂粒やや多し。	黒褐色	暗褐色
83	324	バンク②・J-N層・No.5	深鉢	粗製深鉢	内外面条痕。	外面が肥厚する。	チャート砂粒やや多し。	灰黄色	にぶい黄褐色
83	325	バンク②・J-N層・No.3	深鉢	有文深鉢3類	外面条痕。内面不明。	条痕地に沈線による文様施文。	チャート砂粒多量に含む。	灰黄色	灰黄色
83	326	バンク②・J-N層・No.3	深鉢	有文深鉢3類	外面条痕。内面不明。	条痕地に沈線による文様施文。	チャート砂粒多量に含む。	灰黄色	灰黄色
83	327	バンク②・J-N層・No.3	深鉢	有文深鉢3類	外面条痕。内面不明。	条痕地に沈線による文様施文。	チャート砂粒多量に含む。	灰黄色	灰黄色

Tab.33 追加実測縄文土器観察表

第5章 奥谷南遺跡Ⅰ～Ⅲ区調査のまとめ

1994年度奥谷南遺跡Ⅰ～Ⅲ区の調査の成果について、Ⅰ区からⅢ区へと出土遺物・遺構について調査区ごとに4章調査の成果の項で報告した。Ⅰ区からは弥生中期末～後期初頭の高地性集落と近世初頭の需墓を含む土坑墓、Ⅱ区からは弥生後期末の丘陵上に構築された土坑墓群、Ⅲ区からは縄文中期末を中心とした時期の縄文土器と堅果類を含む貯蔵穴が検出されている。ここでは、縄文時代、弥生時代中期末～後期初頭、弥生時代後期末、近世の4時期に分けて遺構・遺物について時期ごとに若干の考察を交えながら調査の成果をまとめる。

第1節 縄文時代

縄文時代の遺構・遺物はⅢ区東西の旧谷状地形から検出された。(本来、遺構名は例えば「Ⅲ区SK-1」等と呼称しなければならないが、以下の遺構は、すべてⅢ区に属するものであり、「Ⅲ区」を省略して記述する。)

1. 縄文時代前期

縄文時代前期の遺物として、包含層及び貯蔵穴から出土した前期初頭の羽鳥下層式土器(Fig.57-146～149の4点)が挙げられる。高知平野では、近年の空港拡張・高速道路建設等による大規模調査によって徐々に遺跡数が増加しているとはいえ、縄文時代遺跡の調査例はまだまだ少なく、前期の資料が確認されたのは高知市チドノ遺跡^①、南国市栄エ田遺跡^②に次いで3例目となる。いずれの遺跡からも数点の小破片(ともに前期初頭の羽鳥下層式土器)が出土した程度で、遺構を伴うものではない。1998年の田村遺跡群の調査で遺物包含層から羽鳥下層式土器が出土し^③、高知平野の縄文時代前期の遺跡は4遺跡となった。従来考えられていたように、高知県西部の森B式分布圏とは異なり、高知県中央部は羽鳥下層式の分布範囲で瀬戸内の影響下にあったようである。

高知平野ではないが、高知県中央部の四国山地、吉野川上流の段丘に立地する松ノ木遺跡からは前期を通じての土器型式が確認されており^④、土器とともに前期に属する2基の土坑も検出されている。また、物部川段丘上の土佐山田町林田シタノザ遺跡からも小片2点ながら前期に属する土器が確認されている^⑤。



Fig.84 高知平野及び周辺の縄文前期土器出土遺跡

2. 縄文時代中期

Ⅲ区で検出された遺物は大半が縄文時代中期に属する遺物である。当該期の遺構として7基検出された堅果類貯蔵穴とそれに伴う杭列、及び堅穴住居の床面の一部の可能性のあるピット群が挙げられる。

(1) 出土遺物—奥谷南遺跡出土の縄文中期土器について—

① 奥谷南遺跡出土の縄文時代中期土器の分類

今回の調査で出土した縄文土器について有文深鉢を1類～4類、粗製深鉢は口縁形態の違いによりA～D、底部は形状の違いでA～Dに分類した。小片ばかりで、細かく分けることのできない個体が多かったこともあるが、有文深鉢について、1類—無地に沈線、2類—波頂部を持つ、3類—条痕地に沈線、4類—磨消縄文、という分類基準で大きく分けたため、各類には全く異なるモチーフの文様を持つ土器が含まれることとなった。まず、モチーフがはっきりした有文深鉢(鉢)について検討し、それらの土器が所属する時期について考えてみたい。所属時期を比較する際に用いるのは、地理的に近接した瀬戸内地方の土器とし^{⑥)}、必要に応じて九州地方、近畿地方、東海地方との比較を行う^{⑦)}。

1類としたものは平縁あるいは波状口縁を持ち、無地に沈線だけで構成される土器だが、モチーフの分かるものについてはさらに細分し、1-A類～1-G類とする。

1-A類は171の1点のみである。口縁形態や口縁部文様帯が極めて特徴的であり、口縁下に文様帯が構成され、連続する列点文が施文される。171は器形及び口縁部文様帯の特徴から船元Ⅲ式E類と分類された沈線文土器に類似例が見出され^{⑧)}、香川県大浦浜遺跡XXⅠ類土器^{⑨)}と酷似する。しかし、胴部に方形の区画文を持つ点が決定的に異なっている。区画文の登場は、里木Ⅱ・Ⅲ式新段階以降であり^{⑩)}、少なくとも中期後葉以降に位置付けられる土器である。区画文の形状は高知県西部の下益野式土器(中津式併行)である窪川町仕出原遺跡出土の注口土器に類似しており^{⑪)}、胴部モチーフからみれば中津式直前に位置付けられる土器だといえる。171と船元Ⅲ式E類の一部の沈線文土器あるいは大浦浜XXⅠ類土器は近接した時期のものと考えられ、これらの土器は船元Ⅲ式併行ではなく、より新しい時期(中期後半以降)のものである可能性がある。

1-B類(173)は縦位の短沈線とその上方に2本の平行沈線を持つものである。波状口縁で文様帯の下で屈曲し、胴部は無文となっている。形状は成立期の中津土器に類似するが^{⑫)}、屈曲部下が無文である点など中期末の資料の要素も持っている。

1-C類(174)は縦位の短沈線と上方の2本沈線と沈線間を埋める山形文で構成され、胴部文様(縦位沈線)と口縁部文様の間は隆起帯で区画されている。沈線のタッチは強く裏側が盛り上がるほどであり、中期末に属する遺物だと考えているが、若干古くなる可能性(里木Ⅱ・Ⅲ式新段階以降)もある。

1-D類(175)は蛇行する沈線を有する土器である。

1-E類(176・179)は楕円の区画文の中に1条の沈線を持つもので、口縁下にも1条の沈線を有する。モチーフの全貌はわからない。

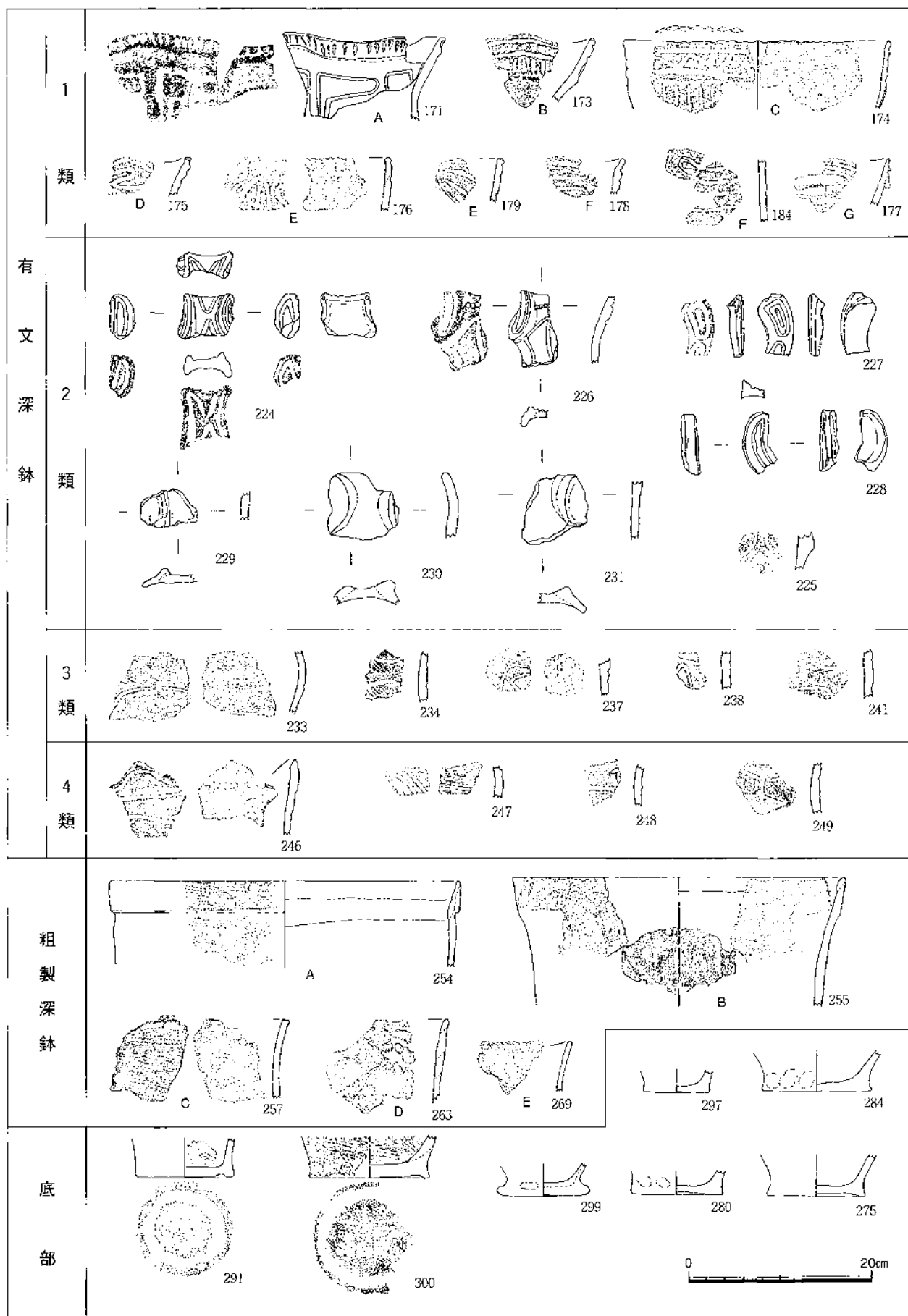


Fig.85 奥谷南遺跡出土縄文中期土器 (S=1/6)

1-F類は細長い楕円の区画文を持つもので、178・184・208が挙げられる。

1-G類(177)は肥厚し下垂する口縁を持つもので、口縁下に2条の沈線を有する。

2類については、本文中で分けた無地に沈線を持つもの(2-A類)・沈線を持たないもの(2-B類)・貝殻縁辺による擬縄文(2-C類)という3類に細分する。

2-A類は224・226・227・228の4点である。224については、沈線によるモチーフが奈良県布留遺跡出土の中期末の土器に酷似し¹¹³⁾、東海地方を主たる分布域とする咲畑・醍醐様式に含まれる土器¹¹⁴⁾とほぼ同一のものである。刺突による小孔で加飾する点など226も224に類似しており、ほぼ同じ時期、即ち中期末=中津式成立直前の遺物と考えられる。226には胴部の区画文も認められるが、確認できる範囲では横方向に連続しておらず、後期初頭の中津式ではなく中期末的な様相を残しているといえる。

2-B類は2-A類と比べ、やや大ぶりのつくりで、沈線および刺突等による加飾が全く認められない。この資料だけで時期を特定することはできないが、中期末の時間幅の中では捉え得る遺物である。

2-C類は擬縄文による磨消縄文を持つものであり、波頂部の存在により、2類としたが本来なら4類の磨消縄文に分類すべきかもしれない。時期について2-B類と同様である。

3類は条痕地の土器である。モチーフの分からないものが多いため、細分はしない。瀬戸内では条痕地の土器が里木Ⅱ・Ⅲ式古段階から存在する。その割合は里木Ⅱ・Ⅲ式期を通じて増加しており、これは九州の影響によるものであると理解されている¹¹⁵⁾。奥谷南遺跡の様相もこの瀬戸内の状況に準じていると考えたい。何点かの土器には区画文の存在が想定され、234・241には細長い楕円の区画文が推定される。区画文の登場を里木Ⅱ・Ⅲ式新段階とすると、3類の所属時期は中期後葉(里木Ⅱ・Ⅲ式新段階)~後期初頭(中津式)の時間幅の中で捉えられる。

4類は磨消縄文を持つ土器である。縄文原体によるものを4-A類、擬縄文によるものを4-B類とした。今回確認された縄文土器で縄文を持つ土器は4-A類の6点だけであり、全体に占める割合は極めて少ない。縄文原体は全てRIである。小片が多く、これだけで時期を特定することは難しいものの、246・247など区画文の存在から中期後半~後期初頭に位置付けられる。

粗製深鉢は口縁形態の違いにより、A類からD類に分類した。口縁外面が肥厚するものをA類、内面が肥厚するものをB類、口唇が肥厚せず面をなすものをC類、丸く収めるものをD類、波状口縁を呈するものをE類とした。粗製深鉢の口縁にはバリエーションがあり、1点だけだが刻目のある個体もあった。これらの粗製深鉢の特徴から所属時期を特定することはできない。しかし、仮に同一あるいは近接した時期の土器群だとすれば、全体に占める粗製深鉢の割合によって時期を類推できる。口縁の残る個体の個数比で換算すれば37.5%となり、土器粗製の中に粗製深鉢が一定の割合を占める時期以降の土器だといえる。

② 奥谷南遺跡中期土器の所属時期

有文深鉢(鉢)及び粗製深鉢について概観してきたが、これらの資料全体についていえることは、少なくとも中期後葉から中期末の時間幅の中で捉え得る資料であるということである。沈線文土器

のモチーフの中には船元Ⅲ式土器E類に、その祖形を求められるものがあるものの、資料中に船元Ⅲ式に併行するものはなく、里木Ⅱ・Ⅲ式古・中段階の資料も認められないことから⁽¹⁶⁾、里木Ⅱ・Ⅲ式新段階以降の資料だといえる。さらに、里木Ⅱ・Ⅲ式新段階に共存するという口縁が「強く内弯するものと直交気味のもの」の中で「強く内弯するもの」⁽¹⁷⁾については本資料中に確認できず、その点からすれば本資料は里木Ⅱ・Ⅲ式新段階よりさらに新しい時期に位置付けられる資料である。

区画文のモチーフから中津式直前であるとした1-A類(171)、形態・文様が酷似することから中期終末(咲畑・醍醐様式3様式b併行)⁽¹⁸⁾とした2-A類(224)など、時期が明確に特定できる資料は全て縄文時代後期直前の中期末(北白川C式4期併行)を示している。口縁形態、文様、調整等全てを総合的に判断すれば、奥谷南遺跡出土縄文中期土器は縄文時代中期末に位置付けられる。

バラエティに富む器形・文様など若干の時期差を持つ可能性も否定できないが、それでも九州の中尾田Ⅲ類土器→大平式土器⁽¹⁹⁾→並木式土器→阿方式土器、瀬戸内の矢部奥田式土器古段階→新段階⁽²⁰⁾、近畿の北白川C式土器1期～4期⁽²¹⁾、などの時間幅の中での時期差であり、中期末の範囲に納まる土器群であるといえる。成立期の中津式土器に近い特徴を備えた個体も存在しており、土器の多くは後期初頭に近接した中期末～中期終末に属していると考えられる。

③ 南四国(高知県)の縄文時代中期～後期初頭の遺跡と出土遺物

Fig.86に高知県の縄文時代中期の遺跡と高知平野周辺の縄文時代後期初頭の遺物を出土する遺跡について示した⁽²²⁾。ほとんどの遺跡において、中期の土器は数点単位の少量の出土であり、遺物・遺跡とも急増する後期のみならず、先行する前期と比較しても遺物出土量も少なく、遺跡規模も小さい。木村剛朗氏は西南四国の当該期の様相について、「中期は、土器からみる限り、その初頭に主体があり、後半の遺物はみられるものの少量であり、この時期に衰退の様相をみせる。」と指摘する⁽²³⁾。

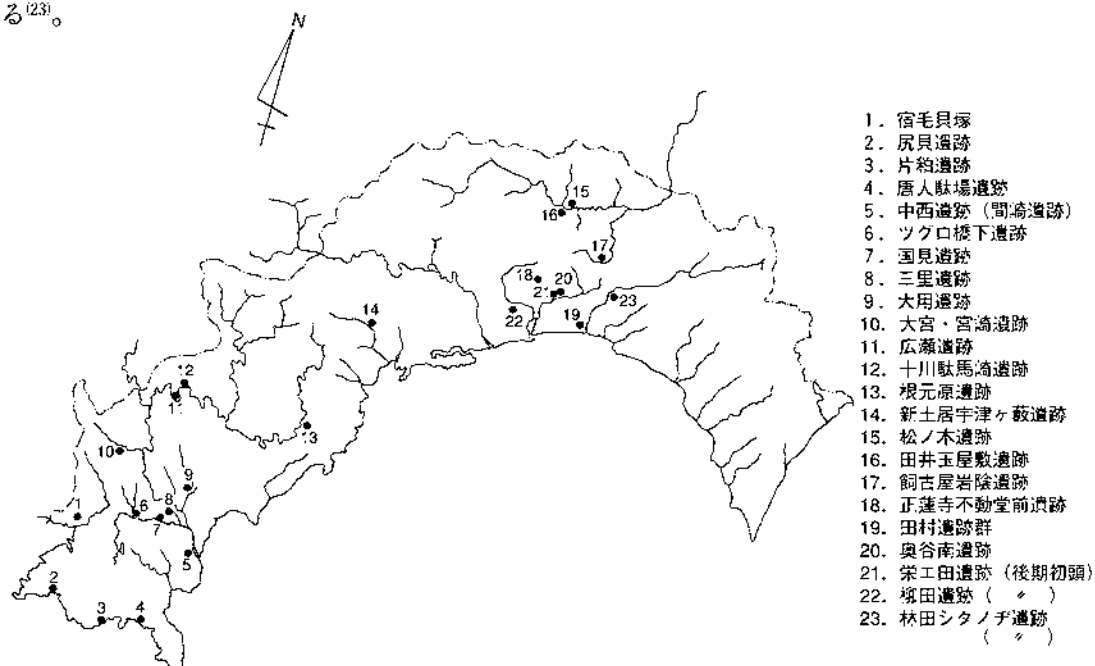


Fig.86 高知県の縄文時代中期の遺跡と高知平野の縄文時代後期初頭の遺跡

中期に続く後期初頭には中津式土器が西日本の広域に広がり、南四国における当該期土器出土遺跡数(Tab.34参照)も急増する。後期初頭の遺跡の急増を理解する上でも、直前の中期後半から中期末にかけての様相を把握する必要がある。しかし、残念ながら南四国では縄文中期の土器様相を明らかにできるほど、資料の蓄積は進んでいない。特に中期後半から末にかけての資料は皆無に等しく、周辺で編年作業の進んだ他地域の資料との対比によってのみ、出土遺物を位置付けることが可能な状況である。

Tab.34とTab.35を比較すると、高知県では中期全体を通じての遺跡数と後期初頭の中津式併行期の遺跡数がほぼ等しいことがわかる。しかも、ある程度まとまった出土量の後期初頭に対し、中期は大半の遺跡で数点程度と極めて少ない。近年の発掘調査で国見遺跡⁽²⁴⁾・松ノ木遺跡⁽²⁵⁾・田村遺跡群⁽²⁶⁾など比較的まとまって土器が出土する遺跡も見られるが、その大半が小片ばかりで、土器の器形やモチーフを把握することすら困難な状況である。確認された中期土器の多くは前半から中葉にかけての船元Ⅰ～Ⅲ式土器である。少ないながらも中期後半の里木Ⅱ・Ⅲ式段階の土器は検出されるが、遺跡数が急増する中津式直前～中期末に相当する遺物は全く報告されていない。

Tab.34 高知県の縄文時代後期初頭の遺跡

	遺 跡 名	市 町 村
1	下益野遺跡	土佐清水市
2	片粕遺跡	土佐清水市
3	三里遺跡	中村市
4	江師遺跡	大正町
5	広瀬遺跡	土和村
6	土川駄場崎遺跡	土和村
7	仕出原遺跡	窪川町
8	北川遺跡	東津野村
9	永野遺跡	葉山村
10	新上居遺跡	葉山村
11	庄町ヶ市遺跡	梶原町
12	野田遺跡	土佐市
13	柳田遺跡	高知市
14	松ノ木遺跡	本山町
15	林田シタノチ遺跡	土佐山田町
16	栄エ田遺跡	南国市

Tab.35 高知県の縄文時代中期の遺跡

	遺 跡 名	市町村	出土土器型式	出土量	発掘調査年次
1	宿毛貝塚	宿毛市	船元Ⅰ(宿毛C)	数点	1951・1981
2	尻貝遺跡	土佐清水市	船元Ⅱ	数点	1989
3	片粕遺跡	土佐清水市	船元Ⅱ(片粕C)	数点	1973
4	唐人駄場遺跡	土佐清水市	船元、里木Ⅱ	数点	表採
5	中西遺跡(岡崎遺跡)	中村市	船元Ⅰ(宿毛C)	数点	表採
6	ツグロ橋下遺跡	中村市	福田C	数点	表採
7	国見遺跡	中村市	船元Ⅰ・Ⅱ、里木Ⅱ	図示遺物83点	1993
8	三里遺跡	中村市	船元Ⅱ(片粕C)	数点	1976
9	大用遺跡	中村市	船元、里木Ⅱ	数点	表採
10	大宮宮崎遺跡	西土佐村	船元Ⅰ	数点	1996
11	広瀬遺跡	土和村	船元Ⅰ(広瀬C)・里木Ⅱ	数点	1963・1971
12	土川駄場崎遺跡	土和村	船元Ⅰ・Ⅱ	数点	1986・1987
13	根元原遺跡	窪川町	船元	数点	表採
14	新上居宇津ヶ敷	葉山村	船元Ⅱ・Ⅲ、里木Ⅱ	数点	1983
15	松ノ木遺跡	本山町	船元Ⅰ～Ⅳ、里木Ⅴ・Ⅵ	図示遺物25点	1992・1993
16	田井玉屋敷遺跡	土佐町	船元Ⅰ・Ⅱ	数点	1950
17	鯛吉屋岩陰遺跡	土佐山田町	船元Ⅱ	数点	1983
18	正徳寺不動堂前遺跡	高知市	船元Ⅰ	数点	表採
19	田村遺跡群	南国市	船元Ⅱ・Ⅲ	約100点	1998
20	奥谷南遺跡	南国市	中期末(北白川C式併行)	図示遺物152点	1994

断片的な資料の集積ではあるものの、南四国において中期初頭から中期後半まで連続する土器型式が、突如、中期末に断絶し、続く後期初頭に爆発的に遺跡数・遺物量が増加するということはないだろうか。環境の激変により南四国の中期末は無人の野になったのだろうか⁽²⁷⁾。そうではなく、やはり、中津式成立直前の南四国にも縄文中期の伝統を受け継ぎ、外来の要素を吸収し、中津式成立期の波を受けた集団が存在したと考える方が理に適っている。遺跡数急増の直前には、それを準備する受け皿となる母体が存在するはずであり、その活動の痕跡が残されているはずである。

奥谷南遺跡出土資料がこの中期末の空白を埋める時期のものだとしても、なぜ、中期末の資料は少ないのか。この理由は、「中津式」として報告された資料自体の中に求められるのではないだろうか。つまり、南四国で従来「中津式」として報告された土器の中には、一定量の中期末に属する土器群が含まれていると考えたい。

例えば、松ノ木遺跡である。この遺跡は、吉野川段丘上の居住好適地でかつ交通の要衝であったということもあり、縄文前期から晩期にかけての長期にわたる土器型式が確認されている⁽²⁸⁾。『松ノ木遺跡Ⅲ』においてⅢ群とされるのが中期の土器で、Ⅲ群土器には船元Ⅰ～Ⅳ式、里木Ⅱ・Ⅲ式が比定されている。Ⅳ群は後期初頭から後期後葉にかけての土器だとされており、中期末に相当する部分だけ土器型式が欠落している。この間、集落の本拠はこの地を離れていたのか、あるいは偶発的に土器が検出されなかったのか。そのいずれでもなく、Ⅳ群の中で中津式土器として比定された土器の中に中期末の土器も含まれている可能性を指摘したい。調査者自身によって、「中津式に類例が求められない」とされるA-3類やA-4・5類、そして沈線により施文されたA-1類の一部が中期末に属する可能性がある。そう捉えることで、松ノ木遺跡の中期末の空白が埋まり、中期から後期前半への連続がスムーズに説明できる。同様のことは、中期後半の資料と後期初頭の資料をともに出土する他遺跡にもいえ、中津式～後期初頭として分類された土器を再検討することによって、一定量の中期末の土器を抽出できる⁽²⁹⁾。

④ まとめ―奥谷南遺跡縄文時代中期土器の特徴―

奥谷南遺跡出土の中期縄文土器が時期的には中期末に所属する土器群であることを確認した。そして、南四国の中期末は空白の時代ではなく後期初頭以降の遺跡数急増を準備する重要な時期であり、当該期の遺跡も存在した可能性について指摘した。次に、当遺跡出土土器群の特徴をまとめてみたい。

- A. 瀬戸内地方と共通する特徴も認められるが、一方で近畿地方・東海地方など東方の影響が確認された。特に2-A類224は咲畑・醍醐様式3様式bの布留遺跡出土土器⁽³⁰⁾に酷似しており、ストレートに東方の影響を受けたものと思われる。
- B. 量的には少ないものの一定量の磨消縄文土器(4類)が存在する。しかし、縄文原体の使用が認められる土器は、磨消縄文土器の中でも6点のみであり、縄文を有する土器の全体に占める割合は3%未満と極めて少ない。
- C. 条痕地の土器が一定量存在する。沈線を持つ有文深鉢(3類)であり、胴部破片が多く粗製深

鉢と区別できないものもあり正確な割合は把握できないが、実測遺物の数から10%程度だと考えている。特に、J-IV層として採り上げたSK-3出土土器は全て条痕地の土器である。

D. 一定量の粗製深鉢が存在する。口縁の比率で37.5%を占めている。

E. 沈線のみで構成される土器が存在する。器形・モチーフはバラエティーに富んでいる。

171・174などある程度の器形を復元できる資料もある。II縁比率でいえば、全体の30~40%を占めることになる。

以上が、抽出し得た奥谷南遺跡縄文中期土器の特徴である。これらの土器が中期末に位置付けられる土器だとすれば、いずれの特徴も続く縄文時代後期初頭の中津式土器の中に確認できる特徴だといえる。中津式土器の成立を育む土壌は後期直前の南四国にもあった。

中津式の中に認められる粗製土器の増加は、早くから西日本一帯の広域で確認されるといわれる。後期初頭の中津式期の変化・器種構造の転換について、矢野健一氏は「後期初頭における器種構造の転換という現象を、九州北部から本州地方西部にかけての地域が共有し、かつその器種構造を系統的に晩期末まで一貫させていくという点」において画期的だとする⁽³¹⁾。

東日本から伝播した文化要素については、その出現が西日本において従来考えられていたよりも早まることが明らかになりつつある。今回の出土資料からも、東日本の文化要素の受容・器種構造の転換の萌芽が確認できる。奥谷南遺跡の縄文集団も西日本の他地域と同様の文化受容を中期末の段階で行っていた。

奥谷南遺跡縄文中期土器は、南四国縄文時代中期社会の一端を、特に中津式直前の様相を知り得る資料として重要である。

Tab.36 縄文時代中期後半の編年と高知県の遺跡

	九州地方の編年	瀬戸内地方の編年	近畿地方の編年	奥谷南遺跡 中期土器の時期	高知県中央部の遺跡	高知県西部の遺跡
中期中葉	春日式北手牧段階	船元Ⅱ式	+		松ノ木遺跡・田村遺跡・田井玉屋敷遺跡	同見遺跡・片粕遺跡・三里遺跡・新土居宇津々敷遺跡
		船元Ⅲ式	I		松ノ木遺跡	
	春日式前谷段階					
中期後半	春日式森木ヶ道段階	里木Ⅱ・Ⅲ式古段階	+		松ノ木遺跡	広瀬遺跡 新土居宇津々敷遺跡
		里木Ⅱ・Ⅲ式中段階	(熊野部)			
	春日式南宮島段階	里木Ⅱ・Ⅳ式新段階	篠原A段階			
	大平式		北白川C式1期			
	並木式	矢部奥田古段階	北白川C式2期	(奥谷南遺跡)		
中期末						ツグロ橋下遺跡?
			北白川C式3期		(松ノ木遺跡)	
	阿高式	矢部奥田新段階	北白川C式4期	奥谷南遺跡	林田シタノチ遺跡	土川馬崎遺跡
					林田シタノチ遺跡 栄ユ田遺跡 野田遺跡 松ノ木遺跡 柳田遺跡	土川馬崎遺跡 庄司ヶ市遺跡・下益野遺跡・新土居遺跡・永野遺跡・片粕遺跡・広瀬遺跡・三里遺跡・仕出原遺跡・江師遺跡・北川遺跡
後期初頭	阿高式	中津式	中津式			

(2) 西側旧谷状地形上面に形成された遺構—竪穴住居—(SX-1)

検出したピットについては生活面を形成する遺構群ということで当初は報告する予定であったが、報告書作成最終段階で、SX-1として検出した「しみ状の広がり」(本文中ではJ-I層・集中Iとして報告)の東側のラインが、竪穴住居のプランを示す可能性に気付いた。SX-1とピットの分布とが重なること、ピットの中で炉に相当する炭化物の集中するピット(P-5・P-6)があること、そして、ピットの並びに柱穴として復元可能なものがあること、この3つの理由から、これらのピットは竪穴住居の床面遺構の可能性を持つ、ということを指摘しておく。SX-1の西半は後世の侵食により削りとられており、竪穴住居だとすれば西半の1/2以上が失われていることになる。また、東側は棚田の水田面形成時に地形を平坦にするため削りとられたとみられ、包含層自体も形成されない。残された状況が極めて悪い遺構ではあるが、J-I層の遺物出土状況からピット自体は形成時の姿を留めていると考えられる。「遺物集中地点で、包含層の残存状況が良く、わずかな落ち込みのある地点」と判断していた「わずかな落ち込み」が竪穴住居の壁面の残りの部分だと捉え、このSX-1の範囲から西側にかけてのピット群を竪穴住居の可能性のある遺構だと考えたい。

出土遺物について、4章から再録し、S=1/4でここにまとめた。SX-1として採り上げた土器は総数471点、その中で図示したものは12点である。172・177・193～196・208は1類としてまとめた無地に沈線を持つ土器で、口縁形態は172のように肥厚しない平縁と、177のように肥厚するタイプがある。太めの沈線による施文ということは間違いないが、小片が大半であり文様の形状を捉え得る個体はほとんどない。わずかに208の文様が細長い楕円の区画文だと推量されるのみである。底部は270・271と273～275の5点である。平底の底部が主体で、その中に高台状を呈する275が混じる。これらの土器は、中期末に位置付けられる土器である。

この遺構が、住居址であるということが確認できるのなら、1984年に調査された葉山村姫野々上町遺跡ST-01⁽³²⁾(縄文後期末～晩期初頭)、1992年の本山町松ノ木遺跡ST-4⁽³³⁾(宿毛式期・縄文後期前半)に次いで南四国では3例目の縄文時代の竪穴住居となる。

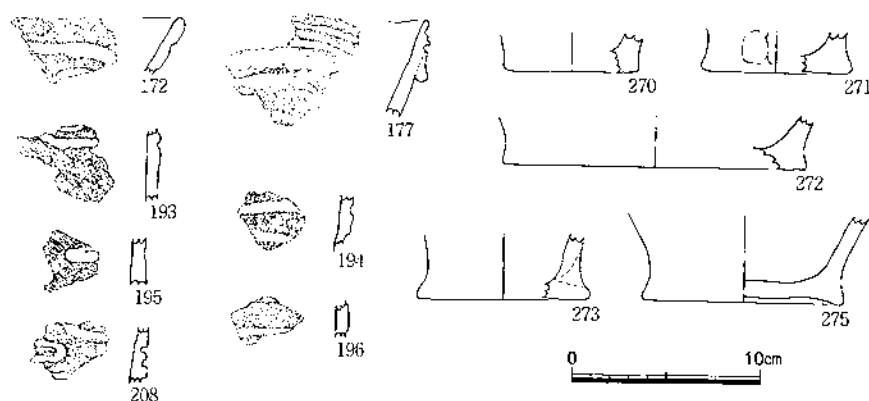


Fig.87 SX-1 出土遺物(土器)(S=1/4)

南四国の縄文時代の住居遺構が少ない理由として、調査例が少ないこと以外に、四国山地の南斜面だという地形上の特徴によって縄文時代以降は恒常的な多雨地帯であり、侵食・堆積が極めて活発に行われてきたということが挙げられる。ゆえに微高地・段丘上の遺構の残存状況も良好ではなく、平野部においては遺跡深度の深さゆえに生活面の検出に至らないケースが想定される。

従来の報告例である上記2遺跡も発達した河岸段丘上に形成された遺構であるが、竪穴住居壁面の残存高3～8cm(姫野々上町遺跡)、5～10cm(松ノ木遺跡)と残存状況が良好だとは言いがたい。当遺跡の例は、さらに残存状況が悪い。今後、縄文期においては壁面が侵食され、ほとんどあるいは全く残っていない状況の竪穴住居の存在についても注意する必要がある。

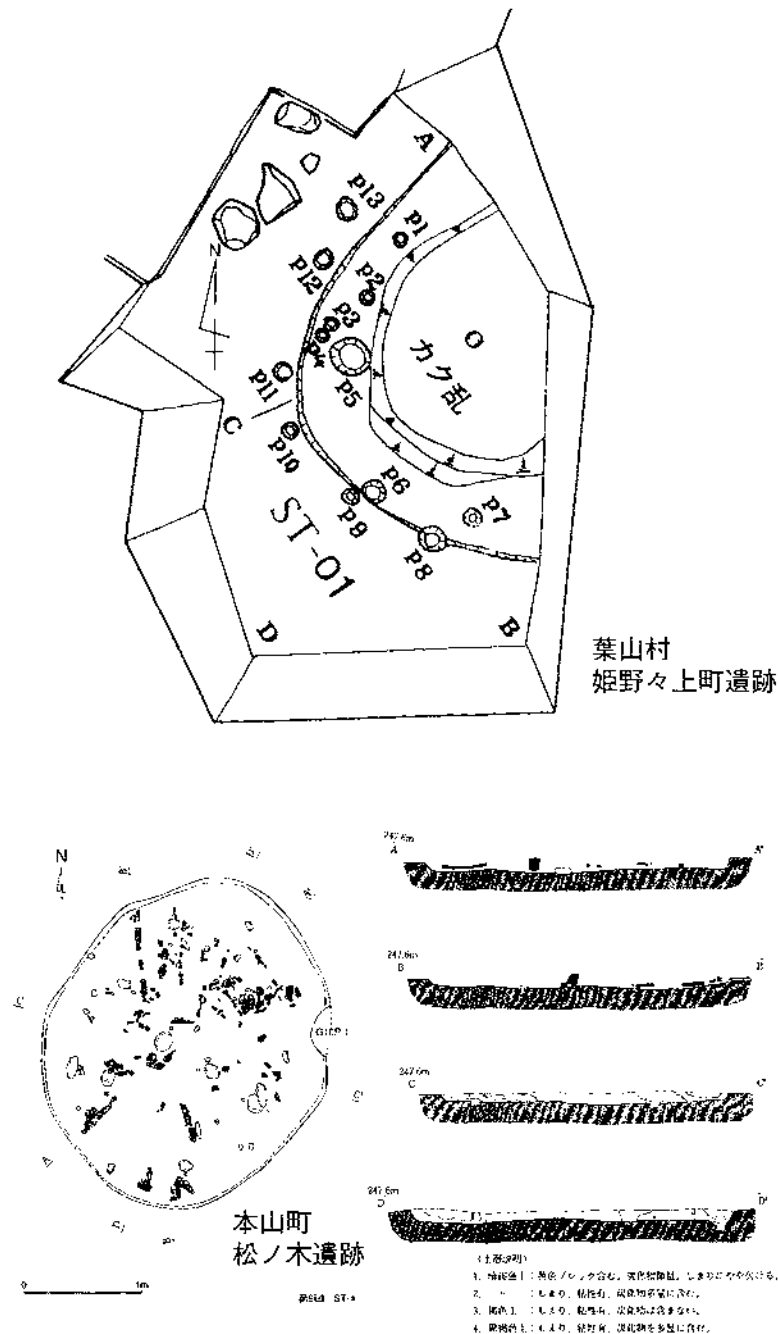


Fig.88 南四国の縄文時代の竪穴住居 (S=1/60)

(3) 貯蔵穴

① 南四国の貯蔵穴

近年、各地で貯蔵穴の検出例が増加しており、全国的に見れば資料の集積は飛躍的に進んでいる。西日本は低湿地の植物遺体の遺存した貯蔵穴であるのに対し、東日本は乾燥した台地上に形成されるフラスコ状の貯蔵穴で植物遺体の遺存のない例が多いといわれる⁽³⁴⁾。近年は、東日本でも低湿地型の貯蔵穴の検出例が知られるようになり、同時に大規模な水晒場木組み遺構の確認例も増加している⁽³⁵⁾。これらの植物遺体・木製構造物は、従来の上器・石器を中心とした出土遺物に較べ多くの情報を含んでおり、よりリアルな形で、縄文時代人の生業・姿を我々の眼前に浮かび上がらせる。

大規模開発が進展する中で、四国でも縄文時代の出土資料は除々にではあるが増加しつつある。しかし、こと植物食-堅果類に限れば四国は空白地帯となっている。

堅果類が含まれなくても、特徴のある形態を持った土坑が食料貯蔵穴であるということは、先学たちによってはっきりと認識されてきた。高知県を例にとれば、1963年の西見当遺跡(田村遺跡群)の調査で検出された土坑は、その形態的特徴から貯蔵穴であると明確に報告されているし⁽³⁶⁾、その後の空港拡張工事に伴う田村遺跡群の調査では、貯蔵穴と目される土坑群がまとまって検出されている⁽³⁷⁾。1986年香我美町下分遠崎遺跡からは貯蔵穴とともに多くの堅果類も出土している⁽³⁸⁾。これら、類例が増加しているのは、多くが弥生時代に属する例である。堅果が確認できる例は少ないとはいえ、弥生時代の食料貯蔵目的の土坑調査例は着実に蓄積されてきている。これは四国の他県も同様である⁽³⁹⁾。

しかし、縄文時代に限れば、貯蔵穴調査例はほとんど報告されておらず、実態は未解明である。四国の他の3県についても、縄文時代の堅果類を出土する良好な貯蔵穴として報告された例を、現段階において確認することは出来なかった。縄文時代の植物食を論じる時、利用されたであろう堅果類の種類一つとっても、四国地方の様相は中国地方や九州地方など隣接する地域に準じて推測されている現状である。

縄文時代の土坑の中で貯蔵穴と特定できる遺構はどうだろうか。高知県の例として、縄文期に限ると後期後半の中村市船戸遺跡⁽⁴⁰⁾、晩期の香北町美良布遺跡⁽⁴¹⁾、同じく晩期の香我美町十万遺跡⁽⁴²⁾の3遺跡で、検出された土坑が貯蔵穴であるという報告がなされている。しかし、遺構の形状や堆積状況は報告されているものの、堅果類自体の報告はない。出土していないのか、あるいは残存状態が悪いのか、いずれにせよ利用されていた堅果類の種類はわからない。

船戸遺跡は、中村市西半の中筋川右岸の段丘上に立地する縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。包含層中から縄文時代後期後葉の伊吹町式土器がまとまって出土しており、縄文時代後期には低湿地遺跡であったとみられる。貯蔵穴1基のみの報告ではあるが、ドングリ集中部の検出と詳細な土坑堆積状況が示されている。平面形は1.25×1.05mの不整形、深さ0.48mで、断面は円柱形を示している。貯蔵穴は基盤であるシルトを掘り込まれ、現在の海拔高1.54m埋土最下層にもドングリを含むが、その上層がドングリ集中層となっており、さらに上層はドングリを含まない腐食混じり灰色粘土層で閉塞されると報告されている。ドングリは出土しているが、種類などドングリの内容は未報告である。ドングリ・植物遺体の他に20~30cm大の礫2点と縄文後期後葉の伊吹

町式土器と同一胎土の上器片が出土している。出土遺物から貯蔵穴の時期は伊吹町式期(後期後葉)とされている。

美良布遺跡は、物部川中流の河岸段丘上に形成された遺跡で、標高約120m、物部川との比高差約20mという立地を示す。ここから縄文晩期中葉に属する遺構が10基確認されており、形態によりA～Dの4類に分類されている。(報告書では晩期前半とされているが、出土する土器は谷尻併行期であり、ここでは晩期中葉の遺構として扱う。)このうちA類が貯蔵穴とされる。I区・P64・P90、II区P10、V区・P1の4基がA類に相当する。いずれの貯蔵穴も円筒状の構造であり、平面形は直径75～90cm内外の円形あるいは円形に近い楕円形、検出面からの深さは82cmから106cmの幅に納まるなど、形態・規格はほぼ同じである。これらの土坑の埋土は、黒色粘性土単純I層であり、堅果類は出土していない。

十万遺跡は物部川東隣の香宗川下流の標高13～14mの河岸にある遺跡で、美良布遺跡より川面に近接した立地を示す。十万遺跡の貯蔵穴はSK-24の一例だけである。出土遺物から晩期後半の貯蔵穴だと考えられる。美良布遺跡とほぼ同形態の円筒状の構造を持つもので、直径1m内外、深さ1mと規模もほぼ同一である。

なお、1997年から1999年にかけての土佐市居徳遺跡群の調査⁽⁴³⁾で十数基にのぼる堅果類を含む縄文時代晩期後半の貯蔵穴の例が報告されている。貯蔵穴の形態は円筒状を示しており、袋状の構造を持つものはない。各貯蔵穴から堅果類の出土が認められるようであり、新たな資料として期待される。詳細な内容については報告書の刊行を待ちたい。

検出例は4遺跡あわせても20例程度であり、南四国の貯蔵穴を一般化するのに十分な資料ではないが、いずれの例にも共通することは形態が円筒形であるということである。低湿地のものも、乾燥した環境である段丘上のものも同様の形態を示す。報告された遺構は平面形は0.7～1.2m(直径)の円形又はくずれた円形で、残存状況の差もあるため本来の深さはわからないが、深さは0.5～1m内外と推定される。(居徳遺跡については浅い皿状のものと、より深い筒状のものが確認されている。)

既知資料の範囲で縄文時代後期・晩期の南四国に限定すれば、抽出し得る特徴は、立地にかかわらず貯蔵穴は円筒状の形態を持つことだといえる⁽⁴⁴⁾。

② 奥谷南遺跡貯蔵穴の特徴

それでは、縄文時代中期末に属すると考えられる奥谷南遺跡の貯蔵穴について内容をまとめてみる。今回の調査で検出された貯蔵穴は、SK-2～SK-8の7基である。これらの貯蔵穴は、小谷の底の湿地部分に2列の列状になって検出されたもので、現在も地下水が貯蔵穴を満たしており、植物遺体の遺存状態は極めて良好であった。貯蔵穴内の堅果類や植物の葉は、空気に触れるまでは当時の色合いを留めていた。貯蔵穴ごとの詳細はTab.37・38のとおりである。

各貯蔵穴ごとに堅果類の総量及び出土地点層位を特定するために埋土をサンプルとして基本的にすべて採り上げ、水洗した後、層位ごとに含まれる植物遺存体・堅果類・土器石器等の遺物の状況を把握する作業を実施した。また、堅果類の残存状況により、貯蔵穴を作り利用した人々が、この

貯蔵穴を利用あるいは放棄した季節も理解できるのではないかと考え、堅果類については種別と共にどの部位が残存しているのか(先端部と基部の弁別)も意図して選別作業を行った⁽⁴⁵⁾。詳細な各貯蔵穴ごとの層別の内容については、第4章調査の成果のTab.18~Tab.24を参照していただきたい。

貯蔵穴ごとの堅果の種類についてはTab.37に示した。

SK-5・SK-7以外の貯蔵穴はアカガシが主体である。SK-2・4・6は、アカガシ以外に、一定量のアラカシ・コナラ・シリブカガシを含んでおり、含有堅果類の上では似た内容となっている。SK-3・8もアカガシ主体だが、SK-8はシリブカガシが確認できず、アカガシの量がやや少なめである点が異なっている。SK-3は他の貯蔵穴に認められないクヌギが確認された点が注目される。これに対し、SK-5とSK-7はアカガシ類の貯蔵ではなく、シイ類の貯蔵に使用された貯蔵穴だと考えられる。SK-5についてはツブラジイが主体であり、SK-7にはツブラジイ以外のシイ類が貯蔵されている。

堅果類以外にも注目される植物遺体が各貯蔵穴から出土している。粘土層や砂層と互層になって堆積する植物集中土層(腐植土層)からは、木の枝や葉などの形状を留めた自然遺物が多数確認されている。これらの植物は堅果類の貯蔵に際し、一定の役割を果たしたものだと考えられる。また、SK-3から検出された網代⁽⁴⁶⁾も、堅果類貯蔵の一端を示す資料として重要である。

貯蔵穴の形態については、深さの違いで40cm以上の深さを持つもの(A類)と20cm前後の浅い皿状のもの(B類)に分類、壁面の形態が袋状に奥に向かって狭り込まれているのか(1)、それとも筒状の構造を示しているのか(2)の違いにより、さらに分類した。平面形態はA-1類がSK-2・3・4・8、A-2類がSK-7、B-1類がSK-5・6であり、B-2類はない。

アカガシ主体の貯蔵形態を示すもの(SK-2~4・6・8)にA-1類・B-1類の両形態が対応し、シイ類主体の貯蔵を示すもの(SK-5・7)にはA-2類・B-1類が対応する。貯蔵穴形態と堅果類を対比させると、A-1類は全てアカガシ主体、A-2類は1例だがシイ類主体と、より深い構造を持つA類においては袋状の構造(1類)と筒状の構造(2類)が堅果の種類に対応していることが指摘できる。しかし、アカガシ類とシイ類というアク抜き必要度の異なる種類が、B-1類という同形態(しかも同規模)の貯蔵穴に貯蔵されるという事実は、貯蔵穴形態が必ずしも貯蔵する堅果の種類を規定しているのではないことを示す。つまり「アク抜きのため」という機能的な面だけから、貯蔵穴形態が選択されたのではなく、何らかの別の理由も含めて、A-1類・A-2類・B-1類の3形態の貯蔵穴が選択されたのだと考えられる。貯蔵期間の違い、アク抜きの段階の違いなどいくつかの理由が想定されるが、形態の異なる明確な理由を明らかにすることはできなかった。

高知県の他遺跡の貯蔵穴形態をこの分類に当てはめると、船戸遺跡・美良布遺跡・十萬遺跡の例は全てA-2類となる。未報告ではあるが居徳遺跡群の例はA-2類とB-2類が混在するようで、「袋状土坑」と称することの可能な例は奥谷南遺跡の貯蔵穴に限定される。

貯蔵されていた堅果類は7基の貯蔵穴を合計して先端部を含む個体が4,087個、基部を含む個体が794個、サンプル埋土1kg当り3.71個と一定量は検出できるが、決して極端な集中を示す数字ではない。これらの貯蔵穴は堅果の貯蔵を終えた姿、貯蔵穴から一定量の堅果類を取り出した後の姿を示しているといえる。ぎっしり詰まっていたであろう堅果類を取り出した後には、若干の取り残

しが生じるものであり、検出された基部の個数は、「取り残し」程度の数だと考えられる。堅果類貯蔵中に先端部は落ちやすく、基部は落ちにくいという点から、先端部と基部の比率が貯蔵穴使用回数に対応するという前提に立って、遺構ごとに比率を出した。先端部と基部の比率はSK-3とSK-8をのぞいて、6～7前後の数値に収まっており、これらの貯蔵穴の使われた回数(季節数)は、ほぼ同じだといえる。

Tab.37 貯蔵穴別堅果類一種類・量一

堅果類 貯蔵穴	アカガシ	アラカシ	コナラ	シリブカガシ	クヌギ	ツブラジイ	シイ類
SK-2	+++++	+	++	+	-	-	-
SK-3	+++++	-	+++	+	+++	-	-
SK-4	+++++	++	++	+	-	+	-
SK-5	-	-	+	-	-	+++++	-
SK-6	+++++	++	+	++	-	-	-
SK-7	-	-	+	-	-	-	+++
SK-8	+++	+	++	-	-	-	-

Tab.38 奥谷南遺跡貯蔵穴まとめ

貯蔵穴	サンプル重量(g)	堅果類総数(先端部を含む個体)	堅果類総数(基部を含む個体)	土器点数	石器類点数(刮片等も含む)	先端部との基部の比率(先端部÷基部)	堅果類集中度(埋土1kgあたり堅果類)	貯蔵穴の容量(ℓ)	種別(入層一深さ40cm以上、3層一深さ20cm前後)	貯蔵穴の平面形
SK-2	245,160	990	140	0	0	7.07	4.04	275	A-1	隅丸長方形
SK-3	320,720	1,554	437	302	6	3.56	4.85	460	A-1	楕円形
SK-4	100,570	427	57	4	0	7.49	4.25	135	A-1	不整形
SK-5	105,150	497	88	21	14	5.65	4.73	118	B-1	円形
SK-6	62,370	153	20	0	0	7.65	2.45	85	B-1	円形
SK-7	216,800	311	50	92	11	6.22	1.43	445	A-2	円形
SK-8	52,000	155	2	12	2	77.50	2.98	62	A-1	円形
合計	1,102,710	4,087	794	431	33	5.15	3.71	1,580		

(平均) (平均)

貯蔵穴中最大(推定460リットル)のSK-3と最小(推定62リットル)のSK-8の数値は3.56と77.50と異なっている。この違いは、取り残された堅果類基部の量に由来するが、なぜ取り残された基部の量に大きな違いが生じるのかについての理由は明確ではない。SK-3の場合は、基部個数が他の貯蔵穴の3倍以上であり、量的に密集といえないまでも「貯蔵」時の姿を部分的に留めている。

貯蔵穴の層は、粘土層・砂層・植物集中土(腐植土)層の3つの層に大別され、これらの層が混じりあったり、礫を含んだりしながら交互に堆積する状況が確認される。貯蔵穴ごとの層の堆積の様相と堅果類の最も集中する層を以下に示す。堅果類の集中が最も顕著な層を(◎)、ついで集中する層を(○)で示す。

SK-2・・砂→腐植土→粘土→砂混粘土→砂礫→砂(○)→砂(◎)

SK-3・・砂→粘土→腐植土→粘土→砂→腐植土(○)→砂→砂(◎)

SK-4・・砂→腐植土→粘土(◎)→砂混粘土→砂→粘礫土→砂(○)

SK-5・・砂混粘土→粘土→腐植土→砂(○)→粘土(◎)

SK-6・・砂→腐植土→砂(◎)

SK-7・・粘土→砂礫→粘土→砂礫(○)→粘砂礫腐植土(◎)→粘土→砂

SK-8・・砂→粘土→粘砂礫→砂混粘土(○)→砂(◎)

貯蔵穴の最下層に堅果類が集中している点、集中層には砂層が多い点などが指摘できる。腐植土とした層は植物の集中する層であり、植物の葉や枝が折り重なって検出されている。堅果類の出土が、多くの場合最下層に集中することは、貯蔵時の姿ではなく、堅果を取り出した後の姿であることを物語っている。堅果類を取り出した後であっても、堆積する土層は堆積時の姿を反映しており、植物・砂・粘土に礫を絡めて、堅果類を被覆していく方法が奥谷南遺跡の貯蔵方法であったと考えられる。

貯蔵穴の構築された谷は、常時水流が途絶えることのない環境で、貯蔵穴は粘土層を掘り込んで構築されている。少なくとも乾燥した環境ではなく、この水流を利用した水晒場があったことは推定できる。貯蔵穴の西側は傾斜した谷斜面であり、旧地形も一段高くなった地形を示している。水場・作業場が形成されるなら東側の空間である。木組み遺構など作業場領域⁴⁷⁾の状況を復元できる木製品は確認されていないが、貯蔵穴列の東側に3ヶ所の杭列が検出されており、ここが作業場であった可能性はある。

③ 貯蔵穴の炭素年代及び暦年代

パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して、SK-2及びSK-3出土の種子の放射性炭素年代測定を行った。詳細は、付編として掲載しているが、ここではその年代較正をして暦年代に近づける作業を行いたい。

パリノ・サーヴェイからいただいたデータは、

SK-2 B-7層 種子 4,730 ± 110 ($\delta^{13}\text{C} = -30.9$) 2,780 B.C. Gak-20252

SK-3 西奥壁ぎわサンプル 種子 4,230 ± 90 ($\delta^{13}\text{C} = -32.0$) 2,280 B.C. Gak-20253

というもので、学習院大学によって放射性年代測定を行っていただいたものである。同位体補正

は行われているものの、暦年較正を行わず、そのまま西暦による紀元前(B.C.)の年代が与えられている。「炭素年代」として、従来の年代と比較する上では、むしろ都合が良いかもしれないが、今後、暦年較正を経た年代が標準となってくるであろう現状では、暦年代に直す作業を経る必要があると考える。

暦年較正をした暦年代(Fig.90参照)は、SK-2 出土種子がB.C.3,600 $\pm$ 80及びB.C.3,520 $\pm$ 40及びB.C.3,400 $\pm$ 50、SK-3 出土種子がB.C.2,890 $\pm$ 24及びB.C.2,805 $\pm$ 10となる。残念ながら、SK-2 出土資料はB.C.3600年前後からB.C.3400年前後の間という200年以上の時間幅を、SK-3 出土資料もB.C.2800年前後からB.C.2900年前後の間という100年ほどの時間幅を持つ結果となった。

従来の炭素年代で考えると、SK-2 の資料は縄文中期前半～中葉に相当し、SK-3 の資料は縄文中期後半～末に相当する。約500年もの時期差のある資料ということになるのだが、SK-2 とSK-3 は隣接し、ほぼ同時期の遺構と捉えられるもので、500年の時期差は考え難い。種子という年代特定をするのに都合の良い資料を使ったにも関わらず、何らかの不確定要因が働いたため測定値に誤りが生じたのか、それとも測定値をそのまま受け入れるべきなのか。周辺も含めて、出土した土器には縄文中期前半から中葉にかけての資料は認められない。そういう点を考えれば、何らかの理由で測定値として誤った数値が示されたと考えるべきだろうか。機会があれば、改めて放射性炭素年代測定を試みてみたい。

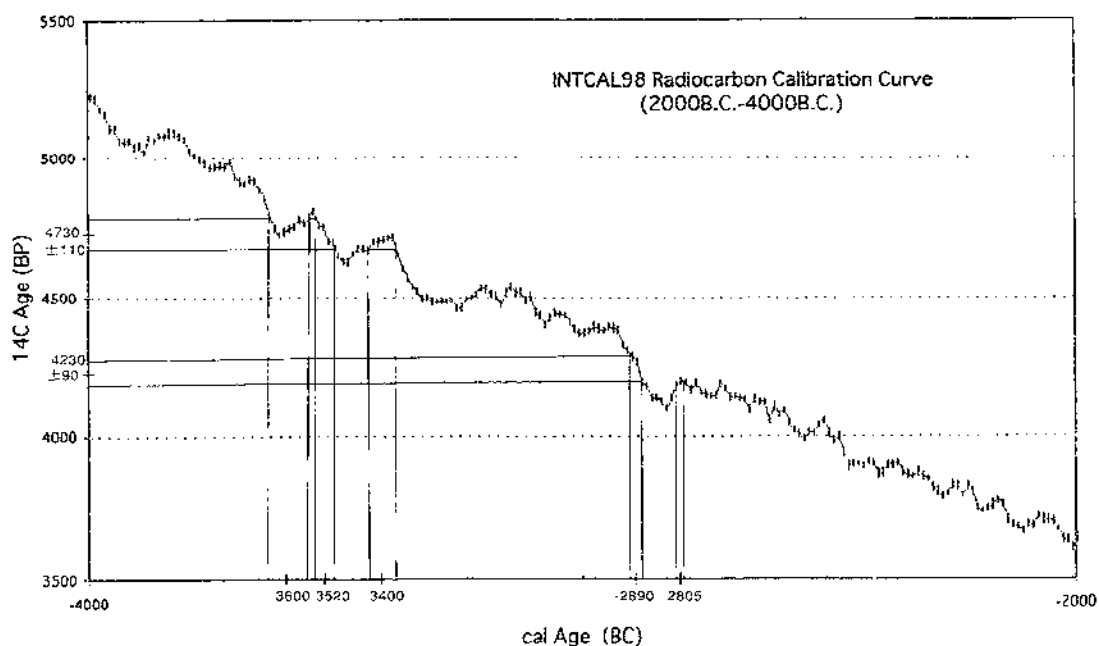


Fig.90 SK-2、SK-3 出土資料の暦年較正

④ 貯蔵穴周辺の環境

パリノ・サーヴェイに委託して各貯蔵穴ごとに行った花粉分析の結果も、当時の周辺の環境を考える上で多くの情報を提供してくれる。詳細は付編「奥谷南遺跡の土坑に関する自然科学分析」に記載されている。付編 表3の花粉分析結果はサンプル採取地点・層に規定される部分が多いとはいえ、各貯蔵穴の内容を端的に示していると考えてよいだろう。

各貯蔵穴ともコナラ属アカガシ亜属の花粉出現率が圧倒的に高く、貯蔵されていた堅果類の主体がアカガシであったことと共に、アカガシの林が近くまで迫っていたであろうことが推察される。SK-5・SK-7の花粉はシイノキ属の出現率が高く、特にSK-7については貯蔵穴中で唯一コナラ属アカガシ亜属の花粉よりもシイノキ属の花粉が多いという特徴を示す。これは、出土した堅果類の種類(SK-5・7はシイ類主体)にも照応するし、SK-7のみ形態上A-2類という袋状を示さない奥谷南遺跡の中で特異な形態の土坑だということにも関連するかもしれない。

周辺環境も花粉の内容から推定されている。「調査点周辺には、暖温帯性常緑広葉樹林(照葉樹林)の主要構成要素であるアカガシ亜属やシイノキ属からなる植生が成立していた」とされ、出現花粉より、「ヤマモモ属・クマシデ属・アサダ属・コナラ亜属・エノキ属・ムクノキ属・カラスザンショウ属・カエデ属などの広葉樹の種類やツタ属・ノブドウ属・テイカカズラ属などのツル性植物が分布していた」とされる。当時の奥谷南遺跡周辺の植生は「樹種構成の豊富な森林」であり、現在の高知平野の自然林と同様の豊かな照葉樹林の姿が想像できる。縄文前期の温暖期から縄文後期の寒冷期へと向かう途上に位置付けられる縄文中期末には、当地は現在と同じような森林相だったことが推察されるのである。

(4) まとめ—縄文時代中期末の奥谷南遺跡—

奥谷南遺跡の縄文時代中期について、①出土遺物(土器)、②遺構(竪穴住居の可能性のある遺構)、③貯蔵穴の3点から検討を加えてきた。

検出された土器の多くは縄文時代中期末に属する。これらの土器群は若干の時期幅を持ったとしても、せいぜい中期末の範囲内にとどまると考えられ、近畿地方の北白川C式併行期、瀬戸内の矢部奥田式併行期に比定されるものである。土器の内容は、沈線文土器、条痕地の土器、磨消縄文土器などが存在し、粗製深鉢が一定の割合を占めていることなど、後期初頭の中津式期に認められる現象が、先行する南四国の中期末でも確認できることが判明した。

遺構としては、谷の低地部分から7基の貯蔵穴が2列の列状をなして検出されている。縄文時代中期末のⅢ区の谷間は、貯蔵穴7基を単位とする集団の生活の拠点であったといえる。炭化物の集中するピットが確認され、わずかな地形上の落ち込みが認められたSX-1とされる地点が竪穴住居だとすれば、貯蔵穴と約15mという近接した地点に住居域が形成されていたことになる。

貯蔵穴を形態的特徴からみれば、壁面に抉り込みのある袋状の形態(A-1類)が4基、皿状で壁面に抉り込みのある形態(B-1類)が2基、筒状で壁面の抉り込みがほとんどないもの(A-2類)が1基である。

低湿地遺跡では貯蔵穴の形態はバラエティーに富んでおり、筒状・袋状など様々な形態が存在するといわれる⁽⁴⁸⁾。しかし、時間・空間を限定すればどうだろうか。土器型式と較べると地域差を直接的には反映しないかもしれないが、時期・地域による堅穴住居の形態の違い程度には集団の相違を映し出すのではないか。形態の差は貯蔵する堅果類の水さらしの必要の有無・程度の差など貯蔵穴の機能差による場合もあろう。しかし、地域特有の「機能差を反映した形態」もあり得るわけで、貯蔵穴形態は受け継がれてきた各地域の文化伝統を反映し、外来文化の影響があれば、それを反映するのではないか。

少ない資料ながら、南四国の場合は縄文後晩期においては筒状の形態の貯蔵穴ばかりで、乾燥地・低湿地にかかわらず筒状貯蔵穴地帯だと予想されるが、奥谷南遺跡例は異なり、袋状に壁面を掘り込むタイプ(A・1類・B・1類)が主体となっている。縄文時代中期以前の例が皆無の南四国の現状では筒状が中期以前からの伝統なのか、中期から後期にかけて形態が転換したのか、あるいは他地域の影響によるものなのか判断する術はない。岡山県南方前池遺跡例、熊本県曾畑貝塚例など、西日本の低湿地に立地する貯蔵穴には筒状の構造を持つものが多い。これに対し、東日本はフラスコ状ピットに代表されるように、袋状の構造を持つものが優勢である⁽⁵¹⁾。土器に認められるような縄文時代中期末における東方からの影響が貯蔵穴形態にも反映されている、と考えるのは、いささか恣意的な解釈に過ぎるだろうか。

貯蔵穴から出土した堅果類は、製粉又は加熱処理と水さらしの必要なクヌギ・コナラは認められるものの、クヌギはSK-3のみに含まれコナラは量的に少ないなど、ともに例外的であり、主体は水さらしのみでアク抜き可能なアカガシを中心とするカシ類である⁽⁵²⁾。アク抜きの不要なシイ類も利用されており、ツブラジイなどの貯蔵が確認されるものの、カシ類で唯一アク抜きが不要で西日本・照葉樹林地帯で多く検出されるイチイガシは確認できなかった。

貯蔵穴の時期を出土堅果類から求めようと放射性炭素年代測定を試み、炭素年代として $4,730 \pm 110$ と $4,230 \pm 90$ という2つの数値を得た。並んだ2つの貯蔵穴から得られた数値であり、検出された土器型式から見ても500年の差については合理的な説明ができない。今後課題を残す結果となった。

年代の比定に課題を残したものの、縄文時代中期末の奥谷南遺跡周辺について得られたデータは貴重なものである。水さらしのみでアク抜きが可能なアカガシが主体の貯蔵形態は、水が絶えない立地の当遺跡貯蔵穴にアク抜き機能が備わっていた可能性を考えさせる。また、花粉分析の結果は、アカガシが優勢な照葉樹林が広がっていたこととともに、ヤマモモ・ノブドウなど多様な食用植物の存在についても想起させる⁽⁵³⁾。縄文時代中期末の当地では、現在に近い気候の下、落葉広葉樹林に比べ人口保持力の小さい照葉樹林が広がる環境の中で、小規模な集落が営まれていたのであろう。さらに土器の様相からは、縄文中期末から後期初頭にかけての器種構造の転換、中津式土器の成立という汎西日本的な流れ⁽⁵⁴⁾と無関係ではあり得なかった高知平野の縄文人の姿を見てとることができるのである。

註・引用文献（5章第1節縄文時代）

- (1)岡本健児『日本の古代遺跡 39.高知』保育社1989年
- (2)松村信博『栄エ田遺跡』高知県埋蔵文化財センター1995年
- (3)『平成10年度田村遺跡群記者発表資料』高知県埋蔵文化財センター1998年
- (4)前田光雄『松ノ木遺跡Ⅲ』本山町教育委員会
- (5)山崎王明『林田シタノザ遺跡Ⅱ』土佐山田町教育委員会1993年
- (6)瀬戸内地方の土器については、矢野健一「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」(『江口貝塚。縄文前中期編一』愛媛大学法文学部考古学研究室1993年)並びに「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」(『古代吉備』第16集1994年)の編年を基準にして検討した。
- (7)九州・近畿・東海地方の土器については『縄文土器大観3 中期Ⅱ』(小学館1988年)を参考にした。九州の土器については、徳永貞紹「並木式土器の成立とその前夜」(『牟田裕二君追悼論集』)1994年を参考にした。
- (8)間壁忠彦・間壁霞子「里木貝塚」(『倉敷考古館研究集報』第7号)倉敷考古館1971年
- (9)『大浦浜遺跡』香川県教育委員会1988年
- (10)矢野健一「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」(『江口貝塚Ⅰ—縄文前中期編一』愛媛大学法文学部考古学研究室)1993年
- (11)この土器については、片岡鷹介「高知県高岡郡窪川町仕出原出土の注目土器」(『あるかいあ3号』1963年)で紹介された後、岡本健児『高知県の考古学』(吉川弘文館1966年)・岡本健児『高知県史考古編』(高知県1968年)・木村剛朗「土佐における縄文後期文化について」(『高知の研究』1 清文社1989年)などいくつかの文献で採り上げられている。『高知県史考古編』では中期末に属する土器という見解が示されているが、それ以外の文献では後期初頭の土器という位置付けがなされている。中期末～後期初頭の時間幅で捉えられる土器であり、中期末に位置付けられる可能性も残る。
- (12)下澤公明「阿津走出遺跡」【本邦西国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ】岡山県教育委員会1988年
- (13)奈良県天理市布留遺跡出土深鉢(『縄文土器大観3 中期Ⅱ』P233-837小学館)1988年
- (14)泉拓良「咲畑・醍醐式土器様式」(『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館)1988年
- (15)同(10)
- (16)従来の里木「式」に見られる細密波状文などの認められる個体はない。
- (17)同(10)
- (18)同(14)
- (19)東和幸氏から奥谷南遺跡の土器の中に中尾BⅢ類土器・大平式土器に胎土が類似するものがあるとの御指摘をいただいた。文様・器形の類似は確認できなかったものの、九州の影響が及んでいる可能性がある。
東和幸「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」【南九州縄文通信】No.8 1994年
- (20)矢野健一「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」(『古代吉備』第16集1994年)
- (21)泉拓良「中期末縄文土器の分析」(『京都大学埋蔵文化財調査報告書—北白川追分遺跡縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター1985年)
- (22)前田光雄「高知県」(『中四国縄文中期土器集成』中四国縄文研究会1993年)を参考に新資料を追加して作成した。

(23)木村潤朗『西南四国沿海部の縄文文化』播多埋文研 1995年

(24)曾我貴行『高知県中村市国見遺跡』中村市教育委員会 1994年

(25)同(4)

(26)同(3)

(27)同(6)矢野健一氏は縄文時代中期末の遺跡数の少なさについて言及し、以下のように述べている。「このような比較的不安定な影響関係の変化は、おそらく第一に地域の人口規模の少なさに起因すると考えて良いだろう。里木Ⅱ・Ⅲ式以降中津式以前の遺跡数が前後の時期に比べて非常に少ないことは、実態を反映しているものと推測できる。」

(28)同(4)

(29)山田シタノヂ遺跡(同5)で中津式古段階とされる土器に対しては、中期末の平C式併行ではないかという指摘もある。また、1986年の十川駄場崎遺跡出土の中津式とされたP15-19の土器は胴部の区画文に横方向の連続が認められず、中期末に位置付けられる土器である。(山本哲也『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』十和村教育委員会1988年)

(30)同(3)

(31)同(10)

(32)山本哲也「姫野々上町遺跡」『高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書－姫野々上町遺跡・新土居宇津ヶ敷遺跡・永野遺跡－』葉山村教育委員会 1984年

(33)同(4)

(34)塚本節也「食料貯蔵」『季刊考古学』第44号 雄山閣 1993年

(35)栃木県寺野東遺跡、長野県栗林遺跡、群馬県矢瀬遺跡の例にみられるように、各地で大規模な作業場・水晒場などの機能復元可能な水辺の施設が確認されている。

渡辺誠「水場研究の問題点」『考古学ジャーナル』No.405 ニュー・サイエンス社 1996年

(36)岡本健児「第二編原始 第二章弥生前期時代」『南国市史 上巻』南国市史編纂委員会 1983年

(37)『山村遺跡群』第2分冊・第3分冊他 高知県教育委員会 1985年

(38)出原恵三「下分遠崎遺跡Ⅰ」香美郡香我美町教育委員会 1989年

(39)四国の他県例として、弥生時代前期のトチの実の水晒場が確認された愛媛県阿方貝塚遺跡例(1996年～1998年)などが挙げられる。

(40)武吉眞裕「第4章 第1節 1縄文時代」『船戸遺跡』高知県教育委員会 1996年

(41)出原恵三「美良布遺跡」香北町教育委員会 1991年

(42)出原恵三・吉原達生「十万遺跡」香我美町教育委員会 1988年

(43)『居徳遺跡群Ⅳ 平成10年度現地説明会資料(2)』高知県埋蔵文化財センター 1999年

なお貯蔵穴の形状・概数については藤方正治氏の御教示を得た。

(44)本山町松ノ木遺跡の平成4年度調査(同4)では、縄文時代前期に属する断面形状が筒状の上坑が確認されている。遺構の性格は特定できていない。この遺構が貯蔵穴だとすれば、伝統的に筒状形態を採用していた可能性も出てくるが、資料数が少ないこともあり予察の域を出ない。

(45)第16回中・四国縄文研究会(鳥取市・1996年)での名古屋大学教授渡辺誠先生の御指摘を参考にして、先端

部と基部の弁別を試みた。

④⑥網代は小破片も含めて2点確認されている。網代の編み方は「二本超え二本潜り一本送り」であり、熊本県曾畑貝塚例など西日本に比較的多く見られる編み方である。編み物の材質はイヌビワ属クワ科の植物(木本類)であり、SK-3においては堅果類の貯蔵に編み物容器が使われたものと考えられる。

植松なおみ「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』35 1980年

渡辺誠「編み物の容器－籠と笥・箕－」『季刊考古学』第47号 雄山閣 1994年

渡辺誠「マタタビ製のカゴ類」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』No.12 1996年

④⑦各地で事例が増加しているが、長野県栗林遺跡では具体的な水さらし場遺構の構築方法のみならず、集落の中での居住域と作業場領域・貯蔵域の位置関係、貯蔵方法など、詳細で総合的な分析・復元研究が行われている。

岡村秀雄「縄文時代の貯蔵穴と水さらし場遺構」『栗林遺跡・七瀬遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター 1994年

④⑧低湿地の貯蔵穴形状がバラエティーに富み、筒状形態・皿状形態・袋状形態など様々な形態が確認できるという指摘は、従来、多くの研究者によってなされてきた。

同④⑩

潮見浩「縄文時代の食用植物－堅果類の貯蔵庫群を中心として－」『日本考古学論集2 集落と衣食住』古川弘文館 1986年

④⑨近藤義郎編『南方前池遺跡』岡山県山陽町教育委員会 1995年

⑤⑩江本直ほか『宮畑』熊本県教育委員会 1988年

⑤⑪西日本では低湿地に立地する筒状貯蔵穴が多いのに対して、東日本の乾燥地に立地する貯蔵穴はフラスコ状のものが多く。近年の調査により、東日本でも長野県栗林遺跡例のような低湿地型の貯蔵穴が居住域とは異なる地点から確認されはじめた。

⑤⑫堅果類のアク抜きに関しては以下の表を参考にした。

民 俗 分 類	属	種 (出土例のみ)	森 林 帯
A. クヌギ類 製粉または加熱処理+水さらし	コナラ属	クヌギ カシワ	落葉広葉樹林帯 (東北日本) (韓国)
B. ナラ類 製粉または加熱処理+水さらし		ミズナラ コナラ	
C. カシ類 水さらしのみ		アカガシ アラカシ	照葉樹林帯 (西南日本) (韓国南海岸)
D. シイ類など	シイノキ類	イチイガシ ツブラジイ・スダジイ	
	マテバシイ類	マテバシイ	

表、ドングリ類の分類(渡辺誠「岩手県下におけるドングリ類のアク抜き」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』No.6 1990年より転載)

53渡辺誠『縄文時代の植物食』雄山閣 1975年

54縄文時代前期の温暖期から後期の寒冷期への移行途上にあったとされる縄文時代中期末は、現在の気候と比較的に近い気候であったのであろう。花粉分析の結果(貯蔵穴周辺に照葉樹林が広がっていたことが推測されている)は、それを裏付けている。さらに寒冷化が進めば、照葉樹林が落葉広葉樹林へと変化し、食用堅果類の種類・量も増大したものと考えられる。こうした長期的な気候の変化を想定することにより、縄文後期の遺跡数増加を環境変化の面から説明できる。

55千葉豊「西日本縄文後期土器の二三の問題ー瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題ー」『古代言備』第14集 1992年

参考文献

泉拓良「第1章 1 中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』ー北白川追分町縄文遺跡の調査ー』京都大学埋蔵文化財研究センター 1985年

岡崎王雄「第4章 第1節 1.縄文時代中期」『J・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1985年

高畑知功「矢部奥田遺跡」『山湯道建設に伴う発掘調査6』(岡山市埋蔵文化財発掘調査報告82)岡山市教育委員会 1993年

J中・四国縄文中期土器集成』中・四国縄文研究会 1993年

東和幸「春日式土器の型式組列」『鹿児島考古』第23号 鹿児島県考古学会 1989年

渡辺誠『縄文時代の植物食』雄山閣 1975年

渡辺誠「縄文時代の植物質食料・ドングリ類」『考古学ジャーナル』279 ニューサイエンス社 1987年

渡辺誠「日韓におけるドングリ食と縄文土器の起源」『名古屋大学文学部研究論集』史学33 1987年

渡辺誠「低湿地遺跡調査の新展開」『考古学ジャーナル』317 ニューサイエンス社 1990年

渡辺誠「縄文時代の食べもの」『食の科学』150 1990年

渡辺誠「縄文時代集落研究の新展開」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』3. 名古屋大学 1992年

渡辺誠「樺はのの歴史的背景」『対談津島豆股寺門歴はの遺跡』1992年

潮見浩「縄文時代の食用植物・堅果類の貯蔵庫群を中心として」『日本考古学論集2 集落と衣食住』吉川弘文館 1986年

山田昌久「縄文人は食料として植物をどう利用したか」『新視点 日本の歴史ー原始編』新人物往来社 1993年

山田昌久「縄文人は生活用具として植物をどう利用したか」『新視点 日本の歴史ー原始編』新人物往来社 1993年

第2節 弥生時代中期末～後期初頭

I区の斜面一帯に広がる遺構群は弥生系高地性集落と位置づけられる遺構群である。この集落は弥生時代中期末から後期初頭の極めて短い期間に機能した集落である。(本来、遺構名は例えば「I区SX-1」と呼称しなければならないが、以下の遺構は、すべてI区に属するものであり、「I区」を省略して記述する。)

奥谷南遺跡の弥生系高地性集落について今回の成果をまとめる。

- ① 高知県の弥生系高地性集落は弥生中期中葉から後期初頭の時期に集中し、それ以外の時期には認められない^{(1)・(2)}。高知平野では、東半の野市町本村遺跡⁽³⁾、中央部山麓に展開する南国市狭間遺跡⁽⁴⁾、西半の朝倉城山遺跡⁽⁵⁾・伊野町バーガ森北斜面遺跡⁽⁶⁾、仁淀川西岸の上佐市甫木山遺跡⁽⁷⁾など周辺の丘陵一帯に高地性集落の例が知られている。

奥谷南遺跡も同様であり、出土遺物の時期から弥生中期末～後期初頭にかけての短い期間に機能した遺跡であることが判った。周辺に高知平野北端の居住好適地が広がっているにも関わらず、比高差30m以上、25～30°の傾斜を持つ急斜面に遺構を形成する典型的な弥生系高地性集落であるといえる。

- ② この集落では、竪穴住居、段状遺構等の遺構が斜面一帯に形成されている。丘陵上(尾根頂部付近)の緩斜面あるいは頂部平坦面には弥生時代の遺構は形成されておらず、遺物も検出されていない。弥生時代の遺構・遺物は斜面から検出されている。

調査区の丘陵は北面に延びる尾根へと連なっており、頂部付近の平坦部は北側に斜面を背負う地形となっている。にもかかわらず、尾根頂部を遺構形成地点に選ばず、25～30°前後の傾斜を持つ斜面一帯が遺構形成地点として選ばれている。

- ③ 確認された竪穴住居は拡張された可能性がある。南斜面のST-1は壁溝は認められないが上段下段の2段の平坦面を削り出して形成し、東斜面北端のST-2は一部検出されたのみだが、2条の壁溝が確認されている。
- ④ 段状遺構として報告した遺構には2形態があり、最大幅1.5m以上で、ピットなど床面に何らかの遺構を有するものと、最大幅1m前後の平坦面を有するもの(平坦面上にピット等を有する遺構もある)に分類できる。後者は等高線に沿って通路状に細長く巡らされている。前者を段状遺構A類、後者を段状遺構B類と分類すると、A類は東斜面のSX-2・3・4・5、東斜面のSX-10であり、B類は西斜面のSX-1、東斜面のSX-8・11が相当する。SX-6・7については一部のみの検出のためその性格を断定できない。

B類であるSX-1はSX-2とST-1をつなぐ地点にあり、SX-8はST-1とSX-10をつなぐ地点にある。また、SX-8とSX-11の間にはSX-9のような不整形な小段が形成されており、斜面を行き来する階段の役割を果たしていた可能性も指摘できる。I区の中での遺構配置全体の検討により、段状遺構B類とそれに伴う小段は竪穴住居・段状遺構A類を結ぶ通路の役割を果たした遺構であり、上部構造の伴わない遺構だと考えることができる。

また、段状遺構A類は何らかの上部構造を有する遺構だと推定されるが、床面に形成されたピ

ットの配置からその形態を予想することはできない。SX-3のように残存床面積18㎡を超えるものから、SX-5のように6㎡程度と推定されるものまで、規模も様々で、ピット等の検出された遺構も一様ではない。

第4章第1節の「遺構と遺物」の項中で、「その他の時代の遺構と遺物」として形成時期不明の遺構として扱った遺構にSB-1がある。一間×一間の小規模な掘立柱建物で上部構造は不明だが、遺構の配置の中では弥生時代の遺構の可能性も十分考えられる。

⑤ 出土した遺物で、図示した弥生土器は試掘調査時も含めて100点足らずと、調査面積に較べて

Tab.39 高知県の弥生時代の高地性集落（高山に立地する集落を含む）

番号	遺 跡 名	所在地	開始時期	終了時期	標高 (m)	比高差 (m)	立 地	発掘調査
1	國人駅遺跡	土佐清水市	Ⅳ新	Ⅳ新	230~240	120	尾根上半部	
2	ムクリ山遺跡	幡豆郡大月町	Ⅳ新	Ⅳ新	260	190~250	尾根	○
3	江ノ古城跡	中村市	Ⅳ新	V	28~38	20~30	斜面	○
4	ハナノシイ城跡	中村市	Ⅳ	Ⅳ	22~24	18~20	尾根上の接部（堀切）	○
5	古城山遺跡群	中村市	Ⅳ新	V	40~90	30~80	山頂	
6	下郷遺跡	須崎市	Ⅳ古	Ⅳ古	70	40	山斜面	
7	弘岡遺跡	須崎市	Ⅳ古	Ⅳ古	70	50	山丘斜面	
8	不動・岩屋洞六遺跡	高岡郡佐田町	Ⅳ新	Ⅳ古	150	110	洞穴	○
9	鷹巣山遺跡	吾川郡	Ⅳ新	Ⅳ新	1150	700	山腹	○
10	バーダ北斜面遺跡	吾川郡伊野町	Ⅳ古	Ⅳ古	53~76	43~66	山麓の谷を流む傾斜した尾根	○
11	南木山遺跡	土佐市	Ⅳ	Ⅳ	30~85	25~80	山腹	
12	朝倉城山遺跡	高知市	Ⅳ新	V	30~90	20~80	尾根	
13	赤鬼山遺跡	高知市	Ⅳ	Ⅳ	60	30	尾根	
14	細平ヶ岩屋洞遺跡	須村	Ⅳ	V	260~275	30	洞穴	
15	高岡・原遺跡	高知市	Ⅳ新	Ⅳ新	40~50	30~40	山腹	○
16	美谷南遺跡	南岡市	Ⅳ新	V-1	45~59	22~36	山丘斜面	○
17	鉄岡遺跡	南岡市	Ⅳ	Ⅳ	83	60	山腹	○
18	岡豊城跡	南岡市	Ⅳ	Ⅳ	92~94	80~87	山腹	○
19	鬼ヶ嶺遺跡	香美郡野市町	Ⅳ古	V	220	150	山腹の洞穴	
20	龍河洞洞穴遺跡	香美郡野市町	Ⅳ	V	220	110	山腹の洞穴	○
21	龍河洞スカイライン遺跡	香美郡野市町	Ⅳ	V	280	180	後縁上	
22	野市本村遺跡	香美郡野市町	Ⅳ	V-1	30	20	丘陵	○
23	山田遺跡	安芸市	Ⅳ新	Ⅳ新	90	40	尾根	
24	伊尾木遺跡	安芸市	Ⅳ	Ⅳ	105~120	55~70	段丘	
25	別野遺跡	安芸郡芸西村	Ⅳ古	Ⅳ古	50	30	段丘	
26	清瀬洞遺跡	安芸市	Ⅳ新	V	60~72	40~52	斜面の緩やかな丘陵端部	○

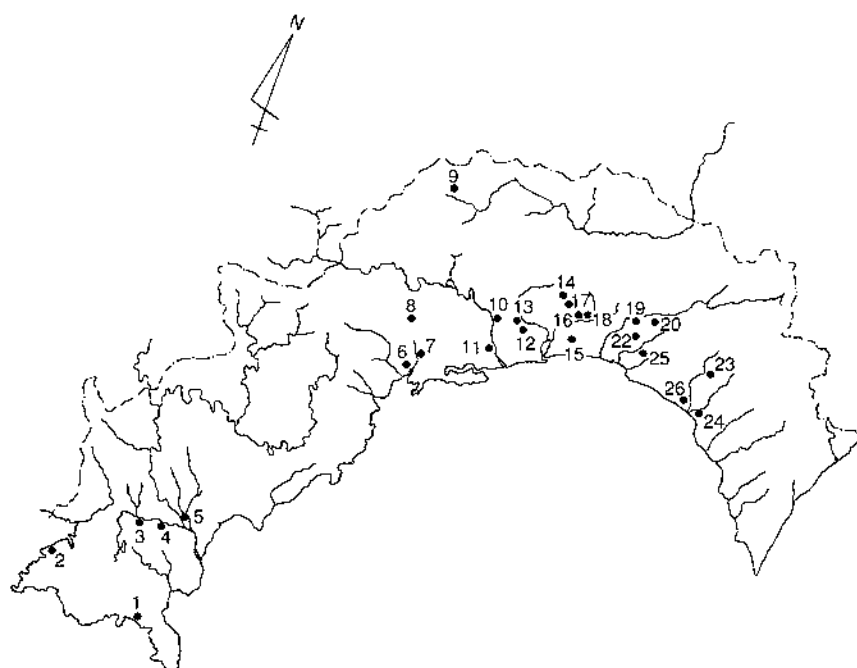


Fig.91 高知県の弥生時代の高地性集落遺跡（高山に立地する集落を含む）

少なく、小片が多い。当遺跡の土器組成を論ずるには資料が少なすぎ、資料が偏在している可能性もある。Ⅳ様式併行期の野市町本村遺跡に較べると凹線文は明らかに退化しており、貼付口縁を持つ土器も全体の13%程と少ないことなどから、奥谷南遺跡の場合は弥生中期末の遺物も認められるものの、後期初頭の遺物が中心であるといえる。少量の遺物という限界の中で敢えて実測遺物により全体の傾向を示すと、凹線文を持つ土器の割合は24%、ヨコナデにより口縁が凹状を呈する土器も含め凹線文土器の影響を受けた土器の割合は全体の約55%となる。無文で口縁の肥厚が認められないもの(素口縁)が16%、貼付口縁と併せて29%であり、凹線文系土器の割合が在地の土器に較べてやや多い。残念ながら、弥生土器の器種間における組成の差等の分析⁸⁾は資料の僅少さ故に行うことはできない。

従来の調査により土器組成の一定示された安芸市清近岡遺跡(高知県東部)、野市町本村遺跡(高知平野東部)、伊野町バーガ森北斜面遺跡(高知平野西部)と比較すると、後期初頭主体という時期差も考慮に入れた上で、凹線文系土器の在り方は本村遺跡の様相により近い。極めて単純化すれば凹線文土器の卓越する県東部(清近岡遺跡)、一定量の凹線文系土器が含まれる高知平野東部(本村遺跡)、在地の貼付口縁を持つ土器の割合が高い高知平野西部(バーガ森北斜面遺跡)という比較を示すことができる。比較対象としたこれらの遺跡は、緩やかな丘陵上に形成された遺跡あるいは高地性集落と定義される遺跡である。当該期の高地性集落と平野部に営まれた集落との比較も重要であり、今後検討すべき課題である。

今次調査では資料の少なさ故に土器の概略の比較だったが、個々の遺跡の凹線文系土器と非凹線文系土器の比率(器種間の比率も含めて)の詳細な分析の蓄積によって、奥谷南遺跡の高地性集落の位置付けがより明らかになってくるだろう。

第2節 引用文献・註

(1)小野忠熙編『高地性集落の研究 資料編』学生社 1978年

なおTab.39は、同書中での岡本健児氏の高知県内の高地性集落の基礎データを元に新資料を追加して作成した。

(2)岡本健児「南西国の弥生系高地性集落遺跡の研究-西暦二世紀代の動乱探求-その1」『同 其の2』『土佐史談』通刊147・148号 1977・1978年

(3)坂本憲昭『野市本村遺跡調査報告書』野市町教育委員会 1993年

(4)岡本健児『古代の日本・38高知』保育社 1989年

(5)岡本健児「神西式土器文化の再検討」『高知女子大学紀要人文・社会科学編』第20巻 1972年

(6)同(1)

(7)坂本憲昭「Ⅵ章遺物・Ⅶ章まとめ」同(2)

坂本憲昭は本村遺跡において、弥生中期の土器群に詳細な分析を加え、口縁形態に着目して器種間の分析を行い、特徴の抽出をしている。

(8)出原恵三・松村信博「高知県」『弥生中期の土器と集落-古代学協会四国支部第8回大会資料』古代学協会四国支部 1993年

第3節 弥生時代後期末

弥生後期末に属する遺物・遺構として、Ⅱ区の標高57mから58mにかけての尾根上に形成された土坑墓群が挙げられる。(本来、遺構名は例えば「Ⅱ区SK-1」等と呼称しなければならないが、以下の遺構は、すべてⅡ区に属するものであり、「Ⅱ区」を省略して記述する。)

形成された土坑墓は主軸方向よりSK-1・6・5(1群)とSK-2・3・4(2群)の2群に分けられる^①。尾根上で検出された遺物は、遺構内・包含層中出土遺物を含めて弥生後期末に属するとビノキⅡ式土器に限定されており、両群とも弥生後期末とビノキⅡ式土器の段階に短期間に構築されたものである。1群・2群ともに墳丘は伴わず、丘陵上の岩盤に構築された墓坑である。

これらの土坑墓群は、1群→2群の変遷をたどったものと想定される。1群の3基の土坑墓から礫は検出されたものの、一端に偏って少量の礫が検出されたもの(SK-1・SK-5)、墓坑の空隙を埋めるように礫が検出されたもの(SK-6)など、礫の量が少量であったり、「空隙を埋める」こと自体が目的の礫であったりと、「礫」自体が副次的に利用されたものである。これに対して2群の土坑墓においては礫に主眼が置かれ、礫の利用法・用い方に明確な意図が生じてくる^②。2群の3基の土坑墓は、それぞれの土坑墓ごとに倒性的な礫の利用がなされている。石室を構成しているかのように墓坑の四周および中央部から礫が集中して検出されるもの(SK-2)、墓坑の一端に15kg~56kgの重量の礫(チャート・石灰石)が並べられているもの(SK-3)、墓坑の上面に整然と2列の礫が並べられ、礫列の間墓坑上面に供献用の土器(Fig. 49)が置かれているもの(SK-4)、いずれの土坑墓も礫が意図的に配されている。また、これら3基の土坑墓の中間点には岩盤を掘り込んで土器棺墓(SK-7)が構築されている。これら2群の土坑墓・土器棺墓の配置は、徳島県鳴門市松丸山遺跡の配置と類似しており^③、直接あるいは間接の影響が及ぼされた可能性をも推量させるものである。

かつて「堅穴式石室墓」として報告した^④SK-2については、この呼称が適当かどうか再検討しなければならない。以前に比較資料として挙げた松丸山遺跡は、天井石も伴い、側壁・奥壁も堅固な作りであり、堅穴式石室の概念で捉えられる典型例である^⑤。これに対してSK-2は岩盤を掘り込んだ墓坑と木棺の空隙に礫を投げ込んだ形態を示し、石室の形を示していない。礫は検出段階で2列になって姿を現し、その後四周の礫が、そして中央部の礫が全面に検出された。中央部の礫は木棺の腐朽によって落ち込んだものだと考えられる。四周の礫は木棺と墓坑の空隙を埋めるために用いられたもので、当初から石室として構築されたものではない。SK-2の従来呼称「堅穴式石室墓」についてはそれを訂正し、SK-2は「土坑墓」の中の1類型を示す「木棺墓」として理解したい。

しかし、墓坑である土坑の周囲全面(床面は除く)を隙間なく礫によって埋めつくす形態は、粗雑ではあるが、他地方の完成された堅穴式石室墓と同様、礫(石)で木棺の周囲を被覆し下界との隔絶を計ろうとした意図が読み取れる。石室を構築する場合と礫で被覆する場合とでは、結果は大きく異なるが、外観は類似していたのではないだろうか。それは、調査時に、礫と礫が重なり合い墓坑の壁面四面が石室の側壁状になって姿を現したことからも推し量ることができる。尾根上に立地する点など、弥生中期以来の伝統(長畝遺跡^⑥・奥谷南遺跡Ⅰ区)とともに他地方の当該期集団墓との類似性も指摘できる^⑦。そういった点を考慮すれば、奥谷南遺跡SK-2は、「堅穴式石室墓」を意識

して造られた木棺墓」と位置づけられよう。

1群においては、尾根頂部に土坑墓が進出することが重要であった。丘陵上に構築することによって一般成員との墓域の区別を明確にし(1群)、次の段階では礫あるいは土器(供献用の土器)を効果的に用いることで、祭祀の意図を明確にする(2群)⁹⁸。高知平野の弥生後期末の段階で丘陵上に墓域が進出する前提条件は、その前夜に準備されている。谷を挟んだ西隣の長畝遺跡からは丘陵上から弥生中期の土器が単独で埋納され、東隣の奥谷南遺跡Ⅰ区からは弥生中期末～後期初頭の高地性集落が確認されている。集落や祭祀空間が丘陵上に進出し、弥生時代の人々が丘陵上を生活あるいは祭祀のための「空間」として捉える機運は熟していた。高知平野の高地性集落に所属する墓域がどの地点に営まれていたのかは現段階で把握されていない⁹⁹。しかし、現在知られている高知平野の墓域¹⁰⁰は弥生時代後期に至るまで集落内あるいは集落に近接した地点に形成されている。他の集落成員と明らかに異なる副葬品・構造を有する墓域¹⁰¹についても同様である。

当遺跡の上坑墓群は、これら集落に近接した地点に墓域が営まれる遺跡とは異なり、丘陵上の集落と隔絶した地点に墓域が営まれており、その点において質的に異なる墓制であるといえる¹⁰²。高知平野の古墳時代前期の墓制は、近年まで確認された事例が皆無の状況で、土器・住居の様相から推定する以外にはなかった。しかし、四国横断自動車道に伴う調査では西隣の尾根上の長畝古墳群からは古墳時代前期の上坑墓が確認され、ようやく当該期資料が姿を見せはじめた。長畝古墳群の前期墓制と当遺跡との連続性も推定されている¹⁰³。高知平野の弥生時代から古墳時代への移行期、前段階とは質的に異なる墓制だという点において、続く古墳時代前期への連続性を考える上で、奥谷南遺跡の弥生時代終末上坑墓群は重要な資料だといえる。

今回の調査の結果として、これらの墓群の内容をまとめる。

- ①弥生時代後期末の短期間に形成された遺構(上坑墓群)である。
- ②墓群には2つのグループ(1群・2群)があり、土坑墓における礫利用の在り方から、1群→2群の変遷が予想される。土坑墓を丘陵上に構築する段階(1群)から、礫を利用して土坑墓ごとに明確な意図を主張する段階(2群)への変遷が予想される。しかし、1群と2群の間には質的な差はなく、「集落に近接した地点に墓域を形成する段階」から「集落と隔絶した丘陵上へ墓域が進出した」という転換が認められる1群形成時に、より大きな画期がある。
- ③遺構から出土するものは土器(ヒビノキⅡ式土器)のみであり、副葬品は認められなかった。
- ④墓群によって礫の種類にも違いがあり、1群は砂岩が中心でチャートを含むのに対し2群は各土坑墓ともに石灰石を含み、チャート・砂岩・石灰石により構成される。また、検出面上面においては石灰石・チャートが使用されるのに対し、墓壙内からは砂岩が検出されており、石材の選択的な利用が看取される。

発掘調査時の事実関係と周辺に限定した土坑墓群の位置付けを行った。南四国の中において、そしてさらに広範な地域との比較等、奥谷南遺跡土坑墓群の位置付けについては考察に譲りたい。

註・引用文献(第5章・第3節)

(1)SK-5については、同方向であることからSK-1・SK-6の2基の上坑墓と同じグループ(1群)に分類したが、他の2基とは離れている位置関係から、時期差のある可能性もある。

(2)礫使用のあり方は、Tab.15～Tab.17にまとめて提示してある。石灰石を上面に使用し、上坑内については砂岩を使用するという礫の選択的な利用が明らかになっている。石灰石と砂岩を頭位に並べたSK-3や、上面検出石列の大半が石灰石であったSK-4などに顕著であり、砂岩が個数比で74%を占めるSK-2においても、石灰石・チャートは上面から検出され、墓坑内は砂岩という違いがはっきりと現れた。一群においても同様であり、砂岩は大半が墓坑内からの検出である。

外に露出する部分には石灰石・チャートを選択的に使用したものと考えられる。

(3)森清治『IV松丸山遺跡』『鳴門市埋蔵文化財調査報告書1 松はちまき山遺跡 松丸山遺跡 松寺前谷川遺跡』鳴門市教育委員会 1994年

(4)松村信博『奥谷南遺跡平成7年度調査概要』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年

(5)同(3)

(6)池澤俊幸『第II章 長畝遺跡』『長畝古墳群』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1996年

(7)河山県前山遺跡・広島県門田遺跡群・徳島県安楽寺遺跡など。

『河山県埋蔵文化財発掘調査報告115 前山遺跡 鎌原遺跡 国道429号線改良に伴う発掘調査I』河山県教育委員会 1997年

『門田遺跡群A地点・東植木山遺跡群A地点 見学会資料』(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1997年

『安楽寺古墳墓群』『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.3』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1992年

(8)1群・2群には明らかに違いがあるものの、それは質的な差ではなく、表面的な変化に過ぎない。「丘陵上に進出し、一般成員と墓域の空間を明確に区別した」点が、前段階の墓域と1・2群含めた奥谷南遺跡の上坑墓群との本質的な相違点である。

(9)南四国の高地性集落の調査として大月町ムクリ山遺跡・伊野町バーガ森北斜面遺跡・野市町木村遺跡・奥谷南遺跡Ⅰ区などの例が挙げられるが、墓域が明らかになった例はない。

(10)集落に近接した土器棺墓の例が確認されている。

森田尚宏『林出遺跡』高知県教育委員会 1985年

下村公彦・角谷和男『五軒屋敷遺跡』高知県教育委員会 1984年

(11)東崎遺跡の弥生終末の方形周溝墓などが例として挙げられる。

『東崎遺跡Ⅱ 発掘調査概要-記者発表及び現地説明会資料-』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1991年

(12)なお、奥谷南遺跡Ⅱ区南麓の栄エ田遺跡は、当遺跡の上坑墓群に関連した集落だと考えられる。住居址は検出されていないが、弥生時代終末～古墳時代初頭の溝が検出され、まとまった土器が出土、集落の存在が予想されている。ただし、関連があるのは間違いないが、土坑墓群の埋葬者が、この集落の成員だったとは断定できない。

松村信博『栄エ田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年

(13)廣田佳久『第IV章 長畝古墳群』『長畝古墳群』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年

第4節 近世

I 区の尾根頂部周辺から近世に属する遺構・遺物が確認されている。(本来、遺構名は例えば「I 区SK-1」等と呼称しなければならないが、以下の遺構は、すべて I 区に属するものであり、「I 区」を省略して記述する。)

尾根頂部付近には、地山岩盤を掘り込んで3基の近世墓が形成されている。SK-1・SK-2・SK-3の3基である。SK-1の西隣には浅い皿状の遺構(SK-4)が形成されている。SK-4の遺構形成時期は分らないが、Fig.34の近世瓦が検出された。近世瓦の存在から、この尾根上には瓦葺建物があつたと考えられるが、今回の調査範囲では該当する建物の明確な痕跡は確認できなかった。尾根頂部に形成される瓦葺建物として礎石を持つ小規模な祠が予想され、岩盤に痕跡を残してなかった可能性もある。

調査範囲には現在に繋がる墓域の痕跡は残っていなかったが、斜面下方や周辺の尾根上には近世から現在へと続く墓域が営まれている。

今回検出された近世墓の形態は2形態に分類できる。2段掘り構造を持ち、検出面から約2mの深さまで岩盤を掘り下げて形成されたもの(SK-1・SK-2、各々の平面形態は異なる。)と平面形は長方形で断面はわずかに逆台形状を呈するもの(SK-3)である。SK-2からは遺物が全く出土しておらず、時期の特定は困難であるが、2段掘りであるという墓坑の形状及び検出面からの深さ、そしてSK-1との位置関係等から、SK-1と同時期の近世墓だと推定される。

SK-1は、2段掘りの中段の段部に至るまで方形を指向する。段の上面は水平面をなし、丁寧に掘り上げられている。遺物についても、量産品であるとはいえ、唐津中型甕・二彩唐津鉢という優品を甕棺として用いるなど、小籠遺跡にみられる近世墓⁽¹⁾など一般集落の上坑墓とは明らかに一線を画した近世墓である。SK-2は2段掘り、深さ約2mという点においてはSK-1と同じだが平面形が長方形である点、中段の段部の形が若干崩れている点などSK-1との相違点も見出される。

これに対して、SK-3は検出面からの深さ0.8m、長軸の長さ2m、短軸の長さ0.8mの規模であり、出土遺物には古伊万里のそば猪口(96)、寛永通宝(古寛永・文銭・新寛永)6枚、10数点出土した角釘、及び若干の炭化物が認められた。出土遺物から18世紀後半～19世紀前半に形成された木棺直葬の土坑墓だと考えられる。

前者(SK-1・2)の形成時期は17世紀中葉であり(SK-2については断定できない)、後者は18世紀後半以降である。この時期差が墓坑の形態に反映しているのではなく、明らかに階層差あるいは葬送儀礼の違いによる墓坑の形態差だと考えられる。

これらの墓坑の中で特に注目されるのはSK-1である。SK-1は調査の成果の項でも述べたように、「儒墓」だということが確認された土坑墓である。儒墓とは儒葬⁽²⁾による墓の総称で、小規模なマウンド等の上部構造を持つこと、土葬墓であり火葬を行わないことなどいくつかの特徴を備えた墓制である⁽³⁾。墓の上部構造だけでなく、墓石に刻まれた改名の違いで仏葬と区別することもできる。近世に儒教が幕藩体制を支える封建教義の一翼を担うイデオロギーとして奨励された後、葬制も儒教に則って行われる例がみられるようになり、各地で儒墓が構築される。特に京都・茨城・

Fig.92

(参考資料)

石盤に刻まれた墓誌

柴田夫人壙誌

夫人諱サア柴田其氏也考名新右衛門尉江州人也妣川瀬氏夫人同州人也天正五年丁丑生於江州長浜承應元年壬辰卒於九月十日巳卯未刻享年七十有六歲土陽城下同月十二日辛巳葬於城東北二里長岡郡小野山生男女五人長娘名カヤ飯吉井喜兵衛尉次男三太郎先亡次娘松先亡次娘竿飯岡彌右衛門尉次男名熊介宗昌次有孫男子承應元年生於九月朔卯刻土陽城下卒於同月五日異日誌其姓名於石以埤焉異時撓地變遷或人誤動而此石先見即能為掩之此昌次所以遠慮也

墓誌蓋

(表)

(裏)

おさあ 木原作左衛門藤次公のつま芝田おさあ夫人の諡な也

木原作左衛門尉藤次公妻芝田氏夫人墓

後の世にもし此地をうこかしてこの石見者かなしみ以多ミを於もひやりて
もとのことくうつしたまへ 芝田夫人壙誌

高知などで盛んにつくられたようで、上佐藩においても藩政前期の家老野中兼山の治世下において盛んに造られたらしい。兼山自身も実母・秋田夫人の葬儀に際して、儒葬を行ったという記録が残っている⁶⁴⁾。

SK-1は、後世に部分的に再掘された痕跡が確認されており、上部構造は残されておらず、痕跡も留めない。本来ならば、儒墓の条件を満たしていないはずなのだが、この遺構が儒墓に関連する遺構であるという決め手となったのは、大正年間に出土した石盤に刻まれた墓誌の存在である⁶⁵⁾。墓誌には、この土坑墓に関する様々な情報が刻まれている。残念ながら、墓誌の出土は考古学的な手法を用いた発掘調査によってではないため記録も残されておらず、掘り出した当時の記憶を留める人々も全て他界しており、詳細については不明である。地元の有志の手で「唐龍の墓」(唐流の墓ーからりゅうのはかーの意か。)と記された記念木塔が調査区外だが、SK-1に近接した地点に建てられている。

発掘調査として明らかにし得た内容は、大きく3点に分けられる。1点目は、儒墓の下部構造が確認できたこと、2点目は儒墓が土葬であることが裏付けられたこと、3点目は出土遺物から時期が特定できたことである。

儒墓の下部構造については、今次調査による2段掘りの形態が儒墓の一般的な形態なのか、当地方独自のものなのか、さらには時期的な変遷はあるのかなど、調査例の蓄積を待たなければ明らかにし得ない課題も多い。SK-1の場合は、甕と鉢が横倒しになった状態で検出されたが、これは「寝棺として定着した」⁶⁶⁾とされる土佐儒葬の在り方と一致する。

土葬であることを確認したのは、付着した骨片の肉眼観察による所見である。儒墓が土葬であるということとともに、上佐藩において火葬が禁じられていたことの傍証として重要である。骨の鑑定は高知県警に依頼し、骨が被熱していないということと、この骨片が成人の人骨ではなく、乳児あるいは嬰兒の骨であるという2点を指摘していただいた。このことは、墓誌の記載内容にも関わる重要な点である。

墓誌の内容は、「木原作左衛門」の妻、「おさあ」の死に際して行われた儒葬について記録するものである。墓誌によれば、おさあは承応元年⁶⁷⁾(1652年)9月10日に高知城下で76歳で亡くなっており、9月12日城下の東北二里に位置する長岡郡小野山に葬られている。墓誌には、同時におさあの曾孫に当る承応元年9月1日生まれて同年9月5日になくなった男子についての記述がある。SK-1はこの男子の墓であると推定され、棺として利用された唐津・中型甕(138)と二彩唐津・鉢(139)に付着した骨片はそれを裏付ける。138は17世紀第二四半期、139は17世紀第一・四半期の遺物⁶⁸⁾で墓誌の年代ー17世紀中葉・承応元年(1652年)と合致し、逆に遺物の年代の下限を証明する記念銘資料となった。

墓誌は現在もこの木塔の位置から、おおよその出土地点を知ることができる。おさあ自身の墓も木塔周辺にあると推定される。儒墓の下部構造の発掘調査は例がなく、下部構造の一つの事例を明らかにし得た貴重な調査例であるといえる。

註・引用文献(第5章第4節)

(1)出原恵三「Ⅳ章考察 2.近世墓について」『小籠遺跡Ⅰ』高知県文化財記録館文化財センター 1995年

(2)儒葬について横川末吉氏は『高知県歴史辞典』(高知市民図書館1980年)「土佐儒葬」の項で以下のように説明する。

「土佐儒葬 とさじゅそう 中国古代の葬式を模したもので、野中兼山が南学興隆を図った当時、その母秋田方を采地本山(町)の堀金山に壮大に葬った。儀式は儒葬によったものであるが、幕府から兼山築城と疑われ、兼山は江戸に出府して弁明しなさをえたが、以後土佐藩においては火葬が禁止され、儒葬による土葬、特に寝棺として定着した。また柩の材はこれを求めるものに与えたこともあり、厚葬の風から墓石の壮大へと富裕の者を駆り立てたが、葬礼の導師は僧侶であった。」

(3)儒墓の墓誌の調査例として林氏墓地の墓誌に関する調査が挙げられる。

滝口宏・岡田芳郎ほか『国史跡林氏墓地調査報告書』新宿区教育委員会 1978年

大正15年10月に国史跡の指定を受ける。ここには初代林羅山以下、徳川幕府に朱子学をもって仕えた一族と学者が葬られている。この墓地が機能し始めたのは1698年、それ以降明治期に至るまで儒葬が行われた。徳川幕府は儒教の中でも朱子学をもって国家の正当な学問とした。林羅山が上野不忍池の別邸に私塾を開いたのが1630年、將軍家綱によって「弘文館」と称せられるようになり、將軍綱吉に湯島に移ることを命じられ、「昌平黉」となりやがて官的な性格をもった学問所となる。

林氏墓地から確認された墓誌・墓誌蓋は合計23点、墓墳の土留めとして利用されていた例が多い。

(4)横川末吉『野中兼山』吉川弘文館 1962年

(5)石盤に刻まれた墓誌の経緯や儒墓に関する情報は、岡本健児「儒墓と墓誌」(『ものがたり考古学・土佐国辺路五十年-』高知県文化財団 1994年)に詳細に叙述されており、その内容を知ることができる。本節全般を通じて参考にさせていただいた。

(6)同(2)

(7)承応元年、土佐藩に起こった事象の一部を抜き出す。(横川末吉『野中兼山』)

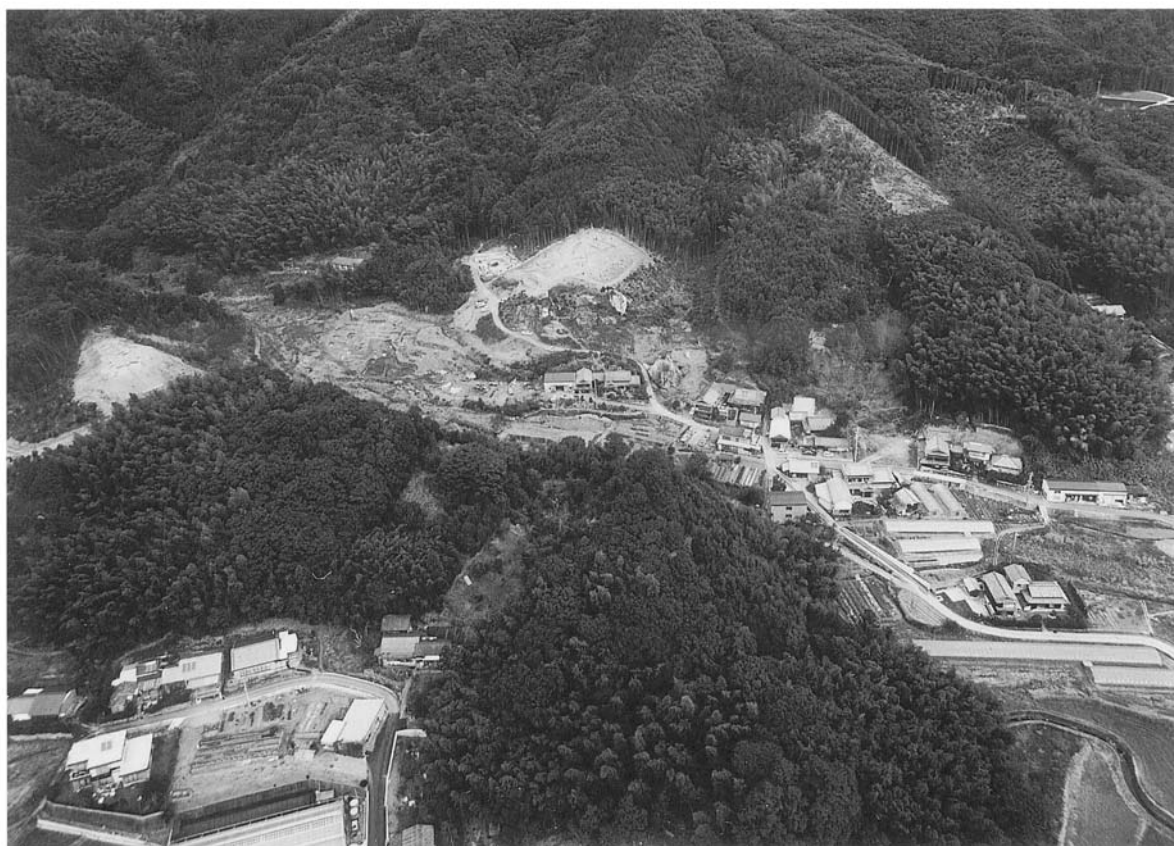
3月 後免町取立

7月 手結港修築・弘岡井筋工事竣工・新川町取立・尾池西郎左衛門捕鯨業を伝える。

(8)大橋康二氏(佐賀県教育庁文化財課)の御教示による。



儒墓 (SK-1) と墓誌の出土を示す木塔



奥谷南遺跡遠景（南から）



奥谷南遺跡遠景（北から）

第6章 考 察

高知平野の弥生墓制

山 本 純 代

1. はじめに

奥谷南遺跡Ⅱ区の調査では、標高58mの尾根頂上部を中心とした500平方メートル程の域内で、切り合い関係のない6基の土壙墓と1基の土器棺墓を検出した。出土した土器はすべて南四国の弥生後期終末のヒビノキⅡ式土器である。

高知県における弥生時代の研究は、80年代以降大規模調査の増加による資料の蓄積により土器編年や集落構造などの研究は飛躍的な進歩を見ている。しかしながら、こと墓制については良好な資料を欠き本格的な研究は皆無に近い状態である。ここでは今次調査を期にこれまで散発的に検出されている墓に関する資料を紹介し若干の考察を試みたい。

2. 弥生時代前期

①田村遺跡群⁽¹⁾

弥生時代最古の集落であるLoc.16、17から壙棺墓、土壙墓が確認されている。Loc.16、17を中心とする集落は物部川の自然堤防上に形成され、竪穴住居と掘立柱建物が馬蹄形状に配され、中央部に広場を持つ。墓は広場の部分から検出されている。

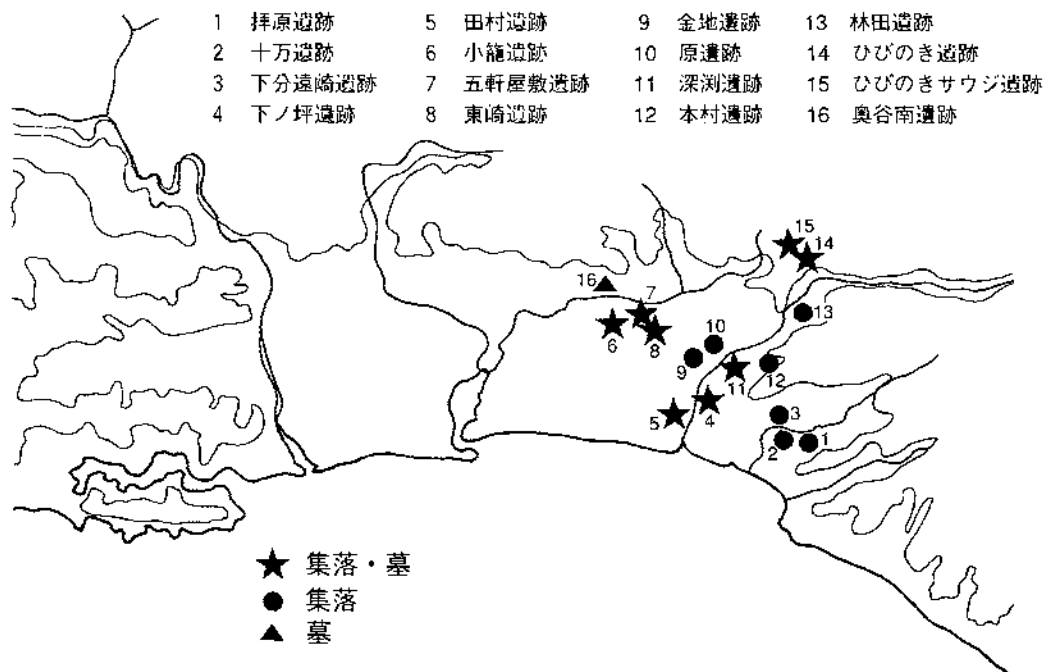


Fig.93 高知平野の弥生時代集落遺跡及び墓

(a)壺棺墓

SK 4 は楕円形を呈し、長軸1.41m、短軸1.01m、深さ35cmを測る。棺身と思われる大型壺(7)は下胴部を底面にへばり付け、上脛部と口縁部を内部に崩れ落とした状態で出土している。器高67.8cm、最大径67.8cm、口径43.8cmを測る。他に壺(1・2)、底部(3～6)、土器片転用の紡錘車(8)も出土している。前期Ⅰ期の幼児墓と考えられる。

(b)土壙墓

Loc.16から2基(SK 6・SK 7)、Loc.17から3基(SK 1・SK 4・SK30)計5基の土壙墓が確認された。

- ・SK 6 はやや乱れた長方形を呈し、長軸3.19m、短軸0.92m、深さ0.35mを測る。壺(16～18)、甕(19～36)、鉢(37)、紡錘車(32)、搬入品の石包丁(37・38)、軽石(33～36)、特殊な大きさの管玉(31)が出土している。出土遺物から前期Ⅰ期の成人墓と考えられる。
- ・SK 7 は長方形を呈し長軸2.17m、短軸1.12m、深さ0.27mを測る。出土遺物はほとんどないが、燐分析の結果埋土中に多くの燐が含まれており埋土検出面よりSK 6 と同時期前期Ⅰ期の成人墓と考えられる。
- ・SK 1 は不整形を呈し、長軸2.90m、短軸0.7m、深さ0.26mを測る。底部破片2点(39・40)が出土している。
- ・SK 4 は不整形を呈し、長軸2.90m、短軸0.65m、深さ0.18mを測る。弥生土器が多数(41～46)出土している。
- ・SK30は長方形を呈し、長軸2.05m、短軸1.30m、深さ0.23mを測る。10数点の弥生土器片(47)が出土している。

これら3基はやはり前期Ⅰ期と考えられる。

②海岸砂丘⁽²⁾

田村遺跡群の南に位置する海岸砂丘上で前期新段階の底部穿孔小壺が土砂採集の折、表採されている。墓の供献用土器と思われる。

3. 弥生時代中期

弥生時代中期前半になるとそれまで自然堤防上を転々と拡散していた集落遺跡数は減少に転じる。そしてⅣ様式段階になると田村遺跡での竪穴住居址数が一気に増大するとともに周辺部にも小集落が拡大していく。しかし墓の発見例は僅少である。かつて土壙墓とされていたもの(進入灯)は溝状土壙とされ生活関連遺構として位置づけられている⁽³⁾。

①田村遺跡群田中地区(進入灯)⁽⁴⁾

木棺墓の可能性のある土壙墓1基と壺棺墓1基が確認されている。

(a)土壙墓

- ・SK21は長方形を呈し長軸2.55m、短軸0.9m、深さ62cmを測る。南壁及び東壁は2段に掘られている。出土遺物は叩石と少量の弥生土器片である。中期後半の木棺墓の可能性のある土壙である。

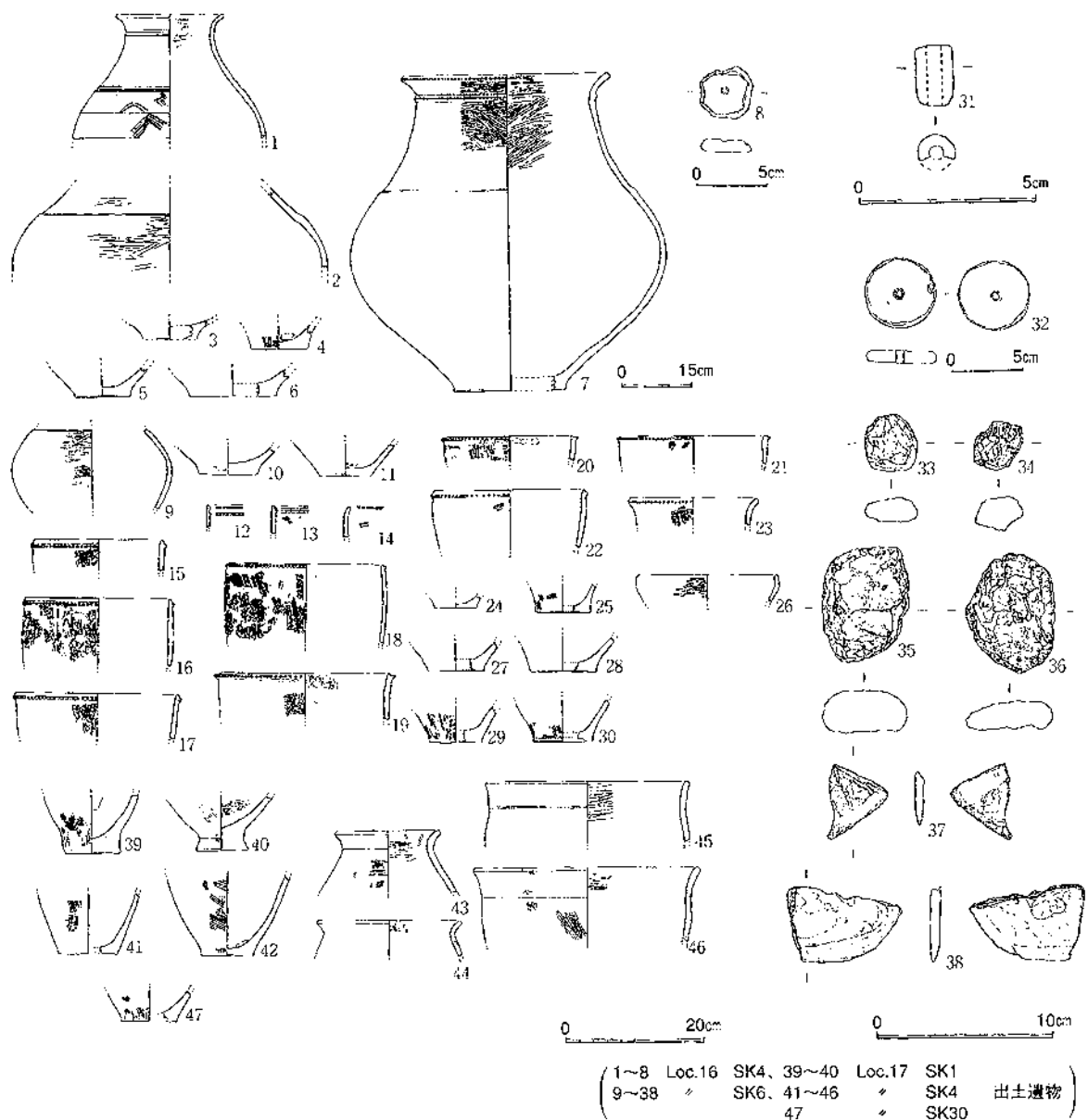
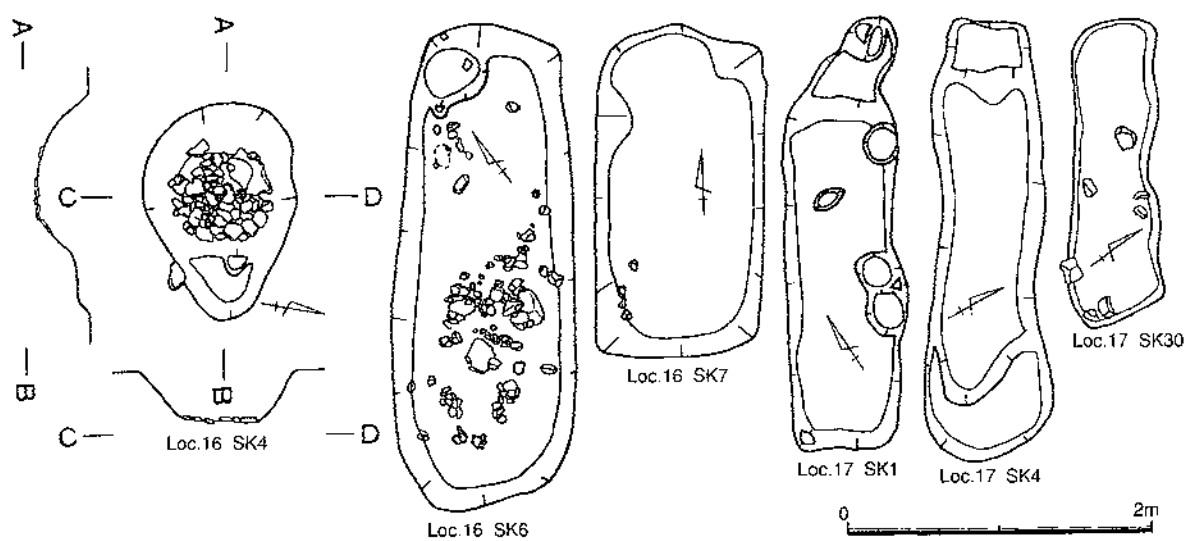


Fig.94 弥生時代前期 田村遺跡

(b)壺棺墓

- ・SK9は楕円形を呈し長軸76cm、短軸56cm、深さ8cmを測る。壺棺が押しつぶされたような状態で出土している。残存器高25.2cm、底部径8.4cm、残存最大径33.2cmを測る、中期の壺棺墓である。

②永田遺跡⁽⁵⁾

永田遺跡は長岡郡本山町にあり四国最大の吉野川流域の河岸段丘上に位置する。周辺部では弥生時代終末の集落址が多数確認されている。永田遺跡は中期末から古墳時代前期初頭まで継続して営まれる集落址の可能性が指摘されている。

(a)土壙墓

- ・SK11は長楕円形を呈し、長軸1.6m、短軸0.64m、深さ45cmを測る。出土遺物は甕口縁部、同胴部、高杯脚部、打製石包丁である。中期末葉の土壙墓と考えられる。

③トリアサリ遺跡⁽⁶⁾

トリアサリ遺跡は南国市十市の海岸砂丘上に位置する。土砂採集の折、凹線文段階の底部穿孔小壺が表採されている。先述した前期のものと同形態の供献用土器と考えられる。

4. 弥生時代後期

弥生時代後期になると遺跡数が増大し、それに照応して墓の検出例も増加する傾向に在り、方形周溝墓、土壙墓、壺棺墓、木棺墓等、その種類も豊富になる。

①小籠遺跡⁽⁷⁾

小籠遺跡は南国市岡豊町小籠に所在し、旧物部川によって形成された更新世の扇状地である長岡台地の先端部に位置する。弥生時代前期末に成立し古墳時代、中近世と多岐な時代にわたって営まれた遺跡である。弥生時代後期初頭の方形周溝墓1基と土壙墓が確認されている。

(a)方形周溝墓

- ・SX1は1辺5.2m、幅1.2m、深さ10cm前後を測る溝状の遺構が北と東を逆L字状に巡り、西側にも確認延長3.5m、幅60～120cm、深さ10cmの溝状遺構が位置している。南側は調査外のため明らかになし得ないが、同様に巡っている可能性がある。弥生時代後期前半の細頸壺が出土しており底部穿孔の供献用の壺の可能性もある。マウンドや主体部は削平を受けたものとされる。

(b)土壙墓

- ・SK18は楕円形を呈し、長軸3m、深さ20cmを測る。3分の1程度が調査区外に出ている。出土遺物は鉢と壺である。弥生時代後期前半の土壙墓である。この他にSK18と同様の埋土を持つ土壙が数基検出されている。報告者は遺物がないところから土壙の性格について保留しているが同時期の土壙墓となる可能性がある。

②下ノ坪遺跡

下ノ坪遺跡は香美郡野市町に所在し、物部川左岸の野市台地の西端にある沖積平地上にある。弥生時代から古墳時代の集落である。県内で確認されている内、最も古い時期のものである壺棺墓2

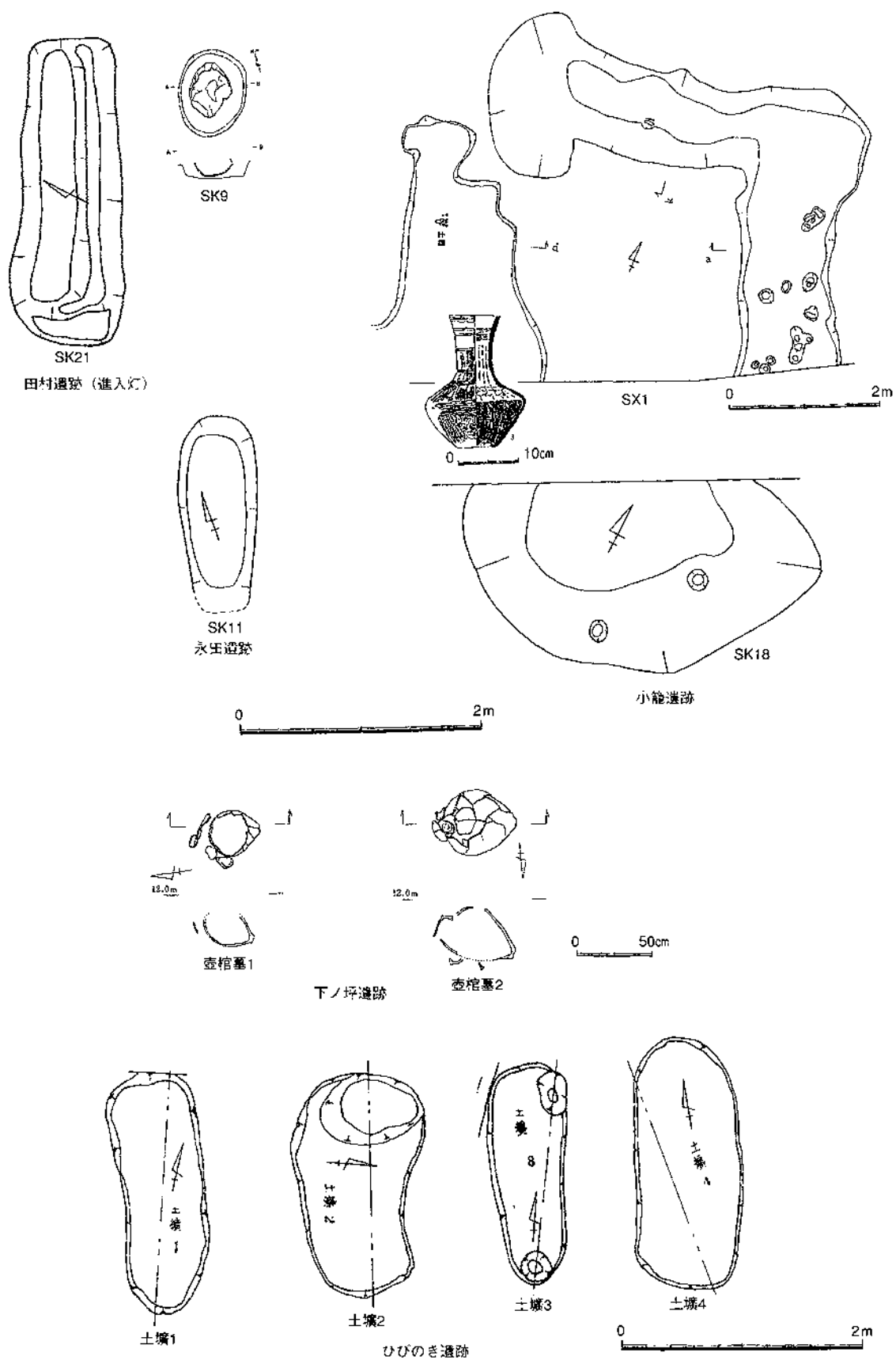


Fig.95 弥生時代中期 (田村遺跡、永田遺跡)・弥生時代後期 (小籠遺跡、下ノ坪遺跡、ひびのき遺跡)

基が確認されている。

(a)壺棺墓

- ・壺棺 1 は高さ40cm以上、最大径42cmの壺で埋置方向は南北で据置角度は27°である。蓋として用いられたと思われる壺口縁部と、壺棺内より壺が検出している。
- ・壺棺 2 は高さ60cm以上、最大径42cmの壺で埋置方向は東西、据置角度は30°である。蓋として用いられたと思われる壺底部と、壺棺内より蓋に使われた壺の口縁部と、棺外より壺棺の口縁部が出土している。壺棺 1・2ともに後期Ⅰに属する。

③ひびのき遺跡^⑧

ひびのき遺跡は香美郡土佐山田町白石町ヒビノキに所在する。長岡台地上に広がる弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落遺跡である。土壌墓 4 基が確認されている。

(a)土壌墓

- ・ 1 号土壌墓はほぼ楕円形を呈し長軸2.4m、短軸0.8mを測る。床面には栗石が敷かれており、この床面より高杯脚と壺底部が出土した。
- ・ 2 号土壌墓は楕円形を呈し長軸 2 m、短軸0.8m、最大幅 1 mを測る。床面には10×14cm大の栗石が敷かれ、この上から底が故意に破壊された痕跡の見られる底部近くの破片が出土している。
- ・ 3 号土壌墓は楕円形を呈し、長軸1.9m、短軸0.7mを測る。床面には栗石と割石が敷かれており、その上から穿孔らしき痕跡のある壺底部が出土している。
- ・ 4 号土壌墓は楕円形を呈し長軸2.4m、短軸0.9mを測る。床面には 9 × 12cm大の栗石が敷かれている。遺物は全くなかった。これら 4 基の土壌墓は弥生時代後期中葉の土壌墓である。

④土佐国衙跡^⑨

土佐国衙跡は南国市比江に所在し、国分川北岸の扇状地で南に広がる平野を一望できる地にある。弥生時代終末期の木棺墓及び土壌墓 2 基が確認されている。

(a)木棺墓

- ・ SK79は舟形を呈し長軸2.55m、短軸0.8m、深さ42cmを測る。2 段掘りとなっており、底面より 1 段上がった平場の北側と南側に側石を配し、東端に人頭大の川原石が置かれている。壺口縁部の破片が出土している。弥生時代終末期の木棺墓と考えられる。

(b)土壌墓

- ・ SK80はほぼ方形を呈し長軸2.3m、短軸0.88m、深さ18cmを測る。底面にピット 4 個が確認されている。出土遺物は外面にタタキ目を存する甕の細片 1 点のみである。
- ・ SK81は舟形を呈し長軸1.5m、短軸0.4m、深さ 9 cmを測る。舟形を呈し長軸2.0m、短軸0.4m、深さ 9 cmを測る。出土遺物は皆無に等しい。弥生時代終末期の土壌墓と考えられる。

⑤五軒屋敷遺跡^⑩

五軒屋敷遺跡は南国市東崎に所在し旧物部川の古扇状地である長岡台地の西寄りに位置している。弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の集落及び弥生時代後期終末の墓群が確認されている。

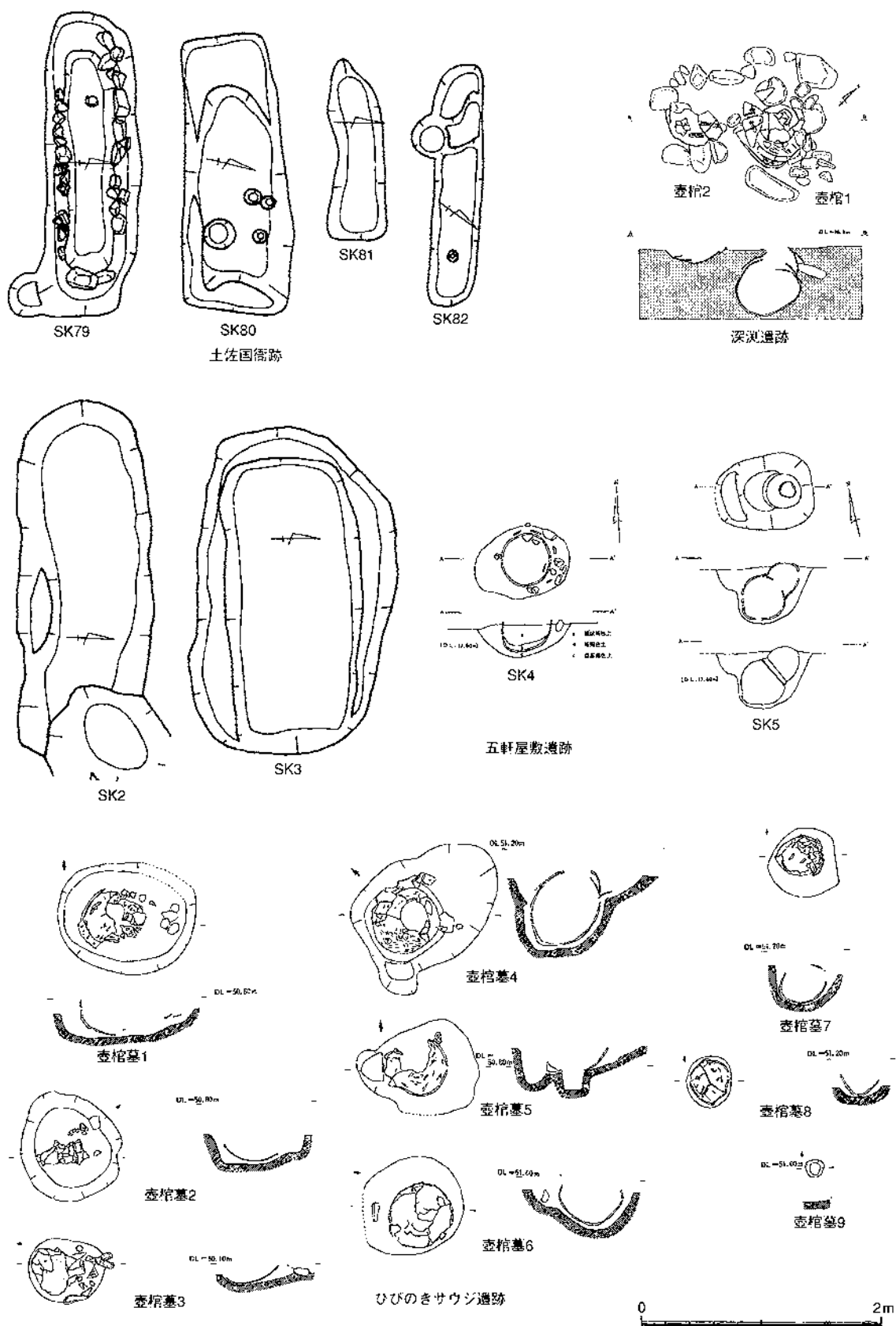


Fig.96 弥生時代終末（土佐国衙跡、深淵遺跡、五軒屋敷遺跡、ひびのきサウジ遺跡）

(a)土壙墓

- ・SK 2 は長軸2.4m、短軸1.1m、深さ36cmを測る。二重口縁の壺型土器口縁部が出土している。
- ・SK 3 は長軸2.74m、短軸1.65m、深さ62cmを測り、段掘りになっている。出土遺物は供献用と考えられる壺型土器と甕型土器である。SK 2、3 共に弥生時代終末期の成人用の土壙墓であると考えられる。

(b)壺棺墓

- ・SK 4 は楕円形を呈し長軸73cm、短軸61cmで深さ24cmを測る。埋置方向はほぼ東西で据置角度は42°である。大型の壺型土器を棺身としており残存器高41.2cm、同径44.4cm、底径7.4cmを測る。
- ・SK 5 は楕円形を呈し長軸83cm、短軸53cm、深さ43cmを測る。明確な段掘りが見られる。埋置方向はほぼ東西で据置角度は46°である。残存器高38.0cm、同径38.2cm、底径7.4cmの壺を棺身として使用し、蓋として使用された甕も出土している。これら2基は弥生時代後期終末の壺棺墓であると考えられる。

⑥深淵遺跡⁽¹⁾

深淵遺跡は香美郡野市町に所在し、物部川河口から3kmほど上流に上った東岸に位置する。縄文時代晩期末から弥生時代、古墳時代中期、後期、古代、中世と多岐な時代にわたって生活が営まれていた。弥生時代終末の壺棺墓2基が確認されている。

(a)壺棺墓

- ・壺棺 1 は墓壙の平面形及び掘り方は確認されていない。壺棺は複棺（覆口式）で上壺の底部は後世の削平によって大部分が欠損している。下壺は上部3分の1程度を打ち欠いており、埋置方向はほぼ北向きで据置角度は27°である。上壺は口径32.4cm、残存器高27.2cm、下壺は残存器高55.2cm、最大径53.6cmを測る。その他に下壺を留めるように底部の破片が分散して出土している。
- ・壺棺 2 は削平を受けており残存状態は不良であった。墓壙の平面形及び掘り方は確認されていない。上壺に用いられたと思われる物は口径32cm、残存器高36cmを測り、下壺と思われる物は残存高44cm、最大径43.2cmを測る。これら2基は弥生時代終末期の壺棺墓と考えられる。

⑦ひびのきサウジ遺跡⁽²⁾

ひびのきサウジ遺跡は香美郡土佐山田町に所在し、県下三大河川の1つである物部川西岸の河岸段丘上に位置する。弥生時代後期終末から古墳時代にかけての大規模な集落址で、壺棺墓9基が確認されている。SK 8、SK 12はやや離れたところに位置するが、それ以外は南北7m、東西6mくらいの範囲で群を形成している。

(a)壺棺墓

- ・壺棺墓 1 は複棺（覆口式）で墓壙は楕円形を呈し長軸1.1m、短軸0.81m、検出面からの深さ20.0～31.5cmを測る。埋置方向はほぼ東向きで据置角度は67.0°である。壺棺は削平を受けており、残存状態は不良であったが下壺は残存高34.8cm、残存径61.2cm、上壺と考えられるものは残存高7.4cmを測る。

Tab.40 高知平野の弥生墓一覧表

時代	遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	方位	角度	遺物
田村遺跡群loc16								
弥生前期前半	SK6(土壇墓)	3.19	0.92	0.35	不整形	N-43°-E		竈、甕、鉢、紡錘車、石包丁、管玉、軽石
	SK7(土壇墓)	2.17	1.12	0.27	長方形	N-4°-E		細片数点のみ
	SK4(壺棺墓)	1.41	1.01	0.35	楕円形	N-81°-E		大型竈、甕、底部、土器片転用 の紡錘車
田村遺跡群loc17								
弥生前期前半	SK1	2.9	0.7	0.26	不整形	N-38°-E		
	SK4	2.9	0.65	0.18	不整形	N-56°-W		
	SK30	2.05	0.5	0.23	長方形	N-55°-W		
田村遺跡田中地区(進入地)								
弥生中期後半	SK9(壺棺墓)	0.76	0.56	0.8	楕円形	N-81°-E		
	SK21	2.55	0.9	0.62	長方形	N-62°-E		叩石、弥生土器細片
永田遺跡	SK11	1.6	0.64	0.45	楕円形	N-20°-E		甕口縁部、胴部、高杯脚、打製石包丁
小籠遺跡								
弥生後期前半	SK18(土壇墓)	3	不明	0.2	楕円形	東西		鉢、甕
弥生後期初頭	SK1(方形周溝墓)	3.2	1.2	0.1前後	-			後期初頭(後期I期)細頸甕
下ノ坪遺跡								
弥生時代後期	壺棺墓1	0.4以上	0.42	(0.24)	-	南北	27°	甕として用いられた甕口縁部、甕
	壺棺墓2	0.6以上	0.42	(0.36)	-	東西	30°	甕として用いられた甕底部、口縁部
ひびのき遺跡								
弥生後期中葉	1号土坑	2.4	0.8		ほぼ楕円形	主軸南北		甕、高杯
	2号土坑	2	0.8		〃	主軸東西		弥生土器片
	3号土坑	1.9	0.7		楕円形	主軸南北		甕底部(穿孔あり)
	4号土坑	2.4	0.9		楕円形	主軸南北		なし
五軒屋敷遺跡								
弥生後期終末	SK4(壺棺墓)	0.73	0.61	0.24	楕円形	N-76°-E	42°	
	SK5(壺棺墓)	0.83	0.53	0.43	〃	N-76°-W	46°	
	SK2(土壇墓)	2.4	1.1	0.36	〃	N-90°-W		甕形土器
	SK3(土壇墓)	2.74	1.65	0.62	長方形	N-80°-W		甕形土器、甕形土器
土佐国衛跡								
弥生後期終末	SK79(木棺墓)	2.55	0.8	0.42	舟形	N-80°-E		甕口縁部
	SK80(〃)	2.3	0.88	0.18	方形	N-78°-E		甕細片
	SK81(土壇墓)	1.5	0.4	0.09	舟形	N-87°-E		
	SK82(〃)	2	0.4	0.09	舟形	N-61°-E		
	SK83(〃)	1.36以上	0.58	0.2	舟形	N-60°-E		弥生土器細片
深瀬遺跡								
弥生時代後期終末	壺棺1	(0.58)	(0.52)	(0.57)	-	ほぼ北向き	27°	
	壺棺2	(0.49)	-	(0.12)	-	不明	不明	
ひびのきサウジ遺跡								
弥生時代終末	SK8(壺棺墓1)	1.1	0.81	0.2~0.32	楕円形	N-84°-E	67°	
	SK12(壺棺墓2)	0.93	0.82	0.15~0.25	楕円形	N-90°-E	不明	焼成後に1孔を穿った底部
	SK19(壺棺墓3)	0.65	0.53	0.09	楕円形	N-2.5°-W	31.5°	
	SK21(壺棺墓4)	1.27	0.93	0.18	不整形	N-77°-W	32.7°	
	SK22(壺棺墓5)	0.78	0.755	0.22	不整形	N-38°-W	46.7°	
	SK20(壺棺墓6)	0.92	0.79	0.3	楕円形	N-72.5°-W	4°	
	SK23(壺棺墓7)	0.675	0.575	0.39	円形	N-72°-W	62.5°	
	SK24(壺棺墓8)	0.43	0.38	0.85	楕円形	N-10.2°-E	8.5°	
	SK32(壺棺墓9)	0.28	0.25	0.2	円形状	ほぼ北向き	不明	
長畝遺跡								
	SK2	2.17	1.2	0.52	不整形	N-19°30'-E		細頸の甕形土器
長畝古墳群								
	SK1	1.8	0.72	0.11	方形	N-27°47'-W		
	SK2	2.35	1	0.28	方形	N-33°9'-E		
	SK3	2.05	1.04	0.34	隅丸方形	N-56°3'-W		
	SK4	1.42	0.6	0.12	方形	N-58°12'-E		

- ・壺棺墓2は残存状態は不良であるが、墓壙は楕円形を呈し長軸0.93m、短軸0.82m、検出面からの深さ14.5～24.5cmを測る。埋置方位は北向きの可能性があり据置角度は不明である。壺棺は残存高14.8cmを測り、底部には焼成後1孔を穿つ。
- ・壺棺墓3の墓壙は楕円形を呈し、長軸0.65m、短軸0.53m、検出面からの深さ9.0cmを測る。残存状態は不良である。埋置方向はほぼ南向きで据置角度は31.5°である。壺棺は残存高30.8cm、残存径52.8cmを測る。二重口縁壺の口縁が出土し、壺棺墓9出土の物と接合できたが壺棺に伴うかどうか不明である。
- ・壺棺墓4は複棺(覆口式)で残存状態は良好である。墓壙は不整形を呈し長軸1.27m、短軸0.93m、検出面からの深さ61cmを測る。埋置方向はほぼ東向きで据置角度は32.7°である。下壺は頸部及び口縁部を意識的に打ち欠いておるものと見られ、胴上端部も打ち欠いて壺に貼り付けるように置いてある。残存高70cm、最大径54.4cmを測る。上壺は残存径47.2cm、最大径44.4cmを測り、下壺同様埋葬時に打ち欠きながら下壺とあわせていったと考えられる。
- ・壺棺墓5の墓壙は不整形を呈し長軸0.78m、短軸0.755m、検出面からの深さ22cmを測る。埋置方向はほぼ東向きで据置角度は46.7°である。残存状態は不良である。壺は残存高50.8cm、最大径48.8cmを測る。又、鉄製鎌の可能性の有る鉄器が壺棺埋土から出土しているが壺棺に伴うものかどうかは不明である。
- ・壺棺墓6は複棺(覆口式)で残存状態は不良である。墓壙は楕円形を呈し長軸0.92m、短軸0.79m、検出面からの深さは30.0cmを測る。埋置方向はほぼ垂直で据置角度は4°である。下壺残存高42.8cm、最大径54.8cmを測り埋土中には上壺と思われる鉢の破片が入っていた。
- ・壺棺墓7は複棺(覆口式)で残存状態は不良である。墓壙は東北隅が柱穴に切られているが、円形を呈すと考えられる。長軸は0.675mまで確認でき、短軸0.575m、検出面からの深さ38.5cmを測る。埋置方向はほぼ東北向きで据置角度は62.5°である。下壺は残存高39.6cm、最大径33.2cmを測る。
- ・壺棺墓8の墓壙は円形を呈し長軸0.43m、短軸0.38m、検出面からの深さ8.5cmを測る。埋置方向はほぼ東向きで据置角度は8.5°である。残存状態は不良である。壺は残存高25cm、最大径36.8cmを測る。
- ・壺棺墓9は残存状態が不良で僅かに1部が残るのみである。墓壙は円形状であったと考えられ長軸0.28m、短軸0.25m、深さは2.0cmを測り基底部のみの残存である。埋置方向はほぼ北向きで据置角度は不明である。これら9基はすべて弥生時代終末期の壺棺墓である。

5. まとめ

以上、高知平野の弥生墓を列挙してみた。高知平野において前期は集落の中央に小児用壺棺墓と成人用土壙墓を用いて埋葬していた。縄文時代より集落の中央部に墓域を設ける事が行われており、この時期は土器や集落の構成においても縄文から弥生への移行期であり、墓制においても縄文的なものを残しているのかもしれない。また、海岸砂丘上に埋葬される例も見られる。

中期前半の事例についてはほとんど不明である。旧村遺跡においても集落規模が極端に減少し、

周辺部の遺跡においても当該期の集落の実態はほとんどわかっていない。このことと照応した現象であろう。ただ、南国市岡豊町に存する長畝古墳群⁽¹³⁾の西側尾根上の長畝遺跡で、弥生時代中期の細頸の壺形土器を伴う土壙が確認されている。墓壙であるかは不明であるが尾根上を何らかの形で使用することが始まっていると想定できる。

凹線文土器の定着し始める中期末からは竪穴住居などの遺跡が増加しはじめ、後期にかけては再び活況を見せるようになる。田村遺跡においては400棟近い竪穴住居址が確認される⁽¹⁴⁾など拠点集落としての様相を整えはじめる。周辺部においても小籠遺跡、下ノ坪遺跡等この時期から始まる新興集落というべき集落が出現するようになり、南四国の弥生社会は新たな展開を見せるようになる。しかしながら墓制については必ずしもこの様な集落動向に呼応する顕著な動きを認めることはできない。まず田村遺跡においては集落内に数基の小児用壺棺、成人用土壙墓、成人用木棺墓と考えられるものが認められる程度である。おそらく周辺部、丘陵状などに墓域が形成されていたのであろう。ただ、新しい動きが全くないわけではない。小籠遺跡では後期初頭の方形周溝墓と他の土壙墓が確認されており、墓域の存在が示唆される。それまで本県では方形周溝墓の出現期は西分増井遺跡等、古墳時代初頭とされてきた⁽¹⁵⁾。またその立地も集落の中であり墓域を形成してはいない。小籠遺跡の調査により本県の方形周溝墓の出現期が後期初頭まで遡り得た。

後期後半になるとそれまで拠点集落であった田村遺跡が突然解体をはじめると同時に標高の高い内陸の平野部や物部川をはじめとする主要河川の中流域に数多くの集落が出現するという注目すべき動きが見られる。この変化と連動する形で墓制にも新しい動きが見られ画期を見せる。この時期最も多いのは集落の中に存する壺棺墓で、これらは幼児用のみで成人用のものはない。次に土壙墓と木棺墓がやはり集落内で見られる。そして奥谷南遺跡では丘陵上という集落とは隔絶された場所で成人用の墓域を確認し得た。これは一般成員とは墓制を異にする被葬者集団の存在を想定させる。又、墓壙の形態も県内には類例を求められないものであり、弥生時代終末期における本県の墓制を考える上で貴重な資料となった。なお前述した長畝古墳群は奥谷南遺跡に隣接する西方400mの尾根上にある。この内尾根頂上部で確認された7基の土壙群は、出土遺物が皆無である為時期は確定できないが、報告者は弥生時代ないし古墳時代はじめの土壙墓の可能性を指摘している。長畝遺跡の例とあわせ、奥谷南遺跡との比較の上で興味深い資料である。集落と隔絶した場所に墓域を設ける行為が中期或いはそれ以前からの伝統的な有り様であるのか、新しい動きであるのかは今後の課題である。

以上、高知平野の弥生墓制について集成してみた。筆者の力不足で考察するには至らず、また他地域の様相も掴みきれず比較も充分できなかった。今後の県下の資料の累積を待つと共に、小文が研究の一助となれば幸いである。尚、お忙しい中、県内の古墳を案内してくださった広島県埋蔵文化財センターの三好和弘氏、及び府中市教育委員会の岡田容子氏及び諸氏、香川県埋蔵文化財センターの片桐孝浩氏、蔵本晋司氏、御助言下さった高知県埋蔵文化財センターの出原恵三氏、松村信博氏、池澤俊幸氏、久家隆芳氏他、諸氏に記して感謝いたします。

<註>

- (1)森田尚宏：「Loc.16」『高知空港拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第2分冊高知県教育委員会 1986年
- 下村公彦：「Loc.17」『高知空港拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第2分冊高知県教育委員会 1986年
- (2)採集資料が南国市教育委員会の中にある。
- (3)小松大洋：『農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理に伴う発掘調査報告書 下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会 1998年
- (4)出原恵三：『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（山側進入灯設置区域）報告書 田村遺跡群田中地区』高知県教育委員会 1986年
- (5)出原恵三・佐竹寛・藤方正治：本山町埋蔵文化財調査報告書第7集『永田遺跡』本山町教育委員会 1995年
- (6)出原恵三氏の御教示による。
- (7)出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治・行藤たけし：『あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書小籠遺跡・Ⅲ』(財)高知県埋蔵文化財センター 1997年
- (8)岡本建児・廣田典夫：『ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会 1977年
- (9)廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書第9集－金谷地区の調査』高知県教育委員会 1989年
- (10)角谷和生・下村公彦：『五軒屋敷遺跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1984年
- (11)吉原達成・高橋啓明・出原恵三：『深湛遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
- (12)高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1990年
- (13)廣田佳久・池澤俊幸：『高知自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 長畝古墳群』(財)高知県埋蔵文化財センター 1996年
- (14)平成10年度高知空港発掘調査 田村遺跡群 現地説明会資料 1999年
- (15)出原恵三：『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会 1990年

<参考文献>

- ・『門田遺跡群A地点・東横木山遺跡群A地点見学会資料』(財)広島県埋蔵文化財センター1997年10月4日
- ・片桐孝浩・信里芳紀『弥生時代の墓制について－種ノ口遺跡の事例を中心に－』『(財)香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅵ 抜刷』(財)香川県埋蔵文化財センター 1998年
- ・真鍋昭文・中野良・・沖野信・・多田仁・伊藤直子・丹下友紀子・坂口隆：『埋蔵文化財発掘調査報告書第58田町3丁目遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財センター 1995年
- ・岡内三真・河野雄次・北條芳隆・橋本達也・中村豊：『庄・蔵本遺跡1－徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査－』徳島大学埋蔵文化財調査室 1998年
- ・森清治：『鳴門市埋蔵文化財調査報告1 松はちまき山遺跡・松丸山遺跡・松寺前谷川遺跡』鳴門市教育委員会 1994年
- ・正岡睦夫：『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115 前山遺跡・鎌戸原遺跡 国道429号線改良に伴う発掘調

査1』岡山県教育委員会 1997年

- ・ 椿貞治：「第Ⅲ章まとめ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87 みそのお遺跡』岡山県教育委員会 1993年
- ・ 出原恵三・池澤俊幸・小松大洋・行藤たけし：『農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理に伴う発掘調査報告書 下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会 1997年
- ・ 出原恵三：「弥生から古墳へ 前期古墳空白地帯の動向」『考古学研究158号』 1993年
- ・ 田代克己：「墓制」『季刊考古学第23号』 雄山閣 1988年
- ・ 金関恕・佐原真：『弥生文化の研究8 祭と墓と装い』 雄山閣 1987年
- ・ 中村健二：「本州西半と四国の縄文時代墓地」『考古学ジャーナル No.422』 ニューサイエンス社 1997年
- ・ 岡本孝之：「弥生時代墓制の地域区分」『考古学研究165号』 考古学研究会 1995年
- ・ 網野善彦・大塚初重・森浩・監修：『シンポジウム「日本の考古学」弥生時代の考古学』 学生社



奥谷南遺跡Ⅱ区全景（上空から）



奥谷南遺跡遠景（北上空から南東方向をのぞむ）

第7章 付編 奥谷南遺跡の土坑に関する自然科学分析

<目次>

はじめに	p.188
1. 試料	p.188
2. 分析方法	p.188
(1) 放射性炭素年代測定結果	p.188
(2) 花粉分析	p.188
(3) 樹種同定	p.189
3. 結果	p.189
(1) 放射性炭素年代測定結果	p.189
(2) 花粉分析	p.189
(3) 樹種同定	p.189
4. 考察	p.192
5. まとめ	p.192
引用文献	p.193

<図表・図版の一覧>

表1 分析試料の一覧

表2 放射性炭素年代測定結果

表3 花粉分析結果

図1 主要花粉化石群集の層位分布

図版1 木材

図版2 花粉化石

※ここで分析の対象となった土坑は、すべてⅢ区の土坑であり、堅果類貯蔵穴と位置付けられるものである。

奥谷南遺跡の土坑に関する自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

奥谷南遺跡（南国市岡豊町所在）は、旧石器時代の細石器、縄文時代草創期の隆起線文土器や南九州系の隆帯文土器などが出土しており、複合遺跡であることが知られている。今回の発掘調査では、縄文時代と考えられる土坑が数基検出されたが、これらの時代観に関する情報は少ない。また、土坑の性格として、覆土中より種実遺体が出土することから、貯蔵穴の可能性が考えられている。そこで今回は、土坑の時代観に関する情報を得るために放射性炭素年代測定、当時の周辺植生に関する情報を得るために花粉分析、土坑内で利用されたとみられる木材の種類を検討するために樹種同定をそれぞれ実施する。

1. 試料

試料は、放射性炭素年代測定がSK-2・SK-3から出土した種実遺体2点、花粉分析がSK-2～8から採取された土壌13点、樹種同定がSK-3から出土した綱代1点である（表1）。

表1 分析試料の一覧

土坑名	採取位置	質	分析項目		
			¹⁴ C	P	W
SK-2	B-7層	種子	○		
	サンプル壁へばりつき	暗灰黄色砂質シルト（細礫含む）		○	
	最下層	オリーブ褐色砂質シルト		○	
SK-3	西奥壁ぎわサンプル	種子	○		
	サンプル23	木材			○
	サンプル30	黒褐色砂質シルト（材含む）		○	
	S-33Fサンプル	黒褐色砂混じり粘土質シルト（材含む）		○	
SK-4	N-1	黒褐色砂混じり粘土質シルト（材含む）		○	
	N-6	黒褐色砂質シルト（材含む）		○	
SK-5	北端サンプル1	黒褐色砂質シルト（材含む）		○	
	南サンプル1	黒褐色砂質シルト（材含む）		○	
SK-6	北端サンプル3	灰黄褐色砂質シルト（材含む）		○	
SK-7	埋土Ⅲ層	灰オリーブ色砂質シルト		○	
	埋土Ⅳ層	黒褐色砂質シルト（材・中礫含む）		○	
SK-8	埋土Ⅳ層	黄灰色砂混じり粘土		○	
	S-4	黒褐色砂混じりシルト質粘土（炭化材含む）		○	

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定結果

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

(2) 花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛、比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝9：1）の順に物理・化学的な処理を

施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の各種類の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフン (-) で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

(3) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定結果

結果を表2に示す。測定の結果、SK-2出土種子が約4,730年前、SK-3出土種子が約4,230年前の測定値を示す。

表2 放射性炭素年代測定結果

試料名	質	年代 (1950年よりの年数)	Code No.
SK-2 B-7層	種子	4,730 ± 110 ($\delta^{13}\text{C} = -30.9$) 2,780 B.C.	Gak 20252
SK-3 西奥壁ざわサンプル	種子	4,230 ± 90 ($\delta^{13}\text{C} = -32.0$) 2,280 B.C.	Gak-20253

注1) 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期 5,570年を使用

注2) 年代値は同位体効果の補正を行った値

(2) 花粉分析

結果を表3・図1に示す。各試料とも花粉化石が良好に検出される。木本花粉の出現傾向は、SK-7とそれ以外の遺構で異なる。SK-7では、コナラ属アカガシ亜属・シイノキ属が優占する。その他に種類は、出現率が極めて低率である。SK-7以外の遺構埋積物では、基本的にはコナラ属アカガシ亜属が多産し、シイノキ属を伴う。ただし、SK-5ではシイノキ属の出現率がやや高い。この他、モミ属・ツガ属・マツ属・スギ属・イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科・ヤマモモ属・クマシデ属・アサダ属・コナラ属コナラ亜属・エノキ属・ムクノキ属・カエデ属・ツバキ属などを伴う。これらの種類の中でエノキ属・ムクノキ属がSK-4とSK-6で、またツバキ属がSK-3サンプル30で比較的多く検出される。

草本花粉の出現傾向は、イネ科・カヤツリグサ科・タデ属・マメ科・ヨモギ属などが検出されるが、総花粉・胞子に対して草本花粉の占める割合が10%以下と低率である。

(3) 樹種同定（網代）

木材はイヌビワ属に同定される。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・イヌビワ属 (Ficus) クワ科

表3 花粉分析結果

種類	試料名	SK-2		SK-3		SK-4		SK-5		SK-6		SK-7		SK-8	
		サンプリング層別	最下層	サンプリング層別	S-XFサンプリング層別	N1	N6	北端サンプリング層別	南サンプリング層別	北端サンプリング層別	埋土層別	埋土層別	埋土層別	S-4	
木本花粉															
マキ属		1	-												
モミ属		5	2	1	1	2	7	3	1	2	1				
ツガ属		3	4	2	2	2	1	2	2		2	1	1	1	
マツ属		1	5	1	1	1	3	-	1	2	2	-	2	2	
コウヤマキ属		-	-	1	-	1	1	-	-		1	-	-	-	
スギ属		3	1	-	2	1	1	1	3	2	2	-	1	5	
イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科		3	2	9	2	1	1	2	1		3	2	3	2	
ヤマモモ属		2		5	2	2		3	4	1	2		6	2	
サウダグミ属		2	-	1			1		1	-		1			
クルミ属		-	-	-				-	-	-	-	-			
クマシデ属 アサダ属		9	2	1	1	7	5	4	4	2	-	2	2	2	
ハンノキ属		-	1	-	-	2	-		1	6	-		-	2	
ブナ属		-	1	-	1	-	-	-	-	1	-	1	2	-	
コナラ属コナラ亜属		10	6	8	3	4	6	6	2	6	3	5	4	19	
コナラ属アカガシ亜属		195	150	166	180	144	135	192	158	172	138	103	189	180	
クリ属		1	1	1	1	2			3	1	1	1	1	1	
シイノキ属		6	6	9	11	14	11	33	74	19	162	147	25	31	
ニレ属-ケヤキ属		-	-	-	-	2	4	2	1	1	1	-		1	
エノキ属 ムクノキ属		2	8	-	2	17	32	1	1	20	1	2			
シキミ属		-				-		-					1	1	
ザンショウ属		-				-		-					-	-	
カラスザンショウ属		1	-	1	1	-	2	-	1	1	1	-	3	1	
キハダ属		1	2			-		1					-	-	
ミカン科															
アカメガシラ属		-			1					1			2		
ニシキギ属		-	-	-		-		-	-	-	-	-	1		
カエデ属		-	-	2	4	-	1	3	2		1	1	-	-	
トチノキ属		-		1	-	1		-					-	-	
クロウメモドキ属		-		1	3			-	1				-	-	
ブドウ属		-			1	-		-	-	-	-	-	-	-	
ツタ属		1			1	1	1	-	1				1	-	
ノブドウ属			1		1	1	4		1	1			2		
ツバキ属		1		45	1	7	2			5	1	1	1		
グミ属		-		-	-	-					1	-		-	
ウロギ属		1		-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	
ミズキ属		-			-	-		-					1	-	
ツツジ属									1						
カキ属		-		-		-		-	-		1	1		-	
ハイノキ属		-	1			-	1	1	1				2	1	
エゴノキ属		1	1												
テイカカズラ属		1		-				1	1	-		-			
ニワトコ属近似種				-					-	-	-	-			
ガマズミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
草本花粉															
ガマ属		1			-	-		-							
イネ科		10	7	4	-	3	2	-		6	2	2	5	3	
カヤツリグサ科		2		-	-	-	2	-		1			1	1	
ユリ科		-	1			-				-					
クワ科						1	2			-			1		
タデ属		3	5					4	1	1	3	2			
アカザ科		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
キンボウゲ科		1	-	1	1	-	1	2	1	3		1	2	-	
タケニグサ属		2				-							-	1	
バラ科		-	2	3	1	-	4	2	3	2	1		-	1	
マメ科		1	1		1	2		1	-	1	1	5	3	1	
セリ科		-	1		1	1		2					-		
シソ科		-			1									1	
オミナエシ属								2		-					
マツムシソウ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ゴキツル属		-		-	-	-		-	-	-	-				
ヨモギ属		8	4	1	-	1	-	3	2	-	1	-	2	1	
キク亜科		2	2	1	-	-			-	2	1	-	-	2	
タンポポ亜科		1	-	-	-	-	-	-	-		1	-	-	-	
不明花粉		3	7	14	4	4	8	3	6	2	2		5	6	
シダ類胞子															
シダ類胞子		70	62	48	38	437	254	24	37	86	70	69	113	227	
合 計															
木本花粉		250	196	256	224	212	219	259	270	245	325	271	252	252	
草本花粉		32	24	10	5	9	12	17	7	17	11	13	14	11	
不明花粉		3	7	14	4	4	8	3	6	2	2	1	5	6	
シダ類胞子		70	62	48	38	437	254	24	37	86	70	69	113	227	
総計（不明を除く）		352	282	314	267	658	485	300	314	348	406	353	379	490	

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2～4個が複合して散在し、分布密度は低い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1～5細胞幅、1～30細胞高。柔組織は独立帯状。

4. 考察

縄文時代と考えられる土坑は、SK-2およびSK-3で得られた放射性炭素年代測定値によると、約4,700年前～4,200年前頃に利用されていた、また、埋没したことが推定される。

土坑内覆土中の花粉化石群集は、いずれもアカガシ亜属が多産することが特徴であった。ただし、SK-5およびSK-7ではシイノキ属、SK-4およびSK-6ではエノキ属－ムクノキ属、SK-3ではツバキ属なども多産しており、土坑間で多産する種類構成に多少の違いが認められた。このような差異は、土坑の埋没時期（年代・季節など）の違い、土坑周囲の局地的な植生の違い、土坑を埋めている土壌の由来の違いなどを反映している可能性がある。いずれにせよ、調査地点周辺には、暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要構成要素であるアカガシ亜属やシイノキ属などからなる植生が成立していたと考えられる。このような植生は、木本花粉の出現率が高率であったことから、遺跡付近まで迫っていたと思われる。また、当時の森林構成要素として、ヤマモモ属・クマシデ属－アサダ属・コナラ亜属・エノキ属－ムクノキ属・カラスザンショウ属・カエデ属などの広葉樹の種類やツタ属・ノブドウ属・テイカカズラ属などツル性植物などが分布していたとみられる。したがって、当時の植生は樹種構成の豊富な森林であったと推定される。本遺跡の近くの岡豊低湿地で行われた花粉分析結果によると、約7,000年前から約2,000年前までシイノキ属・アカガシ亜属などの照葉樹林が優勢であったことが推定されている（山中ほか、1992）。このことは、今回の結果とも調和的であり、縄文時代の本地域には、シイ・カシなどからなる暖温帯性の植生が広く分布していたことが推定される。

土坑から出土した木材は、何らかの用材の可能性が考えられる。樹種はイヌビワ属であった。イヌビワ属の木材は軽軟で、現在では薪炭材や雑用材などに用いられるが、特別の用途はないとされる（平井、1981）。このことを考慮すれば、本試料についても周辺に生育していたものを利用したことが推定される。

5. まとめ

縄文時代と考えられる土坑は、年代的には約4,700～4,200年前頃に利用されていたことが推定され、土坑間での花粉化石群集の組成の違いを考慮すると、遺構により構築時期が多少異なっていた可能性がある。

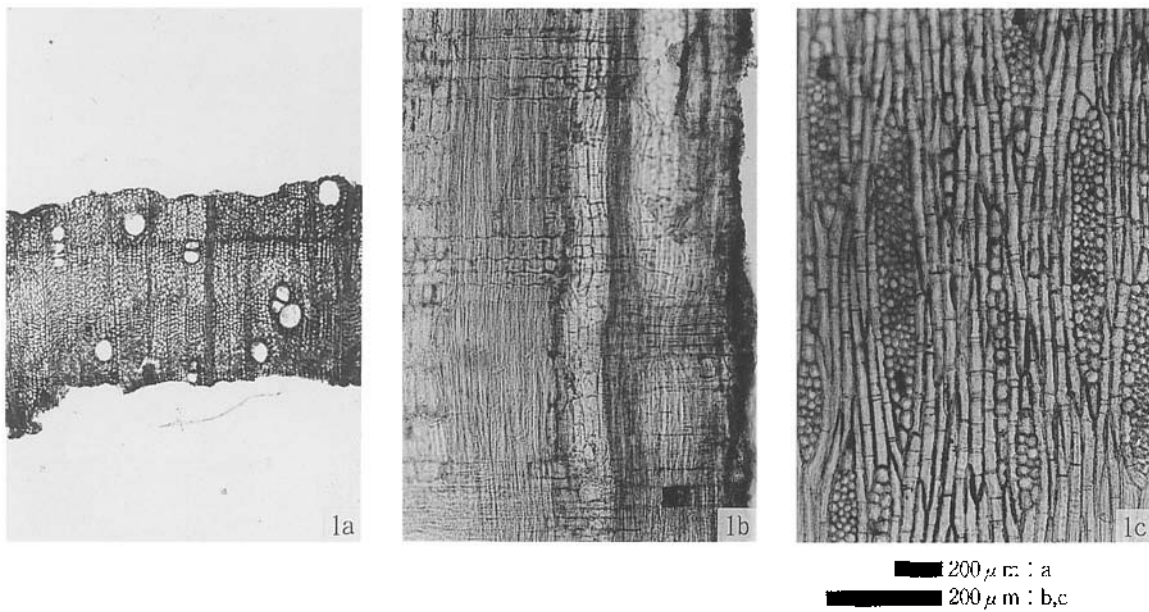
土坑が利用されていた当時、遺跡近辺にはカシ類・シイ類などを主とする、樹種構成の豊富な暖温帯性の植生が成立していたことが推定される。本遺構の性格として貯蔵穴の可能性が考えられている。主要な植生構成要素であったカシ類・シイ類の種実にはアクヌキを必要としないドングリ類である。当時の植生環境を考慮すると、調査地点近辺で採取対象となる種実が人手し易い状況にあったことが窺える。このことは土坑の性格を検討する上で貴重な成果といえる。

引用文献

平井信二 (1981) 木の事典 第10巻. かなえ書房.

山中三男・伊藤山美子・石川愼吾 (1992) 高知平野の岡豊低湿地完新世堆積物の花粉分析. 日生態会誌, 42, p.21-30.

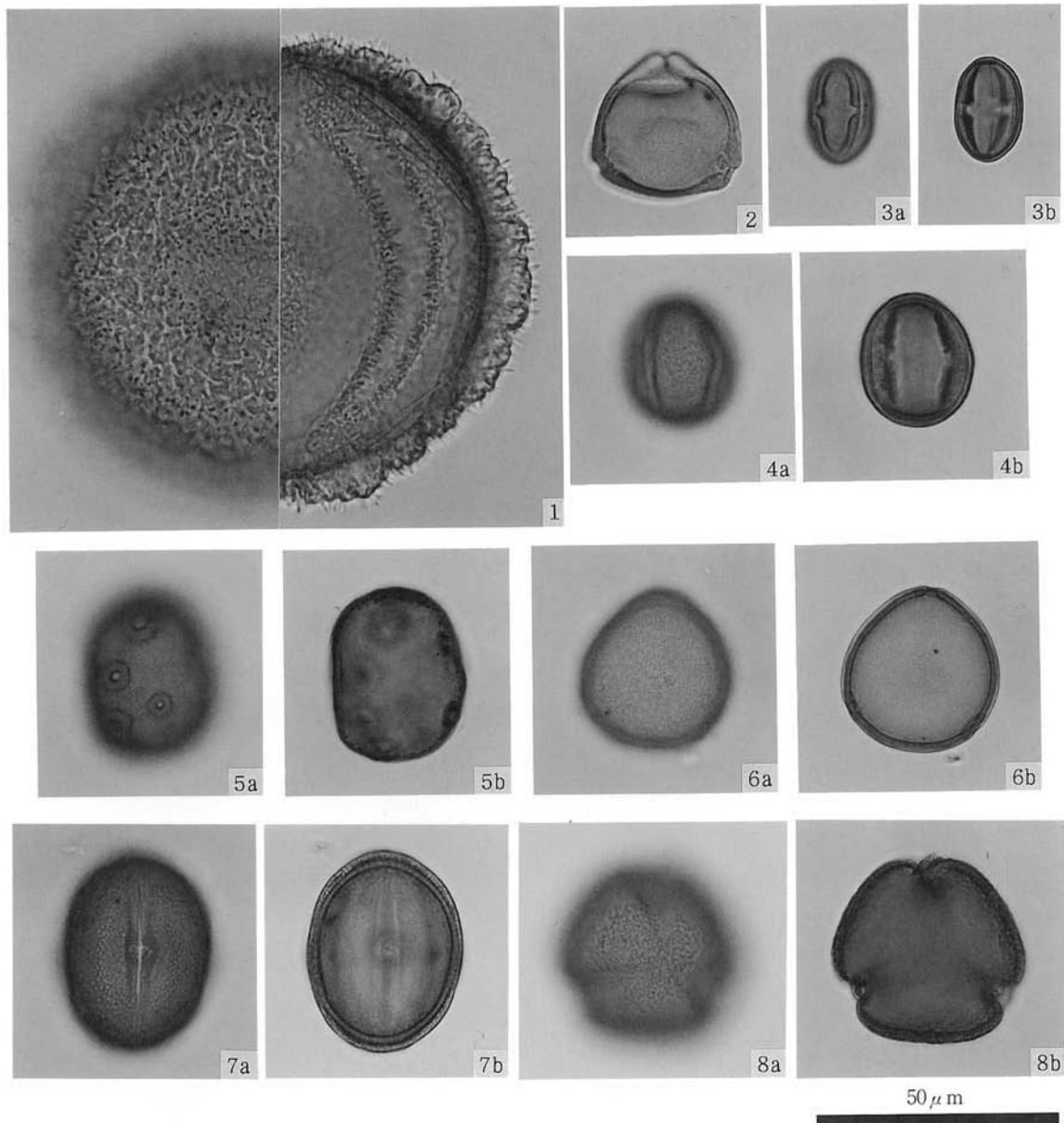
図版1 木材 (網代)



1. イヌビワ属 (Ⅲ区SK-3 No.23)

a: 木口, b: 柱心, c: 板目

図版2 花粉化石



- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1. ツガ属 (SK-5南サンプル1) | 2. ヤマモモ属 (SK-5南サンプル1) |
| 3. シイノキ属 (SK-5南サンプル1) | 4. コナラ属アカガシ亜属 (SK-5南サンプル1) |
| 5. テイカカズラ属 (SK-5南サンプル1) | 6. エノキ属—ムクノキ属 (SK-5南サンプル1) |
| 7. ノブドウ属 (SK-5南サンプル1) | 8. ツバキ属 (SK-5南サンプル1) |

写 真 图 版

奥谷南遺跡調査前（上空から）



I・Ⅲ区 調査前（上空から）



Ⅱ区 調査前（上空から）



PL 2



試掘調査



I 区 調査前風景



I 区 西斜面調査前の状況及び確認トレンチ (TR-6)



I区 全景 (上空から)



I区 ST-1 周辺 (南から)



I区 ST-1 完掘（平野部をのぞむ）



I区 ST-1 セクション



I 区 ST-1



II 区から I 区尾根方向をのぞむ



ST-1 出土遺物



I 区 ST-1



I 区 ST-1 下層・最終確認



I 区 ST-2 セクション



I 区 ST-2 完掘 (斜面上方より)



I 区 SX-2



I 区 西斜面・SX-3・SX-4・SB-1



I 区 SX-8 出土遺物



I 区 SX-8からST-1方向をのぞむ



I 区 SX-4



I 区 SX-3



I 区 SX-12



I 区 SK-1 出土遺物



I 区 SK-1 遺物取り上げ後の土坑とセクション



I 区 SK-2



I 区 SK-2



I 区 SK-3 セクション



I 区 SK-3 遺物出土状況（寛永通宝）



I 区 SK-3 遺物出土状況（伊万里）



I 区 SK-3



I 区 SK-3



I 区 調査風景



Ⅱ区 調査前（北から）



Ⅱ区 調査前（南から）



Ⅱ区 遠景（南から）



Ⅱ区 遺構完掘状況（上空から）



Ⅱ区 確認トレンチ



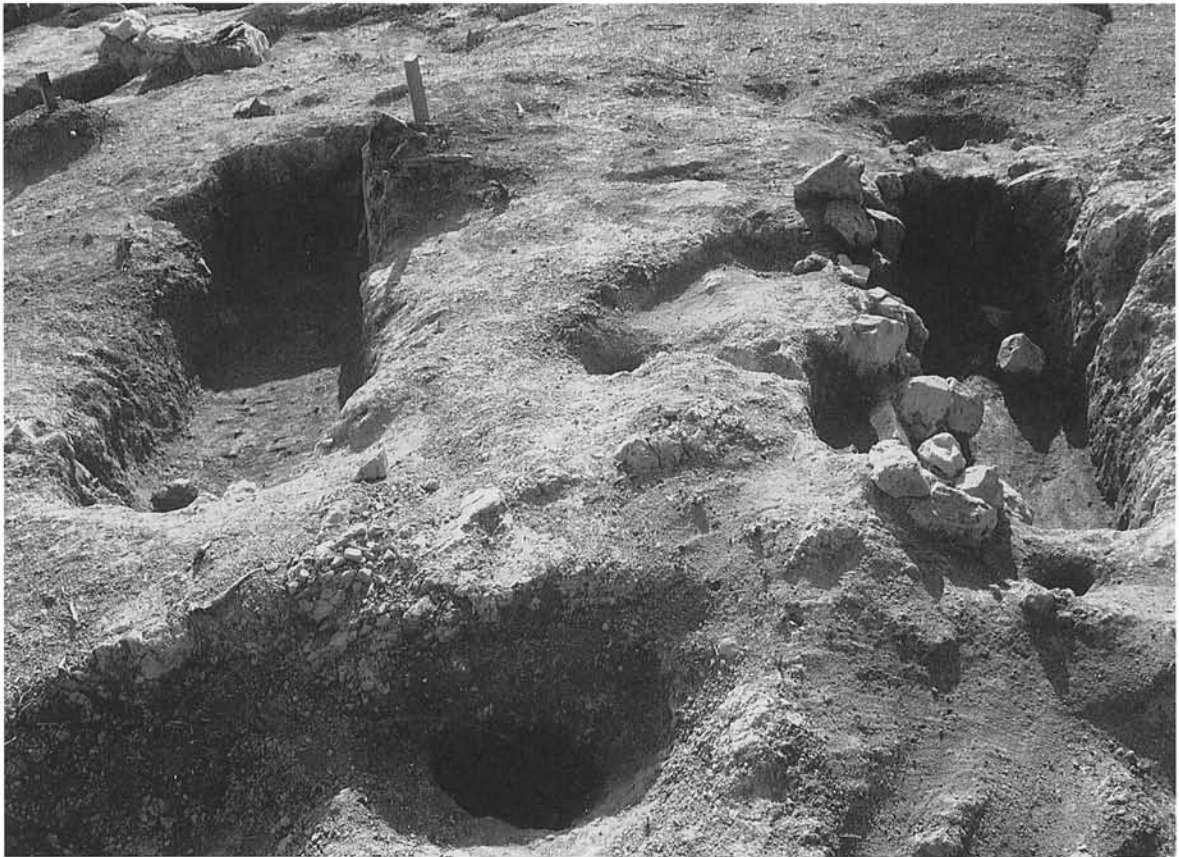
Ⅱ区 設定バンク（北から）



Ⅱ区 南北方向バンク（6ライン）



Ⅱ区 東西方向バンク（Cライン）



Ⅱ区 SK-1・SK-6 礫検出状況



Ⅱ区 SK-1・SK-6 最終礫検出状況



Ⅱ区 SK-6



Ⅱ区 SK-6



Ⅱ区 SK-6



Ⅱ区 SK-5



Ⅱ区 SK-1北端礫 検出状況

Ⅱ区 SK-1から
SK-3・4・5方向をのぞむ

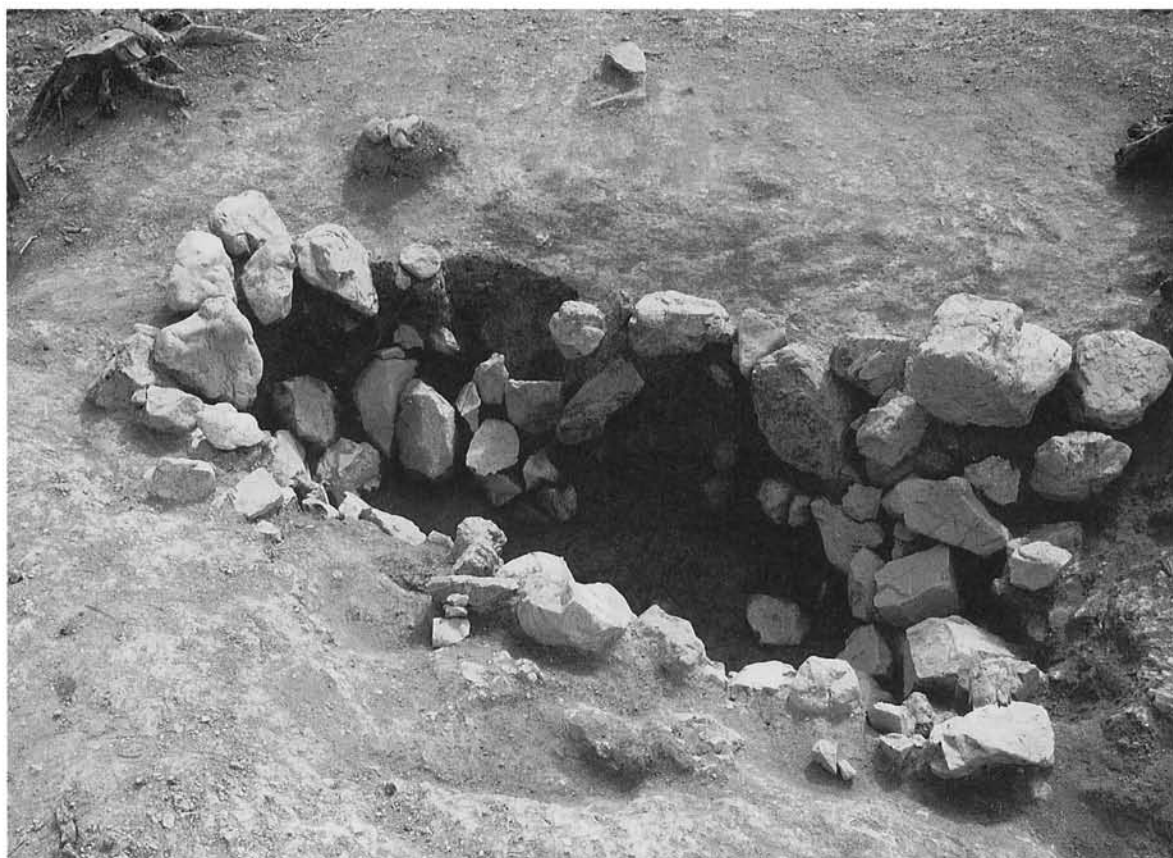


Ⅱ区 SK-2・3・4

PL 24



Ⅱ区 SK-2



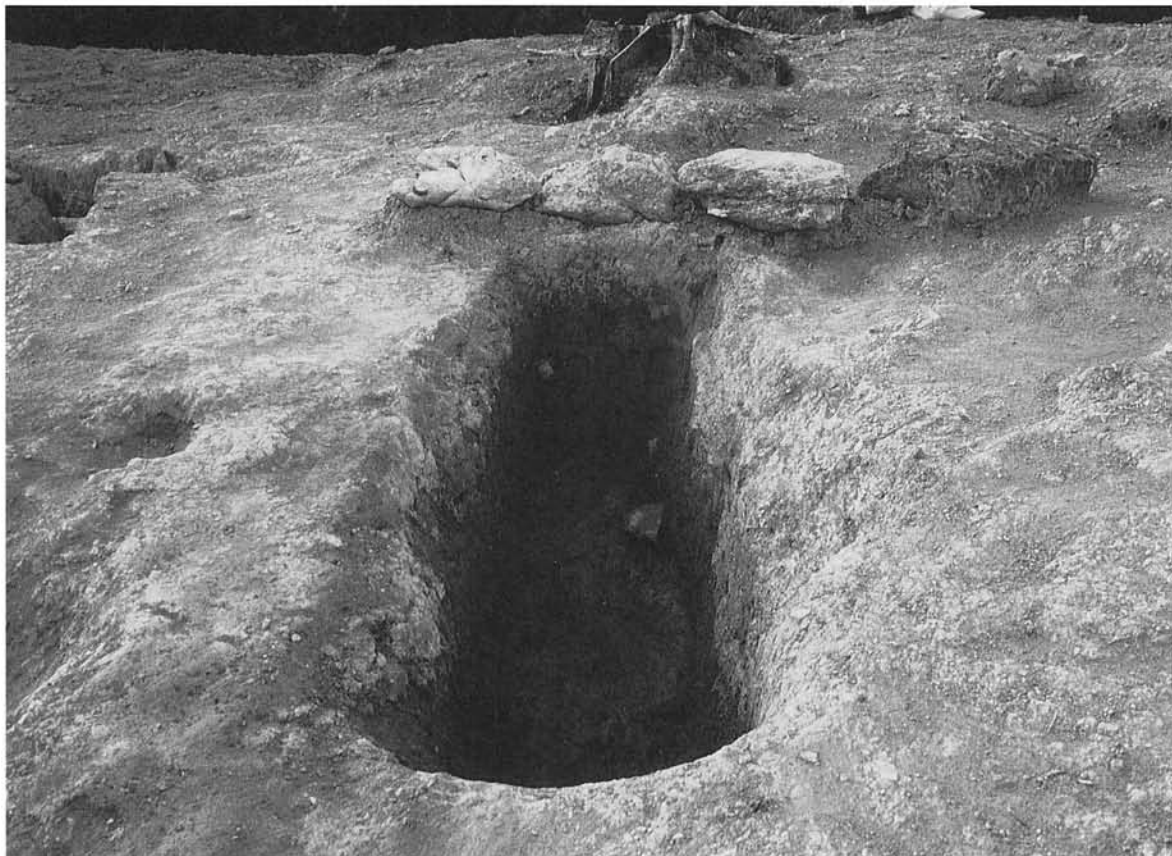
Ⅱ区 SK-2



Ⅱ区 SK-2完掘



Ⅱ区 SK-2最終礫検出状況



Ⅱ区 SK-3



石列検出状況



供献土器(139)



供献土器(139)



供献土器(139)



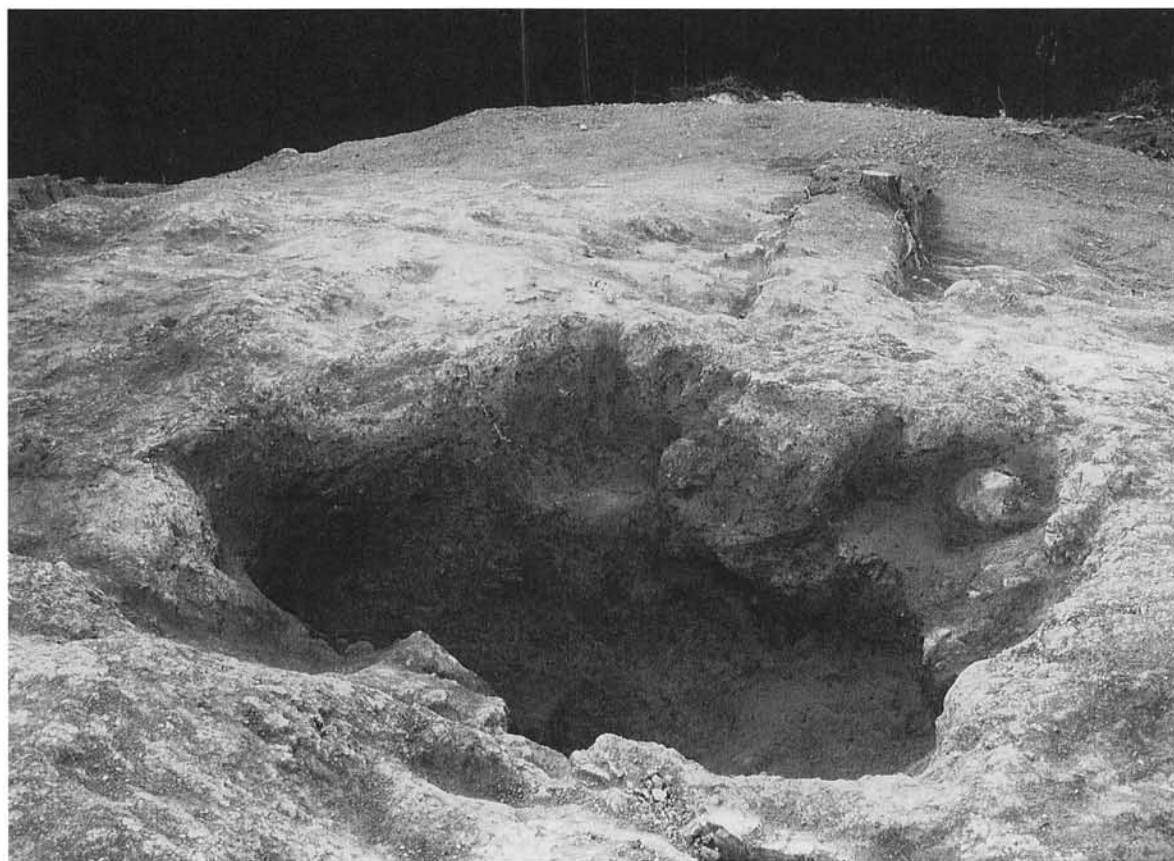
供献土器(139)



II区 SK-4



II区 SK-7



II区 SK-4 完掘



SK-1



SK-3



SK-4



SK-5

Ⅱ区 遺構完掘状況



Ⅲ区 調査前風景



Ⅲ区 調査前風景



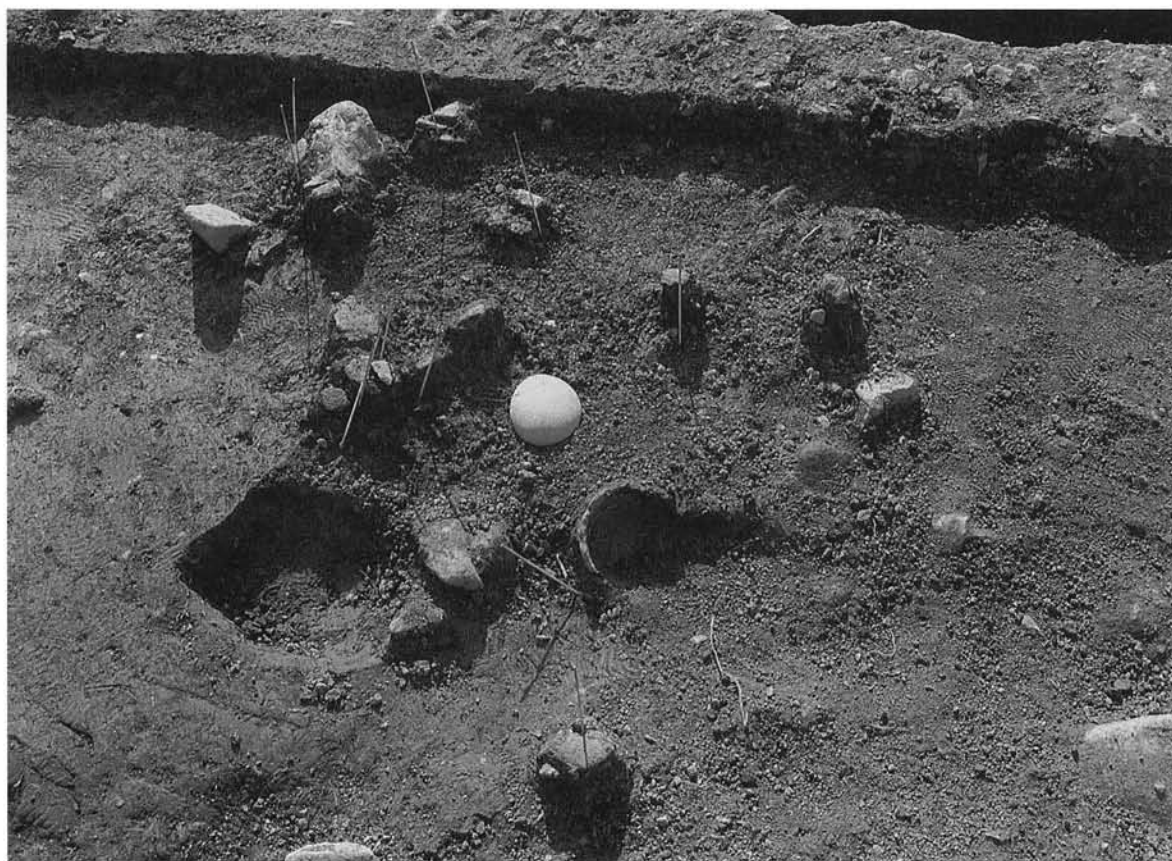
Ⅲ区 全景（上空から）



Ⅲ区 貯蔵穴周辺（上空から）



Ⅲ区 西側谷状地形・遺構面



Ⅲ区 遺物出土状況



Ⅲ区 東側の谷状地形



貯蔵穴（北から）



貯蔵穴 (SK-2～SK-8 北から)



貯蔵穴東側 南北セクション



SK-2



SK-2 セクション



SK-2



SK-3



SK-3とSK-4



SK-3



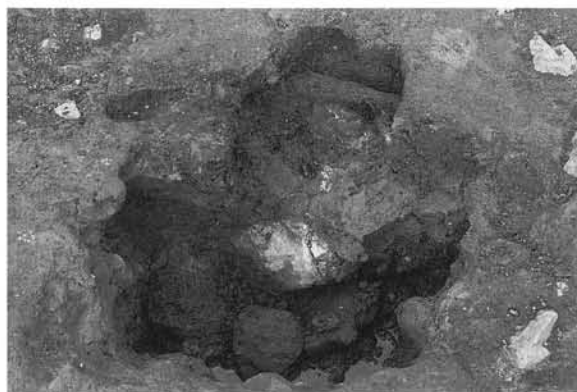
SK-3



SK-4



SK-4



SK-4



SK-4



SK-4



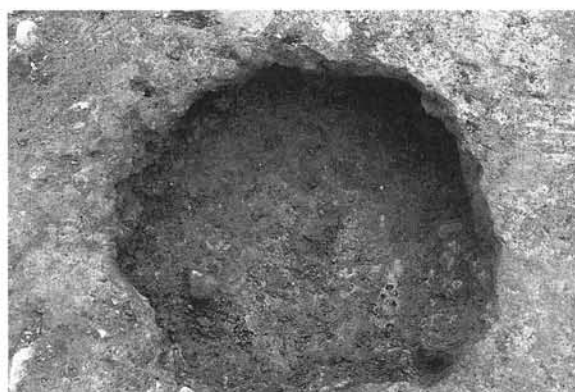
SK-5



SK-2~8 (南から)



SK-5



SK-5



SK-6



SK-7



SK-7



SK-8



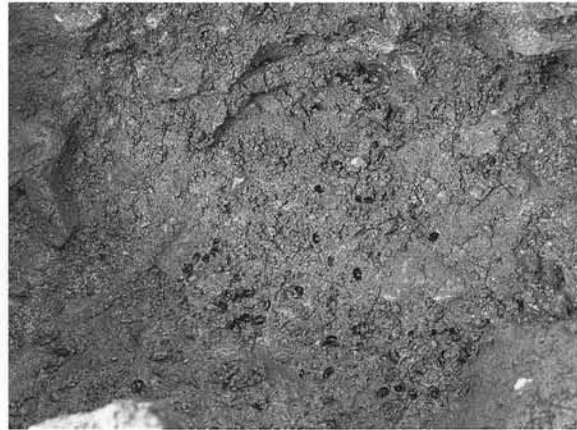
SK-8



SK-8



SK-2



SK-2 最下層堅果類出土状況



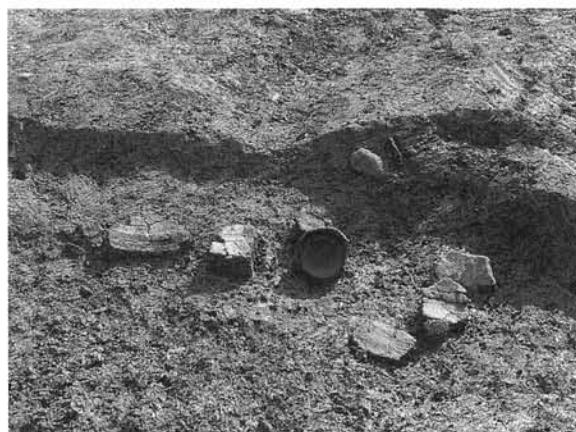
SK-2 最下層堅果類出土状況



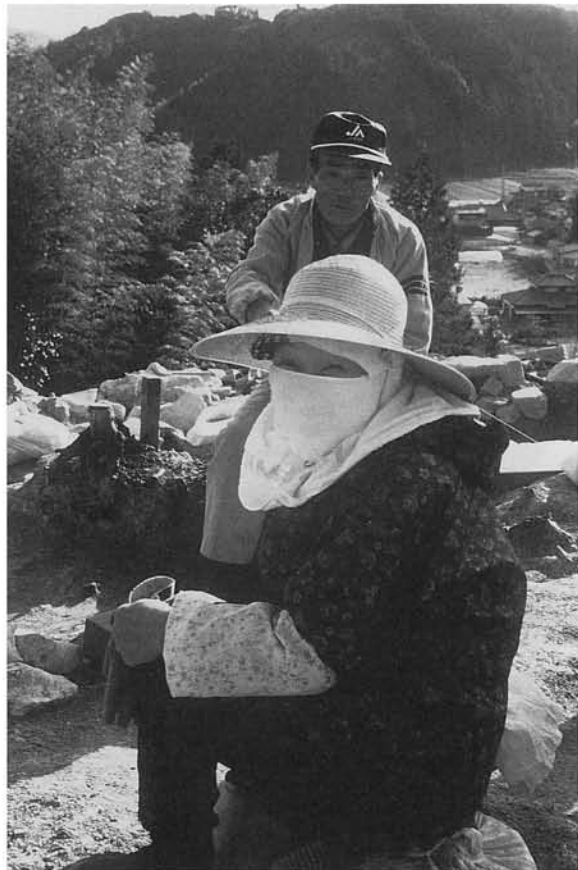
出土直後の堅果類



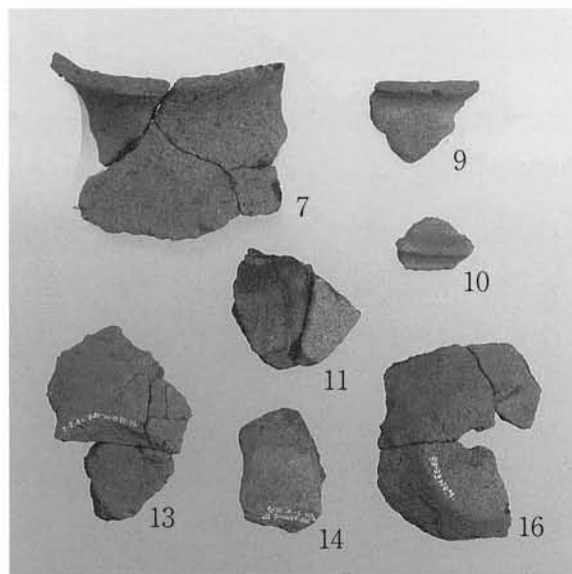
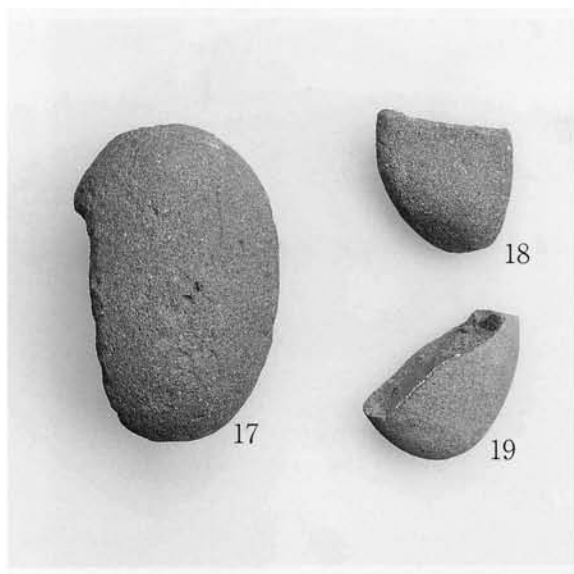
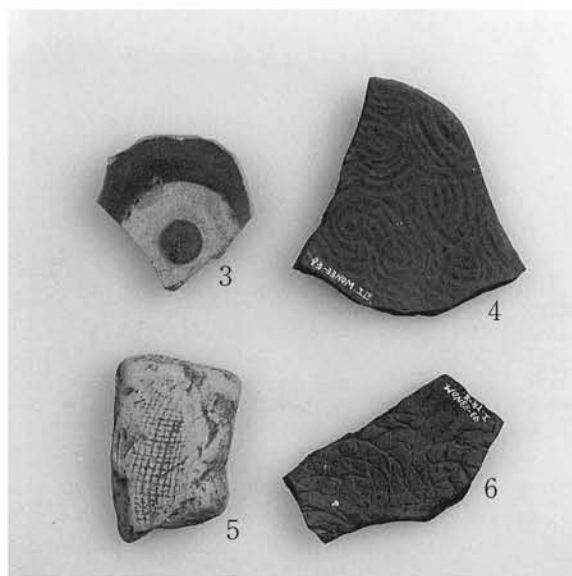
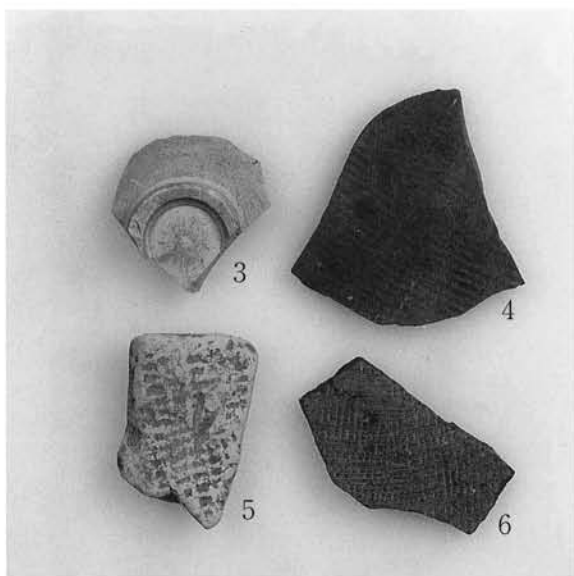
Ⅲ区 貯蔵穴（SK-2・3・4・7）及び堅果類出土状況



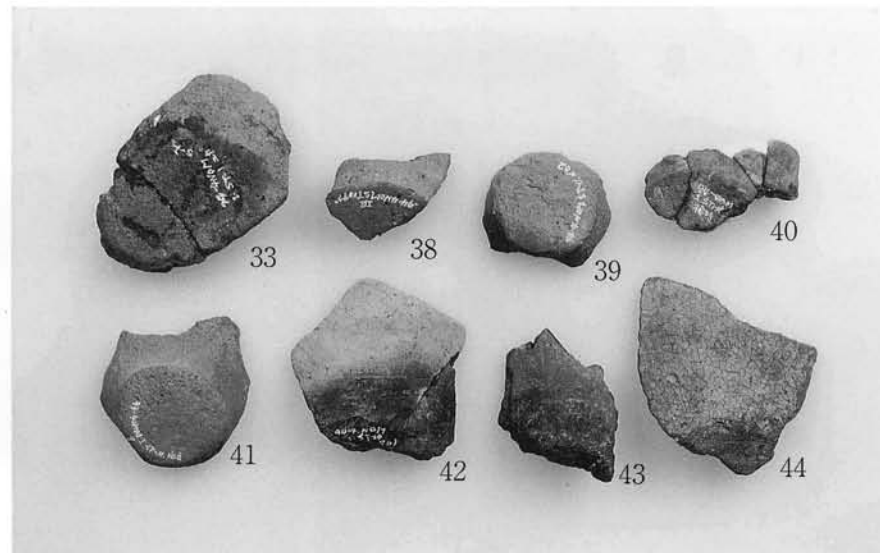
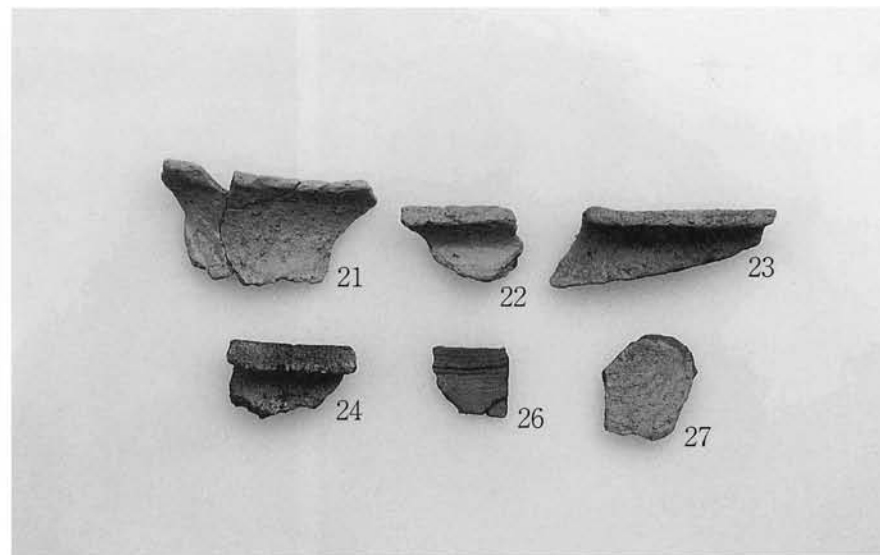
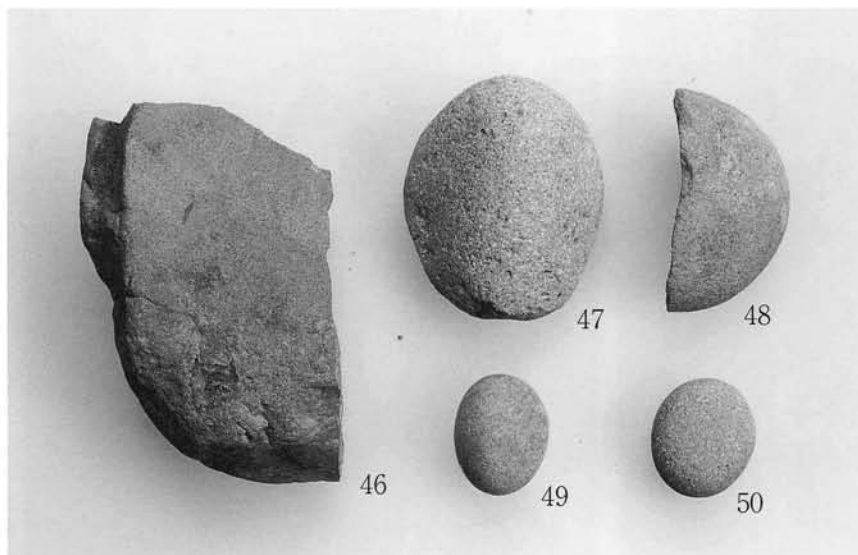
Ⅲ区 遺物出土状況



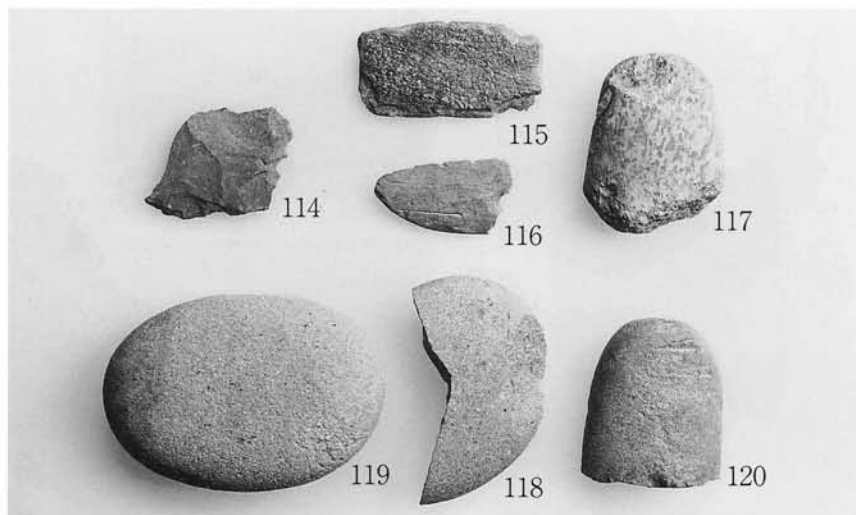
Ⅱ・Ⅲ区 作業風景



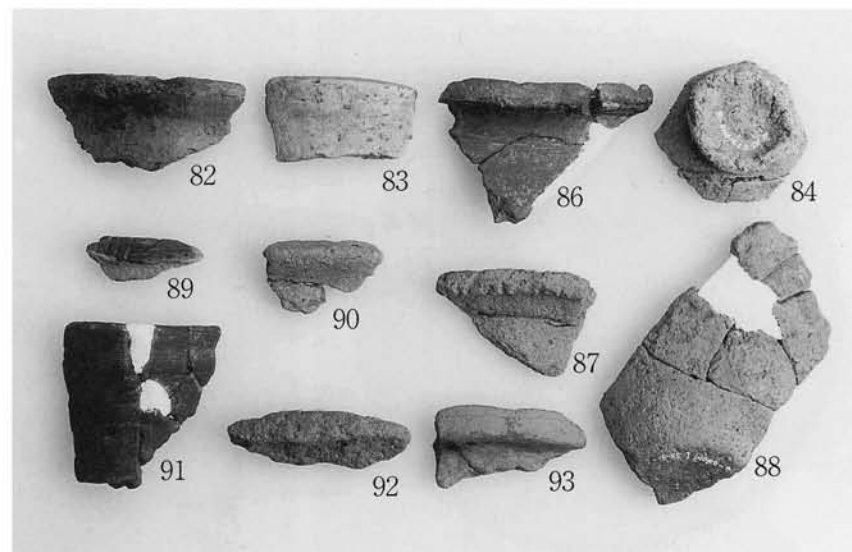
試掘調査出土遺物



I 区 ST-1出土遺物



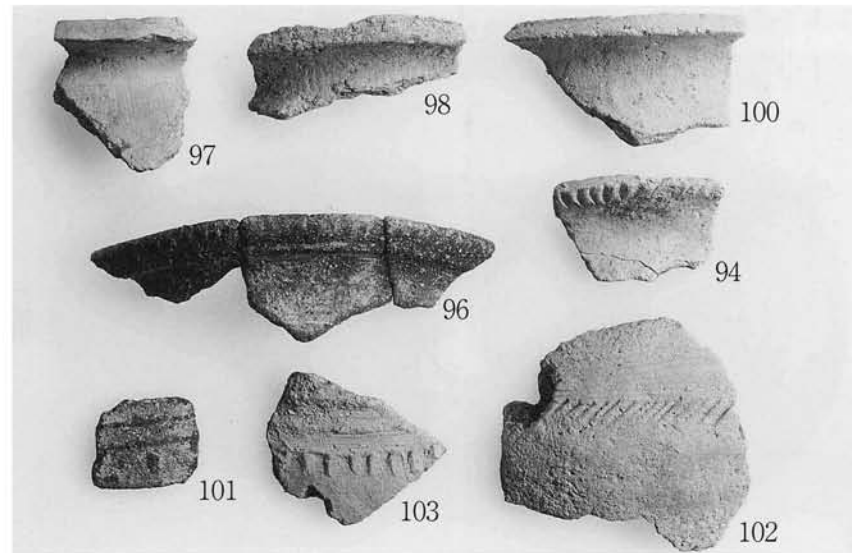
I 区 包含層出土遺物 (石器)



I 区 SX-4 出土遺物



I 区 SX-5 出土遺物 (紡錘車)



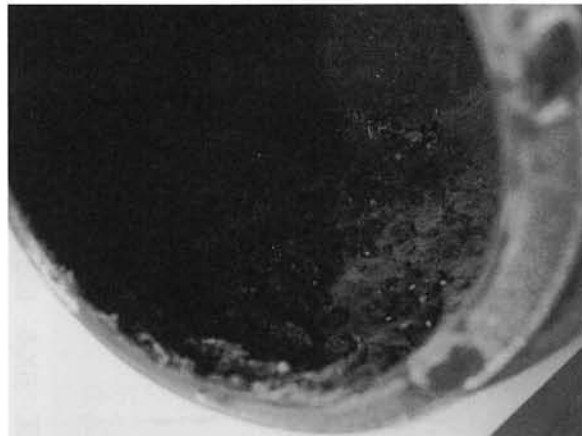
I 区 包含層出土遺物



SK-1



SK-1



SK-1 122内面付着物



SK-3



124~129 表



裏



側面



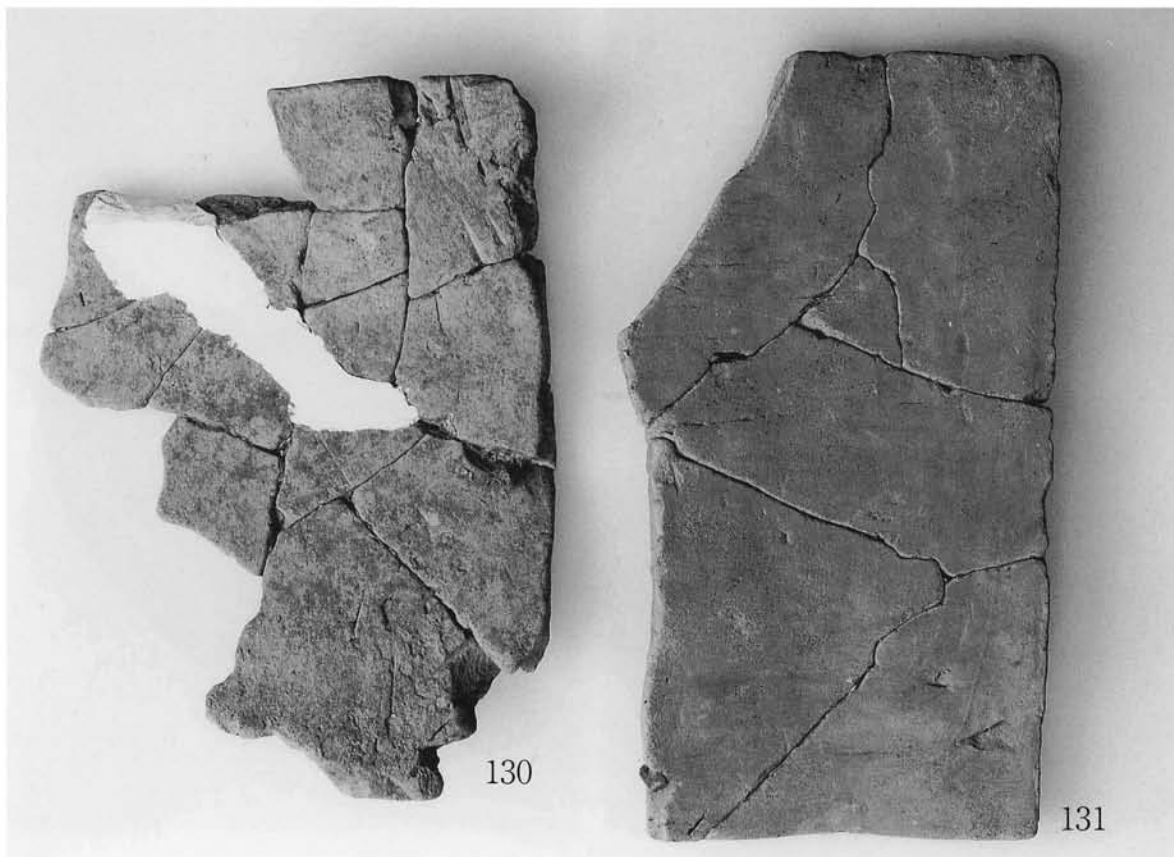
側面

SK-3

I区 出土遺物 (SK-1・SK-3)

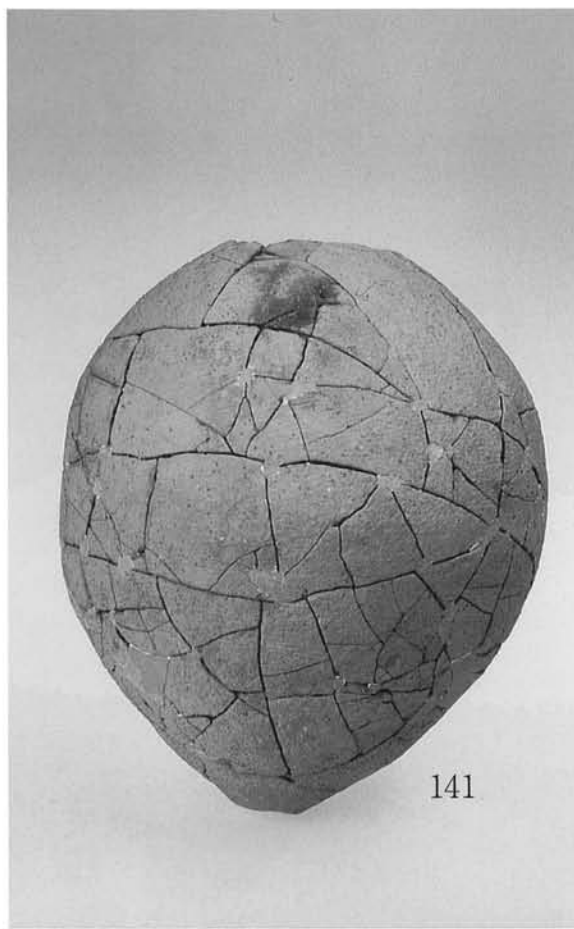
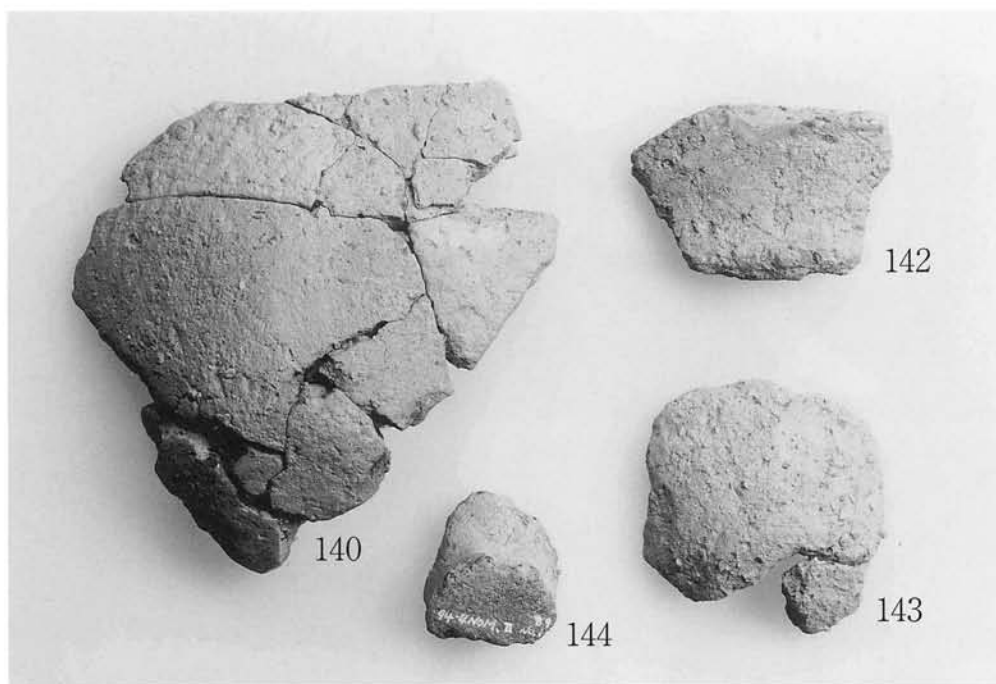


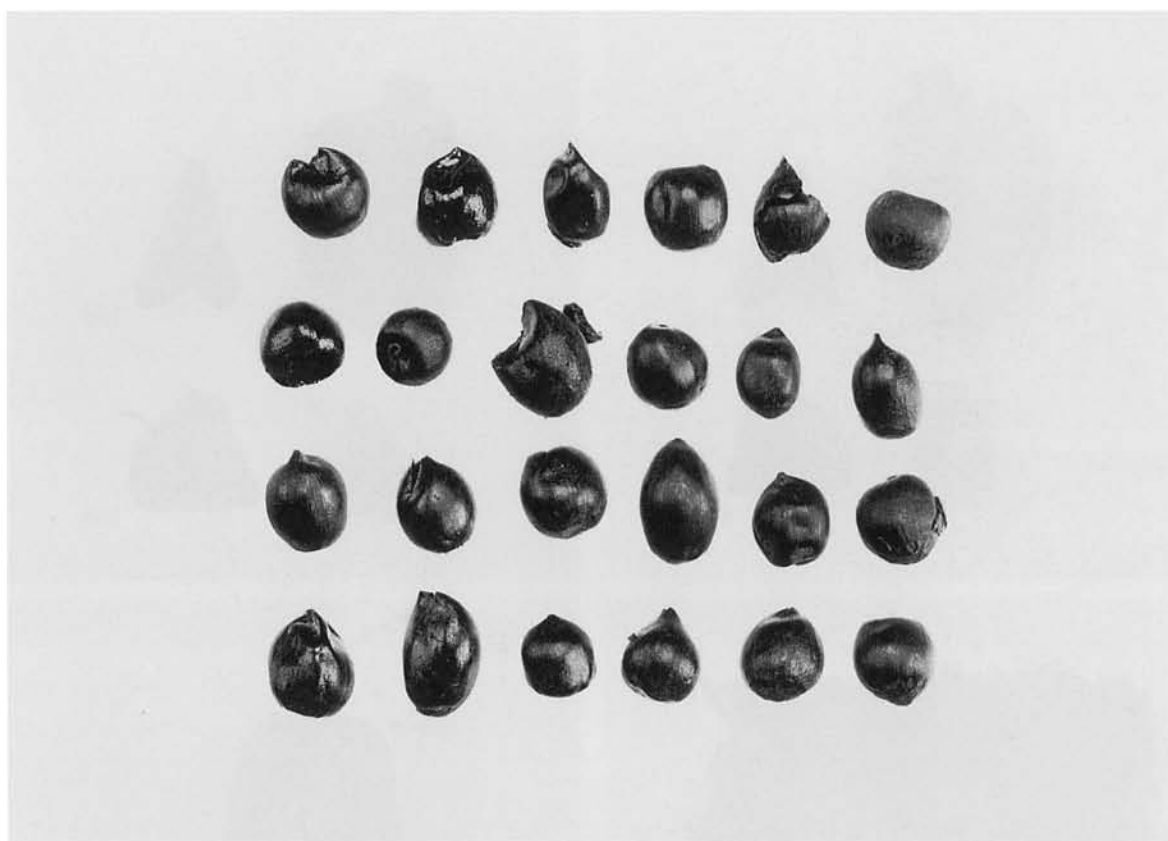
凸面



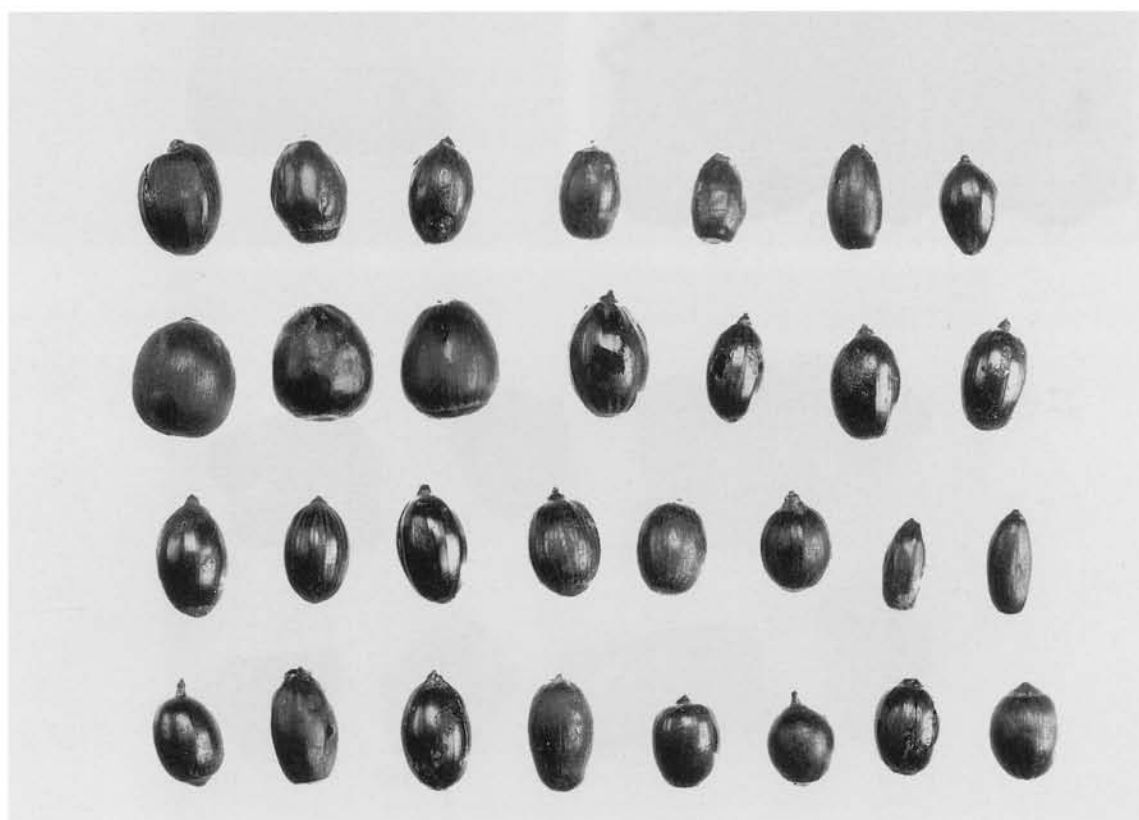
I 区出土遺物 (SK-4)

凹面

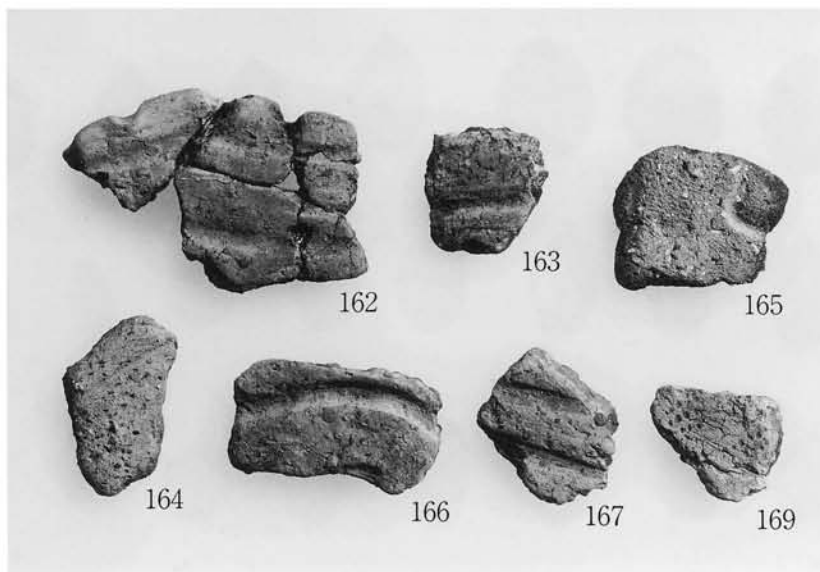
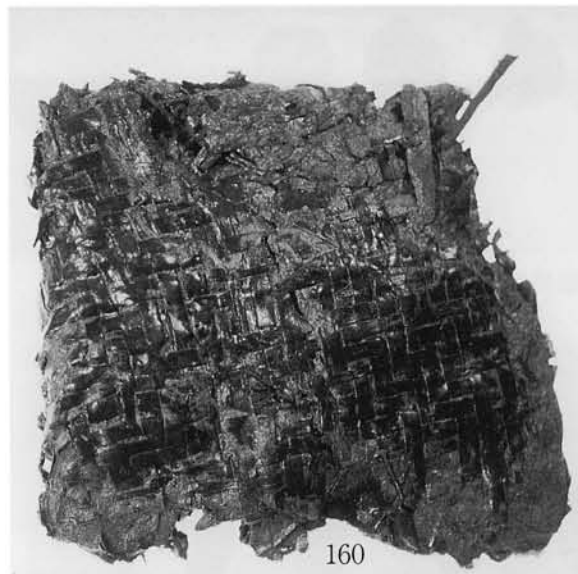
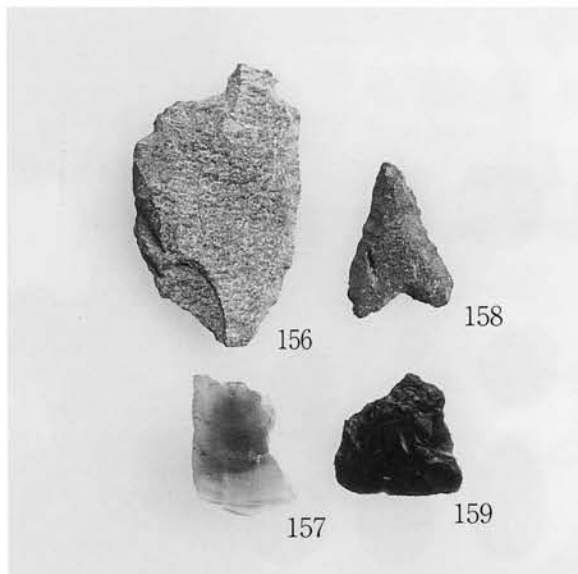




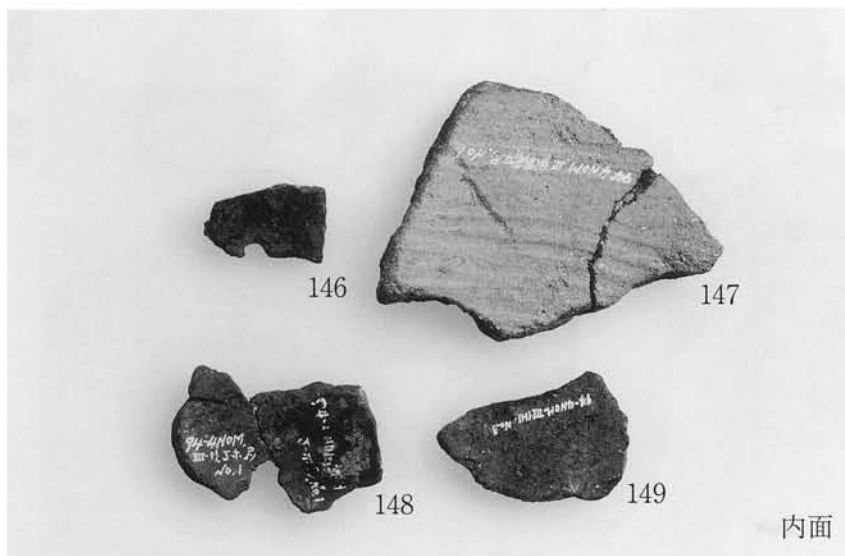
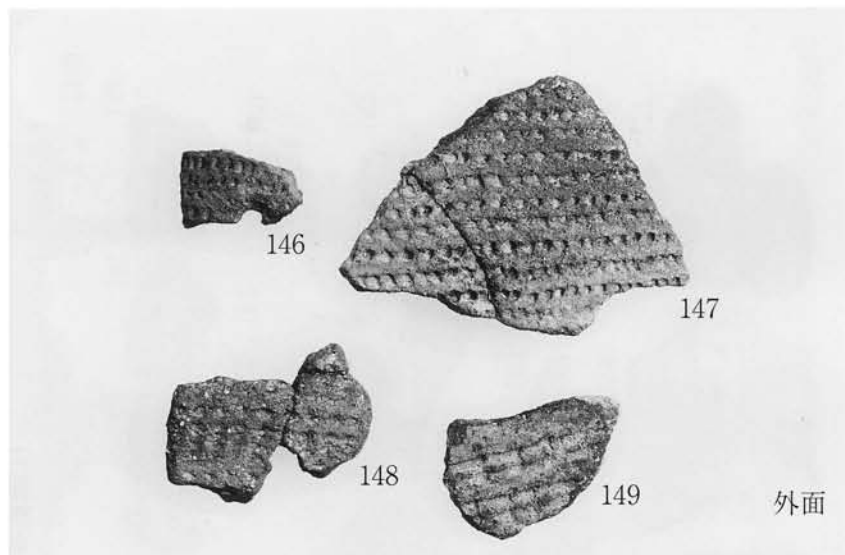
貯蔵穴出土堅果類(1)



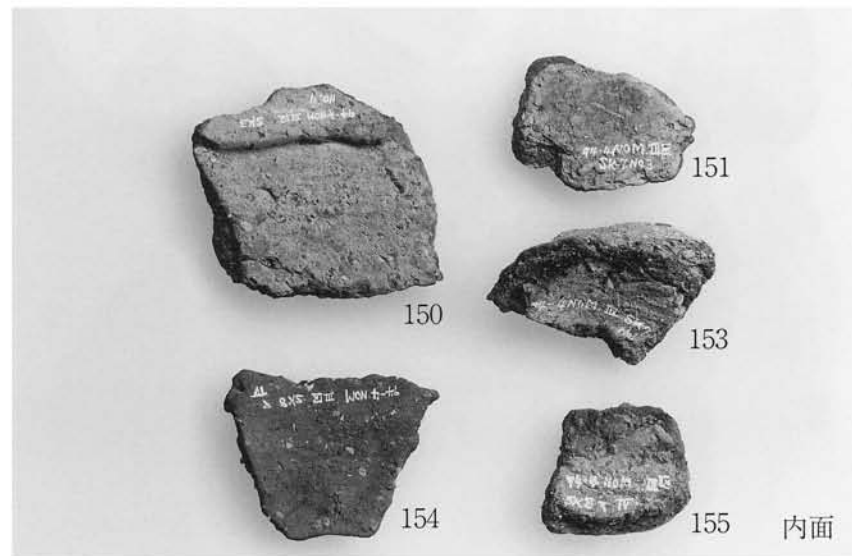
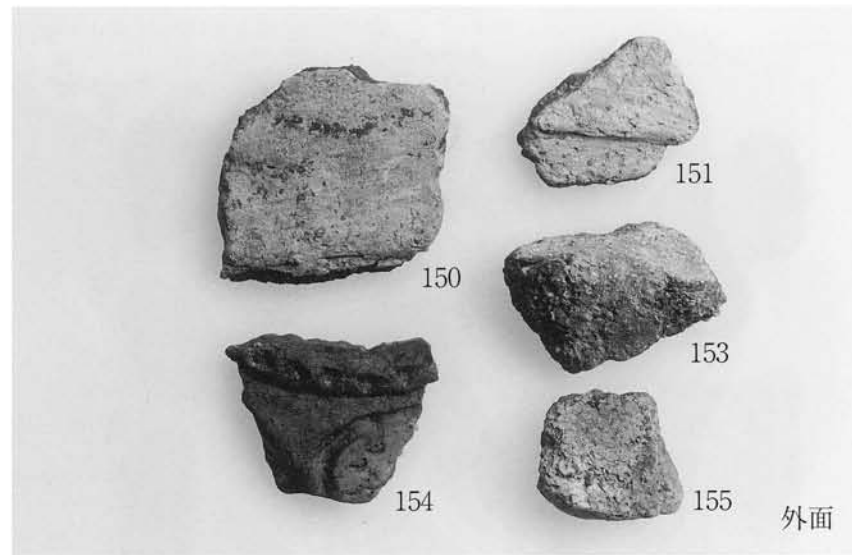
貯蔵穴出土堅果類(2)



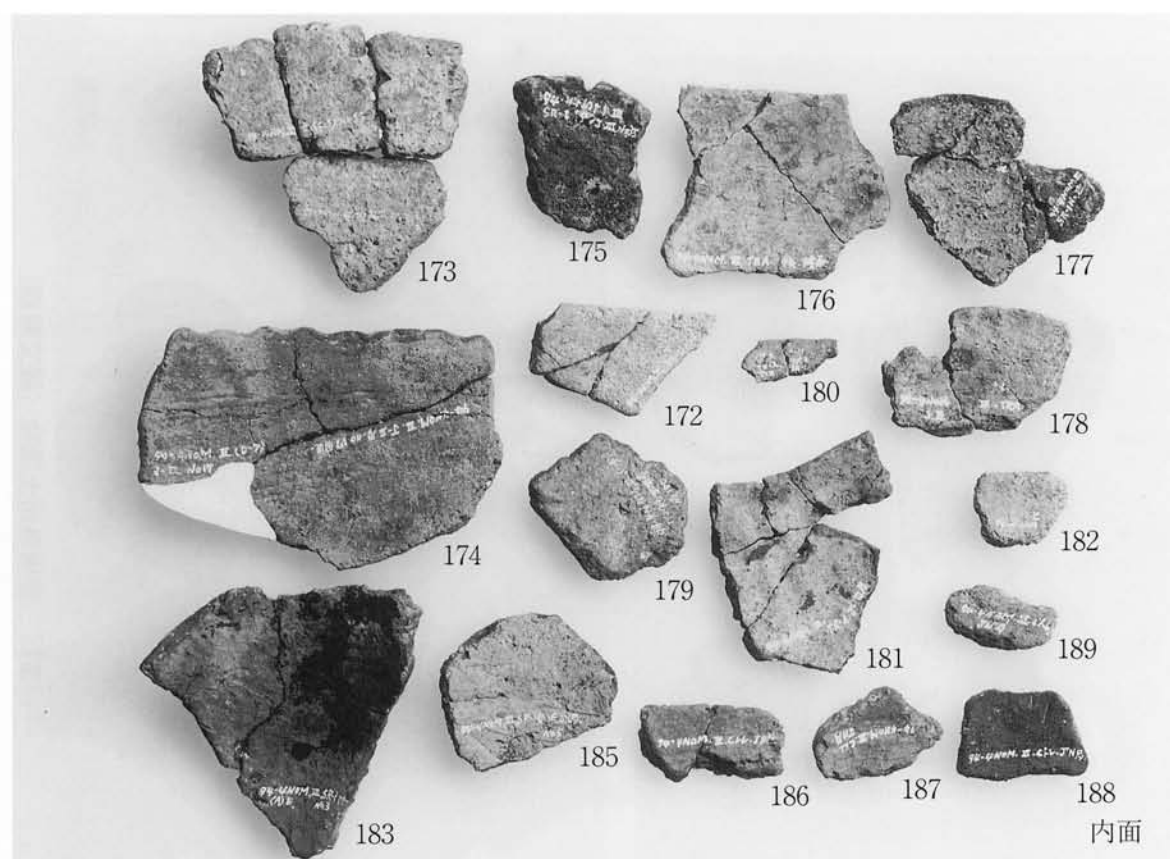
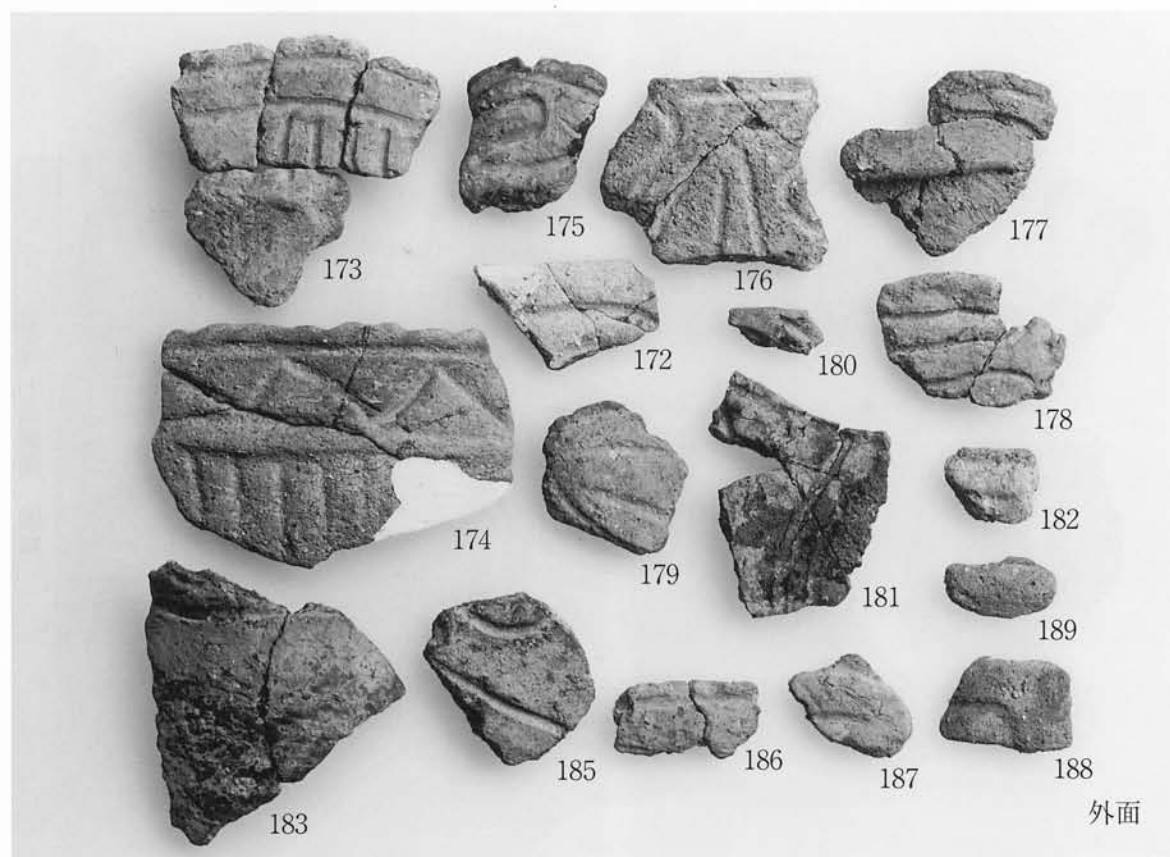
Ⅲ区 遺構出土遺物



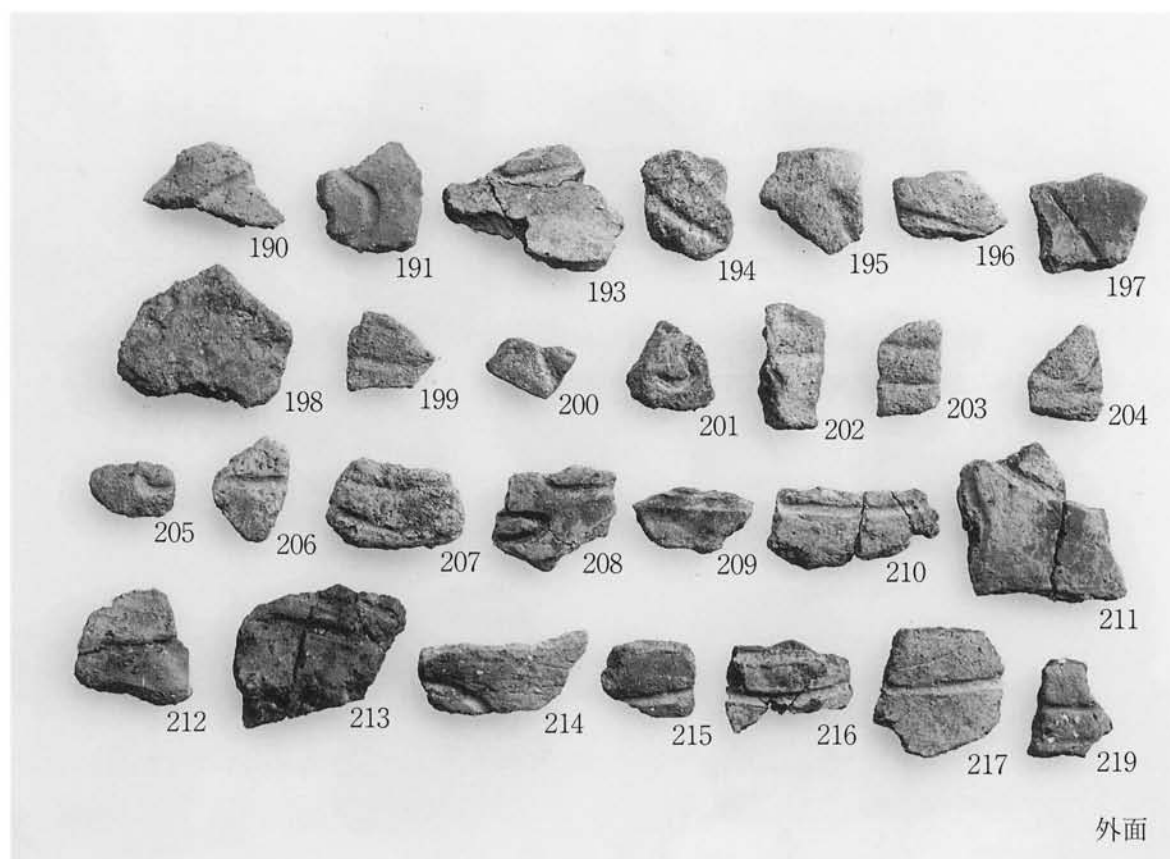
Ⅲ区 遺構外出土遺物（縄文前期）



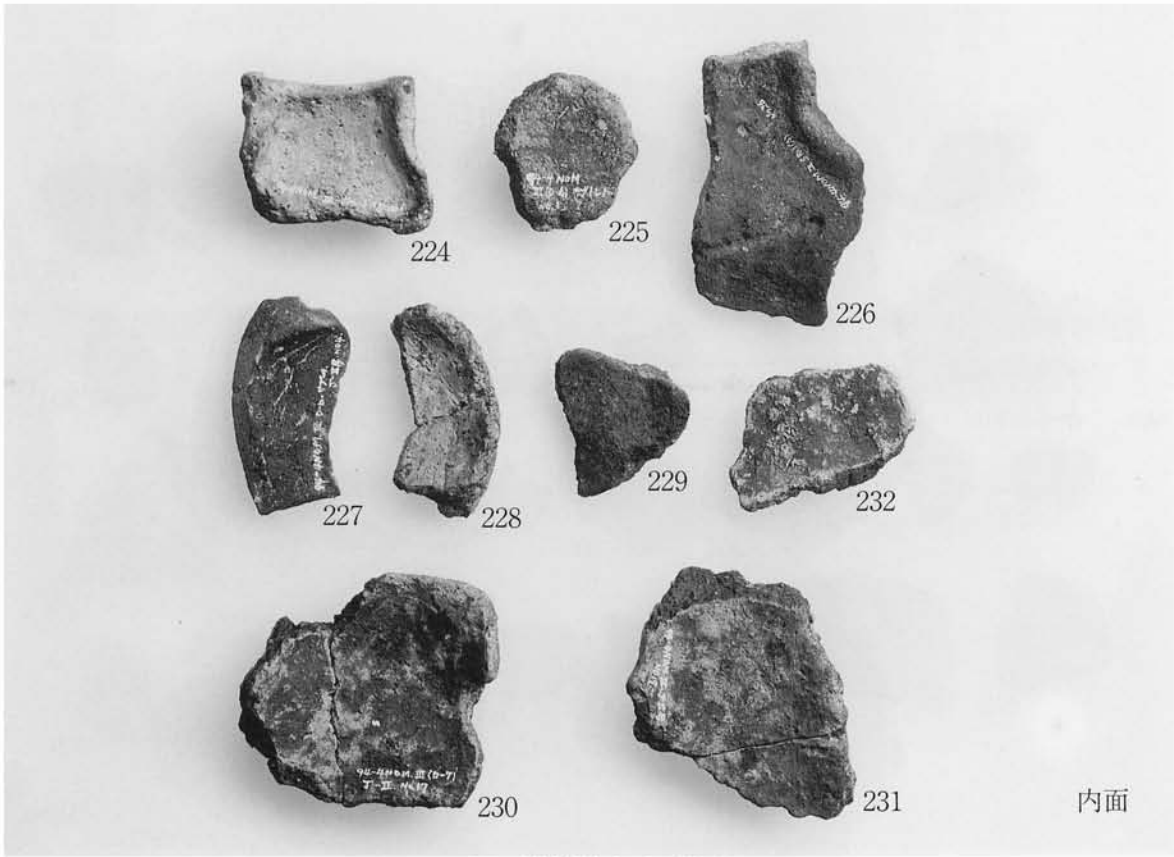
Ⅲ区 遺構出土遺物



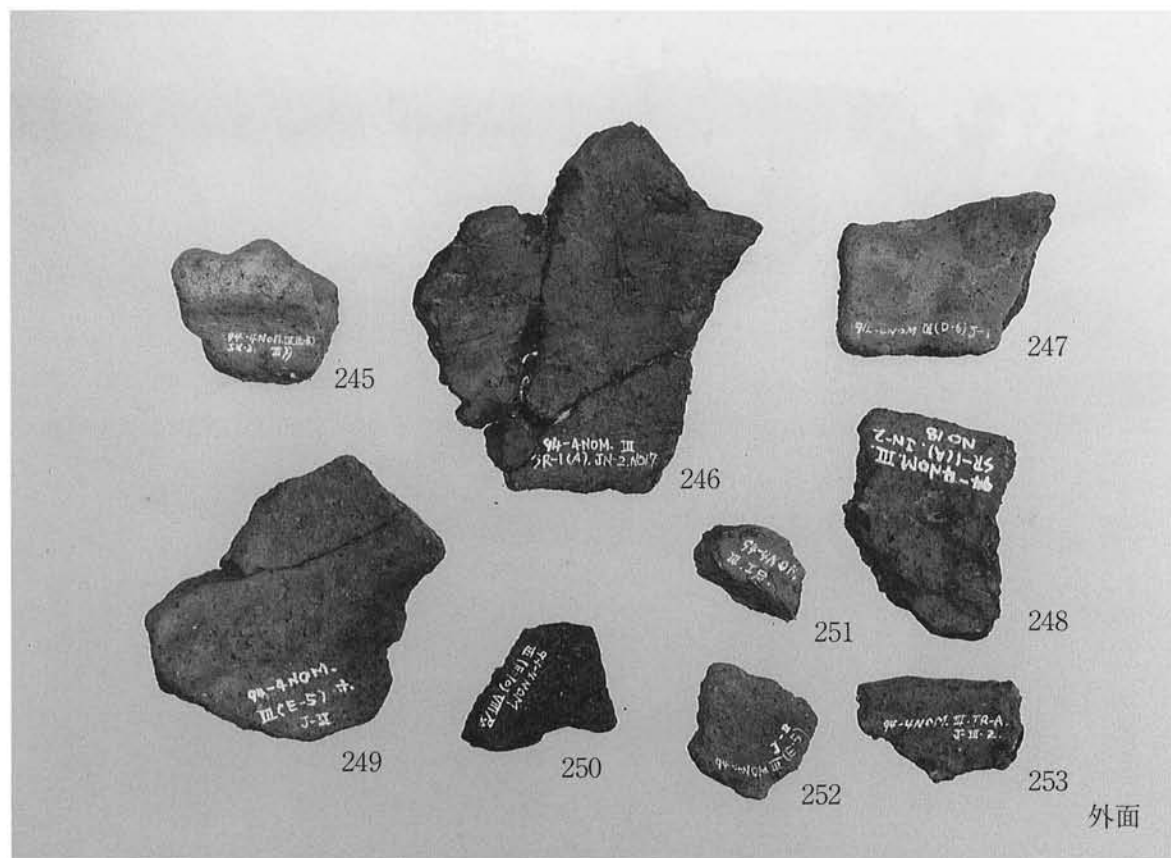
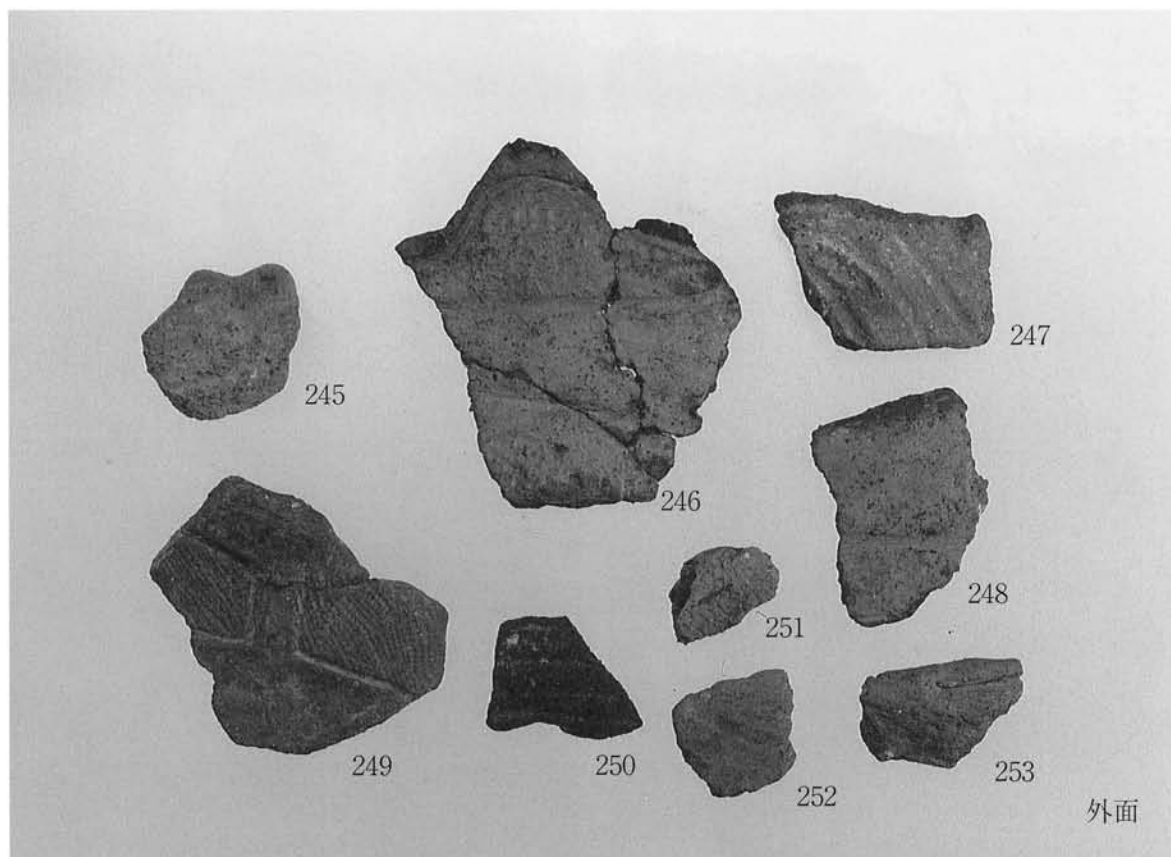
皿区 遺構外出土遺物(1)



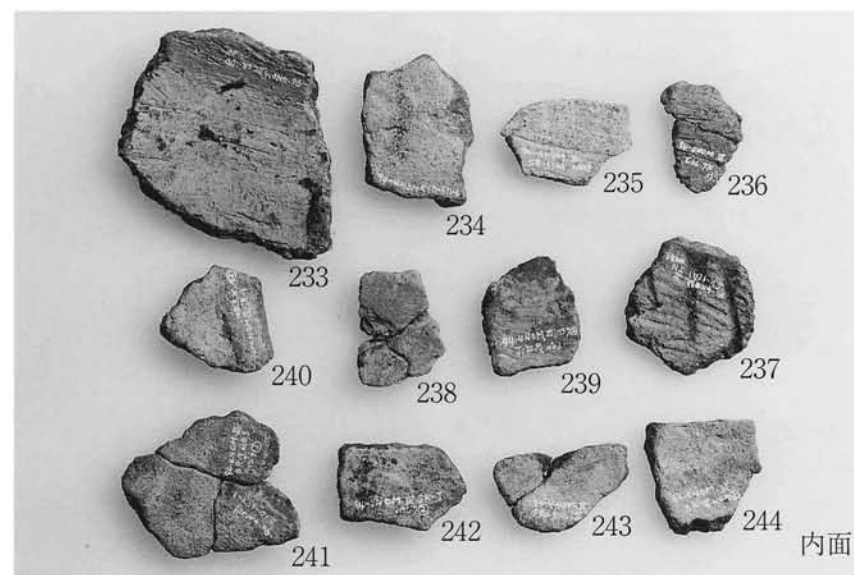
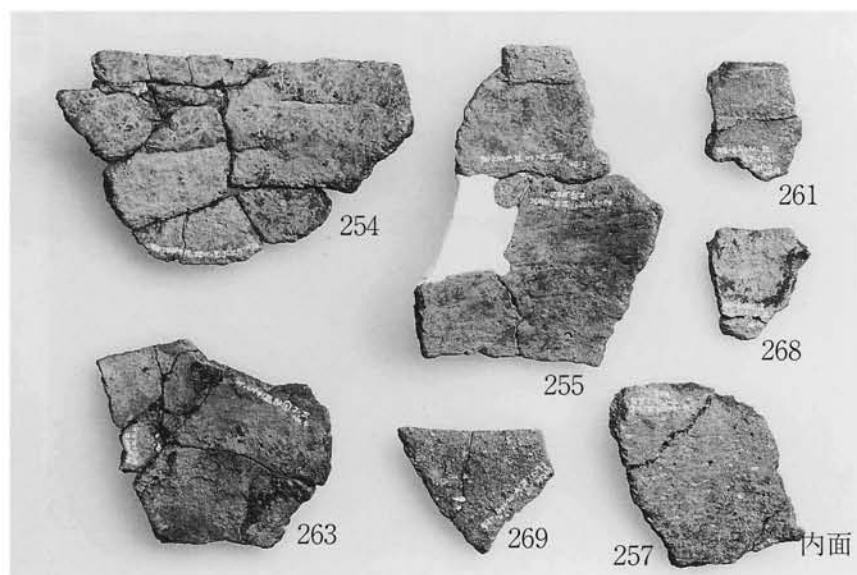
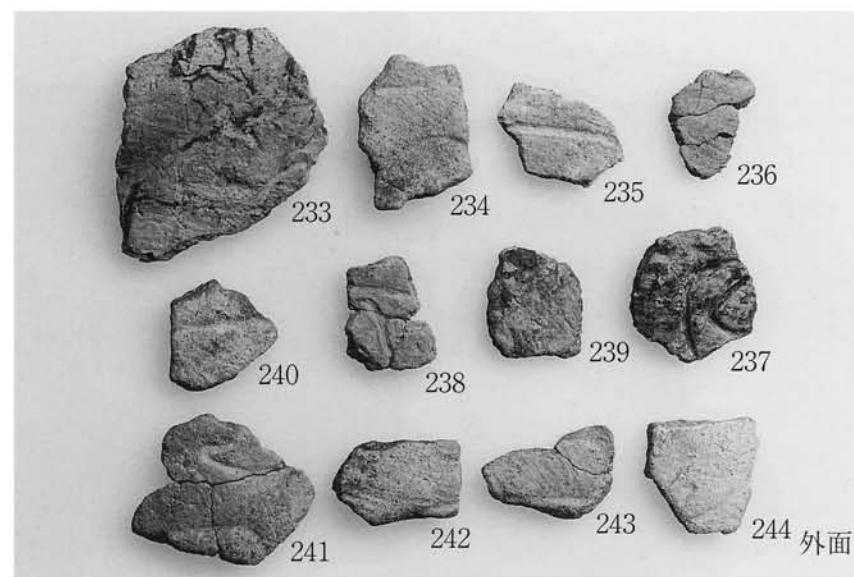
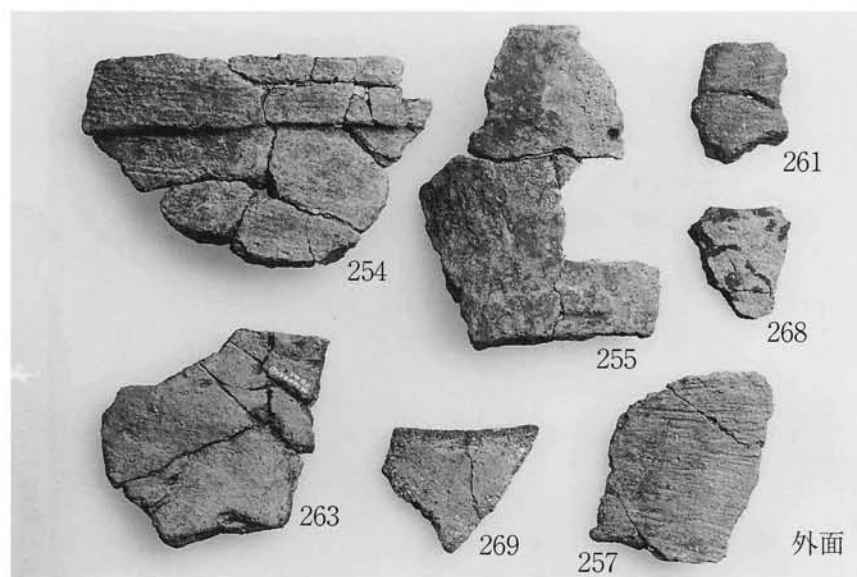
Ⅲ区 遺構外出土遺物(2)



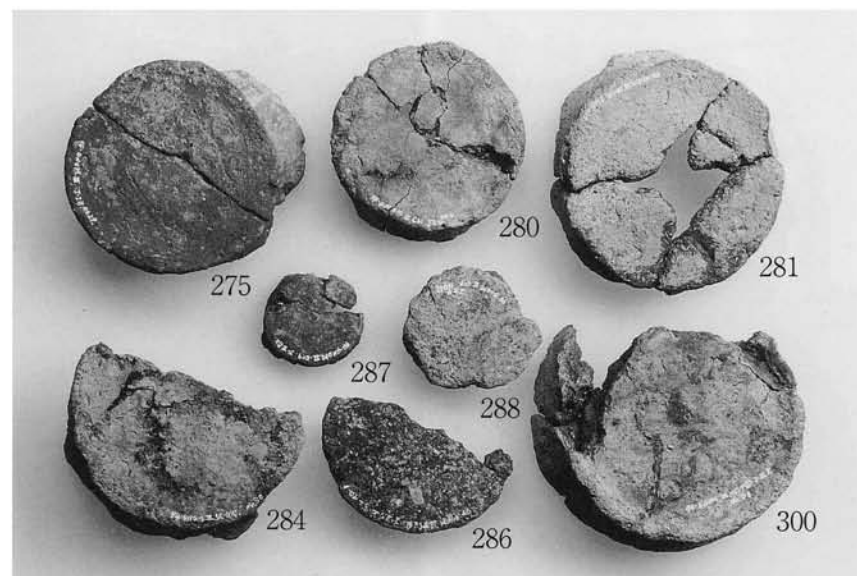
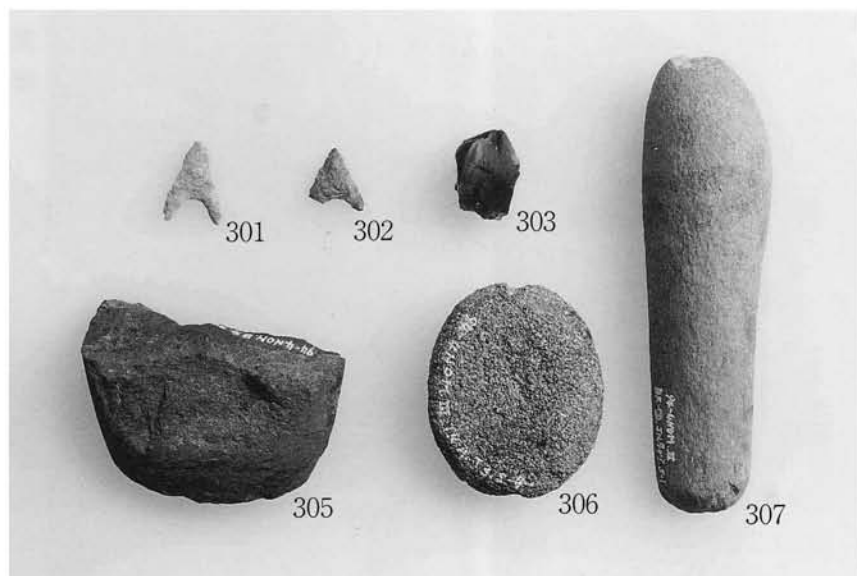
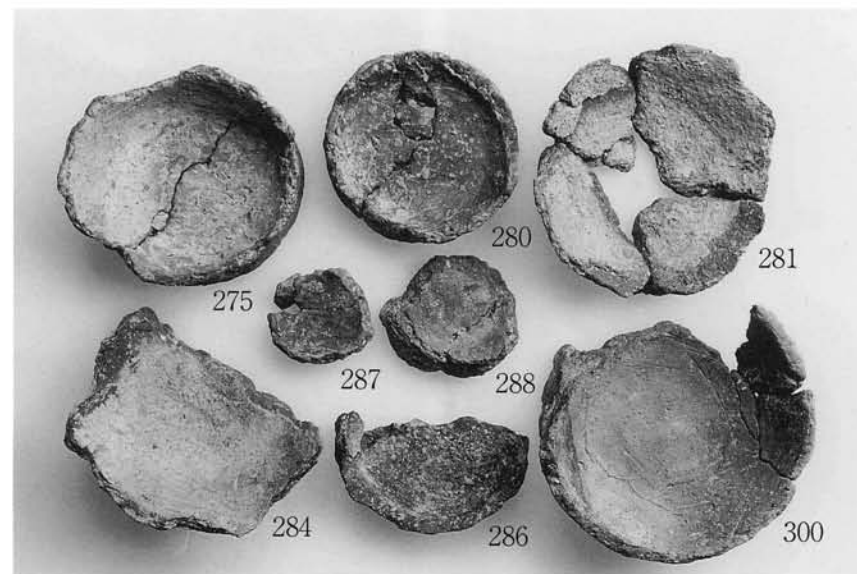
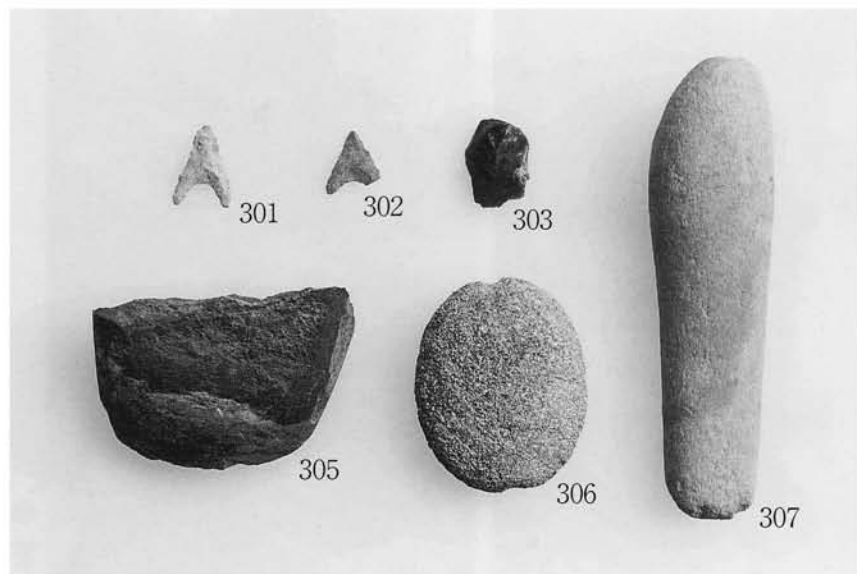
Ⅲ区 遺構外出土遺物(3)



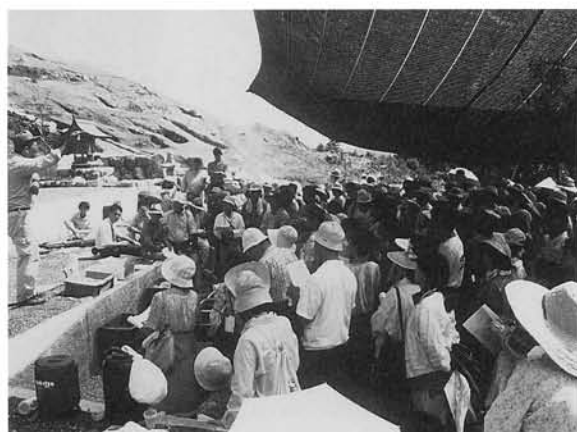
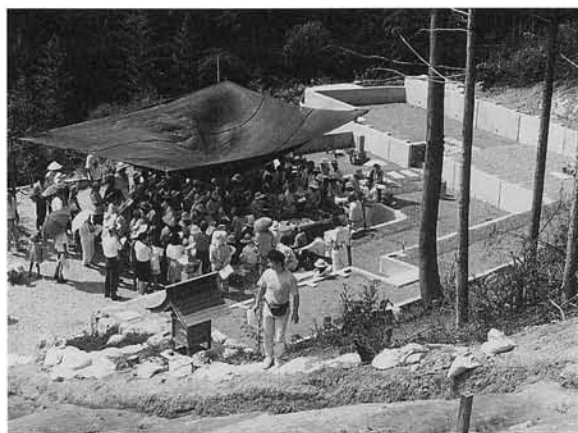
Ⅲ区 遺構外出土遺物(4)



Ⅲ区 遺構外出土遺物(5)



Ⅲ区 遺構外出土遺物(6)



現地説明会



調査に参加した人々

報告書抄録

ふりがな		おくたにみなみいせきいち						
書名	奥谷南遺跡Ⅰ							
副書名	四国横断自動車道(南国・伊野間)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	松村信博・山本純代							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL.088-864-0671							
発行年月日	西暦 1999年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
おくたにみなみいせき 奥谷南遺跡 (Ⅰ～Ⅲ区)	こうち けんなんこく し 高知県南国市 おくちよう こほす 岡豊町小蓮	39204	0063	33度 35分 50秒	133度 36分 45秒	試掘調査 1994.2.23～ 1994.3.31 本調査 1994.4.18～ 1995.3.17	5,400m ²	四国横断自動車道 (南国～伊野間) 建設工事に伴う調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
奥谷南遺跡 Ⅲ区	集落跡	縄文	貯蔵穴7基 ピット18基		縄文土器 (前期・中期) 堅果類・網代 石斧・石錘・石鏃		縄文時代中期の 堅果類貯蔵穴	
奥谷南遺跡 Ⅱ区	墳墓	弥生	土坑墓 土器棺墓		弥生土器 (後期末)		弥生時代終末の 丘陵先端に築か れた土坑墓群	
奥谷南遺跡 Ⅰ区	集落跡	弥生	竪穴住居 段状遺構		弥生土器 (中期末～後期初頭) 石鏃・石包丁		弥生中期末～後 期初頭の高地性 集落	
奥谷南遺跡 Ⅰ区	墳墓	近世	儒墓 土坑墓		唐津 (中型甕・二彩唐津鉢) 古伊万里 寛永通宝		儒墓(承応元年) --大正年間に石盤 の墓誌出土--	

奥谷南遺跡 I

1999年3月31日

編集 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

電話 (088) 864-0671

印刷 石西村謄写堂